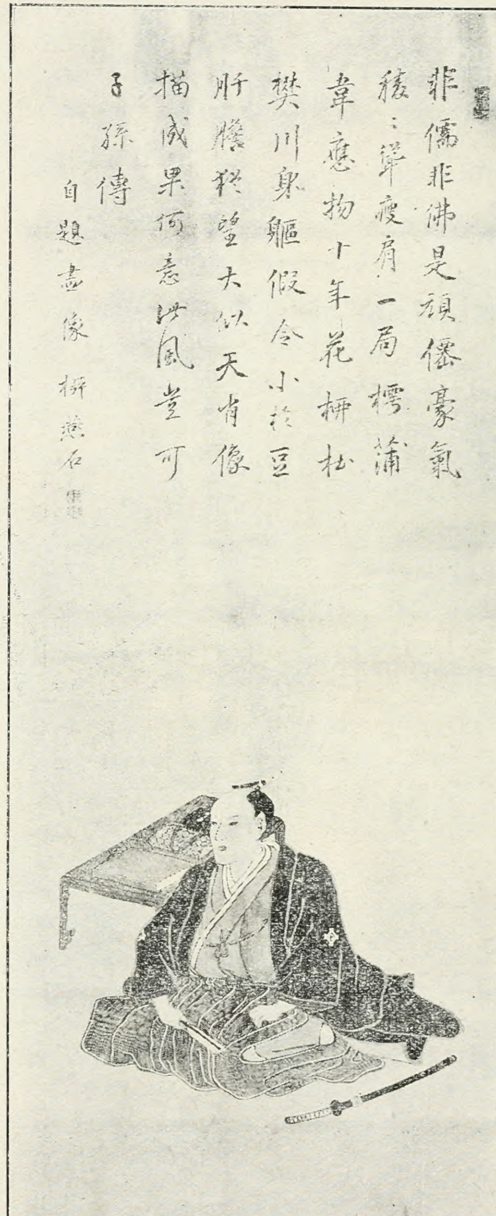
梶原竹軒監修

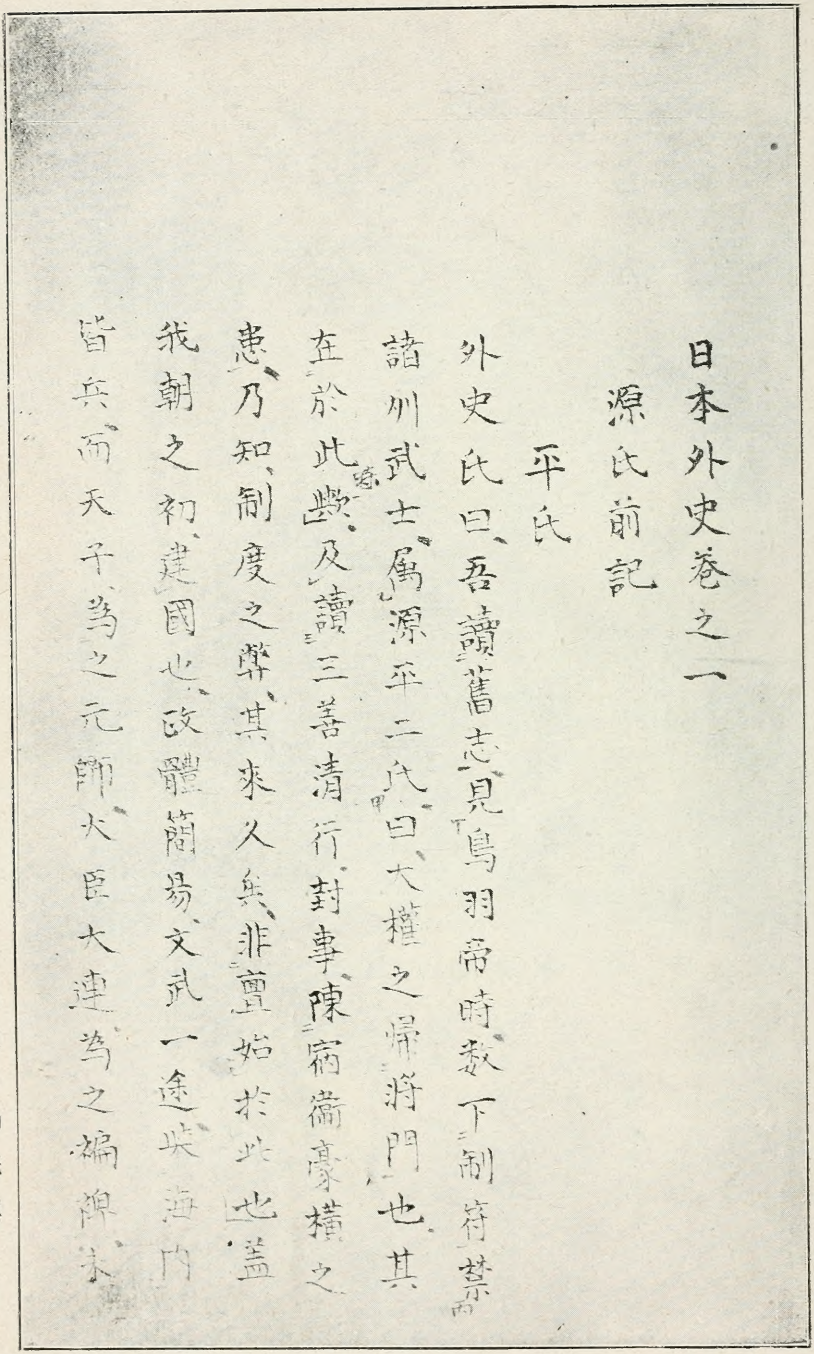
日柳燕石全集

香川新報社發行

（燕石翁肖像）

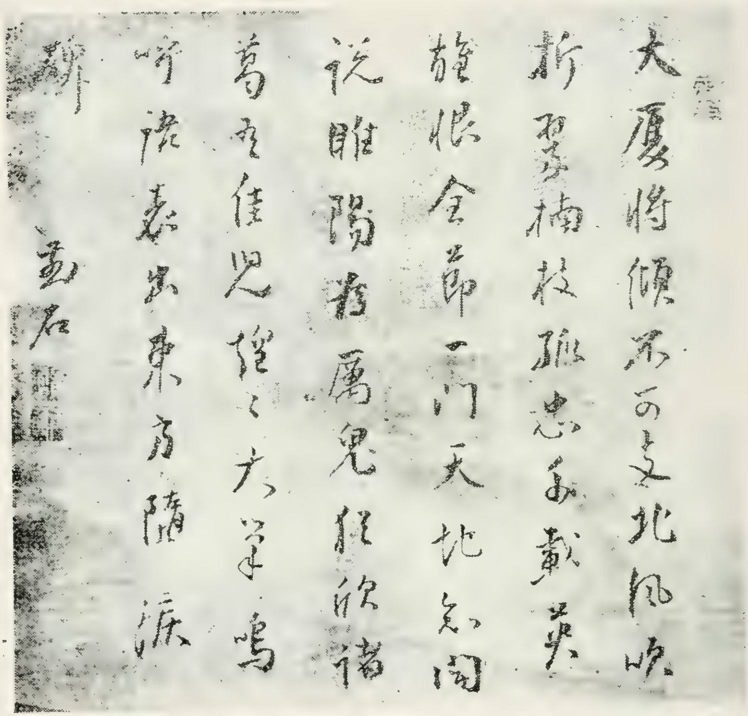


（大阪日柳氏藏）


日本外史卷之一
源氏前記
平氏
外史氏曰吾讀舊志見鳥羽帝時數下制符禁
諸州武士屬源平二氏曰大權之歸將門也其
在於此歟及讀三善清行封事陳宿衛豪横之
患乃知制度之弊其來久矣非直始於此也蓋
我朝之初建國也政體簡易文武一途海內
皆兵而天子爲之元帥大臣大連爲之褊裨未

(大阪日柳氏藏)

(楠公之詩)

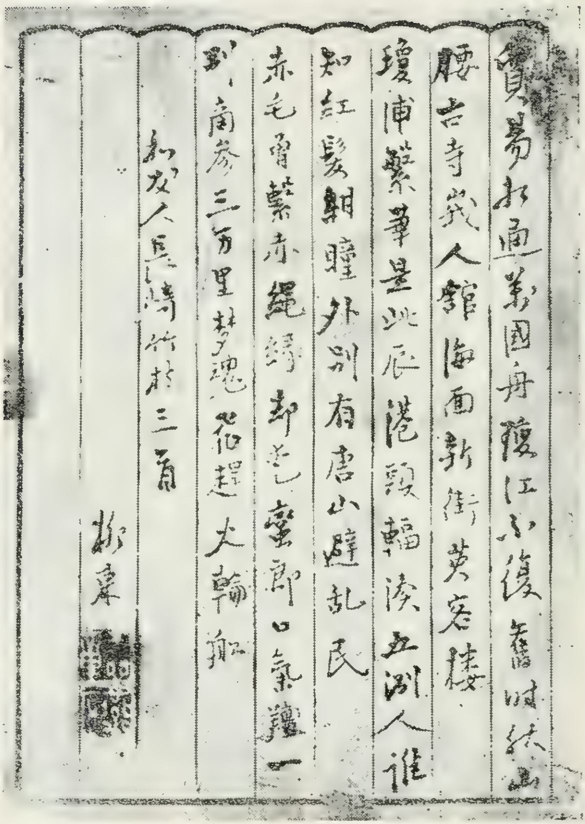


(高松古川氏藏)

大厦將傾不可支、北風吹
折翠楠枝、孤忠千載英雄
恨、全節一門天地知、聞說
睢陽爲厲鬼、猶欣諸葛有
佳兒、煌々大筆嗚呼語、表
出東方墮淚碑

燕石

(長崎竹枝)



(丸龜氏家喜兵衞氏藏)

和友人長崎竹枝三首

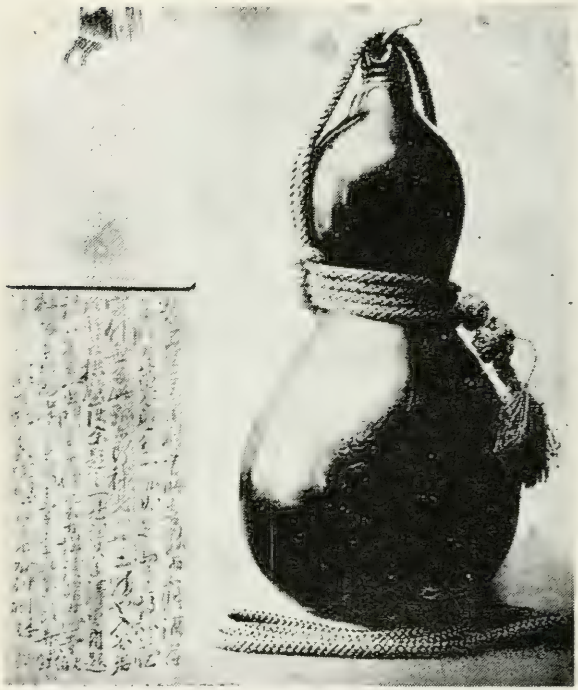
柳東

貿易相通萬國舟、瓊江不復舊時秋、山腰古寺峨人舘、海面新街英客樓

瓊浦繁華是此辰、港頭輻湊五洲人、誰知紅髮紺瞳外、別有唐山避亂民

赤毛曾繫赤繩緣、却愛蠻郎口氣羶、一別商參三万里、夢魂飛趕火輪船

(燕石愛瓢此君)

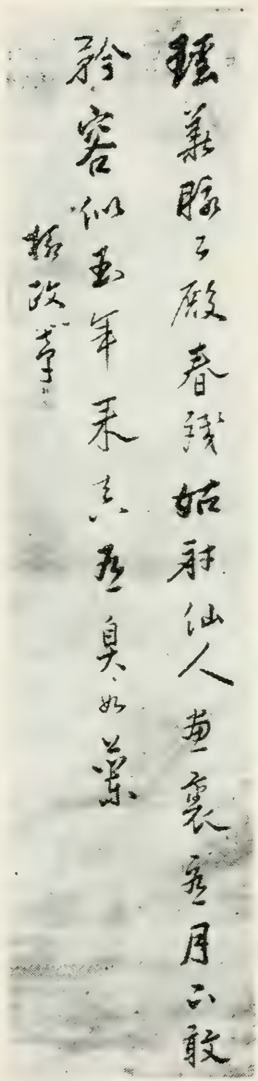


(西讃某氏藏)

先子好學而不積書册、
喜飲而不貯酒器蓋腹有
萬卷壁懸一瓢則足焉而
已故所藏家什無多此瓢
亦所稀見而無二物也入
谷君珍襲如拱璧使余題
之一見認其手澤曾自題
詩云先生一出門童子擔
之去古城讀碣時幽時觀
梅處實此物況有手鐫之
字先子壯歲戲弄鉄筆其
痕亦非可疑乃題完璧時
壬辰春仲

柳　愬

（牡丹之詩）

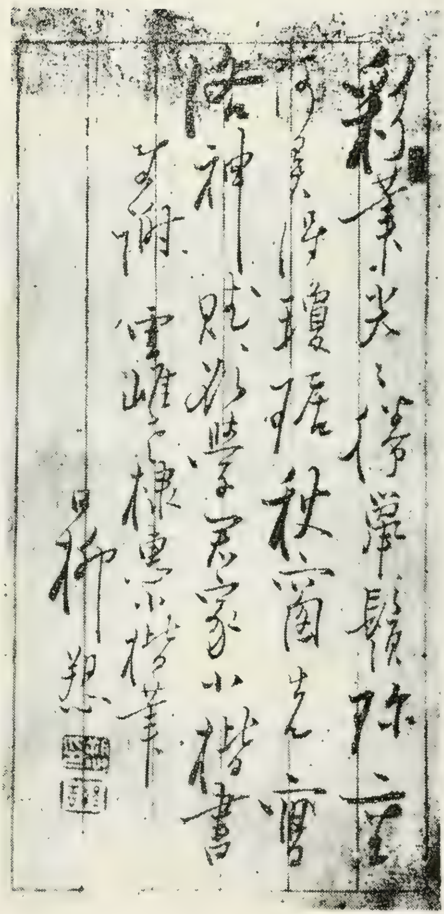


（高松古川氏藏）

瑤華脉々殿春殘、姑射仙人畫裏看、月下敢矜容似玉、年來眞有臭如蘭

柳政章

(日柳三舟筆蹟)



(丸龜氏家喜兵衛氏藏)

彩筆尖々勝鼠鬚、珍重何異得瓊瑶、秋窓先寫洛神賦、
欲學君家小楷書

奉謝雲雌老棣惠小楷筆

日柳恕

日柳燕石全集目次

傳記之部

遺稿之部

榎井村爪髮瘞表

難得而易失者時乎。時不可先亦不可後。既得其時可以有爲矣。然而事之成否在天不可必也。余於日柳士煥深有惜焉。士煥夙懷勤王之志與四方慷慨之士交歡往來。遂以此遭吏議幽囚四年。及明治紀元戊辰之春。始得出獄。于時皇室中興權綱大張。而正議之士皆得登庸士煥以二月至京師。從徵士木戸孝允赴鎮西。既而大將軍仁和王北征請士煥爲史官掌日誌。乃以六月發途中罹疾。八月二十五日歿于北越柏崎驛。享年五十有二。王命厚葬于祠官樋口氏塋。賜諡大櫻定居彥。嗣子終吉聞訃奔之。得其爪髮還而瘞之先兆。嗚虖士煥以有爲之才得有爲之時。而天不假之年可勝嘆耶。士煥諱政章。讀之那可榎井村人也。初稱長次郞。及入京改稱耕吉。其別號曰柳東。曰燕石。燕石之名噪四方。以其俠而善詩也。幼時讀書于山中。年十八歸承家業。二

十一喪考妣。性豪放不羈。好飲博交游極廣。貴産爲傾晏如也。平生感激之意一寓之詩。博覽强記特富于史學。故懷古詠史之作最爲所長士煥發京之日召賜御杯今藏于家。又寄書于終吉有曰。若或斃于矢丸亦死王事可謂大快矣。其病也會鄉有植田宗平亦在行中因得視養無缺。臨歿恍惚之際猶奮起爲從軍態。無一語及家事。遺書有病中七快記及他著述數部。子男一人曰愬即終吉也。女一人早亡。終吉請余表于石。舊誼不辭也。爲擧其概略。

片山沖堂撰

柳東日柳先生頌德碑

柳東日柳先生。讃州榎井人。以氣節自任。尤善詩賦。長之吉田。木戸薩之西鄕。小松。土之後藤。及我越之本間等皆與之游焉。若高杉晉作遁難潛伏其家云。明治元年七月二十日。先生從總督宮。來柏崎。予時與

長谷川强菴翁對酌於某樓。有客突如來問曰。長谷川鐵之進非公與乎。强翁即答云予則正傑也。問者何人曰讃州日柳柳東明朝當來見强翁抵掌曰柳東來矣柳東來矣。翌日相携訪先生於逆旅則困臥病蓐。蹶起將命酒盃曰。昨來觸瘴毒熱發殊甚。强菴慰諭云。會津陷落不出旬月。事定當張一大祝宴於新潟。匆卒辞謝。當此之時賊復長岡。薩長兵怒如火殊死而鬪。長驅入會津。再來柏崎則先生既已物故。予與强翁携壺酒鮮鱗奠墓前而去。嗚呼天下名士空葬於荒艸寂寞之濱香火蕭然無來弔之者。悲夫。刈羽有志某々等恐其湮滅。爲建斯碑云

明治三十七年甲辰二月

長岡　高橋三寅撰

柏崎　丸田尙友書

右碑陰又有文曰
先生諱政章字士煥通稱耕吉。日柳氏號燕石。明治元年六月從仁和寺宮北征。途爲瘴毒所犯。八月二十五日遂歿於柏崎。享年五十又二親王賜諡曰大櫻定居彦命。祠官樋口秀實厚葬之柏崎招魂場。明治三十六年十一月特旨賜從四位

日柳燕石翁之碑（在榎井）

贈從四位日柳君追思碑

樞密院議長元帥陸軍大將正二位
大勳位功一級公爵山縣有朋篆題

君氏日柳。諱政章。字士煥。稱耕吉。讃岐那珂郡榎井村人。別號燕石又柳東。明治元年六月從官軍北征。途罹疾。八月二十五日歿于北越柏崎驛。享齡五十二。乃者鄉人追思不措。樹石表其遺址。來請余銘乃據

武岡豊太所精覈事蹟。製之銘曰

藻海浩蕩　象山鬱崛　山海鍾精
玆誕奇傑　厥人爲誰　日柳燕石
少時警敏　夙耽典籍　史學是善
酌古參擬　兼善詩詞　用之咏史
奇思層出　往往驚人　豪俠負才
飲博流連　家貲蕩盡　毫弗顧惜
友道極廣　來往晨夕　一旦感奮
屏絕紛華　輸心勤王　期復朝家
庇護英俊　經畫研揣　幕吏指目
囚之獄裡　苦楚四歲　値皇政新
夙蒙抽擢　斯列廷臣　仁和大將
聞知文名　請爲記室　扈從北征

既達素懷　更賛王業　天耶命耶
二豎來襲　吁嗟慘矣　俄駕雲車
親王賜謚　大櫻定居　書生從軍
我軒志酬　齡雖半百　榮名千秋
況是桑梓　遺愛不竭　巍然隆碑
永表峻節

大正九年十一月

正五位勳五等　土屋　弘撰
從七位　黑木安雄書

日柳三舟君碑（在阿部野）

贈從四位日柳柳東翁。夙唱勤王。遂從軍于北陸以卒矣。先生其嫡子生于讃州仲多度郡榎井村。明治二年起身于陸軍兵部史生。尋任陸

兵學大屬。五年轉大阪府大屬。管學務。乃奮尽力府下數十學校擬造諸事着々奏功。十二年兼任大阪師範學校長。明年辭職家居。先生諱政恕小字終吉。号三舟。幼學醫而嗜文學。最善詩。詩才縱横。百篇立成人稱李白。兼巧書畫。既已家居揮毫自適。著侯鯖詩話。皇朝尊愛史。本朝女鑑。海內詩媒。覆甕小稿。葦亭詩抄。又創盲啞學校。愛育社。事主慈愛。志存報國。溫柔容人。人爭請交。而詩酒談笑之間。言歸愛國繼述之美。人愈仰敬焉。三十六年七月二十三日病卒。享年六十有五。三男曰復太郎曰櫻橘。曰彥九郎。四女曰喬曰蘆。曰梅曰象。皆配資延氏所舉孫二男二女。諸氏相謀。葬先生于阿倍野。建碑表之。又返爪髮于榎井舊塋。蘆婿岩松來乞碑銘。嗚呼。余與先生交三十年。談兼公私。情若兄弟。今則爲隔世人。豈忍銘乎。而友誼不可辭。乃銘曰

戸戸春風　人誦孝經　警句在世
教風維馨　不朽在此　今名何竭

一片苔石聊表吟骨

五十五翁湖山小野長愿題額

友人　南岳藤澤恒撰

寺西易堂書

年譜三、四丁ハ五、六丁五、六丁ハ三、四丁ノ誤
同上二七丁十二行主馬ハ（瑳磨）
傳記三〇丁十四行冒頭不明字ハ（翁）
同上三一丁十五行漢類の種字ハ（漢字ノ種類）
同上一一九丁末行がしハノ下（熟し篆額）ノ四字ヲ脱ス
呑象樓遺稿石集三三丁四行敗ノ下衊ヲ脱ス
同上三四丁十二行橋ハ（僑）
同上絲集五十三丁五行趙ノ下（家）ヲ脱ス
同上六五丁十三行公ハ（么）同十四行繋ハ（擊）
同上七〇丁十行鄙ハ（鄂）
同上竹集九二丁十四行徹ハ（微）
同上匏集一二一丁初行野ノ下僧ヲ脱ス
同上土集一六八丁氣ハ（水）
同革集一九四丁五行人ノ下（無）ヲ脱ス
同上一九七丁十行揚ハ（楊）
同上二〇四丁八行子ハ（字）
同上二〇五丁十一行亥ハ（陔）
同上二一三丁四行明大ハ（明天）
同木集二二九丁八、十五行劊ハ（劊）
同上二三〇丁四、五行劊ハ（劊）
同上二四〇丁十行日ハ（自）

日柳燕石年譜

◆文化十四年　（丁丑）　一才

讃岐國那珂郡（今仲多度郡）榎井村字旗岡の邸に於て生る幼名長次郎

父を惣兵衛、母を幾世と云ふ

二月十五日　中井履軒沒す年八十六

五月十四日　古賀精里沒す年六十八

仝　英船浦賀に來る

同年九月　仁孝天皇即位

◆文政元年　戊寅　二才

五月　英船又浦賀に來る

◆文政二年　己卯

七月八日　柏木如亭、京都に於て沒す年五十七

◆文政四年　辛巳　五才

四月　伊能忠敬沒す年七十七

五月　高松藩主松平賴儀致仕す

五月二十七日　松平賴恕高松藩封を襲ひ讃守となる

七月　森狙仙沒す年七十五

九月　塙保己一沒す年七十六

◆文政五年（壬午）　六才

三月　上杉鷹山卒す年七十二

四月　英船浦賀に來る

十一月　坂谷朗廬備中九名村於に生る

此年　畿內、山陽。山陰道、虎疫流行

◆文政六年　癸未　七才

七月廿六日　吉田擴齋、金藏寺村に於て生る

此年　井上文郁備中國に於て生る

◆文政七年（甲申）　八才

七月英船薩摩寶島に來り猥藉す

是歲頃叔父石崎近潔に從ひ句讀を受く

◆文政八年（乙酉）　九才
二月　外國船打攘の事を嚴令す
四月　太田錦城沒す年六十一
五月廿六日　賴三木八郎生る
此年　河野鐵兜生る　賴春風沒す年七十三
◆文政九年（丙戌）　十才
此年　賴山陽の日本外史成る
三月　龜田鵬齋沒す年七十三
十二月朔日　藤田幽谷沒す年五十三
◆文政十年（丁亥）　十一才
四月　牧石潭沒す年八十
八月　菅茶山沒す年八十二
九月　高田屋嘉兵衛沒す
九月六日　長谷川佐太郎生る
此年　西郷隆盛生る

◆文政十一年　(戊子)　十二才
此年　頼山陽日本樂府成る
十一月　本居春庭沒す年六十六
同　酒井抱一沒す年六十八
◆文政十二年　(己丑)　十三才
正月　樂翁公外史の題言を賜ふ
三月十五日　楫取素彥生る
五月　松平定信(樂翁)卒す年七十二
八月晦日　前高松藩主松平賴儀卒す年五十五
八月　坂出墾田成る
此年　森田節齋昌平黌に入る
九月廿七日　武市瑞山土佐國長岡郡吹井村に於て生る
◆天保元年　(庚寅)　十四才
此年　三井雪航に就き漢籍詩文を學ふ
八月　吉田松陰、萩城下松下村に生る

◆天保二年（辛卯）　十五才
五月　丸龜藩に於て、新堀湛浦を築く
五月　後藤漆谷沒す年八十三
此年　外船東蝦夷を侵す
同　大阪安治川を濬ひ、天保山を築く
同　合葉快堂生る
◆天保三年（壬辰）　十六才
六月　高松城内に考信閣を開き歷朝要紀を編輯す
九月　賴山陽沒す年五十三
十月　岡内綾川沒す年六十九
十二月　松平賴恕阿野郡林田村に雲井御所の碑を建つ
◆天保四年（癸巳）　十七才
三月　京極高琢、西讃多度三野兩郡の部分を領す
八月　牧詩牛沒す年四十六
九月　卷菱湖、本居大平沒す

十一月廿三日　東久世通禧生る
此年　諸國飢饉、奥羽の地殊に甚し
同　桂小五郎(木戸孝允)生る
◆天保五年(甲午)　十八才
四月　梶原藍渠沒す年七十三
此年　師門を辭して家に歸る
五月　頼杏坪沒す年七十九
八月四日　松平頼聰高松に於て生る
此年　水野忠邦老中となる
十一月　梁川星巖、玉池吟社を開く
◆天保六年(乙未)　十九才
三月七日　壬生基修生る
七月　柴野碧海沒す年六十九
八月　田能村竹田大阪に於て沒す年五十九
十一月廿八日　井上聞太生る

此年　森田節齋、西備中に遊ひ小野移山亭に寓す
十月十五日　坂本龍馬生る
◆天保七年（丙申）　二十才
三月　象山雜詞を著はす
六月　山田鹿庭沒す年八十一
十月十九日　京極高典生る
是歲　諸國飢饉
同　綾松山に遊ひ崇德帝陵を拜す
同　龜井昭陽歿す年六十四
◆天保八年（丁酉）　二十一才
二月　大塩平八郎亂を大阪に作す（三月自殺）
二月　大窪詩佛歿す年七十一
三月　象山雜詞を著はす
四月　中山城山歿す年七十五
四月十日　父総兵衞（政恒）歿す年七十七

四月十六日　母幾世歿す年五十八
六月十五日　板垣退助生る
◆天保九年（戊戌）　二十二才
三月　江戸城西丸災す、高松藩金二萬兩を獻し再營の資を助く
是年　森田節齋伊豫小松に至り近藤篤山の門に入る
二月十六日　大隈八太郎、佐賀に於て生る
三月　前多度津藩主、京極高賢卒す年六十三
閏四月廿二日　山縣狂介、萩に於て生る
是年　多度津藩、多度津港を築く
十二月　書家岸駒歿す年九十
◆天保十年（己亥）　二十三才
三月　千春詞を著はす
五月　摩島松南歿す年四十九
六月廿一日　高松藩歷朝要紀を天皇上皇に奉献す
七月十四日　長男道之助（號三舟）生る

此歳　夏象山雜詞を新鐫す
八月六日　松平金岳、龜阜へ移轉す
八月二十日　高杉晉作、長門萩町菊屋橫丁の宅に生る
是歳　高野長英、渡邊華山等罰せらる
◆天保十一年（庚子）　二十四才
正月　三野元密歿す年殆ど九十
是歳　久坂元瑞生る
七月　大原東野歿す年七十
十月　森田節齋、豫州小松より歸路、柳東軒を訪ふ
◆天保十二年（辛丑）　二十五才
正月　藤川三溪、長崎に遊ふ
五月　久米榮左衞門歿す年六十二
八月　沿海の防備を嚴にす
九月二日　伊藤俊輔生る
十月十一日　渡邊華山、三州、田原に於て自双す年四十九

十二月　谷文晁沒す年七十八
是年　琴平山下に僑居す
同年冬　森田節齋、再び備中に遊び、上成村小野晩翠亭に寓す
◆天保十三年（壬寅）　二十六才
四月十六日　高松藩主松平賴恕卒す年四十五
五月廿四日　松平賴胤、高松藩封を襲ふ（明治十年十二月卅日卒す年六十八）
六月十九日　細川林谷、江戸下谷三昧渠の宅に於て沒す年六十五
七月　爲永春水獄中に於て沒す
是年　岩村南里沒す年五十九
同　荒川栗園、隱岐に行く
同　小原鉄心、大垣城代に任ず
仝　清國、英國に香港を割與す
◆天保十四年（癸卯）　二十七才
三月　香川景樹沒す年七十六
閏九月　平田篤胤沒す年六十八

是年冬　森田節齋、郷里五條に歸る、次て京都丸太町に於て、帷を下し徒に授く

是年　長州人士河上彌一郎、品川彌二郎生る

同　水野忠邦の老職を罷め阿部正弘を閣老に任せらる

同　野城廣助上總國に於て生る

◆弘化元年（甲辰）　二十八才

四月　富山凌雲と倶に、九州に游ひ五月歸る

五月六日　水戸中納言烈公閉居を命せられ、其臣藤田東湖等亦同く罰に遇ふ

五月十日　江戸本城悉く燒く

六月　水野忠邦、堀親寶老中となる

十一月廿六日　水戸齋昭の屏居を免す

十二月十七日　石崎近潔歿す年七十八

十二月二十日　琴陵金陵歿す年六十二

此年　山陽遺稿成る

◆弘化二年（乙巳）　二十九才

正月　新砲臺を浦賀に築く

四月　久家暢齋歿す年五十四

七月　英船長崎に來る

九月　長女阿菊生る

是年　柳東軒に移居す

仝　加藤梅崖歿す年六十三

◆弘化三年（丙午）　三十才

正月二十六日　仁孝天皇崩御

正月　小橋安藏二男友之輔生る

二月十三日　皇太子踐祚す（孝明天皇）

二月廿六日　近藤篤山歿す年八十一

五月二日　浦上春琴歿す年六十八

六月　米船浦賀に來り通商を求む許さす

九月十七日　妻ぬい歿す年二十七

十一月朔日　村岡宗四郎生る

十一月十一日　猪飼敬所歿す

◆弘化四年　(丁未)　三十一才

正月　中清泉歿す年六十五

三月　吉田松陰江戸に遊ふ

四月　小橋香水江戸に遊ひ、異船來航の狀を視察し、八月歸る

九月廿三日　天皇即位す(孝明天皇)

九月　德川慶喜、一橋家を嗣く

是年　森田節齋洛西岩倉山寺に轉寓す。古賀侗庵歿す年六十

◆嘉永元年　(戊申)　三十二才

五月廿一日　大原重德生る

十一月　瀧澤馬琴歿す年八十二

是年　森田節齋大和郡山に轉居す

仝　阿波に遊ひ途、大阪の險を越へ、引田に出て歸る

仝　砲臺を浦賀に築く

◆嘉永二年　(己酉)　三十三才

二月廿五日　黑住宗忠歿す年七十一

四月　葛飾北齋歿す年九十
七月　牧野默庵歿す年五十四
十月廿三日　西園寺公望生る
十一月十一日　乃木無人（希典）江戸に於て生る
十二月十二日　水野秋彦、常陸國眞壁に於て生る
十二月廿五日　幕府曩に文政撰夷の令を復せしに依り諸侯に命して兵備を修めしむ
是年　備中人植田玄郁來る
仝　小妻菊松を聘す
仝　琴平山下撫松樓に仮居す
仝　蘭人始て牛痘を傳ふ

◆嘉永三年（庚戌）　三十四才

三月　金鄕春夕榮を著はす
三月七日　丸龜藩主、京極高朗致仕す（明治七年二月十四日卒す年七十七）
三月　京極朗徹、丸龜藩封を襲ふ（明治十五年東京に卒す）
四月五日　勅して國家の康寧を、七社七寺に祈る

五月　宮本璋庵(風月翁)歿す年七十五

七月　小橋香水、大阪伊勢に遊ひ進て江戸に至り形勢を視察し、九月歸る

十月晦日　高野長英、捕吏と格鬪して死す年四十七

是年　清國長髮賊の亂起る

是年冬　越後の志士、長尾秋水來訪す

十一月　再ひ幕府に、海防の勅諭を下す

此年　坂井虎山沒す年五十三

◆嘉永四年(辛亥)　三十五才

正月三日　土佐の萬次郎米國より歸る

三月十五日　和氣清麻呂の廟社に正一位を贈り護王大明神の號を賜ふ

五月八日　篠崎小竹歿す年七十一

同　浦賀の砲臺を增築す

六月五日　三井雪航歿す年五十六

九月　村岡竹所歿す年六十二

此年　島津齊彬薩摩藩封を襲ふ

◆嘉永五年　(壬子)　三十六

二月廿五日　兒玉源太郎生る

五月二日　武藏大森に大砲臺場を築く

是年春　柴秋村大阪に來り緒方の塾に入る

五月廿三日　江戸西城燒く(十二月成る)

七月　三野謙谷歿す年七十三

九月廿九日　桂小五郎等の選拔生、萩を發し江戸に赴く

九月　睦仁親王(明治天皇)御降誕

是年　攝津に遊ふ。荒河德卿隱島より浪華に來る

十一月廿二日　江戸城内失火、寶藏燒く

十二月　森寛齋來る

是歲　愬兒を詫間富山氏に托し、醫術を學はしむ

仝　三井竹窓琴平にて生る

◆嘉永六年　(癸丑)　三十七

正月　吉田松陰(年廿四)海路四國に過り、途次二月浪華に出て、大和五條に到り森

田節齋の門に遊ひ、淹留數十日、五月二日辭して東遊の途に上る

正月三日　長女菊子笠岡に於て沒す年十一才

是年春　河野鐵兜來る

三月二十日　中林竹洞京都に於て沒す年七十八

三月　三備州に遊ぶ

五月　雪航詩鈔開版成る

六月朔日　吉田松陰、東北遊歷より江戶に歸來す

六月三日　ペルリ米艦四隻を率ひ浦賀に來り、和親貿易を請ふ、幕府其書を受け翌年回答を爲すを約す

六月廿二日　十二代將軍家慶薨す

六月　柳東軒畧稿を著はす

六月　菊池五山沒す年八十

仝　邦內大旱魃に付諸所雨乞を爲す

此年夏　山陽詩註を著はす（明治二年京都に於て梓行さる）

七月十八日　魯國水師提督プーチヤチン、軍艦四隻を率ひ、長崎に來り互市を請ふ

八月四日　品川海に砲臺を築く
十月廿三日　德川家定（十三代）將軍となる
◉安政元年（甲寅）　三十八才
正月十四日　米艦六隻再ひ浦賀に來り去年の答報を促す
三月　鞆津に遊ふ
三月三日　幕府ペルリと和親條約を締結す
三月廿七日　吉田松陰、金子重輔と共に下田に於て米艦に投し彼國に至らんとして、事成らす拘囚せらる
四月六日　皇宮炎上す
四月六日　佐久間象山、幕譴に因り幽囚せらる
四月　越後長岡の志士長谷川鉄之進、圓座に來り小橋氏を訪ふ因て丸龜村岡方に潜伏せしむ
六月十四日　滿濃池決潰し多く田畝を損す、其數日前已に兆あるを以て幸に人畜を傷らす
閏七月十八日　安元杜預藏、江戸に於て歿す年二十七
是歳頃　呑象樓に移る

是年秋　荒川栗園沒す年三十九
十一月四日　五日大震災あり人畜の死傷多し
是年　美馬君田琴平に來寓す
◆安政二年（乙卯）　三十九才
正月　長州の志士、金子重輔、野山の獄中に病死す
正月十六日　江川太郎左衛門病死す年五十五
三月三日　勅して梵鐘を以て大砲を鑄る事を命す
七月廿九日　和蘭國より蒸氣船を幕府に獻す
是年夏　森田節齋再ひ柳東軒を訪ふ
仝　藤川伯孝と舟遊を爲す
十月二日　江戸地大に震ふ、藤田東湖等震死す
十一月廿三日　皇宮新營成り天皇還幸
十二月廿九日　皇宮造營の役を助く（高松藩）
十二月　禁裏造營の賞を獻る、其賞として時服を賜ふ（丸龜藩）
十二月　藤村今是沒す年五十九

同　長谷川正傑來り、小橋方に潜伏す
是年　廣瀨淡窓沒す年七十四
同　植田文藏備中に還る
同　劉君鳳來り訪ふ
◆安政三年（丙辰）　四十才
正月二日　山本梅逸歿す年七十四
仝　十三日　蕃書調所を建つ
三月廿四日　講武所を設く
三月　小橋橘陰江戸より歸り上國の形勢を告げ、尋て友之輔を伴ひ江戸に至る
此年春　吉田鶴仙歿す
八月　米國領事ハルリス下田に駐在す
仝　岡內有恒沒す年五十八
十月二十日　二宮尊德沒す年七十
十二月　木村默老沒す年八十五
此年秋　備後に游び野田笛浦と聚遠樓に登る

六月廿八日　中島棕隱沒す年七十七

此年　賴聿庵沒す年五十六

◆安政四年（丁已）　四十一

正月　森田節齋一男を擧け、司馬太郎と命名す

四月八日　朝廷より皇居造營の助役を賞し、三十六人歌合手鑑を、高松藩に賜ふ

四月　合葉文山沒す年六十一

五月　江戸築地に、軍艦操練所を置く

五月　長崎に製鐵所を置く

六月　老中阿部正弘逝く

是歲夏　廣瀬林外來り訪ふ

七月十八日　市川米庵沒す年八十

十月　琴陵宥常金羅大權現別當職に補せらる

仝　ハルリス將軍に謁見し、國書を呈す

十一月　池口杏圃沒す年三十

十二月　米國に江戸、大阪、兵庫、新潟の四港を開くを約す

是年　高杉松下村塾に入る

◆安政五年（戊午）　四十二才

正月　諸公卿に勅して、外國事件を議せしむ

二月　白峯に登り歸路林田村に過り、細川清氏の戰跡を吊す

三月十二日　公卿八十八名急に參朝して、勅文案修改のことを論請す

四月廿三日　井伊掃部頭直弼大老となる

五月十一日　僧月照（仲多度郡吉原村出身）西鄕隆盛と共に、薩海にて入水す、西鄕は蘇生せしも、月照は終に寂す

六月　鯖江藩主間部詮勝、老中となる

六月十九日　幕府米國と條約を締結して、後に之を奏す

七月二十八日　水戸齊昭、再び駒込の別邸に幽囚せらる

七月五日　十三代將軍家定薨す

七月三十日　高杉東遊の途に就く

七月十五日　島津齊彬薨す

九月一日　梁川星巖沒す年七十

九月　虎列拉病大流行

是歳秋　丸龜藩大塚敏等、輯する所の西讃府志成る

十月廿五日　徳川家茂（十四代）征夷大將軍に任す

十月　大疑獄起り、勤王の名士を逮捕する者百數十名に及ぶ、讃人長谷川宗右衛門
仝速水亦其中にあり

十一月四日　高杉、昌平黌に入る

十二月五日　吉田松陰、萩、野山獄に下さる

此年　小栗上野介等を米國へ遣はす

◆安政六年（己未）　四十三才

正月十七日　河田迪齋江戸に於て沒す年五十四

二月　長谷川鐵之進、來り軍器調製を計畫す

三月十日　多度津藩主、京極高琢致仕す在職二十七年

三月十八日　勤王僧信海、江戸の獄中に於て沒す年三十九

三月　京極高典、多度津藩封を襲ふ

五月　横濱、神奈川、箱館の三港を開く

六月廿七日　德川齊昭に永蟄居、一橋慶喜に致仕を命す
七月九日　吉田松陰、江戸傳馬町の獄に送致せらる
七月廿一日　野田笛浦沒す年六十一
八月廿四日　佐藤一齋沒す年八十八
八月廿七日　水藩士安島帶刀自及を命せらる年四十八
八月　露、佛二國と本條約を交換す
仝月仝日　水藩士茅根伊豫之助斬罪に處せらる
九月十四日　梅田雲濱、江戸小倉藩邸の獄舍に於て歿す年四十四
九月　興泉寺へ手洗鉢及井側を寄附す
十月七日　賴三樹江戸の獄中に於て、刑斬せらる年三十五
十月七日　橋本左內、江戸小塚原に於て斬らる年二十六
十月十七日　高杉藩命により昌平黌を退學し、江戸を發し歸國の途に就く
十月廿七日　吉田松陰、江戸の獄中に於て斬らる年二十九
十一月十六日　高杉萩に歸着
是歲　疑獄のため、屠腹斬死等の刑に處せられたる者、多數を算せり

仝　坂谷朗廬來り訪ふ

仝　三舟京都に遊學す

是年　琴平高燈籠を建築す、東讃寒川郡千秋講、萬歲講の寄附する所なり

◉萬延元年（庚申）　四十四才

正月　本條約交換の爲め、使を米國に遣す

三月三日　水戸藩浪士等大老井伊直弼を櫻田門外に害す

三月廿三日　水藩士、高橋多一郎大阪天王寺に於て自刄す年四十七

四月　森田節齋、姫路侯の聘に應して、好古堂の教授となる

此歲春　京師に遊ふ

五月二日　高杉軍艦丙辰丸に駕し東行の途多度津に寄港仝三日金刀比羅宮に參詣せり

六月　蘭國と和親條約を締結す

七月八日　高松藩主松平賴胤、其職を辭す

八月九日　長谷川速水、江戸傳馬町の獄中に沒す年二十五

八月十五日　徳川齊昭（烈公）薨す年六十一

十一月　江戸城本丸成る

仝　安積艮齋す年七十六

十一月　普國と通商條約を締結す

◆文久元年（辛酉）　四十五才

二月　高杉江戸に行く

五月廿七日　飯田忠彦自殺す年六十三

五月廿八日　水戸藩士、英國公使を東禪寺に襲ふ

五月　三升京都より歸省す

六月　小橋友之輔江戸より歸る

七月八日　松平賴聰、高松藩封を襲ふ

七月廿六日　櫻田の暴徒を刑す

森田節齊倉敷に移居す

七月　廣瀨旭窓來り訪ふ

是歲　上州館林人、山本士述、塩谷宕卿來り訪ふ

九月　宇多津の志士、阿比野安太郎沒す年四十九

十月廿日　皇妹和宮京都を發し江戸に赴く、これ將軍德川家茂に降嫁のためなり

十二月　渡邊松窩（名友信）歿す年四十七

十二月廿三日　高杉、支那視察の命を受く

十二月　幕使歐洲諸國に赴く

是年　小西清琴歿す

仝　三舟京都より歸り、醫業を開く

仝　雄北（萩田）嘯觴中に於て象山竹枝改本を刻す

◉文久二年（壬戌）　四十六才

正月　奈良松莊歿す年七十七

正月十五日　水戸浪士平山兵介等、老中安藤信正を、坂下門外に傷く

四月廿三日　伏見寺田屋の變起り名士有馬新七以下、首唱死する者八人其他負傷多し

四月廿九日　高杉千歳丸に搭し、長崎を出帆し五月六日上海に安着す

五月一日　田中河内介、仝男左馬介播洋船中に於て殺さる河内介年四十八左馬介年十八

五月二日　拂曉仝父子の死体、小豆島福田濱に漂着す

七月十四日　高杉支那より長崎に歸る

仝月　仝志太田次郎、小橋友之輔を上京せしめ、上國の形勢を窺はしむ

八月廿一日　生麥の變あり外交上の大問題發生す
閏八月朔日　松平容保京都の守護職となる
十月八日　藤森弘庵江戸本郷に於て歿す年六十四
十一月　長谷川宗右衛門、朝旨により出獄す
十二月　高杉同志と謀り、江戸御殿山の英國公使館を燒く
是歲　吉成好謙歿す年六十四
同　坂下門外の殘徒、椋木八太郞、旭健、來り燕石に賴る

◆文久三年（癸亥）　四十七才

二月十三日　將軍家茂、江戸を發し上洛の途に就く
二月二十三日　三輪田元綱師岡正胤等の志士三條河原に。足利尊氏義詮義滿の木像を梟首す
二月　英國生麥事件の償金を請求す
三月十六日　高杉滯京中剃髮して東行と號す
四月十日　秋山伊豆歿す年五十七
四月十日　高杉萩に歸り、數日の後松下村に幽居す
四月　詔して五月十日を攘夷の期日と定む

四月廿四日　森田節齋長女孟歿す年三才
五月十日　馬關海峽に於ける長藩の攘夷戰始まる
五月　家里松嶹歿す年三十七
六月六日　高杉山口に召出され、馬關防禦の事を命せらる
六月七日　高杉奇兵隊を編制す
六月下旬　長谷川正傑、野城廣助(變名平山次郞)丸龜に來り村岡方に潛伏す
六月　緒方洪庵歿す年五十四
七月　小橋友之輔長谷川世傑等三條實美公の內命を受け、阿州祖谷に至り、土豪を勤王せしめむとせしが、要領を得ずして、八月上旬歸る
七月二日　鹿兒島灣に於て、薩藩英國艦隊を砲擊す
八月　京都の特使丸龜村岡宗四郞方に來り、御親征の擧を告げしを以て、全志と出動準備を爲す(尋て沙汰止みとなる)
八月十七日　大和五條に於ける天誅組の義擧起り、松本謙三郞、藤本鐵石以下戰歿す
八月十七日　廣瀨旭窓。大阪に於て歿す年五十七
八月十八日　勅して大和行幸を停め三條卿一派の參朝を止め長藩士の禁門護衛を罷めしむ

八月十九日　三條實美等七卿、京都を發して西國に脱走し、全廿七日三田尻に上陸す

九月十九日　志士野城廣助丸龜に於て沒す年二十一。琴平鷹谷墓地に葬る

十月十一日　澤宣嘉等但馬の義擧起り、河上彌一郎以下戰歿す

十月　小橋安藏、藤川求馬を高松藩の獄に投す

十一月　太田次郎、小橋友之輔、招賢閣に入つて國事に努力す

◆元治元年　(甲子)　四十八才

正月十五日　將軍家茂京都に入る

正月　小橋友之輔、太田次郎、長谷川祐傑、招賢閣を發し上京す

二月十六日　南山義擧の志士、伴林光平斬らる年五十二

三月廿五日　高杉京都より山口に歸着す、萩に護送し野山獄に投せらる投獄集を著はす

三月　水藩志士武田伊賀、藤田小四郎等兵を筑波山に擧ぐ

五月　小橋安藏出獄す

六月五日　京都三條池田屋の變あり、宮部鼎藏、松田重助、吉田稔麿、杉山松助等之に斃る

六月十七日　三舟長女喬子生る

六月廿一日　高杉出獄を許され自邸の坐敷牢に入る。在獄八十餘日

六月廿四日　英國留學中の井上、伊藤　聯合艦隊馬關襲擊の風評を聞き、急き歸朝此日山口に着す

七月十一日　佐久間象山、京都木屋町に於て害死す年五十四

七月七日　南山義擧の志士、原田龜太郎斬らる年二十七

七月十九日　京都禁門の變あり、長藩來島又兵衞、眞木和泉、久坂玄瑞等皆死し、小橋友之輔も戰死す

七月十九日　當日の變、高松藩主は手兵を率ひ參朝し、天氣を伺ひ、命あり小御所を守り支族松平大膳をして、日の門外を守らしむ

七月廿日　乾十郎、長尾郁三郎、京都六角の獄に於て斬らる

八月三日　德川將軍長州征討の爲め、進發の令を下す

十一月朔日　征長總督、德川慶勝、大阪を發し、廣島に向ふ

十一月朔日　高杉、大庭傳七、中村圓太と仝行博多に向ふ

十一月四日　高杉、博多に着す、北九州聯合の事を謀る、六日田代に至り、平田大江を訪ひ、後博多に歸り、野村望東尼の平尾山莊に寓す

仝十二日　長藩三家老に死を賜ひ四參謀を斬り、幕府に恭順の意を表す

仝十八日　征長總督、長藩に命じ三條卿等五卿を、九州に轉坐せしめんとす

仝廿一日　高杉國變を聞き、博多を發し廿五日馬關に歸る

十二月十五日　高杉長府に於て義兵を擧げ、功山寺に往き三條卿等五卿に謁し訣別す、其夜直に馬關に行き、翌朝新地の會所を圍み吏員を逐ふ

十二月廿六日　征長總督、長藩の恭順を認め、師を班へす

十二月　井上善心、橋陰の紹介を以て小橋方に來り後、丸龜村岡方に潜伏す

◉慶應元年（乙丑）　四十九才

正月　小橋安藏を高松藩の獄に投す

正月四日　征長總督、進發の令を停め、軍を班し廣島を退く

正月十六日　高杉馬關より、太田に到り其の翌日諸軍を整へ山口に入る

二月十三日　松崎澁右衛門を高松藩の獄に投す

二月十四日　五卿等長府を發し、太宰府に移る

二月　武田耕雲齋等を刑す

四月廿三日　高杉、馬關開港論を主張し、長府藩士の激昂を來たしたるを以て、時情鎮撫の爲め山口に召還さる

四月下旬　高杉、長府藩士等の加害を避け、且つ時勢探究の爲、商人に變装して、大阪に往き、伊豫に往き讃岐に過り日柳燕石に賴る
四月廿六日　桂小五郎但馬より長州に還る其の途多度津に立寄り燕石、佐太郎と會見す
四月　森田節齋、五條に歸り榮山寺に寓す
閏五月四日　高杉讃岐を脱し此月下旬馬關に遁れ歸る
仝月仝日　燕石、君田の徒を高松藩の獄に投す
是年　富家松浦歿す年六十
七月十五日　齊藤拙堂歿す年六十九
八月三日　幕府再ひ、長州征討の令を發す
八月五日　英佛米蘭の聯合艦隊馬關を侵す、高杉講和委員として馬關に出張す
八月六日　馬關櫻山招魂場落成す、高杉奇兵隊諸士を率ひ參拜し、祭事を行ふ
八月十四日　高杉再ひ外艦に赴き、講和條約を締結す
八月廿二日　幕命あり高松藩をして、長防征討四國第二陣を以て、伊達遠江守と與に、德山より山口に向はしむ(十一月五日發す)
九月廿六日　高杉、桂小五郎と共に海軍興隆用掛を命せらる

九月廿四日　藩主の命に依り、谷潜藏と改名す

十月[illegible]日　坂本龍馬、三田尻に着し尋いで馬關に來り、高杉、木戸等と會談し、[illegible]

[illegible]

十月廿五日　筑前藩士、加藤司書自刃、同日、月形洗藏斬首せらる

十一月七日　將軍家茂大阪城に入る

十二月四日　高杉筑前に潜行して、野村望東尼の平尾山莊に寓す

十二月朔日　征長總督、徳川慶勝大阪を發し、廣島に向ふ

十二月廿六日　征長總督、長藩の恭順を認め師を班へす

十二月廿六日　筑前藩士河合總兵衛自刃す

十二月　藤澤東畡歿す年七十

是年　日尾荊山歿す

◆慶應二年　丙寅　五十才

正月　高島秋帆歿す年六十九

仝　獄中に於て、猶[illegible]を著はす

二月廿一日　備前の志士、岡元太郎、作州英田郡土居驛に於て自刃す年三十

四月七日　立石孫一郎等、部下を率ゐ倉敷代官所及蒔田相模守の陣屋を襲ふ

四月廿四日　作州津山の志士、井汲唯一自刃す

四月廿六日　立石孫一郎戰死す

六月　幕府再び征長の命を下し、毛利敬親父子に蟄居、削封するを令す

六月十日　幕軍、長州四境に攻撃を開始す。然も其大軍の用ゐ難き、長藩に同情を寄す

[illegible]

六月十二日　高杉、丙寅丸に乘り大島郡に出撃し幕艦を襲撃す

七月二十日　將軍家茂、大阪城中に薨ず。享年

七月十一日　[illegible]

八月十一日　[illegible]

九月十二日　幕府、征長軍撤廢を布告し、[illegible]

十月　[illegible]

十一月　[illegible]

十二月五日　慶喜德川宗家を繼ぎ、征夷大將軍に任ず

十二月廿五日　孝明天皇崩御

十二月　坂本龍馬、中岡愼太郎、京都河原町に於て幕臣近藤勇等に殺さる、龍馬年三十二、愼太郎年三十

◆慶應三年（丁卯）　五十一才

正月九日　皇太子踐祚（明治天皇）

正月廿九日　村岡宗四郎幽死す年廿二

二月　征長軍を解く

三月廿二日　前多度津藩主京極高琢歿す年五十七

三月　獄中に於て皇國千字文を著はす

四月十四日　高杉馬關に於て、病歿す年二十九。藩主哀悼、賻を賜ふ

四月十六日　全遺骸を奇兵隊本營の跡に葬る

五月　兵庫港を開く

九月　尾池松灣歿す年七十八

十月十五日　德川慶喜政權を返上す

十一月　木内龍山（香水弟）歿す年五十七

十二月　朝廷萬機裁決、王政復古の大令を發す

◆明治元年（戊辰）　五十二

正月三日　伏見の戰

正月四日　高松藩兵、伏見に於て官軍と戰ふ

正月十日　高松藩主、松平賴聰の官位を褫ひ土佐、丸龜、多度津三藩の兵來討す

正月初旬　小橋安藏、日柳燕石、美馬君田等出獄す

正月十五日　東征總督熾仁親王出發

正月二十日　朝命により丸龜藩にては、兵三百砲二門を岡正記に附し、多度津藩兵と共に高松に向はしむ

二月廿三日　在京友人の招きに依り琴平を發し上京の途に就く

二月廿七日　丸龜より上船し、飾磨に上陸又尼崎より船にて三月一日陸路大阪に着す

三月三日　京都に着す

三月八日　高松藩より金十二万両を朝廷に献す

三月十七日　東山長洛寺に至り山陽の墓に詣す

四月十一日　木戸と倶に京都を發し神戸に赴く

四月十五日　松平頼聰の官位を復し舊地人民を還し賜ふ
四月廿四日　米國船に搭し藩地に歸る
四月廿五日　近藤勇總州流山に於て斬らる
閏四月廿七日　木戸と倶に京都に歸る
閏四月十二日　木戸下令に要し。神戸より長崎中國四國諸藩の途に上る
五月九日　吉田驛に赴て、高杉の墓を拜す
五月十五日　大總督府。彰義隊を上野に破る
五月廿八日　木戸と倶に三田尻より乘船歸京の途に就く
五月三十日　九州巡視を了へ大阪に歸り直に歸京す
六月十四日　村山齋汀歿す年四十四
六月十六日　大總督仁和寺宮に隨ひ北征の途に上る
六月　木戸下令東京に赴す
七月廿六日　吉田節齋歿す年五十八
八月七日　松平頼胤・逝去す年六十
八月廿五日　北越柏崎に於て歿す年二十二
九月廿二日　會津藩主松平容保降る

例言

一、日柳燕石と云へば、勤王家として讃岐は勿論全國でも知らん人はなき程。其名が廣かつて居るにも係はらず、今に至る迄、其傳記がなきのを遺憾として、本書を編纂したのである。

一、本書の序文は、誰れかに書て頂く積にて、物色したが今は、翁に緣故のある人がないから、柏崎と榎井にある碑銘と、阿部野にある三舟の碑銘とを、巻首に掲げ以て序文の代りとした、是れ聊か編者微意のある所である、看者夫れ之を諒せられよ。

一、吉田松陰でも、高杉晋作でも、皆相當日誌やいろんな關係書類が存してゐて、材料が隨分あるが、我が讃岐の勤王家は、數度投獄の難に遭つて、家族の者が恐怖心にかられ、證據物件を湮滅さすべく、あらゆる書類を、燒却して了つたので、今確實の材料がないのである。

一、それで翁の傳記を作るのは謂ゆる、空中に樓閣を畫くと云ふ如うなもので、迚も完全な傳記が作れない其邊は豫め看官の諒解を、願つて置きたいのである。

一、前記の如く、本書は、匆卒の際に成つたものであるから、機を得て材料を博捜し、完全な傳記を出版したひ積である、本書掲載以外の材料を、有つて居らるゝ各位は、記者へ向け御通知を、希望いたしたいのである。

一、遺稿及遺文錄中にある注記や、又括弧を加へ年號を記入しあるは編者の記入したものである。

一、本書を編むに當り、左の諸君は材料蒐集や校正や、各種の方面に亘つて、斡旋の勞をとつて戴いたから、爰に一言謝意を表する。

大阪	日柳喬子君	兵庫	武岡樂山君
高松	宮武梅嶺君	坂出	岡田唯吉君
同	加藤正良君	琴平	荒川節次君
同	三井謙三君	同	三谷象雲君
榎井	篠原幸吉君	丸龜	島居千代松君
三豐	石井定彦君	同	藤田德太郎君
同	安藤準平君		

日柳燕石傳記

梶原竹軒監修

第一項　祖先

日柳家の祖先に就ては、翁の親友であつた、藤川三溪翁は、羽床伊豆守の末裔と云はれとる、又翁と縁故のありし、長尾藻城は其著讃岐風景論に於て。草薙隼人の末裔と云つとるが、私は二說中何れが正確なりや否や、其疑問を解決すべく、翁の家の書類も捜したが、格別有力な、完全な證據が見付からないから、同姓の故日柳正一の妹が、今丸龜市通町松本方に嫁して居らるゝので。其方に至り日柳家の系圖を、一覽さして貰つた、其卷物たるや、紙質と云ひ、筆蹟と云ひ、古色蒼然たるもので、正確と見とめらるゝものである、其系圖に據ると、七百余年も經たる、實に堂々たる家柄である、無論三溪の羽床說は何等根據なく、長尾藻城の隼人說が正當である事を確め得た。因に羽床伊豆守は天正頃の武將にて、讃岐國阿野郡羽床村に居城せし人で。資治、資吉の二子ありしが天正十四年に戰沒し終に其祀を絕つたのである。

日柳家系譜

元祖　師正　二代　正成

三代　信廣　　四代　信昌
五代　師久　　六代　信行
七代　高昌　　八代　高胤
九代　光昌　　十代　信滿
十一代　信幸　　十二代　景高（此人が長尾大隅守の家臣となる）
十三代　景久　　十四代　景近
十五代　景平　　十六代　景忠
十七代　景廣　　十八代　景顯
十九代　景利　　二十代　景光
二十一代　景貫　　二十二代　景村
二十四代　景行　　二十四代　景正
二十五代　景善　　二十六代　景保

今其大要を畧記すると、村上天皇十世の後胤。中納言正三位師行卿に出づ、此人が播磨國に封を食み、赤松城に居つた、其の三男師正が朝敵を征伐せし軍功により増封され、尾張國に於て祿高二十五万石を受く、而して此人が近衛院より草薙と云ふ姓を賜つたから、連綿として本姓を繼續してゐ

たが、十一代の信幸なるもの、代になつて、何か不首尾な事があつて、誅伐せられ城邑を殁收せられ其嫡子の六才になる音羽丸と次男の四才になる歌丸とが、信幸の未亡人に召連れられ、女中三人家臣十三人總勢十九人とで、讃岐國三野郡（今の三豐郡）箱ノ浦へ流され暫らく住居を爲せしが、後詫間の城主長尾元高に召抱へられ、全家の重臣となつて全地に居た、數年の後主人大隅守が鵜足郡長尾城へ移るに及び、俱に全地へ移轉し、數代忠實に勤めて續き居しが、天正頃に至り大隅守が長曾我部の爲に亡ぼされたので、草薙隼人は長尾へ、全族の兵馬は郡家へ、同族の彈正は岡田鄕へ夫々分居し歸農した、それから又數代を經て、隼人の家が榎井へ轉住したものらしい、左に其系圖の大要を揭げて參考に供する、因に其緣故で、翁が維新前に一時赤松劒吾と稱せし事あつた。

長尾落城臣下離散

于時天正之始頃、土佐長曾我部元親、主人長尾大隅守と、數度の軍に鎬を削り、千變万化と合戰すれとも勝負つかす、依て和睦す、其後天正七年正月より不和になりて、正月より八月迄合戰止むことなし、終に長尾家武運拙く、天正七年八月朔日落城す、夫より長尾氏家中三千四百餘人の中、忠臣三十七人召連れ炭所の山奥に引籠り、寛永十八年迄炭所に住す、同年六十七人の忠臣所々に分散す此の時に草薙隼人（景明事）は元の長尾村へ歸村す、草薙兵庫は奈賀郡軍家村へ落至り、農業をして渡世す、草薙兵五郎（彈正）は岡田鄕積へ落至る、于時寛永十九年七月六日。

竹軒曰く本系譜は此れより以下欠けてないから寛永以後の代數と其分派を知る事を得ざるを遺憾とする。

草薙を日柳と改む

翁の家の本姓字は、無論草薙であつたが、父の總兵衛も尊王家であつて、草薙の二字は草薙劔に對し恐れ多い事を自覺し、嘉永頃より日柳の二字に改めたのである。

西讃には草薙姓を名乘る家は、數軒あるが、日柳の二字を姓氏に用ゆる家は、翁の家と同族より、他にはないので、他家では皆な草薙の二字を使用してある。

第二項　父母と伯父

翁の父は實名敦恒、通稱惣兵衛と云ひ、家付の息子であつて、此人が志想堅固で、家業に出精し、日柳家の中興となり、許多の財産を蓄積されたのである、隨分壯健な質であつたと見へ、天保八年四月十日に、七十七才の高齢で逝かれ、法號を常喜信士と云はれた、翁が二十一才の時で肝必な監督者がなくなりしかば、此れより自然翁の行狀が奔放に流れしならんと思はる。

母は幾世と云ひ、其生家は今の三豐郡財田村大字財田上小字畫丹波の、石崎勘左衛門の次女であつた、夙に貞淑の聞へ高く、家庭も圓滿なりしも、子女が少なく、翁一人であつた、此母も父が逝か

れしより、六十日を過て、仝年の六月十五日に逝かれた、享年五十八であつた法號を妙薇信女と稱された。

石崎叔

母幾世の兄に、石崎近潔と云ふ村夫子があつた、近郷きつて其時分の學者で、澤山の生徒を養成した人で、翁も七八才より十二、三才の頃迄は、此人の處に寄宿して、四書、五經の句讀や習字等を學んで、諸般の薫陶を受けられたものである、遺稿中に「石崎叔の山莊」に題すとか「財田路上の舊作」などの作があるが、此は近潔の事や其周圍の景色等を、咏したものである、爰に一つの疑問があるが、翁は此人を指して叔と云つて居られるが、三井竹窓の書いた翁の傳記には伯父としてある記者も此点に疑問を抱き、曾て三豐郡史編纂の委員たりし、石井定彦君に其調査を依頼せしに、同君の熱心なる、態々財田村に出張して、詳密な調査を遂げ左記の明細書を送られた、其れで多年の疑問が解決したので、大に其勞を多とするのである。

其書に據れば母の兄であるから伯父である、翁はあの通の磊落の人であつたから、實際は伯父なれども、文字の使用上叔と云ふ方が、語路がよいので故意に叔と書かれたものならんか、又伯母は榎井の隣村、櫛梨の荒井家に嫁して居られたが、名をお兼と云ひ、延享四年六月廿六日に歿された。

燕石生母の里方

三豐郡財田村大字財田上五千五百九番地
平民　戶主　岩崎龜太郎

但仝村內に於て中等以上の農家にして仝氏は現に仝村一部落の區長職にあり、天性溫厚篤實部民の信用人物なり

右は日柳燕石先生實母の里方にして、仝家は元本姓石崎たりしも、明治初年一般苗字調の際、岩崎と改姓したるものなり。

現戶主龜太郎五代前戶主某に、二女あり姉某は仲多度郡吉野鄕村字苗田新井家に嫁し、妹某は即ち燕石先生の實母、仝郡榎井村加島屋に嫁し、先生を產みたるものなり。

爾後燕石長じて勤王を唱ふるに至り、幕府の追及甚しきを恐れ、加島屋とは自然的交際上疎遠なりしと云ふ。

苗字改稱の如きも、或は後難を恐れたるものによるならんか。

生母の兄に石崎近潔、字士高號靑岡通稱與八郎なるものあり、同氏は幼少より學を好み、二十才にして、妻諱與を迎へたるも、子女なく妻は以和二年に歿せり、其來來獨身生活をなして、邸宅の東面に於て私塾を開き、專ら子弟の敎養に從事せるを以て、近鄕名門の、子弟五十有餘名來學せり、

此當時燕石先生の如きも門下生として、四書五經等を學ばられたるものと云ふ。

第三項　出生

翁の出生に就ては、甚だ遺憾ながら、其正確なる月日が判からぬ、一体昔の人は生年月を後世に殘し置くと云ふ、歴史的の觀念が甚だ薄弱であつたものか、現に日本人名辭書などを見ても、生年月の明記されて居ない、先生方が澤山ある。

本書を編むに當り、記者は何卒して翁の生年月を知らんと、各方面に向つて調査を開始し、先づ第一に大阪に居らるゝ、令長孫喬子君に就いて說いた、又燕石通を以て自ら許しとられる、兵庫の武岡樂山君にも聽いた、又燕石通の篠原幸吉君にも質したが、何れも要領を得なんだので、琴平の荒川君に聽くと、詳しい事は知らんが、叔父の栗園と一つ年下で、彼れが文化十三年の生れで、安政元年三十九才で歿しとると云はれたのと、も一つは辛丑元日(天保十二年)の口占に「二十五年忙裏過」とあるから、其邊から斷定を下して見ると、文化十四年の幾月日かに、讃岐國は那珂の那榎井村の雜賀家に、呱々の聲を擧げられたのであると認定される。其年父の惣兵衛は五十六才であるから、無論晩年の子である、察するに前に兄や姉に當る人も、一人や二人はあつたであらふが、皆夭死したものらしく、現に榎井にある日柳家累代の塋域には、澤山の小供の墓がある、今は詳しき事は判からぬ、翁の生年を其時分の文豪連の生年と比較すると、備前の藤本鉄石、美濃大垣の小原鉄

心とは同年で、親友の小橋香水とは八つ、節齋とは六つ年下で、藤川三溪とは一つ年長、荒川栗園とは一つ年少である。

更に大さく、其時代の政治的方面を視ると、仁孝天皇が其九月に御卽位になり、將軍は十一代の家齊で、旣に其年は九月に英船が浦賀に來て、幕府の威勢が搖き初めた、又讃岐では高松藩は八代の賴儀公で、丸龜藩は六代の高朗公であつた。

第四項　稱號

翁ほど種々の稱號や、堂號を用ひた人は少ないが、幼名を長次郎、長じて耕吉、晩年上京して浩吉とも稱して居た、本名は父政恒の片諱、卽ち政の一字を採つて政章と云ひ、又た彰、字士煥、號は燕石(又猿示とも書く)柳東、春園、嵩堂、九白堂、容膝堂、三白、三樂、樂王、捫蝨なとゝも云ひ別に呑象樓、雙龍閣、芭蕉書屋とも稱した、又維新前勤王事件にて諸方面へ運動した時には赤松獻吾とも稱してゐた、以上の中で恐らく全國中で燕石の名を知らぬ人はない程其燕石の二字が一番よく社會へ通してゐた。

燕石號の由來

燕石と云ふ文字は、もと鰋石と書いて居つたのであるが、此は榎井の少し東に鰋川と云ふ川があつ

て、其川に鯰岩と云つて、鯰魚に似てる周圍七八間に餘る、大きな岩があつて河水の急湍が激して其岩に衝突すると、其景狀が如何にも爽快であるのを見て、二十才頃より燕石と號されたが、鰋の字は文字其物が字體がヒチクドク、書き惡ひのと、雅でないのと、又一つは、燕雀何んぞ鴻鵠之志を知らんや。なとの謙遜の意味で、斯く燕石と云ふ文字に書き改められたとの說である。

變　名

維新前に在つては、本名では有事の時大事が漏洩する恐れがあつたから、名家は大抵或る場合に臨んでは、變名を用ゆる事が習慣になつて維新前は尚更此習慣か流行してゐた、即ち金岳公子は小國廣太郎の名で維新前に活躍されたが、翁も亦長次郎や燕石では、余り各地へ名聲が通り過ぎて大事漏洩の恐れがあるので、勤王志士と聲息を通ずる時には多く赤松獻吾の假名を使ふてゐた、此は先祖が、播州の赤松城に居つた、緣故に因みて假りに稱されたものである。

第五項　生地及宅址

生　地

翁が文化十四年に呱々の聲を擧げたのは、讃岐榎井東町字旗岡の突當で、琴平街道に沿ふた西向の堂々たる家(今の篠原幸吉氏の宅)であつた。全家は加島屋と云ひ、其近傍切つての財產家であつて

其家は今に舊時の面影が殘つて居る、間口が七間と奥行が十五間で、裏に土藏や植込などもあつて多少は篠原氏の有に歸してから、改修された、前栽に亭々たる松樹があるのを燕石手植の松と言傳へてゐる、裏に離れ座敷もあり、二階の座板などは樟の二寸板を用てある、其當時は界隈中での豪家の俤がしのばれるが、斯かる大家も主人公たる翁の放蕩の結果、人手に渡さねばならぬ羽目に陷り、翁の二十五六才即ち天保十三年頃、篠原の祖父へ賣渡され、數十年間住み慣れた思ひ出多き大家を、弊履の如く見捨てゝ其宅より三丁程、西の南側の一小家屋を借し轉宅された。

柳東軒　芭蕉書屋

初めて移つて來たのが柳東軒であるが此家は矮屋であつたから、一に容膝庵とも稱された、其位置は定かならねど、今の村役塲の附近ならんとの說である、其宅の北に梧桐があり、西に西湖柳があつたので柳東軒と稱し。又翁は芭蕉の蕭々たるを愛し、常に庭内に芭蕉を植付けありしを以て、別號芭蕉書屋とも稱した、天保十年出版の象山雜詞にも芭蕉書屋録とあれば、其れ以後數年間此處に居られしものならんと思はる。

愛松軒　撫松樓

次に嘉永二年頃、翁が三十三四才の時お松と云ふ妾を入れて、鞘橋の西詰を南へ入る所へ一家を構

へ、之れを愛松軒と命名し、後又撫松樓と稱しとられた、此は妾を撫するの意味であるが、愛妾では余り露骨であるから、妾の字を品よく松の字に更へ、撫松軒と云ひ、後に撫松樓と云つた、此家に有名な越後の勤王家長尾秋水が投して、數日淹留した事がある、私は先年、今は故人となれる翁の仝姓であつた、日柳正一方にて、秋水の書きし梅花百律の中の一首を書きし小切物を見たが、其奥書に何んでも、たしか丁巳（安政四年）春琴平山下撫松樓上に於て、梅花百律の中一首を書し、燕石詩伯に際すと題してあつた、然らば其頃迄は此處に居られ、其後仝五年頃より春象樓に移られしものならんかと思はる。

柳東軒の備品

左の品が柳東軒の備品であつた、遺稿には斯ふ言ふ皮肉な事が云つてある、柳東の室には窮鬼が窺つて、家具が往々翼を生して飛んで行く事があるが、左の品だけは座右を離なさすに、保存されてあると。

瓢　刀　銅佛　竹聯　月琴
書帖　漆硯　小杯　茶爐　竹搔背
燈檠

前記諸品の内瓢は翁が此君と自刻し愛玩品の随一でありしが、何時の間にか窮鬼が窺ひ取り出した

ものと見へ、後垂水の入谷氏の有に歸し、後大谷硬造の手に入つていたが、本年春高松市外磨屋町若達樓で開かれし入札會に出て今は西讃某氏の手に歸した、本書口繪に出した物が此である。

呑象樓　皆宜樓　雙松閣

有名な呑象樓は一に皆宜樓又雙松閣とも云ひ、琴平街道の櫻井と琴平との境で、鞘橋を東へ五六丁行つた突當りに在つて、元はすぐ北隣の興泉寺の隱居所であつたのを翁が借りて移居したものである、此家は安政以降天下の文豪や志士が時々訪問し、宿泊もし天下の大事を談せし、有名な家屋なれとも、實質は甚だ貧弱なもので、間口が三間位で奧行が四間位の二階建で、中の間取は樓上が六疊一間で、下は上り口が二疊、中の間が臺所三疊、奧の間が六疊で、此れが翁の居間であつた。此家の特徴としては西向お山(即ち琴平宮)へ面して壹間の窓を明け放してある。當地方にてはお山へ向つて窓を明け、見通しにする事は神慮に觸るゝとて、何所でも恐れ居る所であつたが、翁は豪放な人なれば、そんな迷信にはちつともお搆なく、西向き眞正面に窓を穿ち、琴平山を睥睨し而して此家に呑象樓なる一大名稱を下し二階には誰れか名家の筆になる呑象樓なる額を揭げあつたが、翁が慶應元年高松へ捕へられし後、誰れかが持ち去りしものが、今は其所在さへ定かならすと、蓋し呑象樓なる名稱は、翁が深意のありし事であらう、由來琴平宮は、特別の靈現ある海神として、全

國に數万の信徒を有し、從つて許多の收納金あり、其年收數万金を越えたる事は、琴平及榎井地方の衆民環視の裏にある所である、翁の熱心唱導せる攘夷の擧が實現されんか、先立つものは金であるからイザ旗擧げの際には、お山へ乘込み、一時軍資金として、其有金を流用せんとする、下心で既にお山を呑んで居た意氣があつて、斯くは命名されたのではあるまいか、又其內部の事に就ては曾て記者の先輩に中澤興暢と云ふ老人があつた其人は漢學者で、詩人であつたが、折々翁から招かれるので、或時呑象樓を訪ふたが、表は一間のクヾリ戸が入つて、座敷へ通ると柱には一ケの愛瓢がつるされ刀掛には何にか名刀らしきものが、掛けられ、文几の上には、硯と唐紙の野紙が三四帖のせてある丈にて、秩序整然として、博徒らしき者の影は一人も見へなんだと、聞く所によれば志士や文士の出入口と博徒等の出入口は區別しありて、博徒は裏の路次口より窃かに出入せしめたので、謂はゞ公私の區別がキチンと極つて居たと、此間の狀況から推了すると翁が好んで博戲を弄されたのでなかつた事が首肯されるのである。

呑象樓を保存せよ

附言記者は爰に一言を費さねばならぬ事がある、時折社用を帶びて、琴平や榎井に至る度にもと呑象樓の前を通り、仰ぎ視て今より七八十年前には、木戸や高杉等の勤王名士も來り、又節齋や鐵兜

等の如き文豪も來り、天下の大事を談じ、又藝苑の佳話も語つた如き又と得難き好記念物なるに、今や其れを我關せず焉と、頽敗するがまゝに委することは、何たる無情ぞや、聞く處によれば豐前の中津にある福澤諭吉翁の居宅も、伊勢の松阪にある本居宣長翁の故宅も各其町に於て買收し原形の儘保存されて居るにも拘はらず、榎井村に於ては一向そんな計畫もなき樣なるが、記者は此際切に町有志に勸告するが呑象樓の跡を村に於て買入れ、修繕を加へ、青年會場か、或は圖書館に充當し永く記念として、保存されん事を希望して已まん次第である。

遺稿中に四時皆宜樓とか又單に皆宜樓などゝあるは、皆呑象樓の前名であるらしゐ。

雙龍閣とは矢張此の樓の別名であるが、其由緒は道路を隔てゝ路の南側に、大きな松樹が二本亭々として聳へて居た。此は元は壹里塚か、又は琴平と榎井村との境界に植しもので、一の境界標であつたかも知れないが隨分大きな松であつた、此中壹本は拾年程前に枯死し、殘る壹本も程なく枯れ今は其古株が殘つて居るが、一寸見た處直徑三尺以上もあるから、察する處其松は三百年前後に植へたものらしゐ其で又翁がいつ頃から此處へ移轉されたかは、無論正確な記錄がないが、呑象樓の裏手にある、興泉寺の手洗鉢と井側に翁の自筆にて、左の文字が刻まれてあるが、其は此處へ移轉後翁が報恩の爲め寄附されたものと斷定されるのである。

安政六歲在己未九月吉

漱水

施主　日柳政章

第五項　宗門及墓地

翁の家の檀寺は、讃岐國仲多度郡象郷村大字苗田にある、眞宗東派に屬する。光賢寺である此寺は應仁中三谷興圓の建立で、隨分古き寺歴を有する寺院なりしも、明治五年の百性一揆の際燒かれて寶物などは烏有に歸したものも多しと聞く、然し翁の主義としては日蓮の志想を尊崇されたようである現在榎井村中程の北側で、往還を少し這入つた處に三十番神を祀られてゐるが、香川老人の談に此れは往年金岳公子が、建立されたものであると云はれたが、過日も其お堂に詣して見ると、成程松平家の定紋葵の入つた瓦で、屋根が葺かれてある、此れなども財源は金岳公子であるが、其建築事業には翁なども關與されたかも知れぬ、當市の古老大久保老人が、曾て記者に言はれしに、

最澄、空海、日蓮者雖在僧籍敬神愛國人也

と翁の書かれたものをいつか見た事があつたから、日蓮崇拜家であつたらうとの事である、蓋し中らずと雖も遠からずであると思はる。

又祖先以來の塋域は、榎井旗岡で町より三四町北へ離れた、田甫の中に、土塀園があつて、其中に日柳家同族全体の墓がある、其面積は六七坪もあつて、墓石の數は三四十もある、翁や三舟の墓も無論此所に立てられてあるが、翁の分は越後柏崎にあるのが、遺骸を納めし本墓で、三舟のは大阪天王寺阿部野にあるのが本墓で、當所にあるのは孰れも爪髮を埋めたものである。翁は仁和寺宮から賜はつた、大櫻定居彦命で神道である、法號は釋大定である。

第六項　家庭

翁の家庭は一家團欒さか平和圓滿と云ふ方ではなかつて、寧ろ甚だ寂寥たるものであつた、何にしろ二十才そこ〳〵で兩親に訣れ、肝心な監督者もなく、一人主となつた上に、其當時琴平の地たるや、一の銷金窩であつて、其金山寺町と名つくる所は、殆んど妓樓と料理屋とを以て充たされて居た、老少を問はず、足一たび其境に莅まんか、直に捕虜となつて、一指を染め得すして、空しく其重圍を脫出し得るものは稀であつた、殊に金山寺の裏町今の小松町と云ふ處に、トンバと稱する富籤塲があつて、讃岐は元より近郷より射倖を目的に、來集するもの多く、殷賑を極め、隨つて榎井の地も其れに接壤して居たので、四圍の空氣が混濁して居たから、いつの間にか情海に沈溺して、操行を破壞されたのであらう、然るに翁も三十五六にあつて、往時の夢がさめたものと見へ、愬見

を詫間の富山方に修學に遣はす時、斯ういつて懺悔して居られる。

余は弱冠にして花柳に耽り、誤て風柳の獄に墮ち、粉黛と魅魅とが我を欺ひて鴆毒を侑め辛苦數年の業は化して蕉中の鹿となつた云々。

右のような始末で、許多の財産も雲烟霧消したものである、殊に翁は多情の豪傑で好色家であつたから、妻妾を順次に數人も更換されたので家庭は圓滿でなかつたらしゐ、其最初の妻はヌイと云ひ大阪屋某の女で、琴瑟相和し翁二十三才の時、長男の道之助即後の三舟が生れ、六年の後又翁か二十九才の時にお菊と云ふ女子菊子か生れた、此妻女は貞節で怜悧な人であつたらしゐ何故なれば三舟も菊子も何れも利發な性質であつたから優生學上、かく想像されるのである、然るに其頃から翁は放縱な行狀を爲し、家を外にし發展家となつた、殊に彼女に對しては同情に堪へぬのは、菊子が生るゝと又妓某を落籍して、名をお繁と改めさして、琴平山下に妾宅を構へ、之を愛妾樓又撫松樓と稱し、其家に入浸り、一年余りも妻子の處へは立寄らさりしを以て、妻子は衣食に窮し、己を得す、同姓寬平の家に寄食して居つたが、道之助が八才の時其生母のヌイが前途を墓なみて二十七才で歿した其當時妻子が流離困頓の有様は、到底筆紙の尽すべきにあらずであつた、其お繁と云ふのは泥海に育ちしにも似ず、性質が貞順温厚であつて、道、菊の二兒を撫育すること、恰も吾兒を視るが如くであつたから、二兒も始めて其心を安んした、然るに其後又お松（菊松とも云ふ）と云ふ女

に溺れて、お繁を去り其代りにお松を入れて妾とした、彼是れする内に菊兒は病に罹り歿し、三舟は既に十四才の青年に達せしかば、醫術修業として、松崎の富山凌雲の許に至り寄食し、家庭は一層寂寞を感するに至つた、此お松と云ふは、藝妓でもなく、娼妓でもなく、謂ゆる半黒人の女であつて大兵肥滿して且大力の女で、膽力も餘程据はつて居つたから、翁が諸方へ旅行するに當り同伴され、隨分氣に入りであつたが、一朝の悲劇が出來して、破鏡の難に遭ひ、間もなく歿した、後に又お澤と云ふを入れたが、此れが最後の妾であつて、翁が在獄中の家事向の事や、明治元年京都に上ぼられて後も、荒川氏に伴はれて上京して、翁を慰問し何くれとなく世話した事もある。

道之助（三舟）

道之助は翁二十三才の時の子で、長子愬兒である、名は政愬、字は終吉初め秋帆、後に三舟又草亭主人と號した、天保十年七月十四日の出生で夙慧神童の稱があつて、幼より畫を好み七歳にして、須本紅洲（其頃琴平に來寓してゐた日向人）に就き畫を學び、又近藤秀眠に描法を聽き、合葉文山の粉本により學んだ學業は荒川栗園、書道は村井竹雨に學びつゝあつたが、栗園が隱岐へ行つたので美馬君田に從學した、後醫業を志さし、詫間の富山凌雲と云ふ醫師の處へ入門した、其家は栗園の姉の嫁してる家で、且翁の親友であつたから、凌雲が親切に薫陶を加へたので、學業が上達して、

はや伐診を勤むる迄になつた、然るに彼は倘此れに滿足せず、播州林田の河野鉄兜の塾に至り詩文を學び、又轉して京都に至り醫業を研鑽し、業成り文久元年頃に歸鄕して、榎井の東町の中程の處にて醫術を開業したが、素養がある上に才子肌で其上交際上手であつたから、一時流行り子で、日々多くの患者が蝟集して、門前市を爲し、其れが爲に收入も增し柳家の名聲を囘復しかけた處へ、又翁が入獄と云ふ大難が發生して來た、其時代の牢獄と云ふものは甚だ不規律なもので、賄賂公行であつて、獄吏や牢番などへ、每日多分の附屆と食料が要つた、其費用は皆三舟が醫業の收入の內から支出したとの事である、其後翁が上京する樣になり、好運の曙光が見へたのに、其れも束の間で、明治元年の八月に翁が遠逝の報に接したので、急き上京して柏崎に赴き、逝去の際の摸樣を詳悉すへく、當局へ交涉せしも當時戰亂の際とて、越地への旅行か不可能であつたから、其儘彼地に留り居る間に、薦る者あり明治二年三十一才で兵部史生になり、尋いて陸軍兵學大屬に任せられ、勤務中に時の大阪府權知事渡邊昇に知られ、大阪府大屬に轉じ學務を管して着々功を奏し、同十年大阪師範學校長を兼任してゐたが、翌十三年六月職を辭して、盲啞學校。愛育社、實學校等を起し又一面浪華文會なるものを起し、敎科書を發行して敎育事業に盡瘁した。

又其詩風は尤も七律に長し、一題手に觸るれは直に篇を成したと、著書としては侯鯖詩話、海內詩媒、殘甕小稿其他數種あつた。

明治卅六年七月廿三日、病の爲め三男四女を遺して、黃泉の客となつた、享年六十五。

附言　三舟は前記した如く、明治初年未た教育事業の幼稚な時に、其主腦となり大阪府の教育の基礎を築き上げ、現時の如く隆盛の域に向はしめた大恩人であるから、同府民たる者は天王寺あたりへ一の記念碑を建て丶氏の英靈を慰さねばならぬ、義務があると思ひ、一言此に記してたく

附記　三舟の生れし時も、左記の如く大雷鳴であつて栗園が祝して居る、歿せし時も亦大雷雨であつたと、如何にも奇現象である。

荒河栗園

中元後二日訪二子燦一。雷雨至レ門忽晴。聞レ擧二男兒一乃余至レ門之比恰落レ地矣。賦レ此以賀

來時我怪雷雨至。何料君家有二靈異一。登レ席忽聞喤々聲。始驚麟兒天上墜。
結レ交平日比二同胞一。君兒猶似二我兒曹一。抱來仔細看二面骨一。心祝他年爲二英物一。
君不レ聞放翁生日風雨臻。此兒亦然非二偶然一。爲祝文采繼二阿爺一。縱横壇上挫二衆賢一。指点雲端覩二祥瑞一。萬丈綵霓截二半天一。

菊女

お菊は長女にして三舟と同腹の妹である、弘化二年翁が二十九才の時の子である、菊と命名したの

は菊の節句前後に生れしを以て、かく名づけた、此兒も兄に似て幼より怜悧な質であつたが、不幸にして翌年二ッの歳に母が歿せしかば、翁の手一ッにて生長したので、一しほ愛がまさりしと見へいたく翁の鍾愛を受け、格別虫氣の煩ひもなく可愛さ盛りまで生長せしが、不圖惡症の眼疾に罹りしを以て、其當時琴平には格別な醫者がなかつたので、翁は態々備中笠岡まで連行し、同地の名醫に診察せしめ療養中であつたが、餘病が併發し天壽、如何んともせんかたなく、嘉永六年正月三日、僅かに十一才を一期として其地で歿した、此時翁は三十七才であつて、よる年波と共に一人娘を失ひし事とて、悲歎やる方なく、遺稿中にもお菊を悼むの詩が澤山あるが、日柳家にある遺品中に情鍾と題し翁が涙餘の詩を、細楷を以て自書したものがあるが、初丁の題字は親友であつた、丸龜の鶴仙が書き、次に平安の森寛齋が。バチと琴の爪とを書き、其次に遺稿中にある、追悼詩と和歌とを書き列ねてある、以ていかに哀悼の深かつた事が察せられる。

吾友政章が、むすめの、旅にて身まかりけるとき、かなしひうた、あまたよみて見せける中に、こその秋、おき初にける、黑髮を今はかたみと、見るぞかなしきとあるを、きくうたに、むねつふれて、たゝなきに、なかるゝ事を、ちゝの實のなくに、心はかはかり、かなしからんと、おもうまゝに

春ここに、そひぬへく、たき初し、綠の髮をかたみとや見る

此歌には筆者の名が、缺しとるが多分奈良松莊の筆ならんか

第七項　性行

翁の性質は氣宇宏偉にし磊落、物事に拘泥せぬ氣の捌けた所などは、高杉に似て言はゝ當世肌の人であつた、其才識は羣を抜いて居た、氣分は狷獬持ではなく何處かに悠揚な所があつた、其上任俠の性を有し、人の窮を救ふを以て、已の任として居た、翁の品行に就いて彼是評する人もあるが、昔時の學者が、石に裃を着けた如うな風は、時勢が違つて來たから同一視する事は不可能ぬのである、或老人の話に、翁は余り論語なんかを愛讀されなかつたと聞いてると云つたが、成程そうかも知れぬ、今の名士澁澤翁なんかは、論語党で日夕論語を讀んで、日常の行爲を其型にはめこられるが、今日斯んな事を全翁に話したら、定みし吃驚されるだらうが、我輩が考ふると、此れが燕石翁の眞髓である、翁は英雄は細行を顧みず底の東洋流の豪傑で、酒も飲み博奕もうち姫買もするなど隨分キワドイ事を行つたもので、修身の型には篏まらぬ点が多い、尤も此は元祿の昔し、大石が遊蕩に身を持ち崩し、敵に油斷をさした如うに一面にては佐幕黨を油斷さすべく其韜晦策であつた。然し彼の幡隨院長兵衛などは、俠客中での俠客であるが、學問がない、翁は大俠で大學者で、勤王家である、維新の志士が翁の庇護によつて其生命を全ふし、後風雲に際會し、維新の大業を翼賛した事は、間接に翁の眞心の發露であると云はねばならぬ、翁は又非常な歴史家で、且感情的な人で

あつて、古今の英雄豪傑の事蹟を評論する時に及んでは、霏々として木屑を鋸する如く、微細に渉つて居て、談が進展して忠孝義烈の事に至つた時は、蹶然起立して歎息流涕して聞く者を感動せしめたと、以て其性情の眞摯な、半面が窺はれる今其逸事の二三を左に掲けて紹介する。

附言　翁は常に一刀を、提けて居られしが、此は天下の塵を掃除する意向で、敢て匹夫の勇を學はんと云つて、めつたに脱して人を殺傷する様な活劇は演せられなんだと。

其一　日常

翁の平常は嚅々として書生の如うであつた、元來口の人でなく、筆の人であつた、平素豪放不羈であつたから、時間の經濟なとは余り念頭にかけぬ人であつたかの如うに思はれるが、却々以てソウでない、間がな隙がな讀書と筆硯とに親まれ、倦む事を知られなんだ、晝は多數の人々が出入するので、勉强の間がないから、重に夜間を利用され、夜は遲くまで書見に耽り、其代り晝は今の十時過までも寢られた、此点は金盾公子が十一時頃まで就眠されたのと克く似てゐた。

時折賭場の監視のため行かれても、肝心の戰爭は乾兒に委かせ、自身は隅の方で讀書に余念がなかつたと。（此は善通寺の光家翁の談）

又翁の家には、格別此れはと云ふ、大した本がなかつたので、何處からか壹箱つゝ借り來て、晝夜かゝつて其れを讀破して、スツカリ胸中に蓄へ、而して元の家へ返して又次の書借りてを讀むと云

ふのが、翁の勉强法であつたと、此点は少し山陽の勉强法と似て居る、斯くしてあんな博學者になられたと（此は荒川節次君談）

又日常の膳部なども、青年の時は家が富有であつたので、隨分贅を盡されたかも知らんが、中年以後は質素なもので、決して贅澤な事はされなんだが、酒だけは晝と晩とには必らず、一銚子づゝお膳の上に供へられてあつたと。

其二　孝行

孝は百善の本とか百行の本とか云つて、誰でも子たる者は、日常行はねばならぬ事であるが翁はあの通りの磊落家であつたから、親に對つても其仕振が疎畧であつたらうと思ふ人もなきにしもあらずだが、却々ドウしてそうでなかつた、常に親の膝下では温々たる女子のような態度であつた、或時慈母が病氣に罹り、臥蓐され居る中に表へ女藝人が來て、歌舞を爲したる事があつた、其時家の者や下婢などは病人の看護の事は打忘れ、皆が演藝を見るべく病人を棄て置て表へ飛び出して行つた然るに翁だけは其藝人の方へは一目もふらず、母の側を離れずに、熱心に看護を怠らなかつたと其時伯父某が其所行を見て、スツカリ感心して、此兒は他日偉器とならんとて、大に賞讃したと。

前記した如く、翁の尊屬親に對する尊敬の仕方は、只形式に捉はれたるのでなく、眞心を籠めての仕業であつた、或老人の談に、信州松代に川合正直と云ふ勤王家で孝行な人があつたが、其人は亦

貧洗ふが如き境遇であつたにも拘はらず、先祖の追弔は欠かさなんだ、或時親の命日に當つたが、貧にして何物をも供するものがなかつたから、大豆三粒をお供へに上げてお勤をしたとの事であるが、翁と此人とは境遇は異つて居るかも知れぬが、石崎の伯父や先祖の慰靈祭などは、怠りなく勤められたと見へ、遺稿中に夫れ等に關する詩が散見してゐる。

燕石自題畫像詩

非レ儒非レ佛是頑仙。豪氣稜々聳二瘦肩一。一局樗蒲莘應物。十年花柳杜樊川。身軀仮令少二於豆一。肝膽猶望大似レ天。肖像描成果何意。此風豈可二子孫傳一。

以て平素の抱負を窺知すべしである

幕末の奇傑

先輩煙雨樓主人翁を評して曰く嗚呼燕石は詩人か、尋常の詩人に非す、俠客か尋常の俠客に非す、儒者か尋常の儒者に非す、彼は實に幕末の時代思潮に、涵養せられたる一個の奇傑たるなり云々。

水滸傳を愛讀す

燕石は水滸傳中の、豪傑を以て任したるのみならず、水滸傳を愛讀すること回敎徒のコーランに對するが如く、毎夜其數章を精讀せすんば、決して臥床に入らざるほどであつた、遺稿(十八二十丁)に讀

水滸傳の詩あり參照すれば、本項の事實を證するに餘りあるのである。

伊企儺を慕ふ

燕石伊企儺の人格を慕ひ、畵工に命して其像を摸せしめ、其れを表裝さして幅となし、壁間に懸け春秋に祭事を執行して居た、或時竹窓(三井氏先代)が行つたら、壁間に揭げてある伊企儺の像を指して、汝は此人の事績を知つてるかと言つて、說明されて曰く此人は昔時三韓征討の時大將軍紀男麻呂に從つて新羅を征したが、吾か軍不利にして終に敵の捕虜となつて、降參を勸誘されたが、應しなんたので、刀を首に擬されても屈せす、其上大聲に呼んで曰く、新羅王予が臀肉を啖らへと言つたら、竟に殺されて了つた、若彼が降參したら、生命を全たふしたのに甘んじて殺され死に臨んでも其志を變せなんだ、其精忠は實に日本男子の鏡であるとて、日夕其像を拜して心膽を鍛錬されたとの事である。

第八項　風貌

翁の風貌は余り堂々と云ふ、風でなく寧ろ揚らなんた樣であつた、昔の豪傑は大概容貌魁偉とか、魁岸なと言つて比較的身長の高いものが多いか、翁は之に反し顏の長い丈の低い小男で瘦ぎすで、短小精悍と云ふ風であつた、顏の諸機關は如何と云ふに、鼻は隆準にして形もよかつた眼は細く長く

て男にも女にも持て囃される樣な風であつた、然しそれかといつて、魂の据つた悠揚迫らさるの概があつて、態度に威嚴が加はつて一見紳士の風采が備はつてゐた、又顏は痘痕があつたが是も甚しいのではなく薄ジャンギで余り醜いと云ふ風ではなかつた、親友の藤川三溪は、翁を評して身長四尺に盈たすなど丶ひやかしてるが、荒川君に聞くと夫は酷でマア四尺八九寸はあつたと云はれる斯く云ふ藤川自身も小男であつたと、又翁の尊敬して居られた金岳公子も小男であつた、由來「大男は惣身に智惠が廻りかね」と云ふ、川柳もあつて却つて小男に智嚢を有しさる者が多い、現に高の松人士が夢寐にだも忘れる事の出來ぬ、築港の恩人小田稼亭翁の如きも小男であつた、又南山の役副首領たりし松本奎堂其人も短身である上に、一目も眇で面部に痘痕かあつた其れで見ると、小男に却つてエライ者が多い、翁もご多分に漏れぬのである、蓋し翁の生れた文化頃は、讃岐では未だ種痘が充分に行き渡つて居なかつたから、痘痕のある人か多かつた筈で、翁も其連中の一人であつた其れであるから、無論色男とか美男とか云ふ圏内には編入されないのに係はらず、翁は多情の豪傑で、金鄕の花柳界に嬌名を流し、數多の美人を惱殺されたのは、余程その操縱術に長して居られたと見へる、爰で憶ひだすが私が先年傳記をかいた、女丈夫の若江薫子も痘痕があつて醜婦であつたが、天の配劑は妙なもので兎角豪傑には美貌を賦與されぬものと見へる。

尙一ツ附記するが翁は却々極り手でいつでも、宅に居る時でも外出する時でも、羽織を離なされた

事がなかつた、尤も其時代は今の様な長羽織ではなかつた、短いものであつたと此を見ても威厳があつて紳士然として居た事が判るのである。

長州人士の燕石觀

明治元年五月に、木戸と共に萩に出張した時、諸士が非常に翁を饗應し歡待至らなかつたが一夕前原一誠や野村素軒と同飲、其夜は野村邸に泊りしに、彼の有名な「日本に聖人有り」の詩を作りし、燕石とはドンナ人かと、皆が接見せしに、五尺にたらぬ小男にて、色黑くして頗る氣品揚らず、然れども一度口を開けば、頭の端から毛髮の先まで、忠魂義膽の人なりし云々（某氏談）

第九項　學問と其師

翁は學問と云ふ事に、かけては恐ろしき天禀の才能を有つて居られ其上に、一度聞いた事は終身忘れぬと云ふように、非常に記憶力の強い人であつた、其學問の經路は斯うである、少年時代は三豐郡財田村（位地は琴平より二里許南西に當る）なる、石崎近潔と云ふ伯父の家へ寄宿して、勉強し四書五經位までは解し得るような學力を修め其と同時に習字も無論習はれた、彼是する中に四五年も經過して蛟龍遂に池中のものにあらずで、何時迄も斯かる片田舍に蟄伏さすてはないと、父が考へて十四才の時居村へ呼び戻したものである、其時琴平お山付の醫師に三井雪航と云ふ儒醫があつた

人は山陽や小竹の門人で、近傍切つての學者であつたが、此人は父の總兵衛とも懇意の間柄であつたので其方へ入門された、何にしろ一を聞て十を知ると云ふ、天才肌の上に寒暑風雨の厭ひなく、日夜寢食を忘れて、熱心に脇目もふらす、勉學されたものである、それで塾中で皆の書生等が感心し。評して曰く烏がなかん日はあつても、燕石の勉學を休んだ日がないと云はれ、琴平附近では大評判をとつた秀才であつた。

雪航翁も燕石を視る事、我が子の如くいと懇切に敎育され、嘉永四年其人が歿する迄、前後二十年間も指導の恩を受けられたのである、其先生は嘉永四年に痢病をやんで歿されたが、其時敎子たる翁は、非常に哀悼して、奉悼文を捧げて、其逝去を惜しまれて居られる(雪航翁遺集跋遺稿七九にあり)此れに就て附言するが、昔は其師を父親と云ひ、父と同前に尊敬し。又師たる者も門人を我子と同樣に思つて指導したものであるが、今時は人心が荒さんで、師弟の關係が冷淡になり、何んぞと言へばストライキを起して、校長や敎師を窘じめる事が各地に流行してゐる、實に歎ずべきの至りである何んとかして、此惡風潮を矯正したきものである。

天保頃丸龜に岩村南里(秩)と云ふ儒者があつた、此人は丸龜藩士で西讃切つての學者であつて、翁は非常に尊敬してゐた、此人にも就て敎を受けられ、時折詩文の批評等を請はれたものである、此人も天保十三年に逝かれた、夫れ以後は獨學獨修であれ程の學業淵博、識見高邁の學者になられた

のである（追悼南里先生の詩遺稿四五にあり）

晩年になられては、丸龜の儒醫尾池松灣とも、詩文の研鑽唱和をして親密の交際を結んで居つた、翁の學力の深遠該博であつた事は、本遺稿の詩文は元より其註脚に挿入してある、故事を見ても感するに餘りあるが、特に一驚を吃するのは其時代（即八九十年前）に西洋の人物（閣龍、伯德兒、話聖東、那波烈翁）等の事蹟を咏しさられる一事であるが、翁はあんな熱烈な攘夷家であつたのが、何時の間にか開國家に豹變して西洋の事情を研究された、其先見の明があつたのには今更ながら感服せずには居られぬ。

前記した石崎近潔は、翁の實母の兄であるが翁は詩文中にいつでも石崎叔と書て居られるが、其人は尋常の村夫子でなく、一角の高尚な志想を抱いた隱君子であつたと見へ、翁は其人の德を頌して居られる詩が四五首もある今其一を示す。

題石崎叔山莊

義軒以上高尙。廉讓之間卜居。問奇賓客携酒。閉戶先生讀書。

讀書要訣

【】の讀書要訣は博聞强記などはドウでもよいが、忠孝の二字を充分に服膺せよと言つさられる。

讀書有二要訣一。何要用二博雅一。忠孝唯二字。識レ之即學者

三井雪航

名重清、字子潔、通稱隆齋、號雪航、堂號含翠堂と云ふ、周德の嗣子、琴陵の侍醫、竹窓の義祖父なり、詩文を菅茶山後、山陽に學び正風館を開き子弟を教育す、嘉永四年六月沒す、年五十六

奉悼

雪航三井先生

我年十四五。就レ翁學レ詩。翁也憐二我志一。視レ我如二眞兒一。告諭太丁寧。讀書致二黃鸝一。澤二十年。受恩無二窮涯一。辛亥(嘉永四年)暮之夏。疫鬼恣二虐威一。翁亦觸二邪氣一。一朝就レ衾。惟我來問二病苦一。形容已羸疲。囁嚅不レ能レ語。相對淚如レ絲。猶記十日前。草堂献二一巵一。醉談及二花柳一。一笑共開レ眉。其言未レ離レ耳。其人去安之。人生如二朝露一。百年眞片時。茫々北邙煙。月色晚凄其。作詩呈二墓下一。靈魂知不レ知。

門生柳燕石章

九拜

(三井謙三氏藏)

漢字制限論

學問上に於ける翁の卓見の第一は漢字制限論である、文部省では十余年前より、國語調査會など云ふ機關を設けて、漢類の種字が多いので、其制限に就て數名の學者連が頭を惱ましてゴ座つたが漸

く此頃に至り、在來の漢字中より、千九百六十三字。外に略字百五十四字合せて二千百十七字を撰出して、敎育書や日用の行事に使用するよう、極まつたと東京の新聞に出て居るが、夫れではダメであらうと思ふ、我輩淺學と雖も、文字の活用と云ふ事に就きては、敢て人後に落ちぬ積であるが矢張少くとも三千種は要するのである、果せるかな翁の賢明なる既に今より七八十年前に漢字制限論を唱道して居られる、左の詩が夫れを立証してる。

漢字有用字。不レ過二三千字一何人妄製造。殆過二五万字一可レ憐博學者。目有二未レ識字一

以て翁の卓見がいかに時流に超越せしかゞ察せられる。

青年の際日本外史を寫す

日本外史は間接には討幕の檄文の樣なもので、翁が非常に愛讀せしものなるが其頃全書が容易に手に入らなんだと見へ翁は其全部を謄寫し愛讀したもので、其本が遺族の處に現存してる今之を見ると大判紙を二つ折にして九行十八字詰に、細楷を以て認めてある、同書の原本は恐らく、親友の秋山伊豆が山陽の門弟であつたので、仝人が歸鄕の際將來したものを借りて寫されたものと思はる、日本外史の全部の字數は未だ數へた事はないが、其總數は何万であらう、夫れを寫した上に其に處々要点が書入れがしてある、此れを見ていかに翁が學門に熱心であつたかゞ想察されるのである。

第十項　詩　作

翁は作詩にかけては、天縦の才があつて、其技優に一家を成し、森羅萬象、目に入るものは悉く詩題にされ其を捕へて直觀的の情緒を述ぶるに至つては他の匹儔を許さないものがあつて、就中詠史が得意で、氣節を以つて勝つてゐて、其詠する所は本邦の史蹟と、漢土の史實とを問はす、卓見として敬服すべき点が多ひ、故に一題出る毎に江湖に宣傳された。京都の詩人江馬天江は翁の作を見て警拔と評して敬服してる、翁の詩名が世に鳴つてゐた事は、旣に弘化四年四月江戸京都大阪の三都に於て發行された、皷腹集に五首程又安政五年春京都に於て發行された近世名家詩鈔にも九首採錄され、堂々たる全國中の名家と肩を並べてゐる、和漢の是はと云ふ人物は勿論西洋の人物例之は話聖頓、那波列翁、魯西亞、米利堅等の類までも詩題に撰はれてる、其等を見ても詩才の縱横に發展してる事が窺はれるが、翁の豪放なる詩は志なりと云つて、往々聲律に關せざる点があると聞く香川縣史に錦旗東に移る云々の絶命の辭が載つてゐるが、其れが聲律を失してると、赤松椋園翁が曾て言はれた事がある。

翁の作詩要訣

某生が作詩の要訣を問ふたらシツカリ讀書したら自然に善い詩が作れるものであると敎へられた。

欲レ爲ニ善詩人一須レ積ニ讀書功一讀書千万卷。筆力如レ通レ神。是此一秘訣。傳自ニ浣花翁一

河野鐵兜と詩の論戰

一日河野鉄兜至る、一見舊の如し、酒酣にして、翁が左の舊稿を示した。

日本有ニ聖人一。其名曰ニ楠公一。誤生ニ干戈世一。提レ劍爲ニ英雄一。

鉄兜以て失律と爲す、先生白を擧けて他を言ふ、鉄兜再詰して曰く、足下は詩人に非らずや、說あれは可なり、否されば共に語るに足らずと、先生乃ち口を開いて曰く、詩は志なり、口を衝いて出るを眞詩とす、當今余の詩を知る者、唯賴子成にあらずんば、梁子緯か、所謂詩人の詩を作らずと

鉄兜蹶然とし去る、以て其風概を觀るべし。

（讃岐勤王家傳）

乃木將軍翁の詩を愛誦す

故乃木將軍が先年讃岐善通寺で、師團長たりし時、柳家の遺族より、呑象樓遺稿を贈りし事ありしが、將軍は常に此稿を愛誦し、夜登象山と題し「石壓人頭勢欲傾、滿山露氣不堪淸、夜深天狗來休翼十丈老杉搖有聲」を推して會心の傑作となし、人と詩を語る毎に何うです、夜深かくして天狗來りて翼を休むとは、何うも面白といはれたと爾後學習院々長時代に至るも机邊を離さゞりしと。

第十一項　著述

翁は早くより文學方面に非常な趣味を有して居られ、漢詩文には頗る造詣が深かつた上に、戲作文や俚謠などの軟派物にも通じられ、其當時のハイカラで、出版好であつて讃岐の文化に貢献された点も多大であつた、併し其時分は今と違ひ、印刷術が進歩してゐなかつたので、其彫刻には頗る苦心されたと見へ、開版になつてるものは、僅かに三四種ばかりで、其外のものは原稿の儘で保存され又は謄寫して宣傳されたものもある、其中で金鄉春夕榮の如きは彫刻がまずく、此等は翁が自ら刻されたものか、又は誰れか素人が刻されたものでは、ないかと思はれるものもある、今左に其著書の解題を附する。

象山雜詞

本書は天保七年翁二十才の時の初女作である、仝十年夏上木さる。

十　春　詞

本書は天保十年翁二十三才の作で、岩村南里と雪航が批評を加へ、栗園が校正をしてゐる、半紙四ッ切の寸珍本である。

金郷春夕榮

嘉永三年三月に、著はされた寓意小說で、口繪は君田が畫き序文は枝澄が書き、馬琴風の書振りで半紙四ツ切の寸珍本である。

柳東軒畧稿

嘉永六年六月に著はされたもので、其頃の翁、會心の作を載せてある。吉田松陰が安政五年に、其師節齋に贈りし尺牘中にある、東軒畧稿とあるは此書である。東軒は柳の字を省いて、斯く言ひしもので、其頃出版になりし關西名家詩集等にも、翁の號を東軒としてある。

山陽詩註

此は嘉永六年の夏の著にして、有名な山陽詩鈔の難解の文字につき、其の出所を示し親切に註脚を施したものである、傳へ聞く山陽詩鈔をスッカリ解釋する學者は、讃岐では先づ少ないとの評であるのに翁は何の苦もなく、註記を作られたと言ふのは、如何にも其學力が深かつた事が察せられる此書は翁歿后の明治二年に京都で刊行された、多分三冊が出版さしたものであらう。

西遊詩草

弘化元年翁二十八才の時、宮山凌雲と俱に九州に遊び、其視察した地理人情風物等を詩に咏したもの數百首を集め翁が自から筆記し之を西遊詩草と題し、隱岐にある友人荒川栗園に送り、批評を請はれしが、其後栗園が病氣に罹り、其儘荒川家に殘存せしものにて、實に九州の地歷史とも稱すべき珍中の珍である。

安政から慶應三年に至る迄、約十二年間は不相變、詩は作られたが別に何にも出版はされなんだ、察するに此頃より、元治頃迄は、勤王攘夷論が旺盛になつたので、其方面の事に盡瘁奔走され、席暖まる間がなかつたので、文學方面の事は、幾分か閑却されしものならんか。

捫蝨餘話

皇國千字文

文學者が入獄すると、外部へ精神がちらぬから、非常な勉强が出來るものと見へ、藤田東湖なども嘉永四年小梅に幽錮せられし時、正氣歌、回天詩史、常陸帶等を著はしたが、翁も慶應元年より仝三年まで入獄の厄に遭ひ、其間に著はされしものが前記の二書である、此中捫蝨餘話の原本は何所へ散乱せしか、其所在が不明であるが、本書に轉載しある分は、一昨年冬記者が赤十字香川支部主事の東文輔氏より借覽して謄寫せしものである。

皇國千字文は、翁が萬一獄中にて不歸の客となつた時は、記念とせよとて、親友の長谷川松坡へ送りしものにて、無論寫本であつて、讃岐では誰も此書を出版する者がなかつたと見へ、翁の親友の備中倉敷の勤王家大阪屋源介（林孚一）方にて刊行し江湖へ宣傳したものである。

六　決　記

此れも獄中に於て作られたものであるが、今は原本を見當らんが、或は婆婆歌ならんか、此は遺稿中に載せてある。

呑象樓詩鈔初編

此は明治二年に三册が翁の近作を編纂し、天江詩伯が序を作り京都擁萬堂から發行したが後より順々に出す積なりしも、其事なくして初編きりにて終はつた、半紙の薄つぴらな本である。

柳　東　遺　稿

此れは江南遊記、浪花遊草、西遊詩草の三部より成り、翁が出獄すると間もなく上京し、木戸と倶に阪神及び中國長崎邊迄、巡遊せし得意時代の記事と、詩藻とを集めたものである、此書は白紙刷の小本であるがいつ誰れが出版したものか、奥書も何にもないから、今は要領を得ぬが、蓋し明治十七年頃、翁の十七年祭を修するに當り、其記念として日柳家か或は有志家の手により出版された

ものであらふ。

呑象樓遺稿　八冊

此は天保六年翁が十九才の時より明治元年五十二才逝去の時迄、三十四年間、翁が詠せし忠孝義膽の結晶を蒐集したもので一面翁の自叙傳に當つべく其眞面目を窺知する事が、可能る大著述である翁の二十年忌を修する時の記念として、明治二十一年十二月に出版し、親戚知己に頒かちたるものにて、白紙刷八卷の書であるが、發行部數が僅少であつたものと見へ、余り世間に流布してゐないので、文學界にては珍重視されている。

遺　文　錄

翁は到る所で詩文を作られたものであるが、一々其副本などは保存されなかつたものである、本項には江湖にある、眞蹟により其等の遺詩や、遺文を集めたものである。

第十二項　書　道

書は一に心畵と稱し其人の性格を印象するもので、處世上の一大要道であるから、誰れでも一通りは練習の効を積まねばならぬものである、夫れを閑却して書は姓名を記するにたるなどゝ云ふは、正に非常識の暴論である、日常往復の尺牘などでも、美筆のものに接すると、其人の品格が高まる

ものである、近時に殘存して居る翁の書を見るに醇雅勁健にして一つも衒氣がない、今時の書家の如うに、沽哉主義を極めこんで沈く、實に天眞爛漫で、其人の氣骨稜々たる事がホノ見ゆるが、其師は誰れであつたと云ふ事は、今一寸判明せぬが、察するに少年時代は石崎の伯父に就き、寺子家式で和様めいたものを習はれ、中年以後誰れかの法帖類を習はれ、かく圓熟の境に達されたものだらふ、一説には中島棕隱に習はれたとも云ふ、而して大字よりか小字が良い如うである、青年時代より、各地を遊歷しとられるので、其筆蹟も相當に散布しとる筈であるが、今日では眞筆は甚だ尠ない、此は維新前に翁が繫獄の身となつたので、其筆蹟などを所持してると、其の爲に何にか嫌疑を受くるも知れずと、一部の人士間には一種の恐怖心に襲はれ、故意に燒却したものらしゐ、故に今日では翁の手になつた斷編小片でも、高價を以て歡迎されてゐる、書家でも書家でも其作品は晚年のものが圓熟してるが翁の書も矢張り中年以後のものが佳境に入つてゐる如うである。

落款、冠防、印章

翁は印章も隨分持つて居られたと見え、大小種々風の變つたものが押用されある、記者の見たもの丈けでも左の如くである。

落款　柳政章　柳東　柳東陳人　燕石

冠防　（燕石）　（呑象）　（遊戲）　（一劍報國）　（四十餘年以後之詩）

印章

（讃岐詩人）

柳章

柳東詩人

（備中之詩人）

子煥

柳東

政章

政章

燕石

呑象

日柳章

柳政章

右何れも隷書や篆字である。

燕石と君田の書風

君田の書風、燕石に酷似す、並らべて比較するも、鷄の雌雄を識別し難し、是を以て世人或は燕石の書は君田の代書多しなどいへと。細かる對照する時は、君田の書風は、稍謹嚴にして、燕石の筆跡は磊落の所あり云々。

（讃岐勤王家傳）

第十三項　書道

現時の書家は藝術家だの、美術家だのと云つて大變意張つてゐるが、昔時は儒者よりは一段下位に居た者である、嘗て先輩に斯う云ふ事を聽いた、岡井赤城と云ふは、享和年頃の江戸の儒者で随分

畫も畫かれたが、其人の着色物は稀れである或時同氏が着色畵をかいたら、其れを後藤芝山が見て儒者たる者は着色畵などは畫く者でない止せと、戒められ其れから、着色ものは一切畫れなんだと云ふ事であるが、成程それで畵家は儒者よりは下段に見られたものであるが、然し武士たる者は軍事研究上、城郭山川武具等を實寫する爲め、必要の技術なればとて、一通りは寫生位は學ぶ事になつてをつた、翁も其邊の意向で少しは學ばれたものらしゐ、其師は誰れであつたか、今は明瞭に判からぬが、翁の青年時代(天保頃)榎井の藤の棚に奈良の人で大原東野と云ふ畵家が來とつたが、多分其人あたりに、手ほどきをされたものならんも、以后は自身の工夫を以て、獨特の畵風でかゝれたものであらふ、一説には石川晃山に畵法を聽かれたとの事であるが、今現存してる遺品を見るに俗氣を脫して詩趣橫生し、翁の氣風其儘で筆數が少なく、簡潔で、如何にも氣韻の高い處があつて其賛ときたら、尋常畵家の企及すべからざる底のもので、却々振つて居る今其一、二を紹介するが他は推して知るべしである。

● 題自畵蘭竹

作畵如作文、　其妙在簡潔、　一花二三葉、　是我畵蘭法

書

繪事畫有用、　屢從戰陣中、　愧殺詩人筆、　對虜無寸功

然し今頃のそんじよ、其所らの學者や書家の如うに、法外な潤筆料などを貪ばるなどの人でなく、ほんの一時の興に乘じて、靈腕を揮はれたものであるから、余り澤山は書かれなんたものか、今は其眞蹟が、いくらも殘つて居ないのは遺憾の至りである。

第十四項　彫　刻

翁は又彫刻も行られた、由來讃岐には玉楮象谷と云ふ、漆器彫刻の名家があつた、今の讃岐漆器は其流れを汲んだものであるが、翁も象谷などから趣味を教へられたものか、彫刻も却々隅にはおけぬ腕があつた、大正九年に高松市の表誠館で、翁の遺墨や遺品の展覧會があつたが、其時高松市松島町の中野幸次君の出品に係る盆を見たが、直徑六七寸の丸き給仕盆があつた、左側に菊を一本彫り、右側の上に左の題詩がある、何れも翁の自書自賛自刀に成りしものである。

曾遺彭澤寵。又作楠家章。隱顯雖異趣。風雪各凌霜。南山與南朝。東西同一芳

柳東

又一ツは直徑一尺位の盆に、盛物籠を彫り。此は梅友の刻て翁は上の右傍に

樂在
其中
柳東

と隷書で刻しとられるが、右二品を見るに刀法は塚谷風で、言ふに云はれぬ雅味があつて書体を見ると、四十余年以後の作であつぱれ本職たる玄人の壘を摩するものがある。

又現時西讃某氏の有に歸してる、翁の遺愛瓢にも左の文字が刻してある。

此　君

燕　石　愛　玩

此れも翁の自刻で、刀が深刻に食ひ入り象谷などの刀法に酷似して居る。

第十五項　娯樂及嗜好

翁は才氣縱横の人であつたから、趣味も多方面に渉つて居られ、圍碁や將棋も隨分やられた、此れを娯樂の中に加へるのは少し語弊があるかも知れぬが、一番好きなのは漢詩であつた、十五六才より作詩にふけられ、五十二才の沒年迄殆んど一日として作詩を廢された事はなかつたらしゐ、人が何か物を呉れると、直に詩を賦して之に酬いたものである、今遺詠の殘つて居るもの丈でも貳千首もあるから、一生涯を通しては、恐らく三千首余りは作られたであらふと想はる。

又一ッは例の解語の花を弄ぶ、即ち散財も翁の娯樂の一とも云えるが此は言はぬが、花である今其豪遊ぶりの一端を左に示さん。

燕石の豪遊ぶり

古老傳へて云ふ、當時琴平の花街、金山寺町に於ける燕石の嬌名や實に嘖々、妓にして燕石を知らざる者は大なる耻辱となせりと、燕石が配下を率ゐて、登樓するや流連數日に及び、資産爲めに傾くも平然たり、人之を問へば少年幾年ぞ、與じ盡して寸縷なからんと、何んぞ意に介するに足らんやと、其半面を推知すべきなり云々。（四三、二、二〇大朝）

醜婦を弄ぶ

燕石しば／＼琴平の遊里金山寺に遊び、好んで醜婦を聘して、痛飲夜を徹することあり、世人之を怪みて、さて／＼稀有の物好きよなと、竊に笑ふものありたれども、燕石が狹斜の巷に流連するは其眞意必ずしも漁色にあらざる事を察するものは少く、或人の如きは、其醜婦好きの性癖を諷刺せんが爲め、わざ／＼お多福の仮面の畵を携へ來りて、これに賛せんことを乞ふに至りぬ、燕石直に筆とりあげて、薄墨もつてさら／＼と、書き流したるを見れは。

ほれた、慾目か、どちから見ても

顔の眞中に、鼻がある

袁彦道

又其一ッは、例の袁彦道即ち賭博であるが、元來射倖觀念と云ふは、人の天性であつて、誰れでも其意のない者はない今の株や米の賣買でも、一面から云へば公然の賭博と云つても仕方がない、要は只其自制如何にあるのみだ、殊に其時代は公設の娯樂機關がなかつたので、西讃でも東讃でも隨分流行つたものだ、其中で琴平と榎井は殆んど年中賭場が開かれ、常習になつて居て四圍の空氣が著しく混濁してゐたので、ツイ初はてんごうの積で行られたので、其れが漸々深水へ陷つて遂に病が膏肓に入つたのであるが、翁は内心から此を良い事とは思つて居なかつたが、そこに止を得さる事情があつて其を中止する事が不可能ぬ事情があつた、其第一は博徒の群に入り反對派即ち佐幕派の心理を油斷せしむる事其二は志士を庇護したり、又數多の乾兒を抱へ置くには、許多の費用を要するから勢どちらかの方面より、其財源を捻出せなければならぬから、乾兒等に賭場を張らし或は貸し元となり、其利益を以て、特別收入となし、前記志士の保護費や交際費等に充當したので、翁自からは決して直接に手を下さなかつたと、又翁の家には常には博奕の道具、賽などは一ッも置てなかつた又近所の小供などが菓子などで賭事類似の遊戯、などを爲しをるを見られたらソンナ事は決して爲すものでないと懇々と諭されたと。

賭場での讀書

善通寺町の光家耕改翁の談に曰く同翁が少年の時善通寺の太市に、加島屋の札元で賭場が開かれた

小供心の好奇心にかられ、其景況を見に行つたが若者が丁よ半よと戰爭に無中になつてゐるのに、翁は其場の片隅で悠々と讀書をして居られたのを實見した云々。

又荒川翁の談にも賭博の重要具たる賽などは、何處かへ嚴重に藏置してあつて家族の者すら、其所在を知る事が出來ぬ事程左樣に秘密に隱くしてあつたと。

金銀貨の鷲づかみ

又た當市出身で、今は横濱で醫業を開いて居られる、長尾拙三と言ふ人がある、其祖父に當る人に杏齋と云ふ人があつたが、此人は醫術も上手で其の上詩文にも達して居られたので、翁と懇意の間柄で何時も子分の二三人を連れて、例の戰爭に高松へ遠征に來られたが、翁だけは長尾へ泊られ毎日杏齋翁と詩の聯句などをして遊んで居て、子分を賭場へ出して戰爭に從事さして居られたが、何時でも來られる時には、古き滓袋みたいな大袋へ古金銀や小ッづなどをギッシリ詰込んで來て、奴等が負けて戻ると鷲つかみで金を渡され、子分が親方又負けましたと戻つて來ると、エー弱い奴ジヤと云つて、又鷲つかみにして後の彈丸の金を補給される、勝つて金を取つて戻つて來ても算用もせずに、其儘つかんで袋へ仕舞込まれると云ふ樣な實に大膽な行り方であつたと、此は記者が先年長尾君より、親しく聞きし話である、以て翁の豪放の一端が、窺はれるのである。

鶴仙と松濤との忠言

翁の此道樂に就ては、丸龜の親友鶴仙と松濤が心配して、斯業は薩張と斷念するよう忠告したが、其時翁の答辯が却々振つてゐた、記者は其當時の翁の境遇に同情する、先づ其言狀は斯うである、僕は早くより孤兒となり、又青年時代より遊蕩に身を持くづし、其結果許多の財產を費消し、今は無資產になつた上に、此頃は澤山の乾兒が出來て、我を舍長と仰ひで居る、博徒は無賴な者なれども、義に堅し故に大事に際しては、是等を率ひて、國家の用に供せん爲めなり、決して終身博徒で終るものにあらず、又此節は諸國から志士等が賴よつてくるので其等を扶助するには思はぬ金が要るので、其財源に供するため、今は騎虎の勢で止を得ず、斯る賤しむべき業を爲て居るが、爰両三年の後には三舟も醫學を修業して戾り、一家の生活の安定が、保てる樣になるから其節には貴意に從ひ、屹度中止するから、其時分を潤目して待たれよと答へたが、翁の腹の中には旣に明治の御世になれは、勤王家が全勝を占めて、自分も吳下の阿蒙でなく、相當な地位に昇り、毫閑に列するやも知れぬとの事を、暗にホノメカされたのであるが、惜哉尾池松濤翁は、翁の維新の際に於ける活躍振を見すして文久元年に歿されたのである、此問答は遺文二八〇丁に附載してあるからら熟談を煩はし、其眞情を察して欲しひのである。

賭場より歸て讀書す

先生、生平賭博に伍して、狹斜に醉ふや歸途必ず長鋏を彈じて朗吟し、既に歸るや、直に書樓に登りて讀書し、深夜と雖も、直に寢に就かざりき、又傳ふ客あり問ふ、先生樗蒲となりしか、樗蒲先生となりしかと、先生大に笑ひて曰く、翼ある者吾其鳥たるを知る、燕雀亦鳥にあらずやと、嗚呼先生亦放達なるかな。

（讃岐勤王家傳）

嗜好

翁の嗜好物は英雄酒飮む可しで、第一が酒で此れと詩は翁の生命であつた、それかと云つて斗酒猶辭せず底の大酒豪でもなかつた、大杯が嫌ひで、小杯で朝からでもチビリ〳〵、朝顏を渡しホン〳〵陶然として、麴秀才など丶好な詩題を選んで、作詩に耽ると云ふ風流家であつた、荒川翁の談に毎食時にはお膳の先へ大抵銚子が一本づつ附いてゐたと、而して唐辛が非常に好きであつた、此れは酒の味を調和する爲めなのであらう、お肴は鯛と章魚と新豆が好物であつた、晩年には齒が脆くなつて章魚の更はりに、豆腐を好まれた、遺稿中に、其功德を頌して居られるので、其好物であつた事が知られる、又酒の肴には醬油豆が好きであつた。此醬油豆と云ふものは讃岐だけで、他府縣では餘り歡迎されぬようであるが、其製法は斯うである、先づ蚕豆を炮烙でよく煎り、其温かでほとぼりのさめぬのを、醬油を鉢に入れたる中へ浸し置き、二三時間經つと、醬油が豆の中身へ浸み

込み、酒の肴や晩菜によく適するものである。

肉食の先鞭家

又翁は寒かりやであつたので、冬になると鹿肉や牛肉を嗜まれたが、其時代には牛肉は容易に手に入らぬもので、且つ其れを室內で煮ると、神佛に祟るとて、婦人などが、內に居ると非常に八釜敷云つたものであるから、太抵好きな者でも、一家の主婦の留守中に煮たものである、或時小妻お松の不在に乘じ、牛肉を煮られた事があるが、何處かで貰つて來られたものと見へ量が少なかつて、肴に不足であつたか知らん、其時荒川君(八才位)に向ひ坊よ〳〵アスコのお佛壇に上がつてる、お餅を三ッ程取つて來いと云はれたので、早速命のまゝ持ち來りしに、翁が手に受くるや否や、其れを牛鍋の中へバット打ち込まれた、時に次の間に扣へて居つた、乾兒の一人が、其体たらくを見て親方それはあんまりです、佛さんの罰があたりますと諫めたら、翁が云はれるに何ァに搆ふものか何れ日本も爰四五年の中には各戶で皆牛肉を食する樣になるわさ、平氣で喰はれたとの事であるが其れから間もなく明治四五年頃に至り其通り肉食が行はれて來た、今更ながら翁の先見の明に感服したのである。

翁の酒德頌

翁が酒德を頌せし感想は左の如くである。

酒。酒。如師似友。釣詩鉤。掃愁帚。北海留賓。東坡課婦。舜尙飲千鍾。噲何辭一斗。最宜久坐小杯。不擇卯前申後。直到人間極樂城。肯求天外無何有。』無酒月非月。無酒花豈花。是此酒世界。不飲可如何。

又翁の好きなものは左のものであつた。

柳子平生多所愛。寳刀佳酒籠裾美。如於此間問尤物。人有楠公花有櫻。

次に嫌なものは左の如しである。

柳生近日多憎物。不獨鼠蚊蠓蚤蝨。洋夷煙艸紫砂糖。

第十六項　交遊

翁は其性が豪放磊落で、度量が宏いのと、同情心に富んで居られたので、交を納るものが多かつたのと、又一には例の攘夷と云ふ大事業が、胸に湛んで居たので、成るべく多くの賛成家を得へく、八方美人で金錢を湯水の如く使つて、各方面に向て交際の手を攬めて居られた、其結果數万金の家産を蕩盡されたが、一向そんな事にに無頓着で平氣であつた、其交りし者上は縉紳、慷慨家。文人墨客、醫師、僧侶より、下一般の農商工業家、遊人と稱する種類に至る迄其範圍が如何にも廣汎に

亘つて、殆んど讃岐では加島屋の燕石さんと言つたら、三歳の兒童でも其名を知つて居た、其中で重なる昵懇な人は國外では三河の松本奎堂、越後の長谷川正傑、長州の高杉晋作、木戸孝允、大和の森田節齋、京都の森寛齋、大阪の後藤松陰、備中植田有年、林孚一等である、東讃では松平金岳小橋香水、長谷川宗右衛門、木内龍山、太田次郎、片山冲堂、藤川三溪、長尾杏齋等である西讃ては岩村南里、吉田鶴仙、田岡凌雲、村岡箏子、三井雪航、高木禎吾、荒川栗園、𦩬馬君田、秋山伊豆、奈良松荘、安藤愿庵等である其昵近者中にて所謂肝膽相照す底の二三人に付其經歴談を左に附記し、余人は一々小傳を附する暇かないので、別に交友錄の一項を附してあるから一覽を煩はしたい

附記　以上交際家中を色分けすると、割合に醫者が多いが夫れは其當時は文筆に達した。所謂知識階級と稱する者は醫者であつたから、重に其等と交りを結はれたものと見へる。

金岳公子との關係

公子と燕石とは、非常に親密の間柄なりしもの丶如く、時々龜阜邸(公子居館)に伺候し、勤王事件に付公子と意見を交換せしものと想はる、或時藤澤南岳が始て公子に謁した時に、海南の名士を歴擧して、交際すへき人を擇ばしめられた事があつた、公子が先づ指を燕石に屈せられたから、其人格をお尋に及ふと、公子が斯う云はれた、世人が燕石を詩隱と云ひ、或は大俠など丶云つたりするものは皆其人の眞精を知悉せぬのである、汝が直接に燕石に交際して見れば分ると云はれたとの事で

あるが、所謂英雄、英雄を知るの類で、公子は早くより燕石の尋常の人物にあらさる事を看破し、一朝有事の時に利用せん考にて交際を結ばれ居りしならん、又燕石も公子を非常なる英傑として欽慕せしと見へ、嘉永頃に左の詩を公子に呈せし事ありしと云ふ、是に因て見れは如何に公子を畏敬せしかゞ察せらるゝであらう。

上金岳源公書 幷詩

昨夕奉候高門。恭承德音。實如逢龍華三會。聽佛之說法。章何之因緣得此善果。章初聞臺下英邁豪爽之風。鄙心竊謂臺下急性如火。猛威如虎。及拜尊容。一團和氣使人在春雨之中。臺下實不可思議之人哉。欽慕之餘。聊賦蕪詩。奉呈左右。被賜一粲。則幸甚々々。布衣柳政章誠恐誠惶頓首九拜。

絶世雄才武備文。雷名轟耳遠相聞。蓮華經上盛傳法。玉藻城上夙逸群。
座進俳優李天下。門拓賓客孟嘗君。英風最是壓人處。一砲驚魔栗嶺雲。

柳　章　拜　具

（三井謙三氏藏）

小橋一門との關係

香水、龍山、橋陰。友之輔、太田次郎、村岡の事ども

小橋と日柳とは勤王一件に付ては、始終離るべからざる關係があつて、同功一体となりて仕事をしたものであるから、本項に於て其一端の事蹟を述ぶる事にする。

小橋安藏は讃の名和長年と云はれし人たけあつて、熱烈なる勤王家である、其生立を尋ぬるに彼と其弟の龍山とは小年の際、今の大川郡馬宿村の伊藤宗介(弘)と云ふ人の處へ行つて寄宿して學問をした、其伊藤と云ふ人は高松邊では余り聞へぬが、謂ゆる不聞の學者で和漢學は元より其時代に於て早く蘭學と數學にも達した大學者で、彼の坂出塩田築造者として、有名な久米榮左衛門なども、此人に就て種々の敎を受けたもので、大義名分論も明かであつたから、蓋小橋兄弟の勤王志想は此人より薫陶を受けたものであらう、小橋は早くから天下の形勢に注目して、弘化四年には江戸に遊ひ米船來航の狀を視察して歸り、嘉永三年には伊勢及江戸に遊ひ、形勢を視察して歸り、一面には龍山を江戸に留學せしめて、學問の傍ら視察をさした、其後又末弟の橋陰を江戸に留學せしめて全方面偵察の任務を担當さした、又文久元治年頃には女壻の太田次郎をして、京都方面の探偵を爲さしめ、常に長州の勤王派と氣脈を通して、次郎と友之輔の兩名を長州の招賢閣に入らしめた、蛤門の戰鬪には此兩名が參加し、友之輔は戰死を遂げた、又半面にては龍山に命し勤王運動に屬する通信機關を担當さして、嘉永頃から慶應頃迄の政事に關する、出來事を彼れが失明する迄、東西兩都より探知して、此れを同志に報導する事を怠らなかつた、有名な龍山漫錄は其時の元本である、記者

も故隆子女史より其通信紙、今でいへば新聞の號外の如うなものを一葉藏いてゐるが、夫は半紙を竪に二つ折にして、其當時の出來事を一々區劃して記してある、其熱心な事が察せられる、又妹の箏は丸龜の村岡家に嫁してる女丈夫で、宗四郎の母であつたが、其時は家道が裕かで、宅も手廣であつたので、勤王團の兵站部を担當し、讃岐へ來た志士は大抵同人方へ宿泊さして、種々の面倒を見てやつたもので、高杉なども其一人である又安藏は夫れ等の關係で、文久三年以來三度投獄され其間の家事は總べて龍山が見てゐたが、藩吏が安藏を虐待するのを聞て龍山は憤死し、村岡も亦憤死し家門一同は許多の財產を勤王運動に費消して了つた、一門皆王事に殉すと言ふ可しである。

燕石來る

翁は勤王事件の協議に付て、折々圓座の小橋家へ來られたが、香水の五女故隆子女史の談に、燕石さんは毎々見へたが、來られると何日も父が、サア燕石が來たから、早く酒を持て來いと云ふので顏を見るといつもお燗を搬んだかお肴は醬油豆の外、余の品は何にも求められなんだが其れを出すと一人でチビリ／＼飲んで、話に花が咲いてゐた云々。

上京旅費を助く

明治元年二月廿二日燕石が上京するに付き暇乞として圓座の宅へ來り、種々向來の事ども談じ、高松迄彼を見送り、其夜は共に高松北龜井町の郷宿米屋で同宿し、旅費の足しに貳十金を贈つた。

燕石と橘陰

橘陰は小橘の末弟にして、資性活潑、詩文に長す、夙に東都に遊學し、佐野一齋、藤森天山其他知名の人士に知己多きを以て、東都の政事探偵を以て任せし人で、同志者間に重きを爲してゐた、燕石より橘陰に寄せし一詩あり、左に示す。

寄二小橋季績一

內地雜居洋外夷。一開一見事應レ奇、請君爲レ我揮二椽筆一。寄示在城新竹枝。

荒川栗園

此人は翁より一ツ年長で、管鮑の交りも啻ならすで、兄弟同樣の交際をしてゐた、名は英政通稱は齊と云ひ樟庵の弟で、今現に矍鑠として盆栽や書畫を樂しんで居られる、琴平の元老荒川節次君の叔父に當る人である、翁と同じく詩文を雪航に畫道を大原東野に學び、學力伯仲の間であつた、然し畫は玄人の壘を摩し此点は翁より上手であつた、性剛毅にして負けず嫌であつたので、或時社人の青年の惡ひ奴と喧嘩を爲し、其者に負傷さしたので、此地に居りにくゝなつたので、折柄琴平近傍の出身者で、隱岐國に至り或寺に住職をしてるものが歸省して居たので、其人が又隱島に歸住すると仝行して、仝地に至り島民に讀書や習字を授けて三四年居たが、仝地は孤島で上國との交通が不便であるので安政元年頃大阪まで戻り、暫らく仝地へ足を駐め、小說を著はして自活して居た、

坊間今に行はれてゐる岩見武勇傳は其挿繪を併せて、栗園の一手に成つたものである、後阪地にて病に罹り安政元年秋琴平に歸り間もなく病革り、惜哉三十九歳の働盛りで前途有望の資を抱いて黄泉の客となつた。渠の遺稿を見ると燕石翁に關する詩が澤山あるが、今は其二三を左に紹介する。

両名と左の聯句がある。

獨樂軒席上聯句疊原韻

邂逅相逢共欲狂 政章　淸茶當酒潤詩腸 英政
一談一笑忘賓主 政章　太恨情長日不長 英政

又　四言

鬪詩走筆 英政　當酒煎茶 政章
歡情未尽 英政　早已昏鴉 政章

宿容膝庵次主人子煥見贈韻 時讀劍南鈔

雪擁簷牙密又疎。爐邊燈影照生書。小妻行酒君烹肉。何讓趙家歡有餘。

森田節齋に知らる

渠は又森田節齋とも知己であつた。天保十一年節齋が伊豫より歸途、柳東軒にて邂逅し、風流韻事を談じ左の作がある。

芭蕉書屋邂ニ逅森田謙藏ー　和州人號五城

附驥頼逢高士知。題名一卷十春詞。書窓今夜仝論レ史。吟席何時重共レ卮

夙抱ニ縱横男子志ー。敢爲ニ嫵媚女郎詩ー。兼該玉樹元非レ類。翻怪襟懷似ニ相期ー

五城讀ニ予煥十春詞ー卷尾有ニ余姓名ー因而初識レ余

栗園の尺牘

栗園が嘉永五年大阪より翁に寄せし尺牘がある、一讀以て其交情の濃厚でありし事が察せられる。

松坡君上遊に付玉章焚香

拜讀、老兄起居御清適奉賀候、僕依レ舊蹭蹬、然共變故無之候條、御放念可被下候、近年は腰脚及ひ肩背隱痛、小縣(緒方か)醫院は所謂瘴氣毒と申候、當地には往々有之候病之由、僕先年寒冷に被冒候より、凝結候病に而候、夫故起臥奔走、不レ似ニ往日之健ー候嘆息々々、樟庵僕か稚女を乞申候、一議尋常人情之當然に候へ共、雲濤萬里外に留め置候、幼兒迎取候事相成候は、不ニ容易ー事に御座候、是は○○○之人情と察申候巨細は忠卿長谷川君ゟ申置候條御聞取可被下、餘は期後信不悉

橘春晦　荒河齊隣

子煥赤松賢兄

柴秋邨も、近日播州より罷出候只今小縣（緒方か）へ入塾。蟹行書を學ひ、是は内々國君之命歟と被察候

櫃井雙龍閣主

赤松燕石仁兄　　荒河、齋隣

玉案下

蒼卒畧封請海容焉

歸途吞象樓を訪ふ

渠の兄の宅は、榎井村の東の方であつたので、安政元年秋病を得て歸省するに當り、吞象樓の前を籠で通りしに、燕石翁が其やつれたる容体を見て、强て呼入れ二三日保養せしめて、兄の家へ歸らしめたとの事であるが、其交情の密であつたのと、翁の全情心の厚き事が察せられる。

左の詩は其時の渠が述懷である。

歸省宿㆓柳子煥家㆒席上分韻

非㆑晴非㆑雨宿雲繁。欲㆑去欲㆑留心緒煩、鬮韻輸贏競㆓詩句㆒。養痾宜㆑忌品盤飧。
榴花紅綻臨㆓池面㆒。蕉葉翠舒藏㆓石根㆒。對景貪歡不㆑堪㆑別。躊躇終見又黃昏。

栗園の意氣

文久頃に至り勤王家の氣勢が緊張して、大和の義擧や但馬の義擧が勃發した、時に翁が某老人に語つて曰く、局面が段々面白くなつて來たワイ、之に就て憶ひ起すが今頃まで栗園が存命してゐたら此兩義擧の中の何れかへ參加して、名譽の戰死を遂げてるならんと、以て彼れが勤王心に富んで其意氣が豪壯活潑であつた事が察せらる。

栗園逝く

渠は死に先だつ、一兩年前より、蒙古掃蕩錄の著述に着手して居たが、稿半ばにして安政元年終に不歸の客となつたのである、燕石は渠の死を悼んで

骯髒平生與レ俗疎。客中病苦定何如。歸來囊中餘二何物一。一部稗官未刻書。

とあるは掃蕩錄を指したのである。

森田節齋との關係

節齋名は益字は謙藏初め五城後節齋と號す、大和五條の醫師森田文庵（本姓櫻井）の第一子なり、文化八年生る、文政八年八月京都に到りて賴山陽に從學すること四年、遂に推されて都講たり、後江戸に遊ひ昌平黌に入り居る事三年にして歸り、諸國を漫遊し、萬延元年備中倉敷に至り廣江又兵衛

の建てたる學舍にて教授す、慶應元年郷里に歸り、更に紀伊に遊び那賀郡荒見村北長左衛門の家に寓し、明治元年痢を病み同年七月廿六日同人宅にて客死す、年五十八、紀州龍門山下荒見村善通寺に葬る

節齋平生酒を嗜み、談論時事に及へは、慷慨扼腕口角沫を飛ばす、人と議論を上下して合はされば即ち面折して敢て屈せず　然れども心夙に王室にあり、到る所に勤王の論を唱へて憚らず、故に諸藩の志士雲の如くに其門に集れり、吉田松陰、賴三樹、原田龜太郎、安元杜預藏等みな其門下に在りき、遺稿は桑梓景賢錄、竹窓夏課、如童詩稿、太史公叙賛、蠡測史賛、體格類選等あり。

明治四十一年十一月十三日從四位を贈らる

節齋の遺族

配小倉氏無弦女史と號し、博學能文にして男を生み司馬太郎と云ひ、女を孟と云ふ早死す。司馬太郎は、小笠原島父島の島司たりしが、明治三十六年歿す。

弟あり葆庵と號し備中庭瀨侯の儒官たり。明治の初年弟子三千餘人の多き及へりと云ふ、明治三十一年六月歿す年六十三

（大朝四三、三、六）

燕石と森田節齋

森田節齋、氣節文章を以て、一世を傲睨し意氣堂々能く人を罵倒す、歷遊至る所志士文人孝士節婦義僕遊俠より、神釋儒醫書畫家等、苟くも名ある者を訪ひ語らざるなし、偶讃州金刀比羅の附近に到る卽ち燕石の俠名を聞き往て訪ふ、其が玄關に至れば衝立あり書して曰く、「日々散三千金」以求二同心之友一と、節齋抵掌して曰く好漢有之哉と、旣にして座に上る、楣間に扁して呑象樓の三大字を見る、當時にして燕石たんぜんを着て出て來る、節齋を睨して曰く、君は大和の儒なるかと、左右に在る門下生を指して、門人と謂はすして是れ我が弟分なりと云ひ、談論風生じて以て氣鋒當るべからす、節齋の壯言豪語を以てして遂に瞠若たりしと。

節齋二回柳東軒を訪ふ

節齋は都合二度翁を訪ふた、是より先き渠が廿八歲の時、卽ち天保八年伊豫小松に至り、近藤篤山の門に入り、修學三年同十一年十月五條に歸るの途、翁を柳東軒に訪れて、滯留數日共に中村歌六一座の演劇を琴平に觀た、此時燕石は二十四歲の青年であつた。

第二回は安政二年の夏、卽ち翁が卅十九歲の時、節齋は晩年の新婚旅行として無弦女子を携へ、備中庭瀨に弟の葆庵の許に遊ふの途、路を轉して單獨で榎井に來り燕石を訪ひ、學者俳優の優劣論を爲し、後ち翁に囑して後落葉序を書かした、（本文は遺稿二七六にあり）斯くの如く翁と節齋とは交際が親密で所謂快人、快傑を知るで、肝膽相照らす底の間柄であつた。

吉田松陰との關係

翁と松陰との關係は、初め節齋の紹介に因しものならん、扪蝨餘話に「松陰予か詩を受し常に予か稿を藏す、亦一知己也」とある其死するや又左の悼詩を作り、惋惜の意を述へて居られる。

我愛松陰風骨奇。幾回追悼淚淋漓。虎投幽檻無飢色。鶴望秋旻有逸思。正氣一篇文相筆。秘籌百鍊子房椎。後生欲說尊攘事。先買春絲繡此兒。

予が稿を愛すとは、柳東軒略稿が出來た時に同書を松陰の許に贈つたものと見へる、松陰との關係に就ては今は的確な書證は當方ては見付からんが、吉田の傳記を見ると嘉永六年の正月に、海路四國に過り、途次二月浪華に出て、大和五條に到り森田節齋の許に遊ひ、史記及ひ孫子を聽き、滯留數十日五月二日辭して東遊の途に上る、とあるから豫て節齋より翁の爲人を傳へゐたので、此時呑象樓へ來て面談し、交誼を結はれしものならん。

久坂元瑞、燕石を薦む

安政五年久坂元瑞上京の途次、倉敷に於て吉田と月性の添書を持參して、節齋に面會し時論を交換す、方今諸方面を見るに　有爲の士に乏し、然れ共大和に安元杜預藏、福山に山岡八十郎、讃岐琴平に日柳長次郎ありとて、彼等の性格を語る元瑞、其說を傾聽して富永有隣（松陰と同獄にありし志士）に書を寄せて曰く。

方今諸方志士に乏し、我三奇人を得たり、山岡と安元とは旣に死す、然れ共琴平に快男子燕石あり彼詩を善くす決して疊の上にて、死すへき人にあらずとて、柳東軒略稿を送り、切に有隣に君琴平に至りて、彼に面せよと勸め、日柳の如き人物は得易からずと。元瑞又有隣に勸めて曰く、節齋師の添書を得て彼に面せよと、以て如何に長州人士に景慕されしかが察される。

松陰の書翰

吉田松陰が親友大和郡山の安元杜預藏の死を惜み、森田節齋に送りし書牘の一節

天朝の盛、實に曠代の美事と奉存候、小生對策此仁に示之樣申置候、例の御戒に負き、感激之餘把レ筆立就申候、其後一字も改不申恥入申候、久坂生文才長レ僕數等但是も把レ筆立就申候、土屋生も近日錄レ文乞レ敎度申居候、是は頗る密思を運申候、臥床中不覺長文に相成頭己に岑々擱筆仕候、東軒畧稿も來り、朗誦擊節仕候。

竹軒曰く東軒畧稿は即ち柳東軒畧稿の事なり、安政五年關重弘と云ふ人の編纂したる、近世名家詩鈔に翁の詩が出てるが其作者の注記に號東軒とあり。

此仁小生獄中己來之大知己に御座候、久坂生己に申上候哉と奉存候此回日柳長次郎を訪ひ度候爲態々罷出候、先生より委細御添書被成下候樣奉願候、先日久坂書來り先生の高敎も符中有之、右に付文稿も錄上仕度奉復の件御座候得共、折節數十日不快にて、此節も未だ臥床中故、何も附後

便候令息誕生、史評落成皆不可不賀之事に候へ共、右之次第に而、未ㇾ能ㇾ及甚曠禮之至に御座候

安元生の事、驚愕之至先頃先生の書は、傳覽仕候へ共、志在ㇾ死とのみにて爲ㇾ未ㇾ必爾ㇾと思ひ先便初而得ㇾ其詳ㇾ實に驚怛仕候

四月十八日　門生　寅　拜白

節齋森田先生

座下

谷翁は無事に御座候哉、森は如何、時々御往復被成候哉、谷の海外異傳商權は未た出不申候哉日柳之事、此度の要件にて御座候、吳々も宜御添書奉待候

（本書は長門川越吉水貫一氏藏）

森は田井莊、森哲之助號竹亭にして今大阪に在る辯護士森權六氏の父なり

是は安政五年にして松陰刑死の前年なり、其門生を讃州の志士日柳燕石へ紹介せんことを依賴せしを主要として、此書を附す、其後松陰門下にして、燕石を訪ひて、世話を掛けしもの高杉晉作、木戶孝允等あり其因緣は節齋の紹介に基く乎云々。

右武岡豐太氏著森田節齋と郡山より抄出す。

高杉との關係

高杉と云ふ人は實に近世稀な偉人で、識見もあり學文もあり、武術にも長じ、其上智嚢が豐富で、其擧動の機敏なる、謂ゆる神出鬼沒で、迚も人間業とは見へぬ事が往々あつて、維新前に行つた鴻業に對比すると明治の元勳など云ふ諸氏も、彼の上に出づる者は恐らく無からうと思はる、今の世に斯んな偉人がゐたら外交もアンナに退嬰立義には陷らなんだらうと、俯仰今昔の感に堪へんのであるが彼れが翁を憧憬する樣になつたのは、其師松陰より、翁の爲人を傳へ聞きて、何日か機を得て握手せんと懷ひ居りしに、偶彼れが俄かに馬關開港論を唱へ、藩士の激昂を買ひし爲め、其加害を避け國を出て諸般の動靜を視察として四月の下旬に、馬關より汽船にて大阪に行き一度馬關へ歸り夫れより伊豫の道後へ至り、數日滯在せしも、同所は四國の偏郷であるから、格別有利な情報も探り得なんだので、五月十日頃三津ヶ濱より、讃岐へと志さし、多度津へ着くと、丸龜へ行き夫より琴平參詣を爲し、其足て呑象樓を訪ひしに折惡しく不在であつたので、一詩を遺して旅宿へ歸り翌朝又行つて面會し、双方意見を鬪はした末、翁は意氣投合して親身に更へて、彼を庇護せんとして知已の家の裏座敷を（其家は今は不明であるが、小松町の裏手邊ならんと推定さる）を借りて彼と妾と從者三名を隱匿さした、來た日は五月の十日頃であらうが、其月中は丸龜へも行きたり又小橋方へも往返したりしてゐたが此事いつしか藩吏の知る所となり、捕吏が乘込んで彼を捕縛せんとし翁の內通で前知して、運よく脫出したのは實に天祐であつた、萬一彼が捕吏の手に掛り、江戸へで

も護送されたものなら、遠の昔に身首所を異にしたかも知れなかつたが、翁の注意と彼の機智とで甘く虎穴を脱出したのは、實に彼一身の爲めのみでなく、天下の幸であつた、彼れが翁を如何に信賴したかは、左の書翰を見れば、其際に於ける眞情が、察せられるのである。

春山、花山両君にも、別に差出不仕候間、宜敷御傳言被下度候、其外山縣狂、太田市、野村靖諸君へ御逢候はば、宜敷御傳言奉願候、弟へ何か御用御座候はば、讃州榎井村日柳燕石と申人の所迄被仰越候樣奉願候、路銀未尽候、若し尽候は使差遣候間、其節御渡奉願候。

分袂後は、益御壯健爲二國家一御精勤可レ被レ成、恐悦不少奉存候、出足の砌は色々御厄介に相成御厚情幾久敷、忘却不仕候、馬關出帆後は、終日如レ愚就レ枕、夜半國家の患難を樣々思遣不レ耐二憤鬱一の事に御座候迚生心事御推察可レ被レ下候、道後入浴二七日、從レ夫金比羅參詣仕候、當所にて日柳燕石と申奇人へ出會議論符合得益不レ少候、孰れ此所に少の間は潛游仕候覺悟に御座候、益天下の事情相明、目程遠之事も有之、後悔仕候、長州も未天下の人望、拂レ地不申候、今日こそ辛抱之時に御座候天下之形勢變動無にしも、無之樣相考候、馬關開港論も滿天下に露見の事に付これも甚歎は不レ宜樣奉存候、兎角武備充實、持久の勢相成候上は、不レ足レ懼樣考候、益天下事情可二申越一條も御座候得共、恐露見先は形勢談は是にて擱筆　御存にも御座候哉、日柳氏は博徒の頭子分千人許も有之學文詩賦も腐儒迂生の所レ及無レ之實に關西之一大俠客に御座候、弟を甚留め候に付、當分は此地に

潛游の覺悟に御座候、潛游中自邦家の御爲に可相成事も可有之と期居候、其内寸渡但馬城崎湯に罷越度存居候、是も必然には無之候何にしても日柳氏拋一身潛伏させると申位に付、決て御懸念無用に奉存候、外藩人他言等仕樣なる事は少く候得共、長州人は輕薄に付、露言が多くて困入候、弟も此游行、他國に露れる氣遣は無之候得共、內輪人より露る事、甚懸念に御座候、何卒世上に露れぬ樣、御配慮奉賴候、此度民藏差返候事も、格別の義には無之候、道々少々買物有之、旁差返候醉中の多辯には困入候、歸後も此度の事、世間にて咄不申樣、嚴重に被仰聞候樣奉賴候、孰れ不遠內歸國、萬縷可申述候匆々。

五月十四日（慶應元年）

讃州多度津にて認

備　後　屋　助　次　郎

入江和作樣（馬關屈指の義商なり）

長州征伐は、少々延引に相成候也

讃岐に於ける高杉の行動（横山健堂著高杉晉作抄）

高杉か日柳の所に來た時は、豐後の商人紅屋某と稱へて居た、彼が五月十四日馬關の入江和作に送つた書翰には備後屋助次郎と署名して居るを見れば、此の變名も用ひた、備後屋といふものと、豐

後の商人といふのと、備後と豊後と似通つて居る「豊後の商人」といふ說は備後を聞き違たのかも知れぬ然れども高杉も定めし出鱈目に變名を作つたであらうから、豊後とも備後とも適宜に名乘つたであらう。

右の書翰の中には當分、暫らくの間、此地に潛居するつもりだと書いてある、其の文中にます／＼天下の事情が分つて來たと書いてある、長州も未だ天下の人望地を拂ひ不申候今日こそ辛防の時に御座候とあるは、尤も注意す可き文句である、彼は時情を探索して、長州の人氣、未だ落ちざる事を確めた、彼は潛行の使命の一大要項を果したのだ、政治家として、此の一大事を確むるは、此の際極めて大切な事である、若し長州の人氣が無ければ、無爲蟄伏の外は無い、然るに彼は長州の人氣未だ落ちず、此の際長州として天下に活動するに足るの確信を得た、彼は國論一定の後、防長國內の事は諸友に任かせて置き、自から潛行して、此の一大事の見込を付ける事に苦心した彼の事跡頗る奇拔なるが如くにして、其の着眼は太だ高い云々。

高杉琴平脫出の經路

高杉は琴平で捕吏に襲はれた時、何れの方面へ脫出し長州へ歸りしやと云ふ事を、研究するのは頗る興味ある問題と思ふ。

先づ高杉の傳記を見ると、左の如く書てある。

長い潛伏中に高杉は、漸く幕吏の注目を免かれざるやうになつた。閏五月四日の事であつた、彼は危機一髮の間に身を全くして、おうのも紅屋木助も皆伴れて多度津から馬關に逃げ歸つた、燕石と君田等は其日に幕吏の爲に逮捕された、傳聞に據れば此の時、高杉は酒樓に登つて居たが、捕吏の闖入するや、有り丈の金銀を蒔き散らし、金光燦然たる間に捕吏の躊躇するを見捨て丶屋根傳ひに逃げて、日柳の家に立寄り、急遽の間、其細君から少許の路銀を借り受け、海岸に奔りて、小舟を傚うて跡白浪と逃げ失せた。捕吏が海岸に來た時は、彼は既に沖の波間に遠く浮んで居た云々。

以上は傳記中の一節であるが、蓋し讃岐から向地即ち多度津から尾道へ渡り夫れより海路馬關へ歸つたものであらう斯う見ると船にのるのは何んでもない樣であるが却々常備の船や自動車に乘る如うに容易に乘れるものではない、此れは誰れかが便宜を彼に計つてやつた者があつたと見へる、而して琴平を脫出した經路は、斯うであらう、表口の丸龜街道は捕吏や、藩吏が注目してゐるから迚も彼等の通行は不可能である、夫れで琴平の裏山即ち牛屋口に出て夫れから三豐郡の財田中、神田を經て多度津街道に路を辿り、誰れか面識のある家へ至り、渡舟を命じたものであらう。

前記の入江和作に宛てた、書翰を見ると、其末尾に五月十四日、多度津にて備後屋助次郎とある、其多度津とあるは、多度津の何處かに、燕石の知己か乾兒か、或は高杉の知人かが居て、陰に陽に彼を庇護した、ものであらうが、今は其有志の人名と詳細の事情を知る事を、得ざるのが遺憾である

因に前記本文にある高杉の從者の小傳を左に掲く

おうの

おうのは元と下之關稻荷町堺屋の娼女であるが、絶世の美人ではなかつたが、其性が誠に柔順であつた此れが高杉の氣に入つて、讃岐へも伴はれたものである、高杉歿後髮を切つて尼となり、梅處尼と號し。吉田村東行庵に住し墓守を爲し、明治四十二年八月七日行年六十五才で終つた。

紅屋木助

紅屋木助は馬關に於ける、高杉の奇兵隊本陣の、斜め向ふ邊にあつた商家の主人で、元來石炭などの問屋をして居たが、高杉の御用商人のやうになつて、其二階は全く高杉等の遊び場であつた。

琴平潛伏中高杉の作詩

東行遺稿下卷二葉に左の詩がある、蓋し琴平潛伏中の作ならん、以て翁に負ふ所が多ほかつたのが察せられる。

日柳柳東愛余狂。使余得閑居。終日默坐。回顧舊交。同盟中。死節義者十居八九。余偸生不堪慨歎也。聊賦小詩弔英魂。

眞箇關西志士魁。英風鼓舞我邦來。靈魂可識多遺憾。猛氣猶餘十八回。

囘先師詩曰、振猛尚餘十八囘

柳東爲レ余作二凱歌四首一、卽賦二五絕一題二其後

醉中談二往事一。却愧得二處譽一。四首存二天下一。狂夫死有レ餘。

燕石と高杉晉作

長州の浪人高杉晉作が、紅屋喜兵衛と變名して幕府の注意を避け、愛妾お梅に三味線を彈かせつ何處までも遊蕩な京商人の金比羅參詣と見せかけて、高松より榎井へ落ち來りしかば、燕石之を琴平の知人が、家の奧座敷にかくまひ、懇遇到らざる所なかりしに、たま〳〵晉作の所在は高松藩の爲めに探知せられたるものと見へ、雨すさまじく降しきる日、早や捕人の衆の馳せ向はんとするよし燕石が許に聞こへしを以て、すは一大事と之を晉作に傳へ、片時も早く落ち行くべしと勸め遣りぬ晉作は直に數葉の春畫を、ばら〳〵と室內に散らし置き、尻引つからげて跣足となり、蛇の目傘打ちすぼめてお梅と二人これに頭を差し入れ、雲を霞と逃げ失せたり、頓て乱入したる高松藩の捕手の面々は室內の爲體を見て驚き入るゝこと一方ならず、實に高杉とも云はるゝほどの天下の名士が斯る忌はしきものを弄ぶいはれなし、必定高杉に面ざしの似通ひたる、盜人の類にてやあらずらん然ればこれを追ひ行かん事も無用沙汰にてあるぞと、口々に罵り合ひつゝしづ〳〵と引き返せり、燕石之を聞きてハタと小膝を叩いて曰く、流石は天下の名士高杉晉作なりと云々。(四三、五、一大朝)

木戸との關係

翁と木戸との關係も隨分親密であつたが、然し今は此れと云ふ書證が存してゐないのが遺憾である、僕が大正六年頃と記憶するが、前内閣書記官長であつた、故柴田家門が木戸の事蹟調査として但馬へ行き其歸途當地へ立寄つて全事蹟を調査した、其時記者も面會したがドウも確たる書證は見當らなかつようである、私も何角と本件に關し書證を握りたく、諸方面に目を配り搜索しつゝあつたが昨年故佐野直作の書いた、長谷川佐太郎の傳記を見たら、慶應元年五月の條に木戸が多度津へ船で立寄つたので、燕石を伴ひ會見に行つたとある、無論其用談の内容は不明である、此れは木戸が禁門の變以來但馬に潛伏して天下の形勢を視て居たが、故國の事が氣にかゝり長州へ歸るので、態々寄港して諸方の政況を聞き、翁の意見も質したものだらうが、彼の我か讃岐へ來たのは此れ一度でなく、是より先き元治頃にも呑象樓へ來た事もあるだらう、左もなくば、アンナ親密な關係は唯の一度の會見では成立つ筈のものではない、明治元年の三月に上京されたのも、木戸よりの招きで行かれたのであらふ、着京すると直に木戸へ面會したが、折柄長の重臣等を集め會議中であつたが翁を見て先生來る何んぞ遲きやとて直に翁を上坐に延きて、此れ讃州の莫逆の友杜樊川であると云つて、滿坐に紹介した、四月に阪神や中國九州へ巡遊の時も賓師の格で優待されてゐるのを見ると、隨分前々に世話をされた結果ならんかと想はる、或る老人の話に文久頃に琴平の三井隆邦が木戸の

病氣を診療して事があると云つた此も傳說として揭げ置く。

井　上　文　都（植田宗平）

有年と號し後文郁と改む文政六年備中に生る、幼より穎悟長じて京師に遊學し學成りて四方に週遊し、天下の志士に交る。遂に琴平に寄寓して、燕石君田及ひ藤川將監、小橋安藏等と意氣相投じ常に尊王愛國を唱道す、文久二年憂國志士河本惟一・河野顯三等の老中安藤信正を阪下門外に邀刺するや其徒椋木八太郎、虎口を脫して琴平に至る、燕石之を有年の宅に匿さしむ、平野次郎等の義を生野に唱へて破るゝ時亦殘徒旭健（肥後熊本人）來りて有年の宅に潛みたりと云ふ、其他水戶老士鯉沼伊織（後香川敬三）上總志士野城廣助等の琴平に來るや、皆其宅に潛みたりと云ふ、後幕府の密偵愈急なるや、禍の妻子に及はん事を恐れて、元治元年十一月四日

笥木の、小蔭をたのみ、今日よりは

露　霜　ふ　せ　げ、撫　子　の　花

と國歌、一首を留めて長州に脫走せり、果せる哉日ならずして燕石、君田等皆幽禁せらる、明治の聖代となるや、京都に寓して燕石君田等の放免せられて入洛するに再會し、燕石と俱に軍職につく征東宮の錦旗を北陸に進めさせらるゝや、燕石は秘書を掌り、有年は旗手を命せらる、燕石の軍中病に罹る時　看護に尽力せしも効なく、宮の命によりて、其遺髮を齎らして京都に歸り、其息政愬

后に供奉して東京に至り、後神官となりて靖國神社に奉仕せしが明治廿八年九月歿す年七十三。

第十七項　交友録

前記以外に翁の交際を結ひしものは左の如くである。

江戸　藤森弘庵　小橋橋陰　遠山雲如　師岡正胤
水戸　鯉沼伊織（香川敬三）
上州舘林　山本士述　壚谷有卿
武州　權田直助
上總　野城廣助
下野　椋木八太郎
仙臺　岡　鹿門
會津　南摩羽峰
越後　長尾秋水　長谷川正傑　本間精一郎　高橋三寅
三河　松本奎堂
大垣　小原鉄心

伊勢　齋藤拙堂
大和　森田節齋　安元杜預藏
京都　三條實美　澤宣嘉　頼三樹三郎　中島棕隱
　　　森寛齋　家里松嶹　鴻雪爪　池村久兵衛
　　　江馬天江
丹後　野田笛浦
紀州　伊達自得
大阪　篠崎小竹　後藤松陰　藤澤東畡　同南岳
　　　藤井竹外　奥野小山　安藤秋里　藤井七郎
　　　廣岡久衛　井上金三
神戸　成瀧老人
播州　河野鉄兜　中島子旭　柴原和
長州　吉田松陰　久坂通武　入江九一　高杉晉作
　　　木戸孝允　井上馨　伊藤博文　品川彌二郎
　　　前原一誠　山縣有朋　福田俠平　太田市之進

　　　　楫取素彦　北條新右衛門　伊勢氏華　遠藤謹助
　　　　兒玉少輔　山田秋平　井上善心　櫻井新平
　　　　野村素介
土州　間崎哲馬　阪本龍馬　後藤象次郎
　　　　長岡謙吉　三宅建四郎
備前　藤本鐵石
備中　林孚一　立石孫一郎　荻田雲崖　植田宗平
　　　　島田泰夫
作州　安藤鐵馬
阿波　柴秋村　中島錫胤
伊豫　宇都宮竜山　關重弘　河野遠江
日向　須本紅洲　秋月種樹
肥後　竹志田熊雄　旭健
薩摩　西郷隆盛　小松帶刀
肥前　鍋島閑叟　松林飯山　野口松陽

豐後　劉　君鳳　廣瀨淡窓　廣瀨旭窓　廣瀨林外

此外に日柳家にある書類中に左の人々の名があるが郷貫が判明せぬ。

長光太郎　小倉健作　祇園太郎

東讃高松　松平賴覺　仝　賴該　仝　鉄松　三野謙谷

牧野默庵　片山沖堂　長谷川宗右衞門　仝　速水

松崎澁右衞門　七條伊六　佐野直作　安原枝澄

久保精一　中澤半梅　渡邊松窩　長尾杏齋

梶原官佐　千野木庵　谷本運齊

圓座　小橋安藏　仝　友之輔

田中　太田次郎

古高松　木內龍山　仝　三郎　揚雄藏

牟禮　上野美敎

三谷　藤川求馬

志度　松岡調

西讃林田　富家松浦

琴平　三井雪航　仝　隆邦　荒川栗園　仝　樟庵
　　　荒川節次　大原東野　合葉文山　仝　快堂
　　　美馬君田　松原良輔　井上慶次郎　三井竹莊
　　　松里庵牛助　一蝠
法勳寺　高木禎吾（柏原長英父）
長尾　三好京太郎
宇多津　阿比野安太郎
丸龜　岩村南里　戸祭士彦　吉田鶴仙　尾池松濤
　　　池口杏圃　土肥大作　仝　七助　村田雲和
　　　鮎川一雄　村岡竹所　仝　箏子　仝　宗四郎
　　　田岡凌雲　相川傳八　中村三蕉
榎井　長谷川佐太郎　仝　道次　安川子風
生野　高田澹齋
櫛梨　秋山伊豆
郡家　古川齊

垂水　入谷傳吾
岸上　奈良松莊　黑木茂矩　上里濟
元山　小西清琴
勝間　安藤愿庵（準平父）
松崎　富山凌雲　仝　長平
和田濱　高村小隱
塩飽　僧　知幢
伊豫　河野左仲

右列記する外交友はまだ澤山あるだらふが、書類がないから今は其大体を記するまでゝある。

第十九項　勤王

本項に[illegible]傳の中、[illegible]、即ち我國は海外各國とは其國体が異つて居るので、誰れでも皇室中心主義を抱[illegible]勤[illegible]の[illegible]に抗[illegible]
木外史を他借し來り、自から之を謄寫し日常手に卷を離さず愛讀して、已に我邦國体の重んずべく尊ぶべきを唱へて、王霸の別を明にし、德川氏の橫暴を惡み、王政復古を常に懷いて居られたので

ある、二十余歳の頃に阪神へ旅行されし時にも、第一着に湊川の楠氏の墓へ詣して居られ、其後も數度參詣して、楠公の心事を詠せられた詩が、六、七首もあるのを見ても、大楠公崇拜家であつた事が想はれる、其他知名の忠臣を詠したものは、多數散見してるが、是れ皆翁が勤王心の發露である、翁は吉田松陰より十三才、高杉よりは二十二才の年長であつて、學問や識見に於ても右兩名よりは先輩であつた、安政五年四月十八日付、松陰と其師の節齋に送つた書翰中に、左の一節がある此れを見ても、翁が如何に長州人士に、欽慕されてゐたかゞ想はれる。

松陰より節齋に宛てた書翰の一節

此仁小生獄中已來之大知己に御座候、久坂生已に申上候哉と、奉存候此回日柳長次郎を訪ひ度候爲態々罷出候、先生より委細御添書被成下候樣奉願候云々。

勤王論の勃興

嘉永六年米國水師提督ペルリの渡來せしより、攘夷論が宣傳されて、其勢ひ轟雷の如く、日本全國を震撼した、而して幕府が速に攘夷を實行しないから、勤王討幕論が擡頭して來た、今昔時に遡つて、安政萬延頃に於ける、勤王論なるものを解剖すると、蓋し水戸派の勤王論と、長州派の勤王論との二大暗流があつたようである。即ち一は勤王改幕であつて、幕府の當路者たる閣老以下の內閣員を更迭し、而して攘夷の擧を實行せしめようと云ふのであつて、水戸の烈公なとはさながら德川

家の流を汲んだ人であるから、今更幕府を根柢から打ち壞はして、政權の全部を即時に朝廷へ返還すると云ふような極端な意見ではなかつたらしい、薩の島津久光公でも、土佐の容堂公でも、皆公武合体派で、稍や水戸派の改造論と政見が接近してゐた、之れに反し長州派は無論幕府を根柢より打ち壞はして、政權を朝廷の手に納めて、攘夷を直に實行しようと云ふ過激説であつて、無論高松藩や丸龜藩も穩和派であつた、然るに燕石や小橋の一派は早くより、長州派と氣脉を通じて討幕勤王説を主張したのであるから、佐幕派より壓迫の加はるのは、火を睹るよりも明かな事である、翁及小橋等の同志は夫等の迫害に脅威されず、實行方法に心身を勞した、今左に其大要を摘記し、其苦心慘憺たるものを、諸君に示したいのである。

顧みるに大西郷でも、高杉や木戸でも背景に其國の君主と云ふ、偉大なものを頂いて居たから、いざ實行に移ると、兵力でも金力でも自己の腹を痛めずして、自由に供給されたものであるから、從つて幾分か事業が爲し易い点がある、翁及其同志等はソンナ事は絶對に不可能であつて、皆自からの資力に俟たねばならなんだので、あるから翁及其同志等は自己の財産全部を、活動費に注き込んで了つたのみならす、生命までも取られかけてをつた、此れ取りも直さす、勤王の犧牲となつたといつてもよい、然し夫れが無論翁及び同志者の本望であつただらう。

讃岐の勤王家

維新前に於ける、讃岐の勤王家なるものを、彼れ等が行動の上より見んこ、左の諸士である。

東讃　松平頼該　同　頼纘　長谷川宗右衛門　同　速水
　　　松崎澁右衛門　小橋安藏　藤川求馬　木内龍山
　　　太田次郎　小橋友之輔
西讃　土肥大作　同　七助　田岡凌雲　村岡箏子
　　　村岡宗四郎　日柳燕石　長谷川佐太郎　美馬君田
　　　三好京太郎　高村小隱　僧　月照　僧　信海

外に左の三氏は、皆外來の輸入人物であるが、燕石等と同心一体となりて、行動した者である。

備中　植田宗平　越後　長谷川正傑　上總　野代廣助

又前記の中にて松平頼該同頼纘、長谷川父子松崎、土肥兄弟田岡の八氏は各々頭に君主を頂き居るを以て、單獨行動は不可能であつたのと、松平頼該同頼纘を除くの外多くは幽囚の身であつたから肝心な活動舞臺に立てなんだのである。

又小橋の進門下に、木内三郎、揚雄藏と久保精一の三名がある、此三名は明治二年に松崎が謀殺されし小橋が三度投獄の難に遭ひし時、眞先に上京し彈正臺に越訴し、小橋の寃を救ひし人にて勤王志

想を有せし人である。

又琴平の三井隆邦、松原良輔、井上慶次郎の三氏は、明治元年燕石が上京するに際し五十兩の金を工面して渡し、翁をして活動の便宜を與へし隱れたる勤王家である。

高村小隱は同志中殊に澤宣嘉が、文久三年に生野を脫し逃れ來た時、庇護に努めた人である。

又外に月照、信海等の勤王僧もあるが、此は國外で働いたものであるから別看板である。

勤王同志者の分担

當時に於ける同志者の事務担當は左の如し。

一幹　部　小橋安藏　日柳燕石
一兵站部　村岡箏子　同宗四郎　長谷川佐太郎
一交際係　太田次郎　植田宗平
一通信部　木内龍山（國內）　小橋橋陰（江戶）　池村久兵衛（京都）
　　　　　林　孚一（備中）
一別働隊　藤川三溪
一西讃別働隊　高村小隱

翁等一派の同志者の役割は、前記の通にて幹部は小橋と翁とであつたが、小橋は文久三年十月に投獄の身となつたので、其間の志士救助や萬端の懸引は、翁が專ら担當したものである。

兵站部の村岡は屋號を越後屋と云ひ、數年間繼續せし富豪にして小橋の妹箏子の嫁きし家である、閒座は高松に近く藩吏の監視嚴しきと、道程遠く不便なるを以て志士を隱匿するのに不便であるから、便宜上皆村岡方に隱匿さし扶助したものである。

池村久兵衛は京都の商人にして、小橋は定宿にして上京の都度其家を自家同様に思つて寢食した所である。普通の京都人士と違ひ親切で義氣に富み、金岳公子などの用弁も承つて居た人で始終翁等一派の爲に陰に尽した人である。

林孚一は大阪屋源助と云ひ、備中倉敷の勤王家で溫厚の君子であつた、此人の事に就て故隆子に聞いた節がある、曰く林さんは折々宅へも來られたが何時も法被姿で、商人風をして居られた此はワザト斯んな風をして藩吏の嫌疑を避けられた者であると。讃岐の勤王家は此人に負ふ事が多ほかつた何か京都に大事件があると通知を受けたものである、現に明治二年九月に松崎が殺され、小橋が投獄された時も同志の太田次郎、久保精一、揚雄藏、木内三郎等は直に孚一を訪ね協議の上其助力をかり彈正臺へ越訴し、爲に彈正少忠山村淳平の出張となり、遂に小橋及松崎の寃を雪くを得た恩人である

準備に着手

愈々攘夷の旗擧けをするには、先き立つものは武器であるので、安政三年に小橋の娘聟である、太田次郎に命し加兒波尼電機の試製を爲さしめた、此太田と云ふ人は有名な久米榮左衛門の門人であつて理化學の素養があつた、旣に此時代に電機の製作を爲し、地雷火などに應用する積であつたらしゐ次て丸龜の村岡宗四郎の宅に於て、刀劔彈藥臼砲等を製造せしめた、萬延元年三月伊井大老の櫻田門外に於て誅殺さるゝや、勤王党の氣焰大に上り、一擧攘夷を實行せんとし、暗中飛躍を試みんとする者があつて、倍々軍器の準備が必要を感して來たので、內密に其製造と買収を爲さしめ、文久三年三月に至つて畧ぼ完成の域に至つたので、其等を点檢したら、左の如くであつて、先づ取敢ず村岡方に保管せしめて時機の至るのを待つてゐた。

カルハニ電氣　二組	臼砲　三門	彈丸　數百個	
刀　百口	槍　十五筋	甲冑　八領	

別に軍資金貳千兩

同志者の活動

文久三年八月十八日、京師の特使圓座に來たつて、大和行幸外夷御親征の軍議を開かるへき詔ありと告く、同志勇躍多年の抱負を、實行すへきは此時に在りとし、次郎友之輔正傑廣助君田等と共に

特使に從ひ即日上途、殊更迂回して丸龜に至り前年委托した軍器の內にて、臼砲二門加兒波兒電機二組、破裂火二十個及ひ硝藥附屬具等を携へ、夜間纜を解き丸龜を發し、二十四日大阪に達す、會々朝議一變し大和行幸は中止せられしのみならす、長藩と結ひし七卿の西下となり、京都の形勢混沌たりしかは、君田次郎等は直に上京し、其狀況を知悉し大阪に歸り、曩に將來した軍器は之を瀧川芳秀、北條舒陵の二人に委托し、次郎友之輔等は海路長門に走る、時に廣助は窒扶斯に罹り苦悶するも、沿道各藩侯志士の擧動を監視する事頗る嚴なるを以て、醫藥を陸地に求む可からす、由て舳を轉し丸龜に至り、窃かに廣助を村岡の宅に護送す、安藏與二の二人は已に諸般の準備を爲し村岡に至て同志を待つ、由て次郎等之に面會し前記心事齟齬の事情を告け、徐に今後の形勢の推移を待つて態度を決する事に評議を纏め、次郎友之輔等は長門に航し、招賢閣に入つた。

同志小橋、藤川の入獄

文久三年十月同志の巨頭、小橋安藏、藤川求馬、高松藩の獄に下る、此時藩吏小橋の家宅搜索を行ひ、臼砲二門彈丸數百硝藥若干、其他軍機類若干沒收され、同志等の計畫に頓挫を來した、翌元治元年五月小橋等出獄の上、自宅に於て幽囚さる。

其時友人某下獄と題し翁の悲觀の詩がある。

如此寒風飛雪天。獄中辛苦有誰憐。愧吾無策救危急。黃袖衾中擁火眠。

同志小橋再び獄に下る

慶應元年正月小橋安藏再び藩獄に下る、是は友安三冬等藩政に加はり、為に難事に[illegible]れ[illegible]て、佐幕派に睥睨せられたるに由る、幾くもなくして、松崎澁右衛門内訌に依て獄に下る、閏五月四日燕石、君田も亦藩獄に下る、是れにて讃岐に於ける勤王運動は、又一頓挫を來たした。

同志村岡宗四郞の幽死

慶應二年正月丸龜の全志村岡宗四郞、志士庇護の件により幽囚され、同三年正月に幽死した、全家は丸龜魚屋町にある舊家にして、醬油釀造業を營み有數な富豪で、小橋安藏の姪である、其緣故で讃岐へ來る志士は皆な、其家へ宿泊して庇護を受けたものである。其家は手廣で裏の茯町迄通り拔けであつた今は實野巖太郞と吉田龜吉の二軒に分割されてるが、其一軒の吉田の床下に一間位に穴藏のように掘下げ、周圍に石を組み人の寢住まいの出來るように造つてあつたと聞くが、此處に志士を隱匿したものである、其用意の周密なる感するに堪へんのである、此家も勤王運動に許多の財產を費消して、遂に歿落の非運に傾いたのである。

木內龍山の憤死

慶應三年十一月木內龍山憤死す、時に全中志の巨頭安藏、燕石、君田の三名は獄中に在り、宗四郞

龍山は不歸の客となつて、全志中余す處は、箏子と次郎とのみ、讃岐勤王家は稍や凋落の感ありしも、村岡箏子は能く志士との交際を持續して同志等の遺志を繼續して居た。

燕石、香水、君田三氏の出獄

翌明治元年正月伏見、鳥羽に於て討幕の序幕は、切つて落され、薩長土二千の兵を以て、數萬の德川の軍を擊破し、局面一變、世は王世復古の御世となり、燕石、香水、君田等の巨頭は無事出獄し再び天日を拜するを得た。

之を要するに維新前に於て翁等全志者の活動があつたればこそ、勤王史上に其名を垂れ後世に向つて感化を與ふる其功や大なりと云ふべしで我々後進者は大に感謝の意を表さねばならぬ次第である

志士を庇護す

維新前各藩では、國境へ關所を設けて、他國人の出入を嚴重に取締つたものであるが、獨り琴平は其神社參詣の爲め、又榎井は天領として何れも治外法權場で、交通が自由であつたから、各國の前科者などが多數漂泊して來たものである殊に天川、生野の擧や禁門戰が突發せし以來夫等の擧に關係した志士が、一時の隱れ場として、乞食や藝人などの扮裝をして、翁等の全志者を賴よつて來たもので其數は隨分多分に上はつてゐるが、今は詳しき人名は判然と分からぬ、其中で傳記に存してる人名を擧ぐれば、左の如くで其等は皆翁や、全志者が庇護し、相當な旅費を與へて、其向ふ所へ

行かしめ勤王に盡さしめたものである。

松本奎堂　桂小五郎　中岡愼太郎　鯉淵伊織　本間精一郎
椋木八太郎　旭　健　長谷川正傑　野城廣助
井上善心　高杉晋作　柴原和　藤村紫郎

高杉の隱れ家

前記の諸氏は大概呑象樓へ宿泊したり、又翁の世話で附近の家の裏座敷なとへ、隱匿さしたものであらうが、皆長くは榎井に居られなんだ、其中で高杉だけは小三十日も居たので、其居所が明了になつたら、好記念になると思ひ、諸方面に就きて問ひ合はして見たがドウモ今は慥な事が判からん、一說には松里庵に居つたと云ふ說もあるが、高杉は日蔭者の身であるから、アンナ衆人の出入の多さ料理屋なんかに居た筈がない、仲多度郡史に據ると井上文郁が翁の旨を承けて、彼れの居宅の隣家横田重助の一室に潜匿さしたとある、其井上の家は今の小松町本社支局の少し東であつたと聞くから矢張小松町であつたものらしゐ、其家は多分今は建て換へられて原形を存んして居なゐだらう。

野代廣助逝く

野代廣助は上總國市原郡市原村、山田橋庄屋野城良右衞門の養子である、有名なる國學者權田直助の門人にして、夙に勤王に志さし師直助の旨を體し仝志を糾合する爲め、文久三年六月下旬長谷川

正傑と共に丸龜村岡に來り、時あつて平山次郎と稱してゐた、其後村岡に伴はれて圓座に行き小橋にも面會し、仝志の勤王事件に尽瘁し、阿波の祖谷などへも土豪を說得に行き又京阪地方へも視察に出張した事があつた。仝年八月十八日御親征の擧に加はらんとして、仝志と共に丸龜を出帆し同月廿四日着阪し上京せしも形勢一變御親征中止となり事、志と違ひたるを以て同志と歸國の途に就きしに、船中にてチブスに罹り急に船を回へして、村岡方にて療養せしも藥石効なく九月十九日終に黃泉の客となつた、當時藩吏の志士を搜索する事急なるを以て彼を丸龜に埋葬するを得ず、因て屍を駕籠に乘せ琴平に送り、植田宗平の身寄りの者なりと、世間体をつくろひ終に仝地廣谷墓地に葬つた時に年二十一才であつた、其墓標（野廣之墓）とあるは仝志君田の筆に係る其歿するや幾くもなく權田直助其門人齋藤、西村の兩名を遣はし仝志等の友誼を謝し、廣助勤王の大志を顯らし、死に入る不幸を吊する所の長歌を手書し之を贈る、其歌左の如し因此に原本は小橋に保存されてある。

なしへ子なる、やしろひろすけが、さぬきにて身まかれるを、しぬひて　　直助

うれしとも、うれしき兒等、かなしとも、かなしきこらは、烏か啼吾妻の國を、樫の實の獨ぬけ出て、宮所ゝにはやも參來て、君のへにこそは、しなめと、難波の海、思ひ渡りて、讃岐の海、深きえにしを、いつの世に契り置けむ、高松のたかく聞えて、丸龜のまれなる人々、ものゝふの、友にゝかも、萬すら雄の、數にもかもと、かすまへて、めてられつるを、いつしかに、いさをたて南は、我はもよ待てしものを、思ひき耶、あらしさそひて、行秋のゆきて、かへらぬ、旅ならなとは

坂下義擧の志士を庇護す

文久二年正月十五日平山兵介、河野顯三、兒島强介等十名、老中安藤信正を坂下門外に要撃す不幸にして其徒大半討死し事成らずと雖も、權臣つひに跡を斂め海内の士氣それが爲めに振起す之れを坂下の擧と云ふ、翁亦其全志者の椋木八太郎追捕の難を逃れ來つたので之を庇護したと云ふ、全人は大橋訥庵門下の一人であつた翁の許へ來た時は小林彌助と變名して居たと聞いた。

阿州祖谷の土豪を説く

文久三年七月友之輔、次郎等三條實美卿の旨を体し京師より歸りたれは、即ち長谷川正傑野城廣助等と共に祖谷に入り土豪を說き勤王せしめんとし、全部落を巡遊せしも應する者なく加ふるに德島藩吏の探知する所となり、其壓迫を蒙り宿するに家なく風餐露宿、備さに困頓を窮め要領を得すして八月上旬圓座に歸つた。

大和の義擧を助く

文久三年八月十七日吉村寅太郎、藤本鉄石、松本奎堂等前侍從中山忠光を奉し、天忠組と名づけ兵を擧げ、先づ全國五條の代官鈴木源内を誅伐し、其後所々に於て戰ひ、遂に軍敗れて、事やむと雖も、勤王討幕の第一戰であつた、翁は松本奎堂とは親善の間柄で其擧に就ては一臂の力を致さんとの意志を有して居たから、其幹部に宛てゝ密書を手交すへく、且其戰況を視察せしむへく、平素信

用せる三好京太郎を急行せしめた、仝人は途中十二分の苦楚を嘗め、漸く目的を達して歸國した、其復命書は左の如くである。

天の川の激戰

文久三年八月二十五日、義清時に年十七、日柳燕石一封の手翰を授け、且曰く汝大和天の川の陣營に至り此手翰を交付すべし、苦戰に接せば敵兵一人たりとも倒して死すべしと、嚴命磐石より重し義清奮躍、死を決して燕石に訣れ丸龜より便船に乘し、室津に船を捨てゝ陸行す、幕府の物色太だ急にして、浪士の擧動を探知すること嚴なり、義清晝伏夜行の苦楚を嘗め、間道を辿りて九月七日漸く天の川口に近づく頃五條の戰酣なりとて殺氣天に漲る。義清無事燕石の手翰を交付し、直に五條を指して走り、幕軍に斬入り奮戰三晝夜に及び、幕兵の爲に面部鼻側に負傷し、流血淋漓たるも屈せす、敵と組みて橋上より河中に墜ち、遂に之を刺したり、其墜つるに當り痛く頭蓋を撲ち且腹部に創傷を受けしも、幸に落葉枯枝、河底に堆積せしより一時全く不省に陷りしも蘇生し、勇躍岸に登れは、怪僧按劍坊欄干を引折りて奮擊突戰、忽ち十數人を倒し、幕兵辟易して近つくものなし(按劍坊其名を逸せり、謂ふに熊野叉は大和の僧侶ならん、義清と共に京都に在つて勉學約一年因て相識ると云ふ)按劍坊聲を勵まして曰く、此處に戰ふも益なく、間道直ちに生野銀山に赴きて、仝志に合せよと、偶々流丸飛來して、按劍坊の左肩を貫く、坊曰く事此に至る。我は此地に最後の

決戰を試むべし、請ふ我殊死の狀を見よと卽ち右手に三尺二寸の大刀を振翳し、躍つて敵軍に亂入し終に其行く所を知らず、義淸涙を揮つて疾驅脫出し生野に志す、道梗して通せず、數次危機に瀕す、幸にして大和商人にして燈芯を鬻く者に遭ふ、卽ち其擔夫に變して京都に出づるを得たるも、銀山の義軍破れて施すに術なし、恨を吞んで歸國し、詳かに燕石に復命す、燕石亦嗟歎禁せざるものあり云々　（殿山雜藻）

附記　爰に一つの傳說がある、元來榎井、苗田、四條の三村は俗に天領と稱し、幕府の直轄であつて每年の租米は大柢金納であつたが、文久頃に至つて江戶に於て、現米の入用な事が出來したと見へ海路江戶へ廻送すべく命令があつて、監督者二名を任命した其人々は香川源八の父某と、石川新八と云ふ、二名であつた、翁が此事を聞知して、窃かに右二名を某所へ招致して曰く、ナント物は相談じやが、今度の廻漕米を船の針路を變じて、泉州の堺へ廻はして吳れまいか而して君等は窃かに、隱岐國へ行つて三年程潛んごつて吳れ、無論充分の生活費は支給して、當地に居る家族は生活の安定を與へるは勿論其上君等には過分の褒賞を與へるが、承諾して吳れまじきやと云はれたが、監督者は斯ゝる大それた事には、怖氣がさして應せなんだれは、然らば其れで宜布いが、必す口外は無用と堅く他言を戒めて、其事沙汰止みとなつた。

察するに大和の義擧が成立するれば、先立つものは糧食であるから、其米を堺へ陸揚けさして、天

誅組の食料に、供さす底意であつたかもしれなかつた。

生野銀山義擧の殘徒を庇護す

文久三年十月十三日平野次郎、河上彌一郎等澤主水正宣嘉を擁し、大和の義擧に應援せんと、但馬國生野銀山に義旗を擧げ、先づ代官所を奪ひて本陣と爲し、近國諸藩の兵と一戰に及びしも、衆寡敵せず、遂に軍敗れ、其加擔者の多くは自殺又は捕斬されしも、其中で首領の澤宣嘉と、參謀の旭健其他の者等は讃岐に遁れ來り、暫時潜伏し宣嘉は和田濱高村小隱に頼り、後伊豫新居郡垣生村三木左三方に逃れ、時機を待ち、小橋等同志を語らゐ再擧を計畫せしも、追躡急なりしを以て元治元年又長州に逃れ去つた。

旭健は永らく翁同志者の庇護を受けてゐた、過日坂出町の樋口權之助君を訪ひ、元と木内家にありし龍山宛の書翰の卷を借覽したが、其中に吉田から元治元年五月廿四日付龍山宛の書翰がある、其れに據ると、龍山が彼に金を惠んだ事がある。又彼れの傳記中にも保護した事が書てある。

久々御疎濶に打過申候、時下暑威増甚候處益々御安泰御興居可被成奉大悦候陳は小橋君にも今以御容赦之御沙汰も無之哉ニ付〳〵御痛心之程奉察候。旭健事に是又色々御苦慮被下候由此頃手廻り申候樣子ニ而不過之奉存候得貴面萬々御物語可申承奉存候へ共先月末ゟ不快に罷在此頃追々快氣に相向居候へ共脚に痛所二ヶ所有之何れへも御沙汰に過申候萬期拜晤候　恐々頓首

美馬君田

五月廿四日

木内順次様

旭健は同志から旅費を貰つて京都へ行き活動を續けた樣子である其の畧歴は左の如し。

旭　健

本名木曾源太郎肥後熊本藩士、生野銀山の義擧に關し參謀たり、敗後各地に潜匿し國事に鞅掌す

禁門戰に長軍を援く

元治元年七月の禁門戰は、遠征派たる三條實美以下七卿、長藩主毛利慶親及び眞木和泉等の諸浪士に對する、公武合體派、即ち會津藩主松平容保、薩摩藩島津久光等の衝突より、起りしものである先是長谷川兵庫、太田三郎、小橋友之輔等は[illegible]在[illegible]、[illegible]島[illegible]隊士と共に上京し歎願の途を講じ居りしが、七月十九日薩會桑以下諸藩の兵と衝突戰端[illegible]、長軍大敗し、友之輔は終に名譽の戰死を遂げた時に十九の紅顏の美少年であつたが、其奮鬪振は雄々しかつた事は、聞く者皆感涙を催さぬ者はなかつた。

長谷川は長州に逃れ、次郎は圍を衝いて脱れ歸り其狀況を同志者に報告した。

友之輔奮戰狀況

戰友某報

七月十九日昧爽、衆と訴狀を擁して、堺町御門より鷹司公の邸に至るや、會藩之を射撃して戰鬪俄に起る、而して薩兵會藩を援け、長兵を圍んで勇を鼓し鏖戰す、君素より少壯意氣一發、復た止むへからす、鎗を提けて奮撃突戰し、終に久阪義助、入江九一等と此處に死す、此日君衣帶に書するに「豫州小松人香川三郎春秋十九」の十三字を以てす云々。

前記の記事を見ると、友之輔の用意は周到である、若し讃州香川郡圓座村と書いてあつたら、死後父母や親戚に累を及ほすから、ワザと豫州人としたのである。

翁又友之輔の死を惜しみ、左の詩を後から贈られた。

追㆓悼橋以義㆒

鳳凰城外骨爲ㇾ塵。憐殺喬家小玉麟。顯父母名㆒眞孝子。殉㆓邦家難㆒是忠臣。
靈魂今享蘋蘩祭。壯志夙辭桑梓春。愧我白頭猶未ㇾ死。厚顏又弔少年人。

立石等の來襲を拒む

此件は同志太田次郎等の專ら担當したものである、時は慶應二年四月四日、長藩南部屯集の兵、其數凡そ百五十人が、國境を越て脫走した、隊將立石孫一郎は之を率ひて備中に入り、一擧して倉敷

代官所を毀ち、再擧して蒔田氏の治所を焚き、途中幕府の千人隊と戰ひ、遂に舟に乘し來つて高松藩を襲ひ併せて當時在獄中の小橋を救出し而して其意幕府を怒らし、他迄長藩を死地に入らしめ、王政の復古を促さんとし、其事を省せざる微衷に出たものであるが、若し其擧が實現されんか、高松の市街は燒土とならん事を同志者の龍山等が憂ひ、次郎等をして舟を艤し、硯海中にて立石等と會して、反覆弁論其暴擧を戒しめ遂に其來襲を中止せしめ、彼等は四月十八日舳を西方へ返へし去つて幸に事無きを得た、此は翁等同志者の母國に對する、一大功績と云はねばならぬ。

立石孫一郎

孫一郎は播磨佐用郡上月の人氣節を尙ひ、夙に勤王の志あり、弱冠備中倉敷大橋氏に養はれ敬之助と稱す、元治元年長州に入り、高杉晉作の麾下に屬し、奇兵隊小隊長となる、會々長藩京師の變あり、國老國司信濃益田彈正を斬り藩主謹愼を表す、新進氣鋭の士鬱勃禁する能はず、盛に開戰を主張し、藩論二派に別る、慶應二年四月孫一郎、窃に部下の兵百餘人を率ひ、九日備中に入り倉敷の代官櫻井久之助の舘を襲ひ、進んで井山寶福寺に營し、翌日淺尾に至り蒔田相摸守の舘を焼く、備前及び松山の兵これを討つ孫一郎等多度津に逃れ關門海峡を過ぎ、長州熊毛郡淺内に上陸す、長藩の非戰派兵を使はし孫一郎を捕へんとす、孫一郎健闘して遂に死す、實に慶應二年四月二十六日なり、年三十三

第二十項　旅　行

翁は隨分旅行好にて、廿三四才の頃より、讃岐國内は元より、阿波、伊豫、三備州にも屢々巡遊され又東は兵神、大阪、京都、伊勢邊までへも、旅行を試み、至る所各地方の文人墨客と握手された如うである、然し關東邊までへは足跡を印せられなかつたらしい、西は弘化元年四月二十八才の時、富山淩雲と倶に中國筋より九州に遊び五十の日子を費し、周ぬく筑前、筑後、肥後、肥前の各地を踏破し、特に長崎にては支那人や、和蘭人等の擧動を充分に視察し、外情を探り攘夷の方策に就て考慮を費やして居られる、遺編中に載せてある西遊詩草は、此時の感想を詩に述へられたもので、其數殆んど百三十首に達して居る。

翁の觀察点は却々奇抜である、其中の一、二を左に示す。

讃岐では五月には澤山蚊が出で甚だウルサイが馬關にては同月頃に蚊が居らなんのと、娼妓が碇泊の船へ押賣に來る事を咏しとられる。

水郭無蚊夏氣涼。夜潮滿岸月蒼々。猪牙一葉迎二商船一中載紅裙好女郎。

肥前大村にて田植を見て、故國の事を憶ひだし、左の作があるが其節までは、相應に田地が處分されずに殘つて居たと見へる。

打麥分秧五月天。村々農事急於弦。閑人亦有關心事。故國猶餘二頃田。

其から大川野驛にて、端午の節に會し、故國にある三舟の事を思ひ、左の詠がある、其時三舟は六歳であつた。

疎燈短髮影蕭然。節過端陽幽恨牽。客裏光陰旬欲五。夢中雲海路過千

孤樽寂莫榴花酒。古驛空濛梅雨天。家有一兒初學語。今宵應望阿爺邊。

五月末頃に馬關から尾道まで、舟で來て同所で又多度津まで、船に乗り換て歸られた、其詩中飯野山を飯顆山と云つてをられる其用字が却々面白く感せられるのである。

風軟煖洋十里間。布帆無恙近郷關。蓬窓一瞥明吾眼。一桁濃青飯顆山。

嘉永元年阿波に遊び道を壇入線にとり、芝生より徳島に入り、數日淹留歸途大阪の險を越へ、引田に出て歸られた。

引田

紅杏梢頭春雨收。行人留馬買村醪。山差平穩途差坦。不問身知入我州。

嘉永五年兵神を經て大阪に遊ばれた、此は栗園が阪地まで歸つて來たので面會に行かれたのであるが、兵庫では第一に楠公の墓に詣して居られ左の作がある。

兵庫

兵庫津頭曉繋舟。樹間粉壁靄炊煙。十年敬慕楠公墓、先向行人問湊川。

次に楠公墓下の作長編がある（此詩は巻首に出づ）又此時後藤松陰にも面會された。

安政元年正月には、菊兒の眼病治療の爲め、笠岡に行き同兒が同地で歿したので、一應葬儀を修する爲め歸り、又三月廿四日に丸龜を發し鞆浦に遊び、對潮樓にも上ほられ次韓の留題詩あり。

鞆　浦

牛生廟畔可春遊。一帶紅欄賣酒樓。柳外鍛聲人製碇。花間絃響妓乘舟。

文久三年には倉敷に至り、森田節齋を訪問し又京都に遊び松本奎堂に面會された外、慶應元年迄は攘夷一件にて計畫する處多く、爲に出遊の詩歌もなかつたものゝ如く、委しき事は材料がなきを以て記する事が不可能であるのが遺憾である。

再度の關西巡遊

明治元年三月三日上京されしも各方面への訪問や運動にて寧處に暇がなかつたが、折柄木戸孝允が關西出張の公用を受けたので、翁も同行を要められ、四月十二日神戸より汽船にて三田尻迄行き萩に暫らく滯在の後、長崎に行き是又數日逗留し五月三十日に歸京された、此行西遊詩草の著がある。

北越出張

六月廿一日大總督仁和寺宮の秘書官を命せられ、仝廿六日頃中山道を進み敦賀に出て仝所より乘船

七月廿日北越柏崎に着す滯在中二豎の冒す所となつて、終に八月廿五日不歸の客となつた、是れが最終の旅行である。

第廿一項　入獄

慶應元年正月小橋杏水再び高松藩の獄に下る、蓋し男友之輔等長州勢に加擔し元治元年七月十九日禁門の戰に殉難した事が國中に周知されたので、佐幕派に睥睨されたのであらう、間もなく同藩士松崎謐右衛門、七條伊六、佐野直作等も投獄された、次いで同年四月高杉長府藩士等の加害を避け且つ時勢探究の爲、馬關を脫して大阪に往き、伊豫に往き丸龜に來て、岡を問ひ小橋を尋ね、次て燕石を問ひ、琴平に潛伏して居た。他に有志家も段々入込み、將に同地が勤王黨の策源地とならんとするの觀があつたので高松藩では大に驚き、閏五月四日の田植の最中に先つ燕石、君田等の巨頭を捕へ、而して高杉や、植田宗平其他同志の黨類を、一網打盡的に捕へんとしたが、高杉、植田の二子は身を辛ふして、長州に逃け歸つた。

小橋日柳の兩名は早くより、高松藩にて注目して居たが、琴平榎井の地は、所謂天領であるので着手が遷延して居たが、這回は幕府の命令で捕縛したのである、本來ならば燕石は琴平の牢へ拘禁しおくべき筈なれども、仝所へは國事犯などの重罪人を入れる所がなかつたので、高松の藩獄へ入れたのである。

此藩獄は今の高松市鶴屋町學校の處に置かれてあつた、這回の七氏は國事犯であるから、一人一房制で牢番に賄賂して、罪人同士何等か便宜を計れたが、隣房は常事犯の窃盗殺人犯や詐欺犯が居た翁でも小橋でも宅では隨分放縦な[illegible]中両名とも左黨であるから毎日存分にやれぬので、一層無聊を感じたものらしく、其れで同獄で宅や友人などから酒の差入れがあると、互に融通をしたものである、翁の室は割に廣かつて藤川、松崎、七條等が皆近隣へゐたので酒や肴などの差入があると、翁の處へも分配して來た。翁は獄中を格別苦痛に思はず、安樂居などゝ云つて、一向平氣で其中で詩を作り、此れを安樂居集と題し、今に遺物となつて遺族の家に殘つてゐる。

入獄皮切の俗謠

當時高松藩獄内の慣習として、新たに入牢した者は、囚人一同への顔つなぎの爲め、何か必ず一藝を演ずべき事となり居つた、然れば翁に向ひても夜泣饂飩の賣聲にても、妙なり犬の吠聲にても可なりと、大勢の囚人が異口同音に強ひかけ、水滸傳の豪傑も、これにはほと／＼困じ果てたりしが、囚人の之を責むることいよ／＼急なるものあり、今は絶體絶命となりたれは、然らばとて立ち上りて。

明の鳥は、東で泣けど、　わしが妻子は、西でなく

との俗謡をば即席に作りて、いともあはれに之を歌ひしに、流石に荒惡なる囚人等も、いたく之れに感動して、已が妻子のことをも忍びつゝ、ハラ〳〵と涙を落して、獄衣の袖を搾らぬものは無かつたと。　（四三、五、一大朝）

獄中の抱負

燕石が高松藩の獄中より、榎井の同志の許へ寄せたる扇子あり、自ら筆とりて伊勢蝦を描きてこれに

伊勢蝦は、しばし小腰を屈めて
居れど、やがて錦の鎧きる。

と云ふ俗謡を以て、賛としたるものなるが、多年の素志を達して、奥州征討軍に從ふに至りたるは實に獄中の抱負を實行したるものである。

酒を索むるの詩

戲代㆓君田㆒索㆓酒伯孝㆒帖

獄中餓鬼。渇㆓望般若湯㆒者己數日矣。其奈㆓牛奴馬卒侮㆑僕。新來不㆓肯奉㆑命也。
公之方便願救㆓此若㆒。南無々々。

謝㆓伯孝送㆑酒

般若一滴。轉㆑苦爲㆑樂。公之功德。活佛不㆑啻。

家兒に後事を托す

獄中より左の書を家庭へ送りて後事を三舟に托した、其牢乎たる決心の程感すへしである。

末文中に田夢弼とあるは丸龜の田岡凌雲、越夢吉とあるは播州の河野鐵兜、荻口肅とあるは備中の荻田雲崖の事で皆親友であるから、前記三氏へ墓誌の事を遺囑したもので如何にも用意周到である

與兒愬書

秋風其涼故園如何。予入獄以來無恙。獄苦慘亦復如飴耳。但莫須有之事。頗多端則馬角之生未可期也。諸囚曰獄中夏可凌冬難禦。予本畏寒如虎。氷雪之候如尙在此則當凍死。然是亦天耳何足嗟乎。我齡己卅九。世間之事經歷殆盡。今死此獄亦無遺恨。其不過擾夷之日而死耳。我如果死勿念佛勿請僧。唯唱文天祥正氣歌或陸放翁臨歿詩以祭我魂此可以當千部之經也。頃預作墓誌今具左他日宜用之。嗚呼丈夫至此復何言。汝只自愛勿憂我非剣卑詩人而惜其者。其志業未終而死矣噫。

右文字宜田夢弼商確。如其書則宜托越夢吉。或荻口肅碑高二尺許不彫不琢帶綠苔爲佳。碑側植梅花二三種亦佳。

獄中の著書と慰安

曾て聞く、社會主義者は一回入牢すれは、一國の語を學ひ、二回入牢すれは二國の語を覺ると云ふが、藤田東湖なども弘化元年小梅の幽居で勉學の結果回天詩史、正氣之歌、常陸帶等を完成した、翁も亦在獄中修養を怠たらず、擲蝨餘話、皇國千字文、安樂居詩集等を著はされた、此三種の中に就て擲蝨餘話は、吉田松陰の幽囚錄の如うなもので、嘉永以後の賢君と、志士の逸事等を漢文で記述したものであるが、其材料は何れの方面より手に入れられたものか、身獄裡にあるので、迚も外部より蒐集する事は不可能であるから、其大部分は平素の記憶中より喚ひ起して、書綴られたものであらう、今更ながら翁の記憶力の豐富であつたのに敬意を表せさるを得ぬのである、在獄の勤王家連は、何れも左黨であつたから、何は兎もあれ酒には渴望して居られた、先年小橋氏の傳記を書く時に、故小橋安藏の五女隆子に會ひ、種々の舊話を聞いた事がある、今其一二の消息を摘記せんこ、其頃同家は富有であつたので、又居村の圓座より高松へは、僅かに一里有餘であつたので毎日弱く[illegible]は獄[illegible]其管を通して順々に隣室へ酒を分配したとの奇劇も演せられたと、是を以て見れは、いかに左黨連か酒にこかれて居たかゞ察せられるのである、此れが獄中唯一の慰安であつたものらしゐ。

石三溪の三子を最先に救ひ出されたようである、今左に公子の傳記中より其時の狀況を抄出する。

燕石安藏等を出獄せしむ

前畧燕石香水等の輩は、三年間空しく囹圄に幽せられ、只た東天を仰いて、國家の行末を案じるのみなりしが、此間に時勢一變し、德川氏は朝敵の名を負ひ、高松藩亦伏水に於て、慶喜公を救ひし爲め朝敵となつた、此時公子機先を制して、侍臣長谷川誠一郞、岩島米藏に命し燕石、香水、三溪等を獄より出さしめんとし、其時誠一郞に一の短刀を授け、町奉行朝比奈德平の所に至らしめ、燕石等を出獄せしむへく命し、若朝比奈が應せされば此一刀を渡せと云はれしに、初は老職に協議を爲す迄、暫く待たれよと云ひしも然らは此をと一刀を突付けしかは、今は不得己とて燕石等を引渡せしかは、即時龜阜邸迄伴ひ歸り謁見せしめしに、三人は繩帶で見すぼらしき姿であつた、公子は翁を見て燕石ひどく瘦せたでないかと云はれ、衣服帶も破れ裂け居たりしかば、家臣の衣帶等を與へ、更衣の上入浴せしめ、支度を與へられた其時小橋の如きは、長らく獄中に居りし事とて足が立たさりしかば、駕籠にて圓座の宅へ送り屆けられしと、而して其連中をして封土還付、藩主の復位等につき官邊に奔走せしめられ、相當効果ありしものゝ如しと聞けり。

高藩の朝敵解除に盡瘁す

明治元年正月　高松藩は、伏見戰爭に參加した爲め、朝敵と見做され、藩主の官位褫奪、及城地沒

前記の如く高松藩で勤王家諸氏を入獄せしめたもの丶彼等に對しては此れはと云ふ罪案がない、ので（尤も其中で藤川三溪は少し毛色が變はつてゐて、民兵と云つて護郷兵みたいなものを募集する爲の嫌疑であつた）被告人等を引出して一回も訊問の裁判も開かなかつた、彼等は此れをもどかしく思ひ、密に金岳公子の許へ書面を呈出して、裁判を開いて呉れるよう內願せられたが、そうこうする中に、天下の大勢が刻々變化して、將軍家茂に薨する、征長軍は失敗で引上げる、高松藩は伏見に於て、官軍と衝突し朝敵となつて、彼我位地を變へ、佐幕派の權威は全然零になつて了つたので翁一味の勤王家は、枯楊再び花を生じ、日ならず出獄の曙光がホノ見へて來た。

第廿二項　出獄

勤王家諸氏の出獄期日に就ては、縣史や人物傳にも其れが明記してない、一說には出獄は二月の始（四日か五日頃）と言つた人もあるが、此れは誤聞で正月二十日である、同じ在獄者でも小橋と日柳と三溪は勤王の嫌疑であるが、松崎七條佐野の三氏は勤王と言つぱ藩の內政に關する嫌疑である藤川は農兵の件で各其立場が違つて居た、飜つて其時分の形勢を見ると元年の正月十日には高松藩主が官位をはがれ、同時に土佐丸龜多度津の三藩が高松に來討と云ふ混雜中であるから、藩の重臣等も途方に暮れ、勤王諸氏の出獄手續までは措置をする暇がなかつたが、金岳公子の盡力で小橋と燕

收の處分を蒙るや、金岳公子は之れが善後策に腐心され、當時在檻中の小橋、日柳、藤川等の三巨頭を急ぎ出獄せしめ其等の三人をして其取消運動に從事せしめられたものである、彼等は無論父母の國であるから一刻も早く解除になるよう、熱心に其筋へ向つて運動したものである、因に其當時土佐の本隊は丸龜に駐在してゐて、隊長は長岡謙吉（號懷山）であつた。

春暖益々御安全之由奉抃賀候、小生も六ケ月幽囚之所、此度脫獄（二十日）直樣宮脇公内命にて、土藩應接、右に付甚多忙今日燕石と同道にて丸龜土藩本陣へ罷出候右に付御目に掛り度候へども不本意なから御門外のり打仕候御出府のせつ宮脇へ御たつね可被下奉待入候以上。

廿四日（正月）　求馬

齊先生

（附記）齊と云ふは仲多度郡郡家村三條の醫師で姓を古川と云ひ、高松一番丁蘆澤の出で藤川の親友である、文久頃高藩の外科醫を勤め京都へも出張してゐた人である。

第二十一項　上京と其後の行動

此れからが翁の得意時代に入るのである、出獄早々高松藩の朝敵解除の事や、友人の松崎がまだ出獄の恩命に浴せなんだので、其方の解除の件等に運動され、夫々功果ありしもの丶如うであつた、實

に光陰は矢の如くで、正月も過ぎ去つて二月も早や中ばになつた、時に在京の友人（木戸か品川ならん）より至急上京すへき旨の一封の書翰が翁の許に達したので、多年の抱負を實現するには、此好機を逸すべからずとなし、一日も早く京都へ乘込み、明治新政府の爲に一臂の勢を効さんと決心し、準備をさ〳〵怠りなかつて、同志の君田などへも同行を勸められたが、病氣の爲め辭したので廿二日に從者一人を召具し高松に至り、龜井町の郷宿米屋に小橋と同宿し廿三日より廿五日迄は小橋方に宿泊し安藏に同行を勸めたが、同人は是迄國事の奔走に少く疲勞を感したのと、翁よりは八ツも年長であつて最早六十の坂に手が届きかけてるので、此又同行を辭したれば、國事に就て意見の交換を爲し、尙將來の事どもを囑して別れを告け、廿六日は丸龜に至り舊知の長谷川、高木入谷國方其他諸氏と送別宴を開き廿七日に同地より上船せしが、翌廿八日は風波惡しく直島に泊し、廿九日飾磨に上陸し姬路より明石兵庫を經て、尼崎より舟にて大阪につき、小憩し三月朔日伏見行に乘船し、同三日に京都に着し早速木戸や其他の知已に面會された、其時に木戸は參與とて後の參議の職を奉し、明治政府の大立物の一人であつた、其時木戸に優遇された光景は左の如くであつた。

木戸に優遇さる

先生の初め洛に入るや、公（木戸）宗室有志を一堂に會して、大政を謀議せり、先生（燕石）の至るを望見し、呼て曰く先生來る何ぞ遲きやと、之れを上座に延く、一坐相目して曰く、何物の傖父ぞ、

敢て上座に進むと、公咲ふて曰く、怪む勿れ、是讃州莫逆社樊川なりと衆始めて燕石先生たるを知ると云ふ。

（讃岐勤王家傳）

阪神行

元年の三月十七日には東山長洛寺に至り賴山陽の墓に詣す。

同四月某日に日向の高鍋藩主秋月種樹主催の詩會か、花園の妙心寺にて催された其途中に　町にある崇徳帝の御陵を拜して、参會した其時の詩伴は森春濤、鱸松塘、中根雪江、小原鉄心、廣瀬欣吾、木戸孝允等出席す、木戸列座の諸氏へ燕石を先輩として紹介す。閏四月十一日[illegible]駐蹕燕石は木戸を連れて大阪に至り、中ノ島鴻池（善右衛門）別莊に宿泊す、此處には長州の會計官（北條新右衛門の旅舘として居る）其時井上聞多、品川彌次郎も居合はして、大に歡待さる。

同十八日木戸退朝後、語りて曰く豊公の廟再興の議ありと。翁の意見を徴したれば、翁が云はるゝに、豊公か不逞を討し皇室を尊び、其功は大いなるものに拘はらず、徳川氏が其廟を毀したのは酷であるから、再興すべしと大に賛同して居る。此意を聞いて豊公廟再興着々木戸と燕石である、大阪人士、夫れ此れを三思せよ。

又其月の廿一日には木戸と汽船にて神戸へ行き、伊藤俊輔（博文）方にて洋食の饗應を受け、其美味を感し歸つたら、「我腹収寨天下珍」なぞと云つて、詩友に吹聽すると云つてられる翁も急にハイカ

ラになられたものだ。

中國及長崎行

明治元年の閏四月十二日には木戸と共に、神戸より汽船に搭して關西巡遊の途に上り、同月十六日頃三田尻に上陸し、同四月廿六日には萩に着し日々非常な歡待を受けられ、五月九日吉田驛に至り高杉の墓へ詣し梅處尼にも會ひ、舊時を話し一詩を贈られさる其れより馬關に出て汽船にて玄海洋を航し長崎に着し先年讃岐へ潛行された事のある、澤宣嘉が其時長崎の知事であつたので、是又大歡迎を受けられ、歸途又馬關に立寄り四五日滯在廿四五日頃三田尻より乘船五月卅日に歸京された。

關西出張の要件

這回の關西旅行の要件に付ては左の二樣の說かある、某氏談には近時長州歐化の傾きあり之を鎭めざる可からす、其任に當るものは木戸に如くものなし燕石に如くものはなしとて、二人防長の志氣を皷舞せん爲に三田尻に至る云々。

吉田忠御前講演の一節に、燕石は木戸と共に尊王の同志の結束を圖るため云々

右二說あるが成程其當時長州は戰勝國にて。士氣が緊張して居たから其邊の意向も幾分かなきにしもあらずだか。記者が考ふるに旣に維新の大業は殆んど完成の域に達しとるから、今更事新らしく結束を固める必要はないので、ヨシんば少し各地で不平があつたかも知れないが、此行の目的はツ

ンナ事でなく木戸の双肩には左の大事業が懸つて居たのであつた。
木戸の中國及長崎行の目的は、一に長州藩主敬親に見へて、版籍奉還の事を進言したのと、又一は長崎に於ける耶蘇教徒處分の二大事件處理の爲であつた、翁は陰に陽に此二大事件に就て、意見を披瀝し顧問となつて尽瘁されたものであらう、今參考の爲め、木戸の傳記中より其關係の一節を左に抄出す。

版籍奉還の進言

木戸下問に對て曰く、今各藩の版籍、皆な朱印を幕府に受く、夫れ國土は幕府の有にあらざるなり而して其狀は則ち恰も幕府の封に係るが如し、是れ世に幕府と諸侯とを以て動もすれば、君臣の觀を爲し朝廷を蔑如する者あらんとする所以なり、名分の乖戾未だ此の如く甚しき者あらず、今日名分を正さんとせば、版籍の奉還より急なるはなし、顧ふに一たび版籍を奉還するも、未だ必ずしも直に封土を失ふべきにあらずと雖も、而も其歸する所は到底朝廷の直管に歸するの意を存せざるべからざるなり、敬親默思すること少時、曰く善し、善く之が所分を爲せ云々。
次で薩土肥三藩の贊成を得て、明治二年正月に至り、四藩連署の上表を見るに至れり。

耶蘇教徒の處分

是より先、長崎浦上村の耶蘇教徒公然教法を奉ず、當時長崎に在勤せし、九州鎮撫總督の參謀井上

聞多(馨)等之が處分法を朝廷に稟議す、衆議之を死刑に處す可しとの說多數なりき、木戸は之を不可とし云へらく、宜しく使を訓戒して迷信を醒し、國體を辨せしむべしと、朝議乃ち決し之を井上等に報ず、井上等嘆て曰く 是れ事實に行はれざるの議なりと、尋で木戸自ら長崎に赴き、教徒を各藩に分付して訓諭せしむ。是れ福羽文三郎(美靜)の說を採りたるものなり云々。

旅費の調達

翁の上京に就ては、今迄のように諸國を旅行されるのと趣を異にし、這回は時めく木戸氏よりの招待に預かつたので、從僕の一人も連れ挾み箱の一ツも擔がせねばならぬので、刀劍其他相當の衣服や身の廻りも用意せざるを得なんだが、何分此年の正月に獄から出たばかりで、既に今迄入獄中に許多の費用を要した揚句なれば、今俄に何[illegible]經[illegible]これには隨分苦心されたものらしゐ、其事情を親友の松原、[illegible]井、井上の三子が聞きて大に翁の眞意に同情し、五十両の金を才覺して渡したのであるが、今日では五十兩位の金はなんでもなき事であるが、今より七十年前の五十兩ときては相當高額のものである、翁は早速左の證書を差入れて一寸借用された。翁は上京の上機を得て返弁さるゝ意向であつたらうが、間もなく征東總督の秘書となつて、北越に從軍し遂に戰死されたので其儘、證書が[illegible]に殘つ[illegible]抑も此借金たるや自費に私用したものではなく、言はゞ國家的の用務に使用したのだから、貸した人も翁の人物を信用し

て出したので無論返濟を求むる意思はなかつたのであらう、夫れにも拘はらず翁は飽くまで私用金として借受け、其證書を入れられたものである、此一事を以て記者は翁の如何にも義理堅い、人格に今更なから感心したのである。

覺

一金五拾兩也

右之金借用致候事實正に御座候爲其證一札如件

慶應四年戊辰二月

日柳長次郎 ㊞

松原良輔殿

三井隆邦殿

井上慶次郎殿

第廿三項 逝去

翁の逝去は大きく云へば、日本の損失であるが、時に我か讃岐の爲には一大損失である、若し翁をして明治十年頃まで長生せしめたならば、恐らくは臺閣に列して、赫々たる功績を明治の御代に殘されしならんに、中道にして會津の陷落を目前に扣へなから、其實況を見るに及ばすして逝かれし

は天何んぞ讃岐に幸せざるやの、歎辭を發せざるを得ざるのである、話が少し前に戻るが、今其出發の經路を記さんに、明治元年六月に仁和王（後の小松宮嘉彰親王）に隨ひ京都を立たれたが、北陸道は交通も不便である上に、殆んど越後全國が官軍に對し、反旗を飜して居たので六月廿八日頃に敦賀より乘船し、七月二十日に柏崎まで來られた、其時は同地には賊軍の影は一兵も駐めなんだ、翌廿一日に至つて文久年頃に讃岐へ屢々來た事のある、親友の長谷川鐵之進が翁の來た事を聞知し早速旅舘へ訪問し久闊を叙したが、其時にはや翁は病蓐に臥して居られたと、察するに途中で病氣に罹り、此處迄漸く進んで來られたのであらう。其れから病氣が熱病に變じ、ベッタリ病床に臥したので歿する二日前に蹶然立つて賊を追ふ態を爲し、八月廿五日に病革り左の辭世を殘して、五十二才を一期として前途有望の才を懷いて、北越の露と消へられたのは實に惋惜の至に堪へぬ、翁京師を發するに臨み、兒政恕に書を寄せて曰く我出征の後矢丸の間に斃れても、此は王事に死するのであるから、大愉快であると言ひ而して一語も家事に及ばなんだと、親友の植田が看護に盡力したである。

絶命の辭に曰く

錦旗己移新潟東。病夫一枕伏秋水。朝來漱レ口遙相拜。只禱吾王早立レ功。

仁和王、翁の逝去を聞こし召し、大に惋惜し玉ひ、大櫻定居彥と諡號を賜ひ、柏崎神社祠官樋口氏の塋域に厚く葬らしめ玉ふと云ふ。

附記　此年七月廿六日翁の死に先立つ一ヶ月前には、親友の森田節齋が紀州荒見村北見方に於て歿した年五十八、又翁が數年恩寵を受けし、松平金岳公子は、同年八月廿五日即ち同日時に高松龜阜邸に於て逝かれた年六十、噫其歿年月が翁と同月とは、何んたる宿世の因緣であらう、記者は只管嗟嘆に堪へぬ次第である。

後年小松宮嘉彰親王は、再び越後に赴かせられたる際、翁の墓を訪はせ給ひ、深く御悲み遊ばされ墓所に修理を加へさせられて、墓碑は柏崎招魂場に移されて居ると。

翁の病因

に就ては熱病であつたと聞くが、元來翁は弱体の上に、永らく入獄され、出られると、充分靜養の暇もなく、直に上京し、關西地方へ木戸と俱に巡遊し、歸ると又引續き北越へ出張され、南船北馬殆んど席煖まるに暇あらずて、非常に身体が疲勞した上に、讃岐の如うな暖國から、北越の如うな寒地へ行かれたので、疾が其虛に乘じたので、今云ふチブスかマラリヤの類に、罹られたのであらうと察せられる。

一說には戰線視察中に、流丸に中られたと云ふ說もあるが、翁の柏崎に到着した七月廿日には、賊軍は旣に會津地方へ退却し、官軍も彼等を追擊し會津地方へ進軍中にて、柏崎へは宮樣附の護衛兵しか居なかつたのであるから敵より狙擊される筈がない、記者は其病因に就て琴平の先輩諸氏にも

質したが、皆其當時熱病と聞き居ると云はれた、又翁に看護して居た僕の栗助と云ふ者や、翁の臨終を見屆けた植田宗平なども、歸つて來て熱病で歿されたと話して居たと。

柏崎町

柏崎町は翁の終焉地として、思出で多き處なるを以て、今其地歷の大要を左に揭く。越後刈羽郡の首都、西北面に海港を有す、新潟へ西南十四里、人口一万餘、北越線鐵道車驛、北陸海道の要衝に當る、又附近に產する石油は此地に於て精製せられ、市街殷賑、桑名松平氏の舊陣屋のあつた所にて、明治元年官軍此に會桑軍を破つた所である。

第廿四章　合祀と贈位

柴原和の事は捫蝨餘話の中へ、一寸小傳を書いておいたが、此人は節齋の門人で勤王家であつた、文久頃に形勢視察の爲め、榎井に來り翁の許で食客となり、此人和助の變名で傘職工となつて、隨分世話をかけた人である、此人が維新後千葉縣の知事に任せられ、名聲が大に揚がつて、日本で三名知事の一人となつて、後元老院議官となり、明治廿二年十二月に香川縣の知事となつて赴任して來た、舊來の恩を懷ひ起し、一日翁の墓前に至り、叩頭拜首して曰く、當年の賤工此木和助至ると因て涕泣之れを久くし、今昔の感に堪へさるものゝ如くかりしと。

而して時を移さす、北越の軍功を錄して其筋へ上書し、靖國神社に合祀せられん事を請ひ、歲を閱して聽され、明治廿四年九月廿一日靖國神社へ合祀され、尋て明治三十六年十一月十三日特志を以て從四位を追贈されたのである。

第廿五項　建碑

翁の碑は其終焉の地たる、北越柏崎に於けるものと、生地たる讃州仲多度郡榎井に於けるものと、二基あつて何れも後人景慕の標的となつてゐる、其大要は左の如しである。

柏崎に於ける建碑

明治三十七年二月、越後の有志者丸田尙友等、翁の遺蹟の湮滅せん事を憂ひ、翁往年の知友高橋三寅が撰文を作り、同しく岡千仭が篆額を書し、柏崎神社境内に頌德碑を建てた、其碑銘は卷首に揭げあるから、就て見られよ。

榎井に於ける建碑

前記せし如く、遠き越後でさえ、翁の德を慕ひ、有志者の手に於て、頌德碑が建てられたのに、肝心な翁の呱々の聲を擧けた、榎井の地元で其擧なきは不合理の至りであると、有志者間に其議が持上り、同地の篠原幸吉氏等此れが首唱となり、燕石會なるものを起し、建碑の議がし　、は翁

と縁故ある山縣公に、碑銘は當代の碩儒土屋弘に、書は讃岐出身の黑木安雄に依賴し、夫々承諾せられて、刻字も既に本春成功して、今は既に榎井春日神社境內に搬入してあるが、何れ今年秋季頃迄には建設を了へ、除幕式を行ふ事になるだらうと云ふ、其碑銘は卷首に揭けてある、其碑陰に刻せし文は左の如くで、之れを見ば其由來が知れるのである。

日柳燕石先生碑、誰建之者、燕石會也、燕石會何爲而興、由于追慕先生也、先生勤王事蹟、口碑傳之而金石未勒、先生同鄕後進篠原幸吉等、數年前提唱興會、前兵庫縣知事淸野長太郞、前香川縣知事阪田幹太等賛之、修乃先生之墓、又樹碑鄕祠以顯彰遺烈焉、語曰愼終追遠民德歸厚、如燕石會員等其歸厚之徒也、予快其碑成、書諸碑陰。

大正壬戌　紀元節　　黑　木　安　雄

第廿六項　門　人

翁はあんな學者であつたから、相當な門人があるべき筈であるが、何分交際家であつたのと、諸方面への遊歷が多くジツト家に籠居して、學問を專一に硏鑽すると云ふ、學究的の人でなかつたから此れと云ふ門人はなかつたようである、今現存してる琴平の荒川節次君は少年の際敎を受けた一人である、又今は故人である三井莊三郞も、翁晩年の門人で崇拜家である、又綾歌郡長炭村の三好京

太郎は、少年の時より翁が手塩にかけ、撫育せし門人であると聞く、然して學問方面でなく、俠客肌の乾兒は却々多く、一朝攘夷の旗擧けてもする日には其中の三四百名は、翁の爲に身命を提供するものがあつたと、翁がグシロクに關係したのも、此連中を利用せんとの腹に一物が、あつての事である、今京太郎に就ての事蹟の一部を左に示す。

又仲多度郡誌に據ると、黑木茂矩は詩學を、上里濟は史學を燕石に學んだとあるから此兩名も門人の資格がある。

教へ子京太郎

京太郎名は義清、殿山は其號なり弘化三年正月十七日を以て生る、幼にして書を好む、然れども家貧にして學に就くこと能はす、日々三好玄忠の塾庭に遊び他人の讀書するを諳記す、某日父に從ひ榎井村に赴き、夜中大學を諳誦しつゝ歸る、忽ち後方より聲あり、若輩何をか言ふ、義清徐ろに答ふるに實を以てす、父遅れて至り兒の無禮を謝し熟視すれば日柳燕石なり、曰く敢て無禮なし、而して兒は君の子息なるかと、父素より燕石と相識るや久し、具さに、狀を告げて笑談終に家政に及び約して燕石の學僕たらしむるに决す、時に四方勤王の十輩出して燕石の門を叩くもの多し、松本謙三郎、藤本津之助、高杉晉作等前後して來り王政復古の大計を議す、謀議素より秘中の秘に屬す而して只義清のみ侍座を許さる、故を以て夙に復古の大義を解し、又先輩忠烈の士に依つて志氣を

皷舞せらるゝもの頗る多し云々。（殿山雑藻）

第廿七項　遺族

翁の遺族と云つたら、只た一人の三舟のみであつたが、生理上の關係は妙なもので、兎角一人子と云ふものは何處でも、子が多ひものであるが、三舟も其ご多分にもれず、子澤山で一腹に十二人も生れた、無論三舟は品行方正の人であつたから、第二號などは置かれてなかつた事は保証が出來る其中で夭折したものもあり、生長したものは、男子が三人と女子が四人と都合七人であつた、尤も其中で既に故人になつたものもあるが、現在生存したるものは左の如くで、何れも社會に相當な地位を占め、父祖の名を顯はして居られる。

其内で長女の喬子は、翁四十八歳の時の初孫で、其生るゝや非常に悦んで、呉の孫策の字に因んで喬の一字をとり、大喬と稱せられただけあつて、教育熱心家で學力豊富、才色兼備の女丈夫で、今は青年の教育指導に從事して居られる。

喬子は玉燕と號す明治十七年祖父燕石の十七回忌を修するに當り左の作あり。

北伐星霜十七年。　功名附與一爐煙。
生前知已皆雲閣。　誰說越山風雪天。

遺族調書

（大正十一年七月一日調）

男子

長男　復太郎（明治四十二年五月十七日歿す年四十二）

妻　仲多度郡買田永原一馬の妹ヌイ

男孝一（目下東京に遊學中）

二男　櫻橋　大阪鐵工所勤務年五十

三男　彥九郎　法學士年四十　山口高商敎諭

女子

長女　喬子　年五十九

大阪玉造にて雜貨店經營兼て青年敎育

二女　芦子　年五十二

夫（養子）年五十一岩松（明治十年四月十七日歿す）

子男三人女二人

長男壯平十五銀行勤務

三　女　梅子　三十八年

　　　　陸軍少佐兵頭勘七妻

四　女　象子

　　　明治四十年一月廿四日歿す年二十

呑象樓遺稿序

日柳終吉。刻其父士煥遺稿。又以予之爲父執。屬予序之。予曰士煥之詩。奇拔雄峻。傑出時輩。世人之所知也。況當文久慶應之際。盡心國事。慷慨悲憤血腥之氣。迸筆端。亦世人之所知。何待予言。予之於士煥。齡加一。而死生相許。殆三十年如一日。故能知其青年時言行世人之所未知者。請言其一二。推之亦足以識其人。士煥平日語人曰昔張子房容如婦人。爲帝者師。大丈夫當如此。蓋士煥身不盈四尺。而其志有確乎不可動者。嘗携妾綠卿。遊讃之坂出。有力士某怨士煥者。將來辱之。有人密告戒之。士煥笑謝之。其人請綠卿避之。綠卿亦泰然侍酒。某與其徒三人至。問店主曰樓上有幾人乎。士煥聞之高聲曰敵者燕石一人。何累座客。某扼腕上樓座客皆揑冷汗。偶士煥得詩展剡掃之。墨花淋漓筆勢如流。似不知某等來。某等亦不輙下手。綠卿顧曰君輩前席。某氣少沮。士煥書數紙終。後坐志氣凜然眸電射人。某等遂畏縮。介綠卿謝罪。士煥豪膽率此類。然平居嘔々如書生。座右皆書畫琴棊。客至則出酒。孔北海不啻。士煥題樓曰呑象

樓。蓋自表大志也。士煥雖身居游俠中其所交皆天下有名之士。以故士煥名嘖々于世。士煥先出于羽床伊豆守。伊豆守讃之驍將。系播之赤松氏故一時號幼名長次郎。稱赤松劍吾。其愛留侯亦從赤松氏。又愛五劍峰峻拔也。又常慕孫伯符。故名女孫曰大喬。慕不識庵爲人。而身葬于越地。亦可謂奇矣。蓋其詩奇拔雄峻皆素有所養而然也。遺稿成錄余所識以爲序

明治廿二年二月

七十四翁　藤川忠猷識

序

余始謁金岳公子也。公子歷擧海南名士。使余擇所交。蓋先屈指于柳東日柳翁云。余乃問其人之大概。公子曰。或呼爲詩隱。或呼爲大俠。皆未盡其人已。汝得交則必應自識之。余乃介友人以締交而余方犇走公事。東西無定處。終不能得握手之歡。而翁亦從王師于越。罹疾以歿。令嗣終吉能繼父志。盡心于國事。爲官于陸軍及阪府。與余交十有餘年。典型所存。稍々知翁之爲人。終吉旣已致仕。退居于桃溪。於是脩翁之遺稿。其詩大小一千二百首分爲八卷。八音之美。鏘々乎以振。即謀序于余。々曰翁詩自妙品。人能知之何贅余贅辭。而其以俠自掩。亦人所能知。蓋所交海內名士數百千人。其或亡命于其國。來潛于翁家者。概大俠視之耳。其人今多爲達官。則存天地之間者。其唯詩名乎。然則公子所謂未盡其人者。何以明之乎。沈思少頃憣然曰余過矣。詩也者心聲也。精神之美。布列發舒。實不可掩。讀此詩者必有知翁之果不爲詩人。余過矣。遂爲序

藤澤恒撰

呑象樓遺稿金集

自天保乙未（六）至庚子（十一）

讃岐　日柳章士煥　著

男　懃終吉　輯

静姫鎌府奏舞圖

豆萁煑レ豆東風烈。孤飛鶺鴒羽翼裂。一枝嬌花可憐生。柔姿欲レ折氣不レ折。
纔車歌哀細似レ絲。翠袖掩レ淚蹙二雙眉一。擧レ頭猶レ望二芳山雪一。低頭不レ俯二鶴陵巵一。
君不見閨中將軍北氏女。夫屍未レ冷己踐レ扆。借問牝鷄作二晨鳴一。何如孤鸞奏二踊舞一。

金山鯛歌

金山鯛魚天下美。萬鱗紅滴臙脂水。上番寸肉如二寸金一。活潑生レ翼飛入レ市。
潮烹爐炙皆新鮮。戸々鳴レ刀響戛然。始識人間極樂國。在二此海南櫻花天一。
柏如亭蕎麥歌有二在城人間極樂國。口腹何在レ不レ可レ得句一。

海和尚二首

寶珠纏繞紫衣新。怕レ染二腥風漁市塵一。圓頂光寒秋渚月。結跏坐穩縠波春。

八齡龍女曾傳法。千手觀音是後身。水族從來多網死。憑君濟度得淸因。

佛法東來過海隅。鱗中亦見出浮屠。渡頭乘葦神通態。鉢底擎蓮變相軀。

　葛子琴章魚詩有鉢中猶捧玉蓮花句

淺瀬奔時手是脚。晴沙曝處腹爲顱。可憐末路難持戒。又作腥羶上俗廚。

　　曉登象山

及此紅塵未起時。櫻花深處叩僧扉。疎鐘聲洩香雲外。半睡鶯驚帶夢飛。

　　春夜酒醒

起來縞月中。隣樓歌已定。玻璃六尺窓。可數飛花影。

　　觀河中島戰圖二首

銳兵傳令曉無聲。怒氣如雲來壓營。羽扇一麾風颯々。寶刀三擊鐵錚々。

孫呉竝出好儔侶。歡泰相持難弟兄。其奈傍人偸眼視。十年當局枉輸贏。

　前人以高觀字文泰比甲越二公

龍驤虎攫迭爭勳。奇正相當五度軍。快劍斫營如猛雨。大旗渡水拂晨雲。

中原逐鹿落誰手。天下英雄唯使君。百載二流東逝後。請看淸濁自然分。

　　源廷府踰船圖

鐵衣一躍疾於風。驍捷凌波驚海龍。遺恨阿兄腹中劒。乾坤無地避話鋒。

昔人曰賴朝口有蜜腹有劍

常盤雪行圖

如此呱々凍餒何。欲行無路宿無家。豈知孤笠飄蕭雪。他日東風吹作花。

首夏雜詠十首 錄六

昨試生衣殊覺輕。半階殘溜雨初晴。雀搜暗粒籬邊語。蟻舁落花苔上行。
結夏在家如老衲。終年閉戶是先生。又招隣叟賭樽酒。淨綠陰中某一枰。

嫩篁氣淨透簾櫳。人坐香煙茶靄中。久熟妻組諳漢語。新來婢稍慣家風。
晴池洗硯魚身黑。午檻掃花蛛網紅。喃々休談門外事。世間妄想已成空。

春色嗾人秋色悲。一年最好夏初時。茶烹喜撰試清水。豆蒔隱元編短籬。
鬪雀爭妻花外墮。戲魚攜婢藻邊嬉。悠然袖手書窓午。又誦日長山靜詩。

清和時節愛吾廬。臥隱生涯與俗疎。養筍將添千箇竹。鑿渠更蓄百頭魚。
松飜黃霧輕花墜。蕉補綠天新葉舒。此外幽娛只縹帙。隣房昨借舶來書。

一臥安眠情興宜。九旬芳跡漸收時。小盆漣影朱魚樂。滿砌槐陰黃雀嬉。
曬艾午軒妻勸灸。[illegible]茄晚榻婢供㕑。多閑欲創春來稿。手汲苦泉洗硯池。

午倦初消茶一杯。桐陰冷處絶纖埃。詩風或擬范楊陸。書法粗諳蘭竹梅。無力殘花自然落。有時佳客突如來。閑中愛潔稍成癖。洗硯焚香日百回。』

屋島懷古　二首

白旂横江殺氣浮。六龍杳靄海南州。羿弓射落扇頭日。楚炬燒殘宮外秋。黑馬碑荒楓葉隕。黃牛崎古荻花洲。可憐今夜淒涼月。曾照水晶簾内愁。

黃牛崎源軍放牛試水淺深

大炬燒天壓海氛。源廷尉行軍。喜焚民家。呼曰大炬　紅旗畫鷁亂紛々。弓容流去波間月。鏑影分飛浦上雲。南狩到頭魚龍窟。東兒半是豨猪群。用梶原罵廷尉語　夜攻不果千年恨。附與牛郎獨策勳。平能州夜欲襲源軍。有故不果。後人惜之

平家蟹

爪作彈琴態。身猶擁劍名。風流兼勇武。不妨呼姓平。

八幡公

六郡清平前後功。兒童猶識八幡公。兵機夙學龍蛇陣。射力遙凌霹靂弓。雁影横旗寒塞夕。花香撲馬古關風。英雄事業多佳處。一半堪傳彩畫中。

田園雜興二十首　録十七

對門人語隔桃花。相喚時供自在茶。猫嫁東隣牛北舍。一村無處不通家。』

大麥熟時農事多。黃雲幾擔各歸家。籬邊先卜簸舂地。背縛薔薇欲臥花。』

打麥塲乾恰斷梅。扇車軋々漲黃埃。闔家相救無閑手。椎髻村姑扛臼來。』

豆熟青珠脫新莢。茄肥紫玉壓低枝。頭番風味先嘗得。正是城中未賣時。』

夫収牟麥婦移秧。一雨郊村忙更忙。看舍唯留黃髮叟。敗簑手補曬斜陽。』

揷秧時節日方長。隨例茶前休一塲。鑽燧喫煙相笑語。櫈陰半畝午風涼。』

秧事初終聊慰勞。老孃含笑進村醪。馬鮫蠶豆乾蘿蔔。鬆椀盛來凸字高。』

半夏生時暫輟耕。進來湯餅一盤羹。銀紙挑得三千丈。鼓腹便々答太平。』

讀俗半夏必設湯餅

滿村炎氣午難當。待得夜涼人始忙。筧北筧南爭灌水。踏車閃月綠楊塘。』

瓠花籬外夕陽空。織婦下機六如蓬。背上啼兒搖不定。呱々聲咽爨煙中。』

盂蘭盆節夜初涼。村婦還開舞踏塲。一串紅燈不須火。豆花棚外月如霜。』

早稻醴材新釀香。社公壇上鼓鏜々。村姑亦著茜裙艷。去趁塘南傀儡塲。』

人影紛々爭出村。紅燈挾路照黃昏。大巫齊唱小巫舞。神樂塲中簫鼓喧。』

牛市塲開牛影稠。一繩牽到二三頭。牟々鳴散斜陽路。黃犢烏犍斑白犨。』

礑聲碾出殷其雷。玉粒除芒萬斛堆。先將一半輸城裡。不待吏人敲戸來。

霜餘園柿玉方肥。戸々摘來皆剝皮。斜日梢頭無片影。竹弓猶守最高枝。

節近戀公遠忌初。貯花戸々祭浮屠。編茅豫蔽南天燭。不許霜禽啄赤珠。

二月初八與三井雪航遊萬農池

新草池頭轉綠鋪。不須八尺錦〇〇。詩童溫酒巧手段。倩得溪風吹竹爐。

午雨將來山色濛。細漣吹疊半池風。奚奴避溫擇佳處。十畝松陰濃綠中。

溪雲貼地午濛々。九十九溪望欲窮。知是老龍來捲水。滿湖雨氣爽腥風。

題石崎叔山莊

義軒以上高尚。廉讓之間卜居。問奇賓客携酒。閉戸先生讀書

山莊春曉　二首

崇嶺當窓日出遲。半溪曉氣有餘濕。嬌鶯不怕讀書聲。來向海棠花上立。

一簾疎雨曉濛々。林歛曚光未放紅。乍怪鶯聲空際起。杏花隔在宿雲中。

美人風箏　三首

鸞釵風髻好容光。迷得妖童立夕陽。嬌影唯疑作雲去。春心偏易向風狂。

早依青帝得殊寵。殆使素娥爭艷妝。裊々舞衣常怯雨。前身莫是掃晴娘。

亦是東君宮裏姫。飄然現出艷陽時。煙中嬌影返魂術。龍塞美人天上姿。
黛色高浮遠山頂。釵頭誤觸落花枝。琴心搖蕩春風底。一曲繁聲訴向誰。
雲程輕擧踊青春。湘骨剡膚眞絕倫。珠唱巧傳天上曲。繡鞋不踏世間塵。
秦臺彩鳳添佳伴。洛浦驚鴻現後身。只恨情緣難斷得。一生高下任他人。

織田右府像

驅除闘荊棘。叱咤動扶桑。前後絕儔侶。東西誰頡頏。爪牙皆鬼將。奴僕是猿王。覇畧愚隻禿。英才蔑九郎。(用石川丈山翁語)豬山秦火烈。挽日魯戈揚。挫敵萬人砲(長篠)耀威二丈槍。(右府喜用長槍)氣能摧佛力。手己結皇綱。一蹴雄圖欹。千秋遺恨長。

觀場戲作

七孃艷恨千年淚。五俠英風百世芳。一種人間活青史。教伶兒女說興亡。

冬日早起

日烘松葉千釵。霜壓蕉心半扇。窓邊蠅聚摩頭。階下猫蹲洗面。

詠史

怒髮僅衝冠。虎狼便褫魄。堂々七尺軀。即是連城璧。　藺相如

門下三千客。島中五百兵。孰與火牛力。挽回七十城。　田單

冬夜宿山家

凍雲斷續欲埋屋。冷月時篩半擔竹。耳畔何聲來攪眠。夜風吹動乾蘿葛。

綾松山拜崇德帝陵二首　錄一

鑾輅無蹤草色凋。荒陵事々總呼愁。杜鵑默月空山曉。御製有杜鵑詠天狗嘯雲絕

塹秋。兵氣一從萌鳳闕。海氛幾度逆龍舟。水程西接隱岐島。寃魂隨風能

到不。

白牡丹　香浦堂課題

動人國色凜生光。不借燕脂半點香。淡月一庭渾似水。濃薰滿院尚疑霜。

肯將俗艷媚青帝。好把尊稱號素王。夜靜天風搖玉珮。春寒仙骨著霓裳。

麗姿堪入白描法。彩暈高浮牛檻傍。愧蹈尋常姚魏轍。超然別成一家妝。

紫雲英　同上

滿郊靄紫暖於煙。疊々層々遠接連。隨意侵來芳艸隝。分明界破菜花田。

誰捐万斛燕支水。染出一團猩色氈。般血痕沾戰場地。瑞雲光接太平天。

貪香狂蝶心將醉。愛軟眠牛影也妍。最是春人出遊節。紅裙薰徹夕陽邊。

梶原源太箙梅圖

太刀滴レ血灑二梅花一。源太芳名亦可レ嘉。一朶山櫻三弄レ曲。風流未三必屬二平家一。

蓮生倒騎圖

雌雞亂叫勢鴟張。舊主勳勞隨二渺茫一。此際何緣捨レ身去。一生不三復顧二東方一。

財田路上舊作

岳楓疊レ錦旭光清。早有二獵人一乘レ曉行。一砲驅レ猪何處是。嶮岈響作兩邊聲一。

兩崖密樹濕雲橫。腐葉蘩々蘚有レ聲。白日陰沉如二薄暮一。母猴勃卒引レ兒行。

六尺幽崖蹋似レ門。濛々溪氣午猶昏。叢篁乍缺天初豁。柿子如レ花巖上村。

財田歸路貽二梅花雪航翁一附以二一絕一

黃昏隨レ月出二溪濱一。挾レ路梅花白似レ銀。欲下向二高人一分中半賞上。驢鞍馱返一枝春。

宿二會補堂一

遠街人已定。萬籟寂無レ聲。爐火螢三點。茶鐺蟬一鳴。寒梅風處馥。夜竹雪中明。吟榻清難レ寐。話詩坐二五更一。

懷古十六首

一谷

海何腥風吹翠華諸盛衰運附長嗟。三軍下嶺如飛雨。一族漂波皆落花。
笛鵲古城鶯續曲。宮荒寒浦鬼乘車。憑誰爲問水濱事。枯髑無言坐白沙。

鎌倉

巖邑初開新覇基。六十六國手鞭笞。陰謀時問晨鳴牝。英氣曾呑夜泣兒。
巢窟鵲營鳩欲奪。郊原兎盡狗空悲。他年不作自家計。攫取乾坤知爲誰。

其二

百戰山河袖裏還。早將辣手奪兵權。一門勤儉眞良法。九世尊榮豈偶然。
零紙補窓他日戒。殘螢下酒半宵筵。誰居破此舊家格。天狗來歌玉帳前。

芳野

帝室重失舊青氈。大業茫々彈指間。紫極雲遙嘆馬角。蒼梧日落泣龍顏。
運衰天意不南顧。事逝水流猶北還。金殿無蹤春似夢。落花啼鳥古禪關。

湊河

大廈將傾不可支。北風吹折翠楠枝。孤忠千歲英雄恨。殉節一門天地知。
聞說睢陽爲厲鬼。猶欣諸葛有佳兒。煌々大筆嗚呼語。表出東方墮淚碑。

筑後河

七路腥風吹二賊氛一。揮レ戈誰復挽二殘暉一。關西眞箇有二男子一。河北休レ言無二義軍一。
四世鍾來蘇嶽秀。萬蹄蹴破筑江雲。蕭條一草兼二三木一。爭及菊花霜後芬。

室町

寶鼎遷來比二芥塵一。柳營玉帳逼二櫻宸一。耀レ威南北朝初合。極レ侈金銀閣並新。
當日門生二出天子一。到頭國命落二陪臣一。十三血統纔如レ綫。借問盛時領二幾春一。

小田原

蕭條一劔吐二威光一。壯矣東關落魄郎。叱咤生レ風八州震。指揮隨レ意兩杉僵。
蟄龍挾二兩瑞一躍動。飢鼠乘レ時雄氣揚。遺恨傳レ兵不レ得レ德。兒孫唯持小金湯。

北條氏以二龍鱗一爲二旗章一。早雲嘗夢爲レ鼠噛二兩杉樹一仆レ之。

灞城

淵源遠出大江流。分作二兩川一横二十州一。疊陣吾疑璘玠法。佳兒人比策權儔。
奮二戈雲嶺一鹿崩レ角。張二網嚴洲一鯨授レ頭。果識當時慶澤溢。雄藩幾世護二金甌一。

毛利氏喜用二折敷陣一。其法頗似二吳璘疊陣一。

賤嶽

萬炬連レ天夜壓レ營。北人肝膽一時驚。金瓢高揭月中影。鉄棒橫飛風外聲。

憎殺猴奴爲獸計。終敎鬼將失驍名。滿山草樹蒼茫裏。扼腕與誰論此情。

伏　水

金碧焜煌伏水城。一時覇氣似霓横。寶刀西指雞林震。羽檄東飛龍窟驚。
呉沼花殘秋露冷。隋堤柳老暮煙生。可憐歌舞繁華跡。一点殘螢寂不鳴。

淀　城

豐公置妾淺井氏居于此城

淀姫粧閣淀江頭。彷彿漳濱銅雀樓。妲已前身是妖物。徐娘老後尙風流。
雲興大澤龍蛇出。花盡後閣麋鹿遊。憐殺劉翁過豁達。餘香空附辟陽侯。

名　古　耶

彩旌披拂海西雲。壯烈千秋誰繼勳。大膽驚人猿相國。英風入畫鬼將軍。
雙丸血肉俎頭落。八点山河掌上分。陳迹來觀猶扼腕。覇王樹畔立斜曛。

名古耶僧庵有覇王樹高六七尺

又

一輪紅旭夢中明。眞箇扶桑樹下精。禹跡風雲色將變。箕封草木魂先驚。
英雄不喜國王號。兒女猶知太閤名。今日餘威漸消歇。誰追偉績渡蒼瀛。

大　坂

丹樓紫閣浪華城。其奈二雄圖暗裡傾一。秦室北胡非レ貽レ禍。呉宮西子尙傳レ名。
千金孤注輸全了。一割鴻溝和不レ成。唯有繁花典型在一。春街日湧畫橋聲。

關原

帝降二神人一鎭二搏桑一。仁風吹起自二東方一。縱敎三腐艸煽二餘燼一。爭及黃葵擘二大陽一。
興漢劔華三尺許。服周天下二分强。行々漸覺祥煙鬱。昭代開レ基古戰塲。

江都春夜

布帆無レ影夜朦朧。滿渚櫻花微月籠。知道漁人下二春網一。吹螺聲在二淡煙中一。

謝三人惠二虎店饅頭一

虎店名冠二浪速洲一。品々萬顆好饅頭。藍田蒸玉煙猶暖。溫水浴妃膚太柔。
唯道撥皮眞味在。誰知滿腹赤心稠。一盤健啖不レ辭レ賜。我亦當年荒攝州。

梅雨簡レ人

連朝霖雨已梅黃。濕入香煙低不レ颺。睡外絕無二消日計一。世間豈有二補天方一。
塘邊水漲魚棲レ草。屋角苔侵蝸上レ墻。此際故人如レ慰レ我。袖レ文官暇訪二茅堂一。

見二楊梅一有レ感

紅栗一盤呼レ恨生。靈前供得淚縱橫。曾家羊棗屈家芰。始識古人哀痛情。

夏夜訪二梅塢一

欲レ醒二煩惱襟一來問清涼界。銀蟾恰出レ雲。樟影鮮二於畫一。

溽後散步

欲レ夕炎氛盡。未レ秋涼意生。平田涵二鷺影一。一路劃二蛙聲一。秋露明珠走。松煙素練橫。更憐川上月。數里伴レ人行。

夏日訪二癡眠齋一

我家炎天如二火坑一。故尋二禪榻一借二餘清一。林窓呼レ酒鷺來囀。池檻敲レ棊魚不レ驚。修竹簾前翻レ藻影。老松枕上響二笙聲一。胸襟一洗醒二煩惱一。眞是人間極樂城。

中元後一日擧二男兒一喜賦

綉綳光暖滿堂春。風骨溫柔少玉麟。歡極還流一行淚。北堂已沒弄レ孫人。籯理黃金不レ可レ傳。蠹書附レ汝二三編。何當分我秋燈影。夜讀琅々伴二膝邊一。

夜坐同二荒河德卿一賦

風收楊柳猶涼。月到蓮花逾白。清境何無二好詩一。良宵況有二佳客一。

暮秋即事

朝眠又到午前天。露在二蛛絲一顆々圓。知是新寒威力緊。碧花漸縮小二於錢一。

村上彦四郎奪二錦旗一圖

怒髮衝レ天叱二虎狼一。錦旗高揭武僙々。餘威堪レ照千年後。隻手提來日月光。

佐々木四郎騎渡二菟河一圖

鐵轡生レ風電影過。碧蹄蹴レ浪々如レ花。一鞭奮起一門氣。渡水功名屬二乃家一。

承久中信綱渡二菟河一建武中道譽渡二相模川一皆高綱之裔也

鎭西八郎

鐵袖一揮誰敢當。纔伸二猿臂一動二扶桑一。寶刀入レ島鬼驚レ膽（八郎嘗入二鬼島一）高壘摩レ雲雁乱行。（八郎城跡在二肥後一名二回雁峯一）曾聽强弓能覆レ艦。今看大𪉨化爲レ槍。不レ同伯父誇二昇殿一。卓矣鎭西源八郎。

源延尉

電擊風飛快丈夫。彭亭肝膽大二於軀一。射何穿レ札杜元愷。敵殆失レ魂孫伯符。彩鷁作レ風渡二澎湃一。鐵騘化レ鹿下二崎嶇一。恨君全力無レ由レ試。唯嚇平家白面徒。

少松內府

祥麟威風卽英雄。家國安危七尺躬。憐此孤松存二勁節一。不同百卉媚二春風一。仁人臨レ敵猶兼レ勇。孝子事レ君眞是忠。設使二當年能禱一レ壽。艸間埋沒巨頭公。

北條武州

氣度材量能絶レ群。北條九世只推レ君。謙恭當日同二新莽一。慈惠于レ今比二漢文一。尾藤二洲翁曰泰時亦漢文流亞 犯レ闕生擒數天子。過噴蕭拜故將軍。老奸巧有二騙レ人術一。具眼誰分蕕與レ薰。

北畠准后

博洽名聲天下聞。親提二雄劒一叱二風雲一。身漂惶恐灘頭浪 天龍洋 援絶唯陽城裏軍。闕城 青史千秋獲麟筆。丹心一片臥龍文 闕城書世比二之孔明出師表一 扶桑今古眞儒將。唯有二南朝北畠君一。

足利仁山

百敗終開二覇業一新。姦雄氣度亦超倫。朱三殆欲レ作二天子一。賀六從來是惡人。縱有二將才一能將レ將。難レ償臣節不臣々。一時僥倖取二天下一。頑福猶傳十世春。

上杉管領

凜々秋霜滿二鐵衣一。越山氣象自崔巍。世龍磊落嘲二狐媚一。孟德風流賦二鵲飛一。接劔長蛇破二兕膽一。出關群蟻避二餘威一。一枝竹杖若爲レ意。不三向下中原上試二指揮一。

武田機山

新羅後葉果生英。鬱勃豹韜胸裏橫。驍騎皆兼熊虎力。驕兒徒貽犬豚名。
從容臨畝孔明扇。屹立如山孫子旌。請看南人憚餘烈。總將砲柵挫強兵。

織田右府

手掃腥塵七道通。鑾輿初出棘籬中。源平以下無其匹。甲越之徒讓此功。
佛失威虐作灰燼。奴背餘匪尙英雄。白龍魚服招奇禍。志業千秋奈不終。

豐關白

挐鞋手解掣萃佞。獲取蜻蜓六十州。論義鹿園應失面。語功鬼武亦低頭。
紙城白湧千尋壘。席幟紅翻五色旂。好是東方麟閣上。丹青畫此老獮猴。
長孫無忌嘲歐陽詢詩。誰令麟閣上畫此一獮猴。

春曉

奇温曉入碧紬衾。花壓東窓紅霧深。殘夢瞢騰未離枕。春眠一刻亦千金。

春雨

嬌鶯不語寂窓紗。曉枕閑欹[illegible]味加。一綫濕香來壓夢。始知春雨在梅花。

春山

海南風氣自和雍。諸[illegible]絕無危嶮容。誰家粉本能偸樣。濃是青山澹白峯。

青山白峯皆山名。

春水

新水溶々皺碧波。桃花渚外落紅多。一川織出春風錦。中有游魚似擲梭。

春郊

髩影釵光爭賽神。繁華彷彿勢州春。紫雲英外紅塵路。一馬馱行品字人。

夏日雜興

梧竹陰中清晝長。一編手抄養魚方。硯池漸涸無餘瀋。起向蓮花流露香。

湘簾半捲面輕颸。愛此池亭淺夏時。一架藤花低壓水。金魚吹動紫漣漪。

半尺鱸魚好鱠材。浴餘隨例小呼杯。一階殘滴疎々雨。涼自梧桐葉上來。

雨過池欄月色籠。花尖竹末露玲瓏。山妻爲我添清興。放去囊螢點綠叢。

八尺胡床涼思濃。兩僮舁去月明中。芭蕉好意驅蚊子。綠扇搖來送細風。

尋涼飯後步中庭。風度池塘荷氣馨。薄暮雲消天路近。稚兒擧手欲捫星。

書童汲水灌階除。炎氣全消涼有餘。何物靜中生動意。綠叢徐出大蟾蜍。

觀蓮戲作

如是我聞極樂城。池蓮花大似車輪。唯願移之水亭畔。納涼時節載吟人。

燕子花

翩々飛燕綠波中。曾把嬌名動漢宮。一種容花纖艶態。至今裊々畏微風。

塞上詞

鐵衣霜氣凛。大漠夜如煤。胡騎應衝陣。鞭聲渡水來。

大雪埋弓背。寒氷礫馬身。壯士曉踰塞。鐵衣渾作銀。

斬敵如芟草。霜寒十字矛。歸來欲誇衆。笑數血髑髏。

一路血濛々。人頭飛似雨。歸來白月中。馬首穿紅霧。

塞上鼓聲沈。朔風吹裂面。追北晩未還。馬背霜幾寸。

粟津懷古

不恠木曾如鬼神。滿腔盤氣片時伸。英雄麾下無孱卒。嬌艶帳中有美人。隻手倒瓶餘力綽。一鞭擊鼓猛聲振。朝暾消滅踪安在。短夢黃梁津上春。

咏史五首

開口罵龍王。擧上調鬼武。如何一妖狐。魅此英雄主。

纔攘數兩金。去買六十國。直理掌中紋。不知有何力。

牛刀割雞林。馬鞭絕鴨水。遺恨猿面公。不逢鼠瓣子。

筆帶晉人氣。意解漢書辭。誰料英雄漢。也非沒字碑。

香祖筆記云、倭國陪臣書古雅蒼勁、有晉唐風。豐公解漢書、與石勒事相類、見傳疑小史。

大國封功臣。不烹一獵狗。東方猴冠者。勝他龍顏叟。

新秋

渚蓮紅半褪。涼信入池塘。秋立纔三尺。壤蟲聲漸長。

冬曉

風飄脚鴨葉。葉々漲黃雨。拜童欲掃庭。鼓手罵隣樹。

冬夜

急霰如飛礫。一時鳴萬竹。棲禽眠不安。半夜三遷宿。

庚子元日（天保十一年）

熹々嫩旭曉光開。笑向東窓把酒杯。年與吟心一樣改。春隨鳥舌暗中催。
新芽吐綠一般柳。疎蕾綻紅女字梅。懶性不梳還不盥。怕他賀客叩門來。

象山春興

金陵佳麗甲南州。玉浦瓊江遜幾籌。妓帶攝風皆艶冶。山含京樣自温柔。
櫻雲遶寺寺邊寺。松靄籠樓々上樓。好向此中埋醉骨。春魚如錦酒如油。

十二景中三度市。象山堪レ喚小楊州。櫻花滿レ岸燕支水。楊柳連街翡翠樓。春到二名區一殊綺麗。佛開二色界一亦風流。欲レ知這裏絕佳處。宜下向二畵橋西畔一遊上

象山有十二景

佐屋橋曉望

一川曉色漸分明。樓態橋姿面々呈。畵燭影消螢影澹。瑤笙聲斷水聲淸。岸頭翠霧家々柳。塔上紅雲寺々櫻。象嶺三千餘戸裏。何人同レ我此時情。

春日幽居 二首

雨歇桑麻綠。喧和百五辰。垣低花壓レ屋。徑狹艸埋レ人。眠犢不レ離レ野。棲猫昨嫁レ隣。距レ城纔尺五。自在二葛天民一。

三月念一遊二善通寺一二首

海公餘德及二千年一。香火春浮靄々煙。淸淨平時無二熱地一。繁華一日爛二晴天一。花間雜技人呑レ劍。樟外古龕僧募レ錢。好箇東風駘蕩節。半供二行樂一半淸緣。

海師忌日艶陽天。穀雨恰晴郊色鮮。村叟補レ橋春水渡。狙公撾レ鼓夕陽邊。平疇麥疊鱗々浪。遠寺花籠淡々煙。措大吟遊亦豪擧。旗亭笑擲杖頭錢。

草堂小集和二高田澹齋韻一

新綠遶簾櫳。南軒燭可秉。暗風草有香。纖月花無影。客悉擇名流。春猶留艶景。一壺酒未虛。何問夜過丙。

即事示松莊道人

清和時節尚餘春。柔綠陰中留好人。快意近來寧有此。牡丹開日獲紅鱗。

首夏南園

四月景光猶艶。十弓庭圃堪娯。米囊晒日僧頂。麥穗搖風鬼鬚。葉底蜂巢半隱。雨餘蛛網微晞。蕉迎輕暑搖扇。筍候新晴晒衣。

夏日田家

簸舂塲在小庭隅。遺粒纍々如散珠。稚女拾來猶未尽。桑陰濃處喚雞雛。縛取棣棠爲曲笆。垂條拂地乱交加。隣雞求食時鑽隙。攪破黃金万朶花。

蝦夷人圖

大海凌濤驅猛虎。寒巖冒雪捕緋熊。如編此輩入兵籍。也勝崑崙烏鬼僮。

蝨

雖然非利觜。寒夢漫相妨。半夜褌爲室。一生人是糧。鬚邊馴宰相。衣裏逼君王。咄々笠翁句。未傳戮汝方（李笠翁詩云誅蚊利火攻戮蚤宜水戰）

蚤

小蟲有機智。罪冠蚊蝨蠅。噬時如猛虎。飽則似飛鷹。毡上針無迹。股間錐有稜。如何此醜類。不入歐陽憎。

冬日早行

大星爛々照棲鴉。禿樹梢頭煙似紗。路轉橋頭村市近。碓車聲響搾油家。

題自畫竹

矗々百尺竹。寫來逸氣在。誰截爲長竿。釣鯨跨大海。

備後三郎題詩櫻樹圖

唾手夙期奪玉鑾。三郎豪氣塞區寰。當時此策如能就。舟坂何輸舟上山。遺恨丹心爲蕉鹿。鑾旗空迷海雲曲。行宮月黑夜沈々。單身銜暗護黃屋。君不見虎豹縱横遮路時。一鞭趨急知是誰。五字題來眞長城。櫻花未必讓楠枝。

新田左將截箭圖

寶刀鬼可截（左將刀名鬼切）一揮當強敵。々箭何得穿。吾腸是鐵石。

象山竹枝 併引

予往年戲作象山竹枝百餘首。爲友人所慫慂災梨。近日悔之。無可如何。因欲改作以洗前陋。亦未果焉。聊刪潤數首。問之同社云。

半是煙巒半狹邪。有花有柳小繁華。崖頭碧檻歌姬院。樹杪紅欄賣酒家。

山容如象綠陂陀。長鼻彎々擁晚霞。土俗艷傳蕪叟句。一痕新月似磨牙。

蕪村俳句有新月磨牙象首山之句

艷雲挾路萬株櫻。不待曉光山已明。香願女郎皆破卵。花間不斷早鐘聲。

清姬舊跡少人知。櫻樹林邊一片碑。日暮東風花似雪。憶佗鳳閣捲簾時。

秦家兵火燒南國。珠閣香臺殘礎存。當日免災唯此廟。神威高耀二天門。

二天門秦元親所建

佐屋橋頭蘭麝香。迎來送去太忙金。總蓮蹈碎遊人魄。也是吾鄉響屧廊。

祀事例修十月辰。滿街鹵簿漲香塵。騎馬紅裳前導女。翻風素袂上頭人。

祭官有頭人之名。

京妓新來面尙生。南塘笑摘紫雲英。雪纖未慣山途險。呼取小鬟携手行。

釵光閃月々如銀。殘夜水明樓上春。生怕風簾搖不定。糢糊難認意中人。

蘭湯浴罷玉肌薰。畫閣東頭倚夕曛。纖手搖來銀摺扇。涼風一半與郎分。

水閣鉤簾納晚涼。溪風吹散笑聲香。畫檐並掛玻璃盞。活蓄金魚燦有光。

酒散旗亭餘興濃。愛他微雪舞溪風。醉肩扶得過橋去。雨々鴛鴦一傘中。

呑象樓遺稿金集了

呑象樓遺稿石集　自辛丑（天保十二）至甲辰（弘化元）

辛丑元日（天保十二）

茅廬容レ膝縮如レ蝸。二十五年忙裏過。欲レ試二遠遊一猶未レ果。今春亦見故園花。

早春郊行

麥苗抽レ綠雨餘田。一路晴泥牛跡圓。行覺春風吹已遍。阿波山雪半爲レ煙。

十宮詞（錄二）

幾顆蟠桃進二玉杯一。瑞煙圍繞集二靈臺一。聖朝無事諫書斷。唯有二青禽傳レ信來一。漢宮

綵輿昨日舁二豬龍一。笑語聲香滿二六宮一。恨殺海棠眠未レ足。漁陽鼙鼓鬧二春風一。唐宮

春郊醉歸

游袂翩々帶二酒痕一。醉入歸處恰黄昏。不レ妨春馬行殊緩。月澹櫻花香裏村。

春晚郊游

一雨郊郵新綠肥。風光促レ我曳二笻枝一。水田科斗尾初縮。煙塢緜蠻語尚嬉。

油菜花黄罨壟面。麥麰穗亦夜叉毿。行々殊覺情懷好。正是夏頭春末時。

夜登象山

石壓人頭勢欲傾。滿山靈氣不堪清。夜深天狗來休翼。十丈老杉搖有聲。

彌谷寺

寺在崖頭絶點塵。虛嵐空翠滴衣巾。誰將俗手涴山水。劉取奇巖作佛身。』
嶺風吹髮快將仙。翠壁寒生六月天。老鷲一聲何處所。黑雲低壓大杉巓。

宿長壽院

雨氣暗虛廊。楓棕皆鬼立。佛燈明滅中。臥讀昌黎集。

晩浦所見

一鷁掠水過。浦樹夜雲擁。賈舶大於山。危檣月中聳。

江村秋日雜興九首

村在荻花楓葉中。壚田漁市路斜通。歸牛觳觫渡寒渚。立鷺褷襹臨晩風。
薄霧横江遠帆黑。殘霞燒嶺暮松紅。此郷如許閑人住。欲把生涯付釣篷。』
雁齒橋西漁巷秋。殘霞紅艶豁吟眸。惟巖是鬼嗔張臂。寒鷺如人立縮頭。
老媼救忙時扳網。孤僧求渡晩呼舟。歸來欲借磬叟具。明日牢晴宜釣遊。』
野店西風颭酒旗。招々引我碧江湄。敗罾護果夕陽外。老柳繫橋秋漲時。
曬翼赤蜓眠暖渚。凝眸翠鳥俯寒漪。棹歌蔆唱皆娛耳。何恨漁翁不解詩。』

趙甌北詩云一天明月秋江上只恨漁翁不レ解レ詩。

緩步當車也自佳。鮮明秋景襯二殘霞一。渚田十里鹽爲レ税。漁戶一生舟作レ家。
疎柳橋頭人在レ畫。白蘆洲畔雁棲レ花。咏歸隨レ例又成レ夜。半尺潮痕已上レ沙。」
敗蘚疎籬斷又連。江干秋景總堪レ憐。拂レ波潭竹彎斜浴。援レ石崖松猿倒懸。
釣笠戴歸前浦雨。商帆排出曲灣煙。又呼二隣叟一謀二微飲一。晚網雜魚幽味鮮。」
閑向二林塘一賞二晚晴一。半灣鏡水碧晶々。翠禽飛去煙無レ迹。赤蟹驚奔沙有レ聲。
宜レ月峰巒皆不レ俗。媚レ秋花草似レ含レ情。意行又踐昨來路。慣見漁童悉識レ名。」
沙外斜陽杖影長。蘆花蓼穗艷二秋光一。掠レ波白鷺一雙雪。上レ網碧鱸三尺霜。
遠樹深埋漁巷火。夜山低壓賈船檣。歸途別有二欣然處一。待レ我詩僮辨二晚觴一。」
暮天雲盡江山綠。蓼渚蘋汀爽可レ掬。老蟹深藏作花家。宿鷗閑眠沙爲レ褥。
漁人炊飯夕陽灣。海賈烘レ船秋水曲。滿目風光皆是詩。吟毫一々難二收錄一。」
漁笛吹殘暝色生。秋光冷澹有二餘清一。鷺禽出レ柳々邊沒。遠火蘸レ波々底行。
鹵婦汲レ潮和二月影一。蕘童擔レ草帶二蟲聲一。歸來誇說吟詩侶。得意一聯途上成。」

江郁秋事九首

漁市散時林日傾。醒痕猶在蓼花坪。女郎忙戴二筠籃一去。頭上鮮鱗跳有レ聲。」

疊々潮痕界白沙。水萍亂發錦交加。漁童歸去秋汀寂。老蟹蹣跚綴出花。

觀音菊簇釣魚磯。雨後柔姿俯碧漪。血色蜻蜓來小立。濕翎壓動一枝々。

潮落秋灘石露拳。沙頭閑坐夕陽船。歸牛不待牧童導。自渡蘆花淺水邊。

渡頭艤艇待潮生。楓頂殘霞照岸明。淺渚無波清徹底。臥看螺蛤水中行。

蘆花洲渚夜依稀。蟹火半消新月微。一尺潮痕掠來路。漁娃相喚揭裳歸。

沙汀扳細欲斜陽。戸々青裙來救忙。漁利相分人四散。芦花洲外笑聲香。

湖光明麗夕陽啣。倒影丹楓雜碧杉。待夜漁舟閑不動。竿頭晒網恰如帆。

平沙潤處白於霜。即是漁童遊戲場。毿々鬅髮搖風去。攪破蘆花半渚香。

魚歌子二闋傚張子和

白石敲光燃荻蘆。漁舟晚爨夕陽初。碧鱸美。紅蟹腴。數口家糧半是魚。

蔑視人間万戸侯。一竿能作一生謀。紅蓼岸。白芦洲。我家亦領小金甌。

松尾橋居雜述九首

暫住象頭山下村。未全寂寞未全喧。結隣翁贈牆頭酒　求債人敲月下門。

雪壓虬髯枝半裂。風吹鴨脚葉皆飜。鵲巣聊卜安身計。肯與時髦作競奔。

竹徑梅坪淨掃塵。新居恰好待新春。酒謀諸婦娛良夜。醯乞其隣膾細鱗。

窮鬼來爲不速客。方兄豈是久留賓。喜吾薄福媒清福。暫作煙霞假主人。

竹欄杉柱小茅廬。容此吟身猶有餘。佳友難於求古畫。好山宛似閲奇書。
莵茶試水開爐日。濃紙糊窓掃室初。方位吉凶渾不問。松蘿近處好移居。

僦宅何妨接狹邪。離門纔出即煙霞。借畦先種懶人菜。鑿沼將栽君子花。
巷似蟻珠爲九曲。水如燕尾作雙叉。晩來別有便宜事。一叫聲通賣浴家。

欲策羸驂向洛陽。飄然僦宅象山傍。楓埋筧水全無響。松洩市燈微有光。
飢鹿呼妻幽澗雪。驚尨吠月滿郵霜。灰色已懺豪華夢。一串黎祈時擧觴。

今秋將隨島椋軒遊京師。有故不果。

不向蹄塵滾々間。兀然坐守小柴關。寒村頗有到臍酒。勝地豈無埋骨山。
林栗毬肥孿兒孕。池荷柄折半身彎。此郷風景如斯好。恨沒詩人似我閑。

西抹東塗居屢遷。剩來舊物只青氈。縛籬僵菊花初起。試藥枯松病漸痊。
石出荒蕪熊欲躍。山臨軒戸象如眠。貧中亦作煖房計。笑借妻君私蓄錢。

醬酢爐瓮洗客囊。新居百事太紛忙。廬纔容膝貧彭澤。門尚留賓小孟嘗。
二頃田園蠶食葉。一車家具鼠搬糧。誰言我室如懸磬。剩得床頭書十箱。

廉讓中間好卜居。雖然湫隘脚堪舒。雪聲滿巷客携酒。梅影半簾兒讀書。

大丈夫何掃一室。老先生果愛吾廬。吟餘想到濟貧法。隙地鋤來種雜蔬。

冬初出村

峭颯疎柳未全枯。怪底風力如刺膚。昨夜麻山微有雪。章魚崖上白糢糊。

除日探梅

爲畏夜叉敲戸來。前溪去探雪中梅。半巖疎影橫斜處。即是閑人避債臺。

咏物十八首會輔堂課題

樹影

一簾嫩旭雨初晴。何物使簷縱又橫。層疊雲谷搖不定。婆娑風態碎還生。
階前隨箒掃難掃。池底曳罾魚欲驚。恰是書窓新換紙。描成濃淡自分明。

落花

寶鈴響斷寂簾櫳。樹々繁華夢一空。春冷連朝深院雨。人愁三面小樓風。
餘香纔在馬蹄外。殘粉已埋魚腹中。果爾紅顏皆命薄。飃零半夜散西東。

鶴骨笛

衛軒辭去不求榮。身後宮商骨亦清。驚露一腔寒送響。聞天三弄遠飛聲。
依稀赤壁月中管。髣髴緱山雲外笙。莫向孤山尋舊侶。曲中恐有落梅名。

牡丹餅

温柔美味也堪誇。先覺春韶到齒牙。豈艶宛同嬌女臉。風流不屬酒徒家。誰將天上團圓月。化作人間富貴花。豈許芳宜爭品格。餅中第一好容華。

餅一種有呼芳宜者芳宜即胡枝之和名也

西瓜燈籠

誰修明月學吳剛。刳盡團々綠玉房。新竅曾聞鑿渾沌。餘炎今見屬燉煌。只疑青鬼口吹焔。不識蒼龍卵有光。附與嬌兒好娛目。祭星棚上晚風涼。

菊船

縛取秋英幾種芳。畫船飾就竹籬傍。艶葩層疊錦帆覆。依稀影幽蘭棹香。弔屈楚江堪競渡。載陶彭澤好輕颺。新寒晚夜殊關意。欲掩短篷防冷霜。

紙糊虎

南山遺種助娛嬉。白額黃毛貌得奇。市上三傳非妄語。坐隅獨立尚雄姿。幾回搖首爲狼顧。末路殘軀被鼠欺。凜々威稜磨不盡。有事一嚇禁啼兒。

吹火筒

虛心直節本淸癯。何事飄然熱處趨。幾度濟民將爛額。半生媚竈殆焚軀。

煮茶花外春風榻。温酒雪中寒夜爐。和氣一團吹不斷。貧居豈可此君無。

煙管

竹身金口製何奇。狎得閑人不暫離。恰好擊壺歌老驥。也同服氣學靈龜。
半窓春雨酒醒處。一穗秋燈棋散時。且向吟邊作清骯。氛氳吹出腹中詩。

雪達磨

玉毫銀鉢絶纖瑕。端相凝然座結跏。黄面瞿曇應別種。白衣大士定隣家。
清姿恰映眞如月。微笑猶拈頃刻花。始信本來無一物。火輪纔轉不留些。

還俗尼

紫裟換得綉衣裳。始識温柔別有鄕。菩薩眉存舊時相。鴛鴦夢占上番芳。
滴花楊柳一枝水。洗出蓮花半靨妝。彷彿心經猶記得。開籠時放雪衣娘。

土筆菜

草間亦出管城侯。一寸絲毫心自柔。沙外臨池搖嫩穎。燒痕含墨染尖頭。
催成靈雲夢中句。寫出王孫別後愁。更學連緜草書法。游絲牽處幾莖抽。

秧針

出水新芒各並鋒。輕柔繞指不勝風。一川尖影立錐地。三寸纖心補世功。

鷺頂穿絲疎雨外。波間刺穀夕陽中。梅天五月日長節。好債村姑試女工。

冷豆腐

軟肌新浴白晶々。冷透窗根瓊液生。水味十年交我淡。氷心一片愛他清。
用銀作塊何論價。切玉如泥不聽聲。鱗脯鸞胎難比處。花晨破卵洗春酲。

醂柿

虬卵鸞胎未作奇。晨厨蒸出淡紅肌。寶珠顆々來登掌。甘露津々已潤脾。
好向酣筵消酒渴。如逢儉歳濟民飢。人工有勝天工處。不待梢頭爛熟時。

愁陣

魔軍俄起出奇兵。奮取酒權圍乍成。鬢畔頻侵無剩地。眉間時結築堅城。
春靜枕頭和雨至。秋寒蓬底共潮生。更有火攻非下策。靑燈吐焰夜三更。

書中乾胡蝶

不學人間輕薄郎。藝園深處去潛藏。身粘竹簡名何朽。粉點葩經夢也香。
映雪窓邊逾皎潔。晒風架上欲飛揚。長將遺蛻托文字。知汝前身姓是莊。

菊花煙

節過重陽也不妨。落英拾得殆盈囊。陶家添醉味非酒。楚客返魂煙有香。

銀管輕吹暗二麝氣一。金絲猶奪新鶯裳。老禪漫說六辛偈、知否人間一種芳。

黃蘗隱元惡二煙草一偈云當年鹿苑生二此艸一不レ說二五辛一說二六辛一

重三前一日同二雪航翁一遊二桃山一

滿郁暖氣煽二芳塵一。舞蝶歌鶯各媚レ人。此際出遊何可レ緩。櫻花正及九分春一

憶昔豪華不レ讓レ人。綠樽紅妓醉二芳辰一。重來應レ被二桃花笑一、不二復劉郎前度春一。

答三人問二象山一

人稱二大蘭若一。我喚二小揚州一。佛力能爲レ富、春風不レ帶レ愁。繁光園妓院一。花氣壓二僧樓一。橋態如二刀鞘一。山容是象頭。三千屋齊整。十二景清幽。只恨繁華地。由來之二消流一。

送二德卿之一レ京

龍蟠虎踞帝王都。佳麗山河天下無。翠風東連卅六嶺。艷櫻西簇十万株。文人才士萃二其中一。家々植レ幟張雄譽一。譬猶二英雄割據日一。阿吉阿藤開二覇圖一。聞君觀光遊二彼地一。吾設二餞筵一綏二征轡一。春酒瀲々拍餞船。醉吐二豪語一君須レ記。都下弊風稍入レ時。詩喜二新麗一書嫵媚。或欺二衆盲一賣二虛名一。或學二賈豎一射二小利一。君也我黨一奇士。胸中武庫戈戟備。如與二此曹一爭二才鋒一。各自偃レ旗皆逃避。

君不レ聞甲越二公出ニ邊陲一。壓倒京華皮履兒。

徳卿將レ辭ニ草堂一賦示

濕絮飛花婁ニ尾春一。杜鵑聲裡雨如レ塵。閑愁直覺難ニ消得一。況又朝來別ニ故人一。

夏日早起

睡婢鼾々夢未レ回。幽人早起戸先推。蘿陰帶ニ夜蟾光一冷。階下呼レ秋蟲語哀。始綻池蓮花有レ響。纔抽園筍首方擡。南軒袖手悠然坐。新句飛從ニ天外一來。

午睡清泉翁宅席上課題

靜窓淨几殊宜レ睡。穩臥鼾々呼不レ起。妄想時乘鼠穴車。奇榮何慕槐陰蟻。三杯緑酒媒初成。半熟黃粱味正美。第一人間安樂方。算來在ニ此曲肱裏一。

螢二首

夜階雨初歇。冷氣溢ニ窓戸一。螢火大如レ燐。庭竹影可レ數。

昨夜放ニ嚢螢一。一半踰レ牆去。愛見二三星。未レ離ニ幽竹處一。

秋夜遊ニ僧舍一

淺光林影遶ニ簾櫳一。人坐沉々蓮漏中。呈レ佛詩宜レ極ニ彫琢一。對レ僧談或入ニ虛空一。松釵籠夜篩ニ千月一。蕉扇經レ秋減ニ半風一。最喜廚童殊愛レ客。一爐芋火煮ニ雙弓一。

園中雜咏

老蔓垂々莢正肥。誰將碧稍掛疎籬。私風吹動牛刀影。欲割雞冠花一枝。
刀豆

雞冠花立短籬東。丹頂翠翰搖曉風。誰爲渠儂補其尾。傍邊種得雁來紅。
雞冠花

不畏炎威唯此花。昂然高發壓羣葩。滿身緋甲爛如火。想見東軍赤夜叉。
鬼百合

咏史

七日誇榮亦等閑。逐君一計豈非姦。浮雲翳盡華山月。不許清光洩世間。

自龜城歸路上

除晴不定氣蕭條。簑袂風吟十里郊。人正奔時雨尙逐。日將漏處雲還包。
枯蘆淺水歸牛路。禿樹荒祠老鶴巢。欲把微醺煖吟骨。一旗酒影小園茅。

雪夜

積雪時々崩。竹身起又伏。驚禽乍一鳴。未曉出深綠。

題畫二十首

櫻渚花如雨。灣々紅錦鋪。何處飮吾馬。春波寸碧無。』

崖樹雨濛々。奔湍水聲悍。橋上一僧歸。猛風欲奪傘。」
小閣低臨水。新波與檻齊。翠禽看不見。聲在藕花西。」
江樓晚捲幔。人在畫圖間。晴帆凝不動。妝點夕陽山。」
鷗邊波始定。柳上雨將晴。春渚蒼茫處。一帆排霧行。」
綠蕉掩洞門。翠竹鎖巖閣。採藥人未歸。看舍唯一鶴。」
巖窓讀古書。十日不開戶。睡鶴倦飜身。松花漲金雨。」
倚樓看夕陽。煙嶂見還隱。愛箇賣魚舟。歸帆次第近。」
秋巒劚茯苓。不覺斜陽暮。歸樵未渡橋。半澗已成雨。」
清泉日漱口。不讀近人書。昨夢伏羲氏。來談大古初。」
卸碇蘆花渚。々邊斜日初。沙禽來慣我。欲攫網中魚。」
千騎万乘主。不免塵緣纏。何如簑笠翁。醉釣寒江雪。」
釣罷滿簑雪。夜溪人影明。思酒俄回棹。輕氷碎有聲。」
漁竿生計安。不釣名兼利。扁舟一葉中。載得別天地。」
飛泉屋頂懸。濕霧濕清晝。客來時凭欄。水語與人鬪。」
霜後秋山瘦。歸樵語亦寒。擔薪半楓葉。一路夕陽丹。」

雨點大如拳。餘威震溪樹。欲赴溪僧招。橋危不可渡。
簑袂凍如戟。寒魚不上釣。前灣將避雪。僵竹礙吾舟。
種梅無隙地。香雪欲埋家。主人清徹骨。幽夢不離花。

夜過佐屋橋

粉香黛氣夜初收。佐屋橋頭水靄浮。西畔紅燈東畔月。一川劃斷雨般秋。

寄德卿々々時在隱島

秋老長天雁影疎。十年心事一封書。不知何日君邊達。路隔雲濤万里餘。

秋夕書懷

一臥寒窓百事慵。鏡塵偶拭奈衰容。新愁白髮三千丈。舊夢青樓十二重。
蟋蟀聲圓秋欲老。梧桐葉脫露初濃。栗兄不返松翁去。此際向誰披我胸。

過善通寺塔趾有作

南地大刹善通寺。五層危塔凌雲起。一朝火龍自天降。佛也雖靈亦已矣。
普賢乘象先逃奔。觀音持瓶徒坐視。諸佛爛額或焦頭。不洒一滴楊柳水。
可憐蓮花々上身。一時墮落火坑裏。殘僧說之眉尚蹙。且謀再搆募緣頻。
我來一笑吐讕語。任佗羅漢攘臂嗔。汝不聞千手之手六臂之臂。猶不能

庇一身。何遑能恤世間億萬人

基山寺所見

芋葉埋村綠作圍。炊煙懨㦬両三扉。斜陽市散棊山寺。一路人沽農器歸

基山寺外野川隅。一帶寒沙水欲無。無隙村人亦惡戲。枯蘆深處大呼盧。

望藤目城跡（在西讃粟井村）

唯道讃人皆怯懦。驍將有此好男兒。輸攻墨守百年後。土俗猶傳硬飯辭。

（土軍攻藤目見其城小笑曰是我茶子耳城將新目彈正驍武拒戰土軍死傷頗多時人語曰硬飯茶子蓋茶子點心也硬飯可畏也皆邦音相通）

讀中村宗卜傳

宗卜東讃人也天正中據八栗山城會土州人來襲時城中兵寡乃誘敵於險地大破之既而與衆謀曰大軍繼至險不足恃宜姑避之也即夜航海遁備前路上有杜鵑之咏膾炙人口亂定後還國隱居終身云

飛砲轟天鏖万兵。察機半夜出孤城。一鞭躍馬關何事。欲逐杜鵑雲外聲。

追悼南里先生（天保十三年頃作）

文星光滅海南秋。幾度思君双涙流。人品清高陶栗里。詩風澹沖韋蘇州。

在官猶抱巖居志。脱俗未忘天下憂。可惜遺篇捐不刻。精神一片篋中留。

赤關竹枝六首（弘化元年頃作）

妃嬪一去恨無涯。遺種何年落狹邪。剩得宮妝舊時樣。倡條冶葉別成家。』
月氣籠燈絲柳灣。萬檣矗々聳如山。箇々蓬窓皆着妓。三絃聲度水煙間。』
港口商船百尺檣。帆紋彷彿映斜陽。瓜皮一葉來相賀。中載紅裙好女郎。』
雙珠島外早涼饒。一串銀燈照暮潮。小女慣舟無怯態。玉纖戲蕩木蘭橈。』
狐王廟下正梅霖。港口連檣簇似林。郎禱新晴儂禱雨。鴛衾一夜兩般心。』
朝來惜別淚痕流。一片春帆萬斛愁。却羨江心裙帶菜。送郎綣々不離舟。

壇浦懷古二首

萬馬東來殺氣凶。京軍此地折兵鋒。沙間猶怒雙蝥蟹。波底空沈八歲龍。
玉樹歌殘花有恨。錦帆舟去柳無蹤。憑誰爲問水濱事。古寺秋風吹暮松。』
赤幟光消壇浦東。空將遺跡附漁翁。盛事誰解倒瓶子。末葉人傳出傘工。
千古流芳幾風雅。一門殉節自英雄。冬青樹下來揮淚。斷碣秋寒古梵宮。

筑州路上

野雲埋火曉依微。破驛荒亭斷續雞。知是平生行客少。也無一馬借人騎。』
崖上人家石作垣。斜陽晒紙一村々。田塍十里無他樹。烏桕林連楮穀園。

平岡淺轍綠坡陀。想見薩兵蹂躙過。叢祠燼後無人理。榊樹陰中殘礎多。
剖葦聲中晚靄浮。行人呼渡野川頭。僻村婦女可憐態。背縛嬰兒操小舟。

筥崎

十里松林瑞靄籠。廟門高聳勢穹窿。畫旗影射玄苑外。金榜光飛碧落中。
一自神威掃妖祲。于今忠將禱靈風。近來蒙虜稍猖獗。豪氣誰追伏敵功。

博多

覇家臺下織機業。維昔吳娃教得成。遺法千年續如綫。家々不斷擲梭聲。

海中道

左右蒼潤大月瀛。天橋雖好恐難兄。遊人不踏松間路。別擇沙汀佳處行。

路上所見

路傍有古樟。腹穿一丈強。村人藏其竅。時開樗蒲場。

謁菅公廟

凌雲有翼列三台。遺恨丹心遂作灰。天上仙才早攀桂。人間芳跡有飛梅。
德輝高照西都月。寃語空傳北闕雷。昔屈今伸道長在。廟門金碧映霞開。

筑北雜詩三首

國古民風淳美。驛荒景色蕭疎。山佃燒石如炭。村婦烹雞代蔬。」
崖路高底亂嶂。人家慘羅塞煙。婦自隨夫荷簣。馬能代犢犂田。』
柏樹陰中老屋。槿花籬外荒驛。野祠半祭天神。溪女時嫁河伯。筑州多水虎

宿筒井村

夜雲纍々壓檐低。屋背叢篁雨氣淒。燈火漸昏人未寐。妖禽來學小兒啼。

筑南雨霽

新水拖藍溢野川。高良山下雨餘天。荷香挾路蛙聲馥。蘭葉含風鷺影妍。

柳川城

河水滔々遶粉牆。樹梢樹尾聳斜陽。驍雄曩祖遺風在。巨礮雷轟演武場。

肥後路上雜詩五首

行覺入肥界。民風稍帶豪。薯圃麻畦外。有人攜竹刀。』
瓜蔓燉煌種。薯苗流鬼名。崖腹皆園圃。耕牛雲外鳴。」
蒼崖疊似屏。人有澹雲中。崖缺天初豁。熊城嵌碧空。」
金湯百雉城。藤氏手經營。門傳高麗物。街喚蔚山名。』

又

籃輿搖夢路高低。巒氣濛々人欲迷。夏日山中不知暑。十圍杉外老鶯啼。』
橫巒繞逕倒峰迎。身在雲間十日程。杖底翠瀾山万疊。恨無海馬負人行。
黃山之人能負客遊山號曰海馬見袁倉山詩

謁加藤公廟

於菟眞英物。夜叉最上官。一槍開七道。孤壘聳三韓。敵避岳爺陣。民祈關帝壇。威稜猶凜々。仰止膽將寒。

東肥山中

誰鑿層崖役五丁。羊腸一路遶崢嶸。雲埋老樹鵑聲冷。露濕蒼苔熊跡明。嶺上村如天上住。峽中人似甕中行。更愁山酒皆甜赤。一盞無由慰旅情。』
挿天澹翠幾嶙峋。嵐氣時遮前後人。百尺層崖臨鳥背。千年老樹蔽牛身。梯田鳴破驚溪鹿。民舍敲殘驅疫神。僻境却欣風俗美。村々無處不朱陳。

舟抵島原

濤原海城曲。小嶼斷又續。奇形九十九。一々駭人目。並者學先兒。單者獨眠犢。或凹如臼立。或圓如釜覆。渴黿怒擧頭。奇鬼跳欹足。綵屏繚而屈。雄劍尖以矗。巖出骨全癯。樹枯皮自剝。如非愚公移。定是共工觸。舟行遶

其間一。天然橫披幅。安得二挾山力一。把レ之袖中縮。維昔琉黃氣。噴出溫仙嶽。崩沙如二木葉一。飛來此攢簇。我來風波穩。奇景恣二遊矚一。作レ詩代二紀文一。一揮筆欲レ禿。

島原舟中遇風雨

乘レ舟莫レ乘二小漁舟一。衝レ雨莫レ衝二大洋雨一。漁家小舟易二蕩搖一。洋中大雨無邊處。我赴二瓊津一貪二路程一。舴艋借レ便島原浦。纔離二岸頭一天色濛。玄雲澎湃沒二島嶼一。須臾急雨東南來。獰飈挾レ之勢如レ虎。銀濤百尺天半崩。三尺短篷不レ可レ禦。鰲身出沒鯨口呿。百怪相聚各嗔怒。危哉身在二人鬼間一。性命纖々髮一縷。舟師欲二以レ功償一レ罪。雙手握レ汗搖二急艫一。辛苦漸達二諫早磯一。急投二茅廬一不レ擇レ主。滹沱麥飯價千金。放箸一空充二飢肚一。驚魂漸定賀二再生一。人々面色猶如レ土。嗟吾家居飽食而暖衣。平生不レ知此艱苦。始悟古諺殊有レ理。敎二導驕兒一是行旅。

路上所見

餅店蕭條煙似レ絲。棕櫚葉暗夕陽籬。行々漸覺民風異。老媼五十猶畫眉。

長崎竹枝十五首

峯巒三面綠成レ圍。万瓦鱗々枕二大碕一。一望先知蠻客舘。竿頭高聳相風旗。」

柳鞢花般樂事饒。此中養得幾嬌嬈。珠簾光映瓊瑤浦。沉麝煙籠瑷瑇橋。』
京華嬌女浪華樓。此地何曾讓一籌。請看纖艶數株柳。繫住東呉万里舟。』
十里珠簾二分月。瓊江何處不風流。最是花樓黄鶴枕。引入春夢上楊州。』
花月樓鶴枕云是唐代物
港口蘭船高似城。砲聲漸定沸人聲。海奴裸體黒於漆。百尺檣頭自在行。』
鑼鼓聲囂呉客船。一齊上岸賀安全。瓊山山畔天妃廟。血色絨旗閃半天。』
水晶燈底褥毛氈。碧顔紫髯皆酔顔。小女能諳呉下曲。歌喉宛轉九連環。』
半臉桃霞酔後妝。氍毹氈上待呉郎。嬌來又作猜三戯。笑賭銀杯戰一場。』
猜三拳邦人所謂南無古
浴後忽々整晩妝。輕衫來赴納涼場。鬢邊茉莉花千朶。蓮花移時搖有香。』
扇洲樓是水晶宮。四面軒窓不斷風。酔妓愛涼臨檻首。金釵影閃翠漣中。』
荷蘭館外夕陽空。一碧水天油畫中。釵頭閃動銀瓔珞。人坐船窓十面風。』
氈帳春深香霧浮。髯奴亦自識風流。嬌花相對不解語。一夜蘭房小啞遊。』
啞遊見洋書
欲學胡音猶未成。櫻唇纔了倚瓊饒。生憎六尺玻瓈鏡。不照吾儂胸裡情。』
蘭館嵌一大鏡長凡六尺

夜宴酣時開劇場。多才解事紫髯郎。西廂水滸嫌陳腐。打扮新呈日本粧。』
蠻花影疊碧欄干。玉漏聲中春院閑。香夢沈酣無氣力。倩他鸚鵡喚了鬟。

福濟寺

松蘿掩映翠嵐浮。寺在蜻蜓欲盡頭。縹渺長天渾是水。淸凉盛夏宛如秋。
閃雲碧瓦連蠻館。臨海朱欄疑蜃樓。老衲能諳吳越事。塵談半日使人留。

英吉利詞六首

英吉利西歐一大島也。自近代犯支那邊疆威名大顯。一日崎人爲予詳說其風俗。因戲作十二絕句以廣異聞云。

斗絕巖礁萬載橫。嚴疆彷彿大東瀛。列翁倒海翻山勢。不向此州加寸兵。』
紅裙跨馬武儀々。英國英雄是女王。六十二侯朝覲日。掌心一指拜餘香。』
覽勢穹窿橫碧空。快帆影在白雲中。漢人至竟功思乏。開鑿唯誇神禹巧。』
百丈長橋五萬燈。龍都佳麗實堪矜。厚顏佛國胡爲者。艷說高樓六七層。』
壯觀想見實斯臺。々畔遊春亦壯哉。千輛車乘猶未足。幾人徒步入城來。』
罌粟製成鴉片煙。喫來愉快使人眠。詎圖餘燼化烽火。熏殺支那半壁天。

劉鳳姑（見乍浦集咏）

海氛壓城日無光。白鬼黑鬼來跳梁。夫失其婦々失子。號泣聲咽破煙裏。
就中可憐劉鳳姑。嬌心知義勝丈夫。井華洗出氷霜節。不受羶風涴玉膚。
君不見堂々四百餘州主。却忍大耻敗醜虜。

望飛鸞島憶鄭延平

大東秀氣出英雄。双劒撑天氣吐虹。世傑曾携趙家肉。田横敢出漢王風。
一門忠義衰朝裏。半壁山河孤島中。今日望君桑梓地。瘦肩猶覺聳秋風。

旅夕思鄉

客窓顧影耿難眠。露宿風餐已半年。呼子浦頭人尚滯。望夫山下月將圓。
病軀落托九州地。故國荒蕪二頃田。家有孫丁齡甫七。宵々對母定蕭然。

登名古邪城墟望朝鮮歌

南戈山頭豐公營。裂眦西北唯蒼溟。云是朝鮮釜山浦。似雲非雲一點青。
想見大兵飛渡水。彩帆截風連千里。歷々赤國與青國。渾墮英雄目睹中。
荒煙落日蒼茫色。獨立弔古長大息。直欲裂褭凌森漫。恨吾腋下不生翼。
豐公以朝鮮地圖分繪八色故有青國赤國之稱云

彼杵曉發

東烏未翥曉蒼然。巖樹陰森綠插天。破驛燈殘鬼將出。古關人少吏猶眠。
荒雞啼落孤村月。羸馬踏過層嶺煙。病骨不宜嵐氣冷。强賒赤酒緩征鞭。

宿山驛

旅飯支飢骨董羹。破村投宿若爲情。枕頭穢氣馬牛睡。窓外暗聲麋鹿行。
瘴癘鄉中秋早到。蓬蒿叢裏夜難明。繙囊照撿征途稿。一椀松肪照五更。

舟泊赤馬關下

赤馬關頭海雨晴。滿衫潮氣有餘清。漁人篝火遙々影。商婦琵琶細々聲。
藻浦遠程雲萬里。蓬窓殘夢月三更。無端想起前朝事。攪破愁眠一夜情。

舟中襍咏十一首

赤馬關東雨氣腥。漁燈焰死影微明。窺人水鬼夜深出。滿岸青蘆颼有聲。
豐嶺周山望裏遷。孕風帆腹勢彎々。爨奴淅米下關水。未一炊間抵上關。
日落空洋水渺茫。半帆冷月夜蒼々。那邊知有天魚躍。波上渦紋十丈强。
抱膝長吟午飯餘。滿蓬殘雨滴聲疎。舟師娛我供奇味。手膾鰕夷乾鰍魚。
水氣濛々入曉蓬。東霞未曳半紅裙。枕頭殘夢搖難定。知是片帆橫受風。
蓬窓數尺乾坤窄。烏帽紅裙皆瑟縮。側身時出少年膝。伸脚頻加故人腹。

弓臥艙間困日長。駒々唯入黑甜鄉。傍人畫紙爲棋局。勝敗消閒戰一場。」

小嶼投碇纖月顏。浦雲汀樹夜如煤。舟師先說人家近。一隻飢蚊渡水來。」

海日熹微宿霧收。峯巒面々立抽頭。篙人指點山陽勝。虹戶猫門雙鷺洲。」

落帆舟人豫山隈。枕上驚濤響作雷。云是大洋風意惡。一條黑氣趁人來。」

水路悠々千里間。布帆無恙達鄉關。蓬窓一望消吾渴。紫艷光浮飯顆山。

呑象樓遺稿石集 了

呑象樓遺稿絲集　乙巳（弘化二）至辛亥（嘉永四）

讃岐　日柳章士煥著
男　愬終吉輯

柳東軒雜咏

巷如螺殼旋而曲。路似蛛絲直又斜。載酒詩人來相問。絲楊東畔是吾家。

北壁穿開引午凉。々邊可以倣羲皇。窓前更種梧桐樹。欲凝朝陽與夕陽。

竹譜花經書幾帙。開來時學郭駝術。此際閑人閑課多。朝驅菊虎夕蘭蝨。

菊苗一寸絲心萌。移去朝來乘雨晴。猩亦鶯黃皆異種。小牌一々記花名。

剝啄敲門客悉誰。如非漁叟是牛醫。山妻隨例先温酒。籬畔瓠花初綻時。

矮屋熱甚偶憶涼境而賦

薄暮尋涼丁字橋。蘆尖蘋末露珠饒。歸牛貪水飲清渚。漣影鱗々帶月搖。

漁朋招我碧潭涯。倦喚行厨已夕暈。出水鷗鷀時鼓翼。灑將餘沫濕人衣。

蒲葉含風桑綠戰。涼邊撒網不知倦。淺沙灘上水鱗々。無數逃鱗疾於箭。

香魚時節訪溪叟。溪樹陰中冷似秋。亭午溪村無日影。碧花開滿屋山頭。

偶借僧房試午眠。芭蕉葉大覆軒前。夢魂不墮人間界。直駕青巒上綠天。』

酷愛池亭夏氣清。朝來早起健詩情。閑臨淺渚洗吟硯。恰聽蓮花綻露聲。

柳東軒湫隘欲贅一室未能焉聊記其槩以待他日

柳東主人讀書屋。戶開三面席鋪六。不求華麗不求奇。茅棟松柱吾願足。
軒南隙地皆種梅。香葩爛熳雪一簇。春來人坐疎影中。窓底伊唔聲亦馥。
北種梧桐西芭蕉。雜以兩竿三竿竹。唯礙炎日不礙風。夏月涼氣滴蒼綠。
軒下鑿渠引清流。白藕花間水屈曲。亦鯉數頭呼則浮。迎客恰好倚欄角。
幽石小橋巧安排。其間不看一雜木。嵓桂水仙野薔薇。更補籬罅少種菊。
措大所望如此耳。早晚得志了修築。嗟我囊底生秋風。欠此瑣々小清福。

咏史

東方君子國。萬古一神孫。不似唐虞主。禪讓開禍源。』

東方美御德。々與日月比。終成天上人。不關世間事。』

憲法十七條。可以匡天下。如何厩戶中。尙養一惡馬。』

古典歸烏有。其罪是蘇我。何圖君子邦。亦有暴秦火。』

骨肉相魚肉。源門如屠肆。唯此猿臂公。不忍傷同氣。』

日東有聖人。其名曰楠公。誕生干戈世。提劍作英雄。
眉斧誤英雄。空消百鍊鐵。鶯鶯被底春。釀出越山雪。

過煮海村舍

往事回思暗斷魂。龜城郭外舊柴門。秋風空灑西園淚。春酒曾盈北海尊。
陶令撫殘松尚在。謝公吟處草初繁。此中光景今誰主。寂々壚田煮海煙。

偶得

士生無事世。動作不平鳴。自言生戰國。唾手取功名。誰知眞英雄。智計隨
處生。太平善聚財。亂世善用兵。

題德卿所製隱島圖

縮得北溟千里瀾。島前島後落毫端。鑾輿狩處何邊是。手剪春燈子細看。

隱岐有二島。呼曰島前島後。

頭痛連日不愈戲示德卿

我項不屈權門前。我頭不低綉佛邊。一旦天公惡佶傲。謫我西方頭痛山。
有時腦欲碎。有時額欲燃。或疑正人一笏。擊我顱而爲微塵。否則冥府八
熱。焦此身以爲黑煙。狂叫大喚搪四壁。一夜三遷不安眠。老妻按摩腕欲

脱。小醫望問技己殫。君不レ聞杜詩陳檄皆除レ疾。我依二其例一煩二健筆一。請君雄篇續二古人一。驅二逐二豎一顯二奇術一。

秋園所見

霜餘園卉半摧殘。荷葉失レ青楓未レ丹。寂々秋風斜日底。石榴開口齒方寒。

戊申元日（嘉永元）

償レ債城中人尚疲。一番春意我先知。竹梢雀蹴二崩殘雪一。氷隙魚吹二皺碧漪一。新曆恰開嘉永號。微軀幸遇太平時。更憐稚子粗諳レ字。曉向二東窓一誦二學而一。」

墟入嶺

疊松疊竹擁二蒼崖一。樵徑纔通一綫絲。那處怪禽來攫レ兎。半巖殘雪血淋漓。

暗水潺々隔レ竹喧。梅花壓レ岸々欲傾。崖頭一路蒼苔滑。牝馬徐々駄レ炭行。

芝生路上

梅花飛作二馬蹄塵一。怪底寒風尚逼レ人。春半劍山猶積レ雪。一尖鋸角白嶙峋。

引田

紅杏梢頭春雨收。行人留レ馬買二村醪一。山差平穩途差坦。不レ問身知入二我州一。

牽牛花

花綻二琉璃碧一。蕾肥綾纈紫。籬陰日光薄。柔姿妍且美。近午倚嫣然。似レ笑二我晏起一。

胡枝

昨種二觀音菊一。繁英已攢簇。秋階一夜雨。萬枝頭皆伏。汲婦曉開レ扉。紫瀾欲レ入レ屋。

茄

新茄如二新婦一。嫩紫色只宜。老茄如二老僧一。幽玄味入レ微。如何貪饞客。漫賞上番時。

芋

綠芋寧馨兒。美味勝二其魁一。此物有二二種一。赤者味尤佳。譬猶二犁牛子一。亦生二騂角材一。

筍

快嚼日加餐。嫩籜初肥天。此君有二此子一。可廢萬腥羶。無肉使二人瘦一。坡語豈其然。

蕃椒

赤色赤於火。一點煖腸胃。身材雖然小。精神冠百味。可怪蠻國種。有此猛辣氣。

薇

竹筍與松蕈。菜中爭覇名。別有西山薇。幽味自孤行。子細論風格。也似聖之清。

韮

隙地僅半弓。種得數莖韮。嫩葉刈又生。萋々能耐久。好是夜雨畦。剪之留良友。

蘘荷

蘘荷眞可愛。猗々半尺竹。其根更抽筍。䥫々小犢角。淸味淸更淸。也可醫我俗。

蕪菁

嫩苗春可摘。柔根冬可堀。五美與三益。自有濟貧術。善哉諸葛公。到處種此物。

蘿蔔

土酥經秋霜。味外味更長。貧家非無肉。大嚼日潤腸。咄々西蠻國。謾誇地生羊。

隱元豆

黃蘗老隱元。携來自西方。遠離膻羶地。入我君子鄉。好箇清淨味。可侑般若湯。

讀水滸傳

猛如霹靂力如虎。揷他姦吏比腐鼠。六經以外英雄漢。俠氣薄雲聳千古。
誰揮奇筆字聯珠。三世成啞定不虛。一讀堪祛怯懦氣。也勝人間無用書。

勰兒作幼圃頗有幽致

我屋僅十笏。我庭僅一弓。難栽十箇竹。豈着七株松。稚子出奇策。縮地學壺公。搬來拳大石。疊成凸字峯。崖角置磁塔。宛然古禪宮。崖下鑿作湖。新水綠溶々。渚邊浮遊舫。々上載吟翁。一人立舷首。撐篙聳其躬。兩人艙中坐。撚髭嘯晚風。一幅小山水。幻出咫尺中。五湖與三泖。全景聚雙瞳。兒也汝雖魯。意匠亦頗工。阿爺彫蟲技。輸汝經營功。

藤花

松梢高處亂叢萁。花霧香濃籠半空。疑見東君暫留駕。紫鸞垂尾倚東風。

喫瓊脂戲作

誰懸小瀑布。向我腹中流。銀縷三千丈。啜來爽似秋。

村店烹豆腐硬甚戲作

鼎中烹白石。此法出仙家。我輩非孫楚。何能礪齒牙。

贈小妻菊松

菊花移種竹籬傍。隔斷春風紅紫塲。近日陶家貧徹底。一枝能可耐秋霜。

植田文郁來訪

槿花紅斂夕陽頽。手膾鰺魚欲喚杯。恰喜可人乘此際。隔籬一叫問吾來。

夜歸二首

雨氣壓頭上。茫々望不分。村人急收稻。松火燒溪雲。

孤邨帶白煙。暗水隔修竹。寒火影依微。人家夜舂穀。

宿山寺

老僧入定巖扉靜。一點秋燈殘焰冷。前嶺雲開寒月升。松窓忽掛獼猴影。

潭上所見

危巖臨レ流立。一松懸二其窟一。低枝如二猿臂一。欲レ攫水中月。

京都圖

瑞雲擁護古神京。想見桓皇基業宏。櫻柳交加天造錦（用古歌意）山河襟帶自然城（用還都詔中語）周王禮樂猶文物。晉室衣冠悉雅情。今日類塵飛不レ到。平安樂土豈虛名。

江戸圖

金湯鬱々瑞煙横。畫戟光寒魍魅驚。八百八街皆富麗。六十六國仰二昇平一。大旗高揭扶桑日。雄府何論龍動城。不レ怪蠻奴來懾伏。幕中籌笏悉豪英。

浪華圖

三津第一浪華洲。形勢儼然天下喉。碧瓦連レ雲遮二夜月一。畫船塡レ港失二春流一。鵜皇遺澤萬家竈。猴相豪蹤十歩樓。獨恨人才漸凋萎。梨園僅出幾名優。

雜詩

一夜隣叟到。燒レ豬侑二酒巵一。醉話及二邊事一。談屑飛霏々。主人攘レ臂曰。公歴英吉黎。小黠興二大志一。只恃二火技奇一。我有二三尺刀一。一繫可レ殲レ之。北氏龍山役。英風非レ難レ追。隣叟搖レ手曰。先生論恐非。我邦昇平久。士風稍衰頽。紛々白面

子。嘖々黄口兒。談兵襲甲越。製器倣蠻夷。僅見一隻艦。輙動數萬師。邊儲日以乏。國力日以疲。一旦遭鯨寇。衣纓恐紛披。請看滿清主。一敗徒貽嗤。方今之急務。何必在邊陲。唯能禁奢侈。以富軍國貲。主人罵其迂。勃々怒張眉。妻曰莫々々。畢竟無益辭。賢明今在位。廟議定得宜。知否我厨下。明日無鹽韲。

咏西洋人物五首

針路直窮星漢邊。壯遊不數百張騫。橋頭一叫若爲響。穿破西荒萬里天

閣龍

單身一變白龍服。大艦先連黒海雲。卓立西洋臥盧的。歷山王後只推君

伯德兒○臥盧的才德傑出之稱也

一檄生風草木靡。飄然歸臥慮何奇。十三部内偉男子。義似仲連功范蠡

話聖東

覇才將略並無雙。蔑視峨奴在目中。一敗折鋒非戰罪。天將大雪困英雄。

那波列翁

翻山倒海萬人敵。叱咤生風驅健兒。佛家英雄不好色。只將寡婦代虞姬。

同

藤花二首

青帝宮中壓尾娘。春風搖曳紫羅裳。嬌姿更欲入時樣。插得玉簪瓔珞長。」
櫻雲梨雪散無蹤。獨有藤花香一叢。不許春光容易去。紫繩三尺縛東風。

平　石　在西讃仁尾村海中

平石眞奇石。惜哉在僻鄕。四方皆淼漫。六月尚淸涼。坦處呼爲俎。上頭可喚觴。吾疑駕鯨背。醉臥水中央。

讃　岐

讃岐饒樂土。冠絕海南州。蜀俗多文士。今川了俊紀行曰讃岐自古多出名人 楚人豈沐猴。都人罵南人有四國猴之語 橘媛名未朽。相傳日本武尊妃橘姬讃岐山田郡人 菅相澤猶流。鮮膾櫻鯛美。香羹松蕈柔。地靈狐不產。天暖鶴來留。城聳金龜背。寺凭玉象頭。劍峯雲外影。筆海畫中秋。信彼藤先語。溪山足勝遊。尾藤二洲文曰海南之國其勝可遊者無若讃岐

將　棋

車隊鱗々列雁行。飛騰角立拓封疆。好排疊陣防金將。吳璘用疊陣法過金人衝突 先築新都護玉皇。輕馬斜跳踰高壘。銳兵直進用長槍。爛柯一局互爭勝。九道紋枰小戰場。

戲咏家具十一首

柳東之室窮鬼來窺家具往々生翼而飛唯此數品座右不離聊贈五字以代銘辭

先生一出門。童子擔之去。古城讀碣時。幽寺觀梅處。 瓢
儒中有俠客。醉膽太疎豪。四壁雖如水。未與一寶刀。 刀
吾家極樂國。唯在生前酒。拈花笑問君。能飲一杯否。 銅佛
無竹使人俗。一語是妙言。况添數行字。清韵溢窻軒。 竹聯
先生不解音。一張壁上懸。醉後時看翫。亦我沒絃琴。 月琴
寸縑北湖書。零紙南里稿。百城不換之。柳家第一寶。 書帖
木硯纔三寸。輕便自適宜。我家膠漆友。坐臥未曾離。 漆硯
杯乎吾愛小。々飲神自融。酒間眞樂意。不在鯨吸中。 小杯
風流東山閣。豪侈北野筵。輸我竹爐畔。箕踞煮苦泉。 茶爐
三十方壯健。背上未煩汝。醉後罵姦雄。快于搔癢處。 竹搔背
三尺青紗燈。畫之以秋竹。涼雨半窓書。對讀醫吾俗。 燈檠

夏日雜咏六首

午洫將乾久旱時。魚肩半出水如絲。塾童逃學相呼去。各自携來竹漉籬。

戽水郊田夜尙忙。桔槹聲鬧綠楊塘。隔林一綫燈光閃。知是村巫禱雨場。」
白霧呑山午景昏。行人急就綠楊根。駸々雨脚如奔馬。直自南村跨北村。」
午熱逃來村廟傍。十圍樟下細風涼。牧童先我占佳處。畫地開成角觝塲。」
野塘放閘水初肥。箇々藻蘩花漸低。童子捕魚沙外渚。漲痕早已欲過臍。」
淺水陂塘搖碧鱗。出門涼氣乍醫人。夕風吹動青蘆葉。宿鷺時々露半身。

松莊老人貽筍々殆成竹不可食戲賦

雷後龍孫角已伸。登盤猶可飽饞人。腹中好化長竿去。掃盡吾胸萬斛塵。

荒川樟庵携鰻鱺來

碧鱸未及蓴絲節。紅鬣方逢麥稈初。此際微君誰起我。一籃金色鰻鱺魚。」
炙法何輸都下人。一爐文火暖如春。温馨拉鼻新鮮肉。寸々登盤尙屈伸。

夏夜卽事

竹栢梢頭快雨晴。中庭移榻臥三更。殘雲一片如奇獸。俄頃奔來攫月行。

所見

牛口片雨懸象頭濕雲擁。斜陽明滅中。一塔出林聳。

遊銅華表茶店

葦簾竹柱翠煙浮。細々茶香漲二碧甌一。清賞却宜無月夜。綵燈一串掛二紅毬一。

酒　一字至七字傚二張南史體一

酒。酒。如レ師。似レ友。鈎二詩鈎一。掃レ愁帚。北海留レ賓。東坡謀レ婦。舜尙飮二千鍾一。噲何辭二一斗一。最宜久坐小杯。不レ擇卯前申後。直到二人間極樂城一。肯求二天外無何有一。

讀洋書

全洲統不レ一。各國主皆新。曆數千八百。莫レ比二大東春一。

源平復讐兵。累代迭相爭。懦哉西蠻俗。聽レ之膽已驚。

源平云々見二鎖國論一

歷王與二佛帝一。誇レ艶何頻々。我疑西荒國。此外更無レ人。

一母乳二王子一。咄々鄙羅斯。知否懷抱外。別有二三眼兒一。

寛政中邪敎徒來遭レ戮西人畏曰日本人有二三眼一

意在二利一字一。唯貪二錙與一レ銖。堂々大國主。渾是賈豎徒。

五劍山

帝把二八洲鐵一。鑄成二五劍山一。光流二河漢外一。氣射二斗牛間一。霞影朝燒レ刃。月痕秋掛レ環。南州幾名嶽。孰敵二此孱顏一。

悼二樸齋一　井引

樸齋予鄉酒徒也。性愚直人呼曰樸。因自爲號焉。善飲水至五六升。又有膂力。一怒觸柱。四壁殆頽。鄉曲少年輩。戲推稱老爺。今茲庚戌(嘉永三)夏暴死。予憫之賦一律云

斗酒兼斤肉。宛然矍鑠翁。呑時腹如甕。觸處額爲銅。愚直人呼樸。踈豪自稱雄。象山飲博社。誰繼老爺風。

戲賀鶴仙翁蓄鬚

君不聞木下猿關白。假鬚飄風威聾伯。又不聞藤原鬼上官。疎鬚如戟鷙三韓。古人愛鬚皆如此。不做尋常白面子。鶴仙老人今英雄。滿腮養鬚々蒙茸。好是文壇亦錦袍。輝光相映壯威容。時人肉眼驚奇狀。紛々極口相嘲謗。我祝此老後益矍鑠。壓倒染鬚藤別當。

平等院懷古 以下四首課題

平氏糟糠武家塵。僧覺明罵平相國語 逆焰赫々燔紫宸。誓除此賊淸君側。慷慨白首源將軍。吾馬可奪志難奪。咄嗟傳檄風火烈。麾下僧兵一當千。驍捷驚人肉飛仙。敵兵膽落皆紛披。朱甲和血蔽碧瀾。大功不成雖可惜。一擧振起義旗色。他日東風吹餘馥。枯木花開關左國。

金剛山懷古

蟻集關東八州兵。唾レ手直欲レ提二孤城一。英雄鬪レ智不レ鬪レ力。機變百出鬼神驚。藁人能戰睢陽策。雲梯徒勞墨子壁。八十万衆何所レ爲。三日死傷筆不レ閣。却想賊軍西來年。使三公謀二之亦猶然。惜哉長城空壞破。守禦無レ人叡山嶺。

桶峽懷古

破竹勢加二駿國兵一。馬跡直欲レ蹴二七城一。英雄有レ膽大レ於レ斗。帳中高歌傳二酒觥一。大霧茫々天如レ墨。鉄騎啣レ枚擣二虚營一。疾雷一聲耳未レ掩。長鯨授レ頭血縱横。君不レ見桶峽戰骨猶未レ瘞。京刹梅雨木馬斃。一成一敗跡安在。人間夢幻五十歲（末句小田公所レ唱古謠之語）

好禿顱兮可レ代レ鼓。酒間一擊響轟々。豈料餘音激二餘怒一。化作二千軍鼙鼓聲一。梅雨濛々怨難レ霽。殺氣夜壓二梵王城一。帳下張レ宴酒未レ畢。四面楚歌英雄驚。嗚呼土鼠食レ馬片時夢。竹槊貫レ頭奈二汚名一。誰轉二奇禍一爲二奇福一。傍有二木下老猴精一。

觀二山崎戰圖一

主家不幸奴家幸。復讎一戰霸業成。黠鼠食レ馬實可レ傑。老猴坐レ輿亦何情。口塵戰々天地暗。枉使下傍人候中陰晴上。

呈二宮脇公一

絶世雄才武備レ文。雷名轟レ耳久相聞。藕花經上盛傳レ法。玉藻城中夙逸レ羣。
座進二俳優李天下一。門招二賓客孟嘗君一。英風最是壓レ人處。一砲驚レ魔栗嶺雲。

喫二野猪肉一戯作

雪後猪羹美。登レ盤片々紅。寒宵煖二吟骨一。是我肉屛風。

陳渉

匕首燕荊軻。鉄椎韓張良。輸與隴頭子。鉏耰撃二虎狼一。

項羽

喑噁非二敵手一。虞兮尙貞節。勿下以二成敗一論上。羽亦大英傑。羽亦二字用太史公語

辛亥（嘉永四）元日

滿衢車馬曉喧嘩。迎二得新年一忙更加。獨有二幽人一高レ枕臥。一簾旭影夢二梅花一。

銅華表牡丹

万朶春風錦作レ窠。濃丹膩白各交加。黄金鄉裡銅華表。富貴人看二富貴花一。

楠公別子圖

旗色蕭條海伺風。驛門駐レ馬自從容。休レ言一死長城壞。留得狻猊護二六龍一。

鄭大木焚二儒服一圖

三百炎精己一空。北風吹起黑濛々。誰焚二儒服一收二餘燼一。万火光傳二大日東一。

赤染衛門

綉口吐來皆色絲。助二他夫壻一進二文思一。榮華一卷規箴語。赤染何曾輸二紫姬一。

紫式部

幻如蜃氣麗如レ雲。寫出風情水性人。豈料自家心似レ鐵。孤燈守盡十年春。

紅魚

天下海鮮誰及レ卿。金山聲價自連城。上番恰遇二櫻花節一。末路誰傳二麥稈名一。
万片紅鱗霞疊々。一双碧眼玉晶々。花都士女口無レ福。枉喫二松魚一誇二一生一。

蝦

嶄然頭角異二常鱗一。謝豹啼時聲價新。（謝豹蝦見老學庵筆記）當日朱衣曾賜レ爵。（唐彦謙詩云鞠躬見湯王封作朱衣侯）至レ今鐵甲未レ離レ身。倦分高士腰將レ折。老矣參軍鬚尚伸。外面雖レ獰內心美。勝他西子暗傷レ人。

讀二先哲叢談一

四海干戈亂尚紛。夙開二奎運一掃二煙雲一。一辭不レ用後生贄。高揭煌々御製文。

藤惺窩

乘レ桴來寓海東灣。背受二殫風一撲二我顏一。高義宛然陶靖節。西山相對代二南山一。

朱舜水

枕頭雄劔凛如レ秋。曾貫二淋漓血髑髏一。畫裏詩仙三十六。英風有レ似二此翁一不。

石丈山

壯膽彭亨五尺軀。麒麟閣上好爲レ圖。試二於前代一求二儔侶一。鎌府謀臣江太夫。

源白石

學兼二韜畧一物双松。遺恨身生二治世中一。覇氣滿腔磨不レ盡。一盤炒豆罵二英雄一。

物茂卿

讀史

胡蝶軍纔去。甲螺名亦震。朱火消滅甚。豈獨蟹螯陣。清兵每戰必分二左右一翼二郷兵一不レ識二陣勢一呼爲二蟹螯陣一見二嘉定屠城紀畧一

西瓜

紅玉新瓤綠玉房。誰傳奇種自二西方一。果然天上蒼龍卵。太勝二人間白虎湯一。

井底夏寒浮二艶月一。齒根秋爽滴二瓊漿一。看來不二是尋常物一。一顆兼含二五色光一。

藕

削成寒玉色晶々。菱角蓴絲皆讓レ名。混沌穿開竅猶在。靈均仙去骨殊淸。

何圖淨域如來座。却侑風亭酒客飫。唯説花時不說味。濂溪夫子若爲情。

賀文郁擧男子

電光爛々閃嬌瞳。果識熊羆入夢中。成長何時學爺態。膝前論史罵英雄。

俠容課題

鉄鐟光搖柳陌春。摴蒲百敗益精神。生來不用腰間劍。腕上黒蛇呑万人。

戯贈家中人畜六首

男兒

十年舐犢義方疎。頭角難分龍與猪。狂戯弄毫描魑魅。輕佻升木似猿狙。當吾白髮未盈首。待汝青衿早讀書。一月一箱從此始。竹窓涼雨夜長初。

杜牧之寄姪詩云一日讀十紙一月讀一箱

女兒

休道人間無益兒。膝邊慰我日娛嬉。嬌喉纔學鶯歌舌。媚態初描蠶子眉。笑靨宛然能肖母。禿頭何妨戯呼尼。幼齡憐汝心情黠。不似爺々徹底痴。

妾

臀重千斤腰十圍。不妨養作柳家婢。風情解得能温酒。漢語諳來殆誦詩。

枉臼何輸德耀力。當壚曾畫文君眉。佳名恰有松孃號。凌否歳寒風雪時。

犬

黃耳稍肥猶帶嬌。受恩三日喜將跳。綠陰階下眠過夏。微雪門前蹲徹宵。
稚子騎來時代馬。老妻飼處每先猫。太憐寒巷醉歸路。月下迎吾尾屢搖。

猫

猫奴一昨乞諸隣。綉褥金鈴寵愛新。亂叫含哀猶戀母。狂跳帶媚稍馴人。
屛間古畫時磨爪。竈下寒灰屢涴身。尸素何能可無耻。吾厨平日有殘鱗。

又

猫兒漸長艶陽辰。五德備來柔且馴。文彩宛乎如虎豹。仁心徹底是麒麟。
非人不煖眠同被。無肉將癯食有鱗。一味懶慵唯附火。爐邊好與主翁親。

米貴

米價今年倍去年。啼飢万口日喁然。邊生不復誇便腹。杜子依然聳瘦肩。
數粒難分養鶴料。一囊易盡賣文錢。竈間往々無煙火。自笑妻兒共欲仙。

酒貴

酒國蕭條不作春。渴喉强學獨醒人。青樽殆仆孔融坐。白醆澌生彭澤巾。

舐赤何堪唯到鬲。滴淋一計叵沾唇。社朋如有新醪熟。眞率將爲不速賓。清沉宗壇率社約云誰家釀熟顧爲不速之賓一日花開卽是草率之主

蚊陣

雨翼開張陣法成。欺雷賊吶一聲々。素紈好比機山扇。碧帳宛然楠子城。
淸曉解圍全晦迹。黃昏誇勇自呼名。火攻奇策宜殄滅。竹樹叢中善伏兵。」
一唱千呼耳畔聞。飛如流箭簇如雲。貪而無厭虎狼性。驅則又來胡蝶軍。
篁陰暗邊時出沒。艾煙消處乍紛紜。若爲乞得雨師援。打破簷間烏合羣。

中元掃墓

童心未革二毛繁。墓下秋風吹涙痕。猶記慇懃曾問母。幾宵眠去是蘭盆。

山水小景

垂楊渡口夕陽舟。首載行人尾載牛。々飮淸流浮鼻去。蘋花搖蕩半灣秋。

富士圖

帝意有私東海灣。長留仙嶠在塵寰。玲瓏影射玄菟外。縹渺光浮碧落間。
雄蹲跨地三州背。屹立達天咫尺顏。莫將俗岳相倫擬。眞箇乾坤不二山。

齒脫

柔茹剛吐二十年。其奈一牙凹且穿。狗竇初開誰解入。魚頭雖嚼自相憐。
當時方朔稱編貝。今日女媧思補天。不分家人誇齒力。菜根咬斷響鏗然。

恭聞賜護王祠位階事有作

鳳詔爵新加。龍種名逾馥。六百年後春。應暝泉下目。

校雪航翁遺集題其卷尾

鯨海翡蘭皆自由。篇々銜口味深幽。漆翁鑒賞非虛語。象首山中第一流。
漆谷曾目翁爲象山第一流詩人
詩派曾分老禮卿。聯來字字悉長城。如何鄉里青衿子。唯說麻溪聾叟名。
牧詩半住湖麻溪有詩名晩年患聾

梅

寒威裂地膚。万木凍將折。乾坤唯一枝。笑立隴頭雪。
杏桃皆稱臣。松竹好成隣。寒巖三尺雪。幽澗一枝春。
天地有清氣。凝成一枝玉。愛花不愛梅。其人必凡俗。

雜詩二首

諸子論海防。其意在戎器。巨礮万鈞重。大艦千金費。我有一奇策。其撰與佗異。施仁買民心。守儉壯士氣。

東隅奥羽野。曠原千里連。遷㆑民悉開墾。更添㆓万頃田㆒。北海隱佐地。孤島水中懸。洋夷設㆓據此㆒。妨㆓我運送船㆒。咄々巧㆑利人。海籌徒成㆑篇。目下捨㆓此策㆒。遠論㆓蝦夷邊㆒。

雜咏百首　録十

天

天固積㆑氣耳。確然千万秋。邵子成壞說。亦是杞人憂。

地

地形万中矩。此說古來傳。西人巧手段。削㆑之使㆓團圓㆒。

日

日出扶桑國。光華旦々新。黃葵花一朶。擎㆓得太平春㆒。

月

昇平過㆓二百㆒。人口日加㆑多。月中三萬戸。々數今如何。

雪

比月殊覺㆑冷。喩㆑花不㆑聞㆑香。詞人如㆓瘋犬㆒。逢㆑之郎欲㆑狂。

雷

雷

雷公有烈威。能擊不孝兒。如何憎窮士。夜轟薦福碑。

風

曾覆蒙古艦。又摧喝蘭舶。何事惜餘力。近來不復作。

金

金氣有大毒。能害礦中人。不恠世間客。貪攫滅其身。

銅

羣王皆賈豎。唯知銅臭好。年々万里船。載歸吾國寶。

山

太古經洪水。連峯似疊波。後世儻有火。山形果如何。

海

海面無分界。潮脉通四瀛。離岸纔一寸。蠻舶已横行。

東

海東有新國。共和政教敷。恠佗叅々者。禪讓學唐虞。

西

西方乾竺敎。寂滅唱ニ宗風一。此語終成レ讖。國土卽是空。』

南

南邊琉虬國。亦我版圖地。鎖鑰今嚴否。洋夷解ニ窺覬一。

北

北隣有ニ强國一。其名曰ニ峨羅一。距レ我知幾里。盈々一帶波。

春

櫻花娛ニ我目一。櫻鯛悅ニ我口一。借問五大洲。有ニ此春風一否。

夏

願降ニ北韃地一。爲ニ我版圖裏一。中築ニ避レ暑亭一。夏天移ニ居此一。

秋

百穀入レ秋熟。天下有ニ喜氣一。不レ解古人心。以レ秋爲ニ愁字一。

冬

袘袴胡爲者。重裘猶畏レ冬。記否太古昔。天下皆裸蟲。

人

人生ニ天地間一。憃然如ニ螻蟻一。胡爲不レ量レ力。欲レ窮万物理。

男

男子無文章。何異婦人躬。請看禽鳥類。彩毛在其雄。

女

無姓乘寶轎。誰及美婦人。咄々太平世。勿爲男身子。

儒

三代以前世。帝王皆是儒。何時別開戶。混爲醫卜徒。

僧

鷲山雖棄妻。龍樹已通妃。不恠圓顱者。也畜優婆姨。

米

粒々皆辛苦。其貴如珠玉。咄哉遊民徒。日耗幾万斛。

麥

麥性能耐寒。雪中綠茸々。好闢北蝦疆。滿山蒔此種。

麟

麟乎獸中聖。其靈不可知。冤哉鄭家叟。枉欲剝汝皮。

鄭康成有郊鼓用麟皮之說

鳳

聖人不復出。鳳兮何德衰。可憐五彩翼。化爲蠻國雞。

洋學家以鳳爲印度雞

龜

遍身雖着鎧。不肯作爭鬪。優遊綠水中。能保万年壽。

龍

旱天眠不知。龍也懶且怠。劉累今則亡。幸然免爼醢。

牛

蠢然肥大物。只聽人穿鼻。豈料身後皮。戰場一要器。

馬

名馬駿爽勢。相對益精神。宜哉英雄漢。愛之同美人。

字

漢字可用者。不過三千餘。誰居妄製造。腹笥溢難儲。

書

秦後多僞書。一讀使人愚。誰知造書罪。却劇于燒書。

經

聖教無ニ多端一。唯仁與レ義耳。何物腐頭巾。呶々攪ニ其旨一。

文

漢土文章妙。漸化ニ西蠻奴一。安知千年後。亦髮出ニ韓蘇一。

文章貴ニ短簡一。冗長便覺レ拙。請看古匕首。殺レ人一縷血。

詩

縱吐ニ新奇語一。吹レ毛不レ免レ譏。善哉孔夫子。一生不レ作レ詩。

兵

用レ兵如レ作レ文。未ニ必襲ニ古人一。須レ看ニ車戰法一。誤了房琯軍。

船

我船小如レ鷹。輕捷可ニ以鬪一。今日善用レ之。能擊ニ雙頭鷲一。

礮

作レ俑其無レ後。作レ矢猶不レ仁。誰乎製ニ此器一。一丸鏖ニ万人一。

槍

梨花一團雪。芒穗幾條霜。早晩携レ之去。建ニ功沙漠塲一

弓

弓唯宜可レ手。何必用二六鈞一。挽レ强誇二多力一。定非二善射人一。

刀

利器東方出。霜鋒氣凜森。至レ剛不二撓折一。即是武人心。

劍

三尺纔提去。掃二除天下塵一。肯學二匹夫勇一。誰能敵二一人一。

呑象樓遺稿絲集 了

呑象樓遺稿竹集

自壬子（嘉永五）至甲寅（安政元）

夏日早起

林庭塵未動。涼氣滿籬笆。眠雀坐深竹。垂蛛絓碧花。池蓮猶浸月。樹杪已懸霞。隣叟起何早。篝痕看在沙。

富士二首并引

秋玉山富士詩膾炙人口。然崑崙黑色之山也。比之玲瓏玉芙蓉。恐非倫類也。戲作二絕句。洗其冤云

玉肌絕艶質。宇宙有誰倫。咄々秋叟眼。比之黑美人。芙蓉幾千仞。玉立照乾坤。如拋一掬雪。定作白崑崙。

撫松樓雜咏五首

鞘橋南畔石潭隈。卜得柳家避暑臺。雷後老松十字裂。露中白藕五分開。入樓翠色皆山也。遶檻寒光是水哉。晩洗吟杯謀小飲。偶然有客袖詩來。

柴扉半扇掩紅埃。閑裏幽懷亦可開。岸柳御風仙子態。渚蓮含露美人腮。佳朋時自遠方至。妙句多從天外來。隔水笙歌亦何害。十年妄想已成灰。

水欄氣色夏殊清。吟坐宵々過二更。松上梵宮孤塔影。柳邊妓館細絃聲。
樓居飽受仙人福。市隱初知高士情。最是一蚊飛不到。未秋先得近燈檠。

轔々橋聲向晩収。一條淨綠早涼浮。雲歸象鼻山邊樹。人倚金山寺外樓。
溪鰮飜身過淺瀨。家鳧並影坐清流。好風景處無佳伴。憶起能詩棲碧叟。牧詩牛舊居在東岸

傲然展脚笑王侯。湘簟掃塵涼欲流。酒只無量聊遣興。書非索解且消憂。
沙禽與我閑相似。風柳何心搖不休。咄々莫談名利事。雨餘山色滿樓頭。

撫松樓所見

傾盆驟雨過前灣。炎氣全消一瞬間。白霧遮山象身斷。濁流界水鴨頭斑。
佐屋橋南冷澹秋。吟詩人倚夕陽樓。漣紋不亂蘋花渚。一隊家鳧與影流。

愬兒寓學于宮山氏贈以書數部

我昔如汝齡。讀書叔父塾。經書觀大略。妄得才子目。弱冠耽花柳。誤墮風流獄。粉魑與黛魅。欺我侑醜毒。辛苦數年業。化爲蕉中鹿。千金與雲散。二頃如塊鬻。唯剩數帙書。蠧餘滿敗簏。與汝代籯金。日夕宜勤讀。阿爺少年事。喩之前車覆。期汝跨竈才。再興柳家族。

敦盛墓　以下十三首浪華遊草

中將牡丹薩州櫻。芳艶欲レ滴一種情。別有二嬌花最可一レ憐。不レ呈二媚態一貪二餘生一。孤墳埋レ沙寒浦曲。漁笛聲中人來哭。翠黛粉面貴公子。風姿宛然猶在レ目。君不レ見棣蕚相爭東風嗔。鬼武猪武豈知レ春。莫下將二怯懦一咎中平氏上。閫門百花一樣美。

和田崎憶二本間孫四郎一

截レ風一箭電光流。水鳥含レ魚落二鷁舟一。善射如レ斯猶欠レ事。饒他掠レ國老獼猴。

兵庫

兵庫津頭曉繫レ舟。樹間粉壁靄二炊煙一。十年敬慕楠公墓。先向二行人一問二湊川一。

楠公墓下作

万甲連レ天如二鐵壁一。水陸來壓兵庫東。誰敢當レ之楠中將。手提二一劍一意氣雄。賊顱如レ塵碎粉々。血捲二紫瀾一漲二碧空一。公氣未レ撓公刀折。滿身鋒鏑實鏜裂。公曰當レ死弟曰唯。耦刺駢レ首何快烈。嗟哉良王逝矣藤公不レ回。敵愾之器捨レ公誰。公在天子安。公亡天子危。一死奈壞万里城。志士至レ今猶惜レ之。幸有二郎君一繼二遺馥一。倘向二大廈一支二一木一。半壁山河乾不レ動。公也有レ靈應レ瞑目。

大碣巍然湊水渚。秋霜凜々滿平楚。我來弔古淚簌々。仰天唯稱嗚呼語。

築島懷古

巨鼇背上梵王宮。偉績千秋未作空。洲觜截瀾々失碧。扇頭招日々重紅。
遷都暗合曹瞞轍。築堰遙追梁武功。莫把罪名呼我慢。平公此舉亦英雄。
頼杏坪翁詩有此地曾埋我慢魔句

尼崎舟中

兩岸楓櫨秋色斑。女僧城外夕陽灣。吟人到此情何急。雙眼欲穿天保山。

舟入鯵川

柳影橫行不礙舟。櫓痕搖蕩滿灣秋。三絃聲湧夕陽岸。知是鯵川賣酒樓。

十三夜小飲示河梓庵

恰遇寬平宸賞時。水欄向晚捲簾帷。澱江魚膾丹邱酒。不負今宵月色奇。

高臺眺望示河德卿

高臺一望豁秋晴。万里雲消眼底清。屋是魚鱗遙匝匼。橋如蛛網迭縱橫。
長河西注控蒼海。大野南來擁錦城。幸有故人諳地理。慶元戰跡說分明。

贈德卿々々曾客隱州頃來寓浪華

千里雲濤無信通。六年各地馬牛風。浪華江上一樽酒。相對猶疑是夢中。

贈後藤松陰翁

賴氏文鋒駭鬼神。篠翁詩手縛麒麟。兩家衣鉢併傳得。浪速城中唯一人。

拜東照公廟

麾戟光生小牧軍。猿公豪氣尙逡巡。百年來拜祠門下 猶覺神威凜襲人。

歸舟卽事

星大天如近。風微濤不驚。櫓聲搖夢破。帆影帶秋行。豆嶼眸中小。黍山霞外明。揭篷先一叫。咫尺是當城。

讀韓蘇文十五首

文武周公道。載在原道篇。軻死失其傳。此語豈其然。

審敵蘇公策。平淮韓子功。誰知文壇上。有此大英雄。

學術醇乎醇。孟後唯一人。自視何謙遜。開口稱揚荀。

筆底金剛杵。排邪力有餘。佛也儻有靈。降伏學鱷魚。

龍說與麟解。文極詭幻術。我思靈物靈。輸君一枝筆。

柳氏稱無罪。孟郊說善鳴。不似方今世。文人迭相輕。

世間無伯樂。駑才妄自誇。可憐千里馬。三伏光範門。
法宜因古法。言宜去陳言。請看數或字。南山本北山。
古人曰退之南山詩用數或字一本于詩經北山
字々是藥石。千載猶有用。救弊二篇旨。不獨爲弱宋。
胡虜不欲戰。嚇人形與聲。唯此一二語。今日可防英。
史刳遷固腸。經穿聖賢旨。何處得此方。峻刻韓非子。
一篇先辨奸。眼光何爛然。休誇邵康節。唯說洛水鵑。
筆端如有舌。縱横絕比倫。戰國同姓士。安知是前身。
整學宜公議。雄追長沙策。讀之不動心。天子是木石。
不學干求韓。不爲鬱悶柳。行雲流水文。優哉東坡叟。

月夜過石潭

一痕溪上寒月。幾股沙間碧漪。樹影搖々荇藻。巖姿躍々熊羆。

雛妓

十三雛妓可憐生。渠亦人兒關我情。如此峭風微雪曉。橋頭按曲作寒聲。

對酒

事皆錯々々。身已休々々。唯有一樽酒。晚窓時解憂。
學士唯窺豹。貴人多棺驎。世間求好友。只有飲中人。

晏起

妻問米鹽兒索錢。環攻日々逼吾前。朝來偶得偸安策。高枕梅花帳裏眠。

雪日訪森寬齋寓居

柴戶來敲雪後廟。恐吾醉履印瓊瑤。主人能解風流事。竹外別穿蹊一條。

雪日即事

階畔玲瓏地。慇懃戒履痕。山妻晨汲水。假道向隣園。
大雪深尺餘。晚來埋茅屋。詩童欲掩扉。推出窓中竹。

臘尾頻雪戲作

廣寒宮裏待春來。仙女相呼共掃煤。玉屑瓊塵三万斛。天風吹落白皚々。

臘尾

四隣人擾々。各戶待春回。潑散忘年暮。追儺祝福來。邦俗臘散謂之年忘。又立春夜撒炒豆祝曰鬼外福內。
祭神時媚竈。避債或登臺。吾亦了閑課。寫詩紙一堆。

早春適野

微輕峭寒滿帽風。梅鬚柳眼各春容。新波稍疊鱗々水。殘雪猶斑黶々峯。

遊ニ小瀧梅園一

紅白交加三百株。花光艷々雪晴初。竹籬茅屋好風致。只恨溪翁不レ讀レ書。』
欲下借ニ溪亭一呼中酒杯上。慇懃敲レ戸咲顏開。十年不レ屈幽人膝。且爲ニ梅花一一屈來。

悼ニ菊兒一二十首　錄十

十年撫養愛情濃。瓊蘂先生ニ蓓蕾中一。叵レ對蕭條孤館夕。一枝吹折異鄉風。
兒初患レ眼。就ニ醫于笠岡一。終死ニ旅館一
潛々熱淚灑ニ空帷一。正是寶珠離レ掌時。一粒靈丹豈無レ效。幾回戟レ手罵ニ庸醫一。』
病苦昨來猶緩時。招ニ佗隣稚一助ニ娛嬉一。玩具依然枕頭在。玲瓏三寸泥孩兒。』
雨氣淒涼幽夢囘。殘燈無レ焰夜如レ煤。痴心幾度擡レ頭見。或有ニ嬌魂現出來一。』
一曲三絃學漸成。歌喉纔澁雪中鶯。腹斷東窓微白後。耳邊彷彿尙聽レ聲。』
額邊養レ髮々鬖髿。小髻綰レ鴉嬌態加。欲下待新春一爲中首飾上。市門前月買ニ銀釵一。』
去年初學色香歌。弄筆縱橫字似レ鴉。痛絕死前纔十日。平安一紙寄ニ爺々一。』
色香歌即以呂波也
霜後寒花清艷姿。今生相見已無レ期。此兒豈可レ附ニ荼毘一。玉骨留埋春艸坡。
弊俗多火葬。兒平日不レ善レ之。因從ニ其言一

菊正開時汝以生。故將阿菊作嬌名。何圖弱骨瘦於菊。不待秋風已落英。」

淺碧衣裳繡蝶兒。裁來猶未觸氷肌。万家娛樂新春、。空向山僧爲布施。

三月念三欲趁鞆浦抵龜城値雨宿村
田雲和家以下八首遊徽小稿

午雨簾纖興自佳。故人家亦似吾家。醉餘坦腹閑伸脚。臥見長春帶濕花。

舟中雜詠

碧羅紋細蹙晴波。柔艣一枝聲軋啞。海面春光還可愛。櫻鯛上網赤於花。」

柳岸微風櫻渚煙。蒲帆影暖斗晴天。春魚此際知多獲。錦樣紅鱗不直錢。

對潮樓次韓人留題韻

鼇頭擘出梵王臺。縹緲煙光入座開。駭浪撼樓相盪擊。浮鷗排闥欲飛來。

天連大海鷗全沒。雨挾腥風龍已回。攬此江山爲下物。何辭滿甲十分杯。

未開牡丹 對潮樓詩會題

貴彩遲々殿艷陽。好將晚出壓群芳。猩唇未試千金笑。麝氣纔含一綫香。

應是東君殊用意。故教西子緩催妝。詩家清賞唯斯際。開到十分人悉狂。

鞆浦

牛生廟畔可春遊。一帶紅欄賣酒樓。柳外鍛聲入製碇。花間絃響妓乘舟。

歸舟戲賦呈衛仙翁

晴波澹蕩碧於湖。小艇載過春一壺。好把風流比赤壁。蓬窓有客似髯蘇。

鶴翁有髯

晦日到龜港中村子楡延上旗亭席上分下未到曉猶是春句爲韻予得未字

東道主人不惜費。綠陰留客茶香沸。鶯於春末已無聲。魚到骨邊殊有味。風流談豈利名場。倜儻士皆湖海氣。乘興知吾酒膽豪。三蕉吸盡醉猶未。

春夜拉越夢吉觀花象山

歌樓人定夜無譁。春月在烟如隔紗。一刻千金不虛價。醉携才子見名花。

贈僧某

戀家徒弟只圓顱。煩惱空持百八珠。看君風度非凡相。始識僧中有丈夫。

項羽

叱咤先呑虎狼國。英雄果有拔山力。豈料虞兮一曲歌。風流亦是万人敵。

夏日水亭

柳遶㆑松園㆓夏氣㆒清。々風吹㆑滿納涼棚。低欄離㆑水纔三尺。魚慣㆓人聲㆒恬不㆑驚。

夜坐

竹間快雨收。殘滴響猶幽。夜色涼如㆑水。一螢簾外流。』

諸葛武侯像

莘野渭濱耕釣身。再生降作㆓漢家臣㆒。三分三國呑㆓呉魏㆒。七縱七擒驚㆓鬼神㆒。熊虎望㆑風已低㆑首。蛟龍借㆑力始振㆑鱗。天應欲㆑破㆓姦雄膽㆒。故向㆓南陽㆒出㆓聖人㆒。滿呉堅中以㆓留侯武侯等㆒爲㆓三代以下聖人㆒

夏日田家

輕烟縷々午前茶。鎌手休來暫返㆑家。牛到㆓綠陰㆒鞭不㆑動。涼邊立嚼㆓水晶花㆒。

夏日偶作

心有㆓塵機㆒涼亦熱。身無㆓俗累㆒熱猶涼。使㆓心清淨㆒使㆓身靜㆒。此是我家消暑方。

送㆔鶴翁遊㆓浪華㆒

王仁之後二千春。古道相傳能幾人。梅花應吐如㆓虹氣㆒。文焔風生浪華津。

自題畫像

非㆑儒又非㆑墨。自稱可憐蟲。花柳蕩郎態。搊蒲俠客風。千金曾作㆑塊。一劍尙

横虹。騎虎半生業。彫蟲十載功。豪言世讐敵。痛飲酒英雄。宇宙維知已。
盼兮五尺躬。

讀書十二首　錄九

一部麟經字。煌々照天地。盲史果何心。維之以恠異。
採蘭與贈芍。葩經猶拾收。禁淫不禁色。聖人亦風流。
聖教本簡明。其文如日光。如何爻卦旨。探之太茫々。
孟子排楊墨。雄辯如流水。宜哉曲學徒。誤以儀秦比。
可解不可解。此法讀南華。苦心郭家注。亦是畫足蛇。
人情日刻薄。不復古時敦。韓非刑名法。今日是迂言。
龍韜與虎韜。畢竟空理耳。運用存一心。岳爺論卓矣。
孫子十三篇。々々極精覈。知否千載後。火攻爲上策。
在德不在儉。一語可以師。六篇大著述。欠此緊要辭。

院狗行　咏史樂府之一

院耶狗耶。狗則射之吾有弓。當時妖氛暗天地。不恠賊眼太朦朧。君不聞
獼猴一掠四海裏。無人知有眞天子。

讀二賴山陽翁集一

生前相見恨無レ緣。仰止焚レ香讀二遺篇一。硬語遙凌一萱苑。麗詞不レ數百無絃。用二五山文中語一龍文鼎向二毫端一擧。牛渚犀於二史上一燃。卓矣斯翁振起力。騷壇旗色再新鮮。

棕外來訪時雷雨

電鞭驅到遠山雷。急倚二涼軒一洗二酒杯一。不レ覺連聲呼二快々一。快僧快雨一時來。

七夕憶二阿菊一二首

女郎嬉笑四隣聲。又過二佳辰一幽恨生。一串紅燈雨竿竹。祭星棚是祭靈棚。

涙後還逢七夕辰。一盤瓜芋自傷レ神。憶曾嬉戲開筵日。兒作二主人一爺作レ賓。

中秋有レ作

柳營星落夜雲黲。遏密令嚴二六十州一。北渚南樓人寂寞。今年宜レ喚二晦中秋一。

海風吹掃墨奴舟。精氣何能滌二我州一。看取扶桑枝上月。清光万古一輪秋。

筆

短髮老逾玄。壯心鋭不レ折。可レ憐一寸躬。能罰二奸雄骨一。

紙

玉膚任二我涴一。似レ有二素心約一。憐他片々身。不レ似二人情薄一。

樊噲擁レ盾圖

撞破鉄門扇。戟髯壯士哉。綽々有二餘力一。他年排レ闥來。

嚴子陵

偶然横二帝腹一。脚底有二餘馨一。太史眼何錯。客星是德星。

丙吉問牛圖

等閑憂二喘牛一。吉也胡爲者。知否古聖人。問レ人不レ問レ馬。

寄二淡齋一

淡齋近作有二柿葉斜陽寺薔花明月村句一

馬語人聲攪二耳根一。市中生活不レ堪レ煩。羨君一飽身無レ事。高臥薔花明月村。

雜詩

雍熙過二二百一。人口日以蕃。聞說一年中。百人殖二一人一。一年又一年。黔首溢二乾坤一。地力已無レ餘。天祿終不レ均。願得二新世界一。悉遷二遊惰民一。

近代西歐國。各自稱二同盟一。彷彿周末勢。列國作二連衡一。峨羅及英吉。出沒窺二東瀛一。々々獨立國。單力恐難レ爭。本邦與二支那一。隔レ海只一泓。二國宜レ結レ好。

以防二峨與レ英。

除日訪二淡齋一

人忙我猶閑。來叩小柴關。羨君閑似レ我。把レ蝨坐二青山一。

雪月皆宜樓雜咏七首 錄三

曆々春山翠色堆。向二吾樓上一笑顏開。隣僧通レ好先相約。初雪晴時載レ酒來。」

柴邏翠嵐來入レ軒。看山清福已十分。此中更欲レ添二詩景一。手草一篇祈レ雪文。」

讀書窓外即通衢。欲レ植二梅花一寸地無。幸有三故人能二繪事一。一枝疎影寫模糊。

早起見レ梅々已摧殘

襲レ枕暗香動。飄々數點雪。夜來夢不レ佳。果與二梅花一別。

晏起

梅杪雨竿日。夢醒起尚遲。綿衾三幅底。蒸出一聯詩。

懷レ人詩五首 錄二

桂玉艱難浪速都。躊躇與盡計何如。勸レ君歸隱抛二雙劍一。牛背斜陽坐讀書。

德卿

雪帽南山白陸離。猪羹正是上盤時。記曾樓上留二才子一。對飲同吟勅勒詞。

夢吉

梅二首

鉄爲老乾玉爲英。凌轢風霜浩氣横。世外佳人美而艶。山中高士聖之清。結盟鶴可稱知己。論格竹猶難作兄。不向東皇仰餘澤。一枝傲骨自崢嶸。」稜々巖壑舊精神。不染紛華不染塵。戈戟亂横霜上影。丹青難寫月中眞。空眼桃杏勇無敵。伴結松篁德有鄰。水底靈均應看愧。離騷經外一枝春。

張飛横矛圖

氣呑百万敵。餘勇震江南。一喝怒雷響。山川裂作三。

咏史

赤壁黄蓋策。淝水朱武兵。可憐千秋下。唯傳周謝名。

樓上所見

早起登書樓。々下即通衢。日出煙散處。行人各就途。走者擔紅鱗。叫者賣綠蔬。俯者駝背僂。仰者鶴身癯。村妓曳綵履。蠻叟繇白襦。東西揖而別。前後禹且于。千形與万狀。一々風貌殊。點我窓中景。來爲活畫圖。一笑雪月外。看玩有此娯。

皆宜樓十勝

春寺艶櫻

滿山總一白。霏々嬌雲橫。春風吹不レ動。始知是艶櫻。幽寺埋二何處一。隱々疎鐘聲。

秋林丹楓

霜氣入二楓葉一。山色作二臙脂一。濃丹淺紅際。青松點二綴之一。迎レ客先誇說。吾樓秋更宜。

雙松涼月

一松矗而立。一松蟠以屈。夏夕涼雨後。蒼翠如二新沐一。安得煎二仙膏一。梢間長黏レ月。

孤塔夕照

登樓看二晚晴一。山容妍而麗。羣鴉歸已盡。秋旻無二纖翳一。愛他夕陽中。塔影聳如レ畫。

暮村歸牛

寒烟秋漠々。農家未レ掩レ扇。遠火二三點。隔レ水影依微。曲隝枯蘆外。一牛馱レ月歸。

遠澗鳴鹿

遠街燈已滅。群囂寂無聲。此時起倚檻。夜山近人横。愛聽呦々鹿。彷彿隔雲鳴。

夏山轟雷

香車聲轣轆。滿山雨氣腥。現出金龍影。閃々射窓檻。倚柱壯詩膽。是我觀雷亭。

曉樹宿雲

夜雨初開霽。宿雲在前山。奇狀難捕攫。虎躍又龍蟠。吾家沽畫幅。變化瞬息間。

牛口驟雨

快颷吹雨脚。來自牛口峯。大點如飛礫。動搖十丈松。須臾雲無迹。涼蟾坐碧空。

象頭晴雪

夜來雲三尺。奇嶂玉如削。寒光何玲瓏。來照我吟席。呼婦急謀酒。定有乘興客。

和蘭王血戰圖

不費一丸帝業復。列翁威風撼嶽瀆。高處張陣必死勢、英軍孛軍膽先縮。和蘭兒子何雄豪。當此大敵氣不撓。先登躍馬衝硝霧、滿身鮮血灑紫濤、一戰挫折鯨冠軍。宜哉加爵列王位、綵畫即是功業記。向我誇耀當日事。君不見蠻奴不獨舟楫技。陸軍驍悍亦如此。寄語神國君子人。莫把虎狼比羊豕。

濱田彌兵窘蠻人圖

唾手直擒虎穴虎、々尾乍垂懦於鼠、短刀逼胸九寸氷。光芒凜耀海外土。有膽有智眞丈夫。冷笑荊軻劒術疎。一幅綵畫何用贊、艶說載在蠻人書、

曉櫻

不許世人容易窺。倩他香霧隔幽姿、遙觀朵々猶難辨。近賞梢々皆絕奇。漢殿煙深魂返早。楚臺雲散夢醒遲。名花第一精神處。在此春天欲曙時、

月櫻

誰言春月是朦朧。照到櫻邊更欲融。艶雪添光銀燭外。嬌雲無影玉簾中。孤標仙桂避三舍、酸態梅花趨下風、設使嫦娥能解語、呼君同入廣寒宮、

風櫻

雨態晴妝無レ不レ宜。被二風吹一所最多姿。飛紅亂點歌姬袖。殘粉輕浮詩客扈
鬪罷玉龍鱗尙活。飛來銀蝶翅逾奇。最憐嵐峽醉歸夕。香雪霏々鞭底飾。

雨櫻

雨絲無レ響曉纖々。漸見濕紅低壓レ檐。洛浦凌レ波粧更麗。華淸出浴粉猶沾。
不レ妨弱骨三分瘦。却覺嬌姿一段添。應三是東君殊愛惜一。朦朧深隔水晶簾

牡丹

天將二國色一壯二春光一。纔到二半開一人已狂。老去猶妍夏姬面。肥來更艶玉環粧
太平氣象在二樓閣一（牡丹有二天平樓閣名一）　富貴容華眞帝王。芍藥嬌柔海棠美。一籌終
是讓二芬芳一。

登二聖通寺山一二首

割據英雄事已空。巖花壍樹領二春風一。吟人今日遊山屐。尙競先登第一功
（細川賴之城跡在有焉）
鏡面晶々塵不レ浮。藻江十里細漣收。糢糊影並大椎戸。鬖髿光連雙眼洲
（海上有二一小島一俗呼曰二眞島一蓋眞日邦言相混言三其形如二兩眼相並一也）

初夏拉文山遊瀧鼻此日山神作會遊人雜沓

紙旗林立祭山神。農事些閑首夏天。十里平川人蟻集。綠陰深處漲紅塵。

咏三國人物十二首

三代以上士。四海第一流。莫是太謙遜。自比管樂儔。　武侯

髯也万人敵。虎威震九區。如防吳下狗。定識許都狐。　壯穆

火德光消後。扶孤氣尙雄。膨亨斗大膽。堪續子龍風。　姜維

孝非趙苞類。識豈汝南倫。當日鳳雛號。宜移贈此人。　徐庶

凝塚七十二。身後尙欺人。如麼老狐窟。三馬蹴爲塵。　曹操

猛威震合淝。誰不怖遼來。吳下紫髯子。看作呱々兒。　張遼

虎癡折衝雄。宛然樊噲風。惜哉好身手。不屬卯金翁。　許褚

罵人稱鸚鵡。猶有耿介氣。太勝俗英雄。一生唯狐媚。　禰衡

娶妻得美姝。擒敵得名士。江東多好漢。我慕孫伯符。　孫策

權也亦姦賊。末路不援劉。後人儘生子。勿如孫仲謀。　孫權

十艘油葦火。万艫吳江塵。何事惜餘焰。不燒銅雀春。　周瑜

魯公有遠籌。不肯惜荊州。誰知一短處。卽是三分謀。　魯肅

東坡遊二赤壁一圖

艟艨百万敵。氣勢撼二赤壁一。將仙毫端力。當レ之猶綽々。請看東來鶴。壓倒南飛鵲。

讀二晉紀一

曹鼎如レ塵唾レ手收。奇功歷代有下誰儔一。漫教二奴輩一續中貂尾上。忘却當初燒雉頭一。
万里中原半胡羯。一時人物只清流。南風烈々北風冷。呼作二小康一知幾秋。

忍池夏夕圖

小西湖畔晩涼多。買レ醉旗亭俯二碧波一。十里荷花無二寸隙一。池心何處浴二嫦娥一。

所見

白雲如二白蛇一來呑二象頭嶺一。半身呑未レ終。隱見夕陽影。

遊二廣田村一

新鶥聲裏綠陰肥。野服輕便細葛衣。嬌艶露沾山躑躅。猛香風迸二野薔薇一。
古城時拾草間瓦。幽寺閑敲崗下扉。節恰清和朋二莫逆一。吟遊兩日不レ言レ歸。
管城山畔好風煙。野服乘レ晴輕且便。友辨二行厨一作二東道一。奴諳二村路一著二先鞭一。
幽花離落金銀纈。嫩籜林間玳瑁鮮。此際吟遊殊覺レ快。新鶥綠樹夏初天。

納涼二首

一盤村味進瓜茄。小楊追涼臨水涯。螢是銀燈蛙是鼓。田家夜宴亦豪華。

爛々疎星在高柳。火雲入夜淨加掃。村翁有癖能談天。向我指南々北斗。

夷齊采薇圖

殷麥油々周粟肥。賢如箕子亦將歸。乾坤唯有西山老。滿谷春風採蕨薇。

陶淵明

擧世皆醒君獨醉。樂夫天命亦奚疑。一篇歸去田園語。不似離騷有怨辭。

揚妃調鸚鵡圖

不省中原煽戰塵。滿宮樂事領青春。牡丹花外白鸚鵡。應是前身姓武人。

則天武氏嘗夢爲鸚鵡

伯顏插梅圖

江南素艶擔頭新。受此香風滿馬身。却是郢州屠戮日。胸中不帶一枝春。

記事

甲寅（安政元年）七月九。潰決万農坡。激浪高過額。沛然誰禦之。西隣負父逝。東舍援嫂來。我家當其衝。三日懸釜炊。父老面如土。相對各攢眉。我田

已爲レ河。我禾全委レ泥。我雖レ免ニ其魚一。何以養ニ妻兒一。吾向ニ父老一曰。咄汝休ニ復悲一。

洛城回祿變。花土阿墨夷。請看王侯貴。亦不レ免ニ天災一。

正月十六日墨人入ニ浦賀一四月六日皇城火災

岸上村見ニ萬農水暴溢處一（安政元年六月作）

行感桑滄有ニ變遷一。風光觸レ眼悉悽然。村荒熟路疑生レ路。稼損豐年亦儉年。
古岸沙崩埋ニ柳膝一。層崖石墜壓ニ松肩一。人言近日重修築。治水誰能追ニ昔賢一。

西島之尤者善ニ修築一寛永中築ニ万農坡一云

雜詩

刧灰未レ冷坤輿震。天上瓊樓也不レ安。人道近頃無此例一。一年兩度動鳴レ鑾。』
火輪輾破大瀛波。幾度往來天一涯。堂上能諳蠻虜性。娶隅鞮鞻又蘭闍。』
山鳴海嘯浪華洲。滿港浮屍積作レ邱。澆季神風威力乏。當時不レ覆鄂羅舟一。』
欲下將ニ梵器一爲中兵器上。英略誰追周世宗。佛也有レ知應ニ一笑一。這回始得濟人功。

讀萬次郎漂流記一

異域山河裸人國。大瀛風浪捕鯨舟。當時不幸却多幸。蹈遍地毬全盡頭。

記ニ清人話一

誰招無賴大興戎。欲革垂々辮髮風。不蹈黃巾赤眉轍。一軍渾作黑頭公。

海上觀月

山中觀月々隱木。城中觀月月隱屋。觀月最好是海上。乾坤無物礙雙目。維時甲寅歲初秋。我向濠海試舟遊。今夕何夕眞佳夕。萬里鯨背纖雲收。須臾氷丸昇天末。漪紋鱗々光作活。俯臨船舷洗吾杯。大海即是瑠璃鉢。一盃吸金漣。直覺腸中書。字々皆皎然。二匠傾玉液。更覺胸中塵。一掃全無迹。三杯四盃豪興生。大呼狂叫魚龍驚。袁渚庾樓是凡境。何處有此愉快情。君不聞近來鐵帆時出沒。四邊擅風吹不竭。安得奪渠火輪船。太平海上觀此月。

伊達黃門

獨眼獰龍意氣豪。羣雄誰解共翺翔。老來猶有騰驤志。欲跨南洋万里濤。

黃門晚年有伐呂宋志見伊達譜

林子平

眼光爛射外洋天。五十年前先著鞭。太勝支那同姓客。海籌近日僅成篇。

淸林則徐譯海國圖志

神功后征韓圖

手攝紅裙渡渺瀰。三韓八拜一蛾眉。當時如有長驅策。縛取吳兒爲狗兒。

坂將軍像

雙眼是鷹鬚是虬。螢蠅一掃闢荒陬。公乎生出千年下。日本中央是墨洲。

大伴旅人

也是家皇禦侮臣。夙將黃鉞掃邊塵。幕天席地醉人態。休比竹林劉伯倫。

藤原忠文

手投七箸即東征。却恨賊氛容易平。胸底豹韜常鬱勃。愛聞廐馬嚼芻聲。

藤原保昌

畫中英貌尙桓々。功業當時定炳然。片時街頭三唳笛。餘音嫋々至今傳。

馬以下二首題畫

駿骨價千金。飛騰血爲汗。昇平二百年。馱盡幾痴漢。

唐伯虎詩有下駿馬每馱痴漢奔句上

虎

天下多妖狐。爭呈欺君術。咄々百獸王。今日勿輕出。

訪㆓松莊老人幽居㆒　老人善㆓國學㆒故句中用㆓和語㆒

愛㆓此紅塵々外居㆒。秋光況又夕陽初。窓間杵響仙家藥。架上墨香神代書。露壓㆓蜂巢㆒花冷艶。風吹㆓蛙手㆒葉蕭疎。幽人興味在㆓清話㆒。不㆑問㆓盤中芋栗虚㆒。

秋日郊行

剩暑威初薄。出遊宜㆓此辰㆒。胡瓜瓏㆓蛙背㆒。蕃菊綻㆓猩唇㆒。豐熟異㆓常歳㆒。暄和同㆓小春㆒。村祠知㆑作㆑會。一路有㆓紅塵㆒。

雨中留㆓富山生㆒

檐雨悄々細似㆑絲。半瓶白酒共論㆑詩。刀圭有㆑暇君宜㆑綏。正是橙黃橘綠時。

戲咏雜魚九首

馬鮫

相魚如㆓相色㆒。大者多不㆑宜。唯此馬鮫魚。肉豐味更滋。譬猶㆑美㆓人中㆒。亦有㆓玉環肥㆒。

鱸

松江好膾材。鮮碧爽㆓於秋㆒。唯向㆓櫻花鯛㆒。品格遜㆓一籌㆒。月旦如評㆑渠。鱗中第二流。

海参

東海生男兒(海参一名海男子)眇小三寸身。温柔雖無骨。風格非凡鱗。生翼飛千里。去爲海外珍。

鬼頭魚

鬼頭而虎鬚。稜々簇鱗角。獰貌雖如此。中孕豐腴肉。酷勝西子乳。利劍在其腹。

牛尾魚

牛尾魚初肥。江南橙熟時。雪片烹不融。澹中幽味滋。一種好容華。堪呼賽西施。

鰺

味魚眞有味。(俗呼鰺爲味魚)上番秋風初。乞醯膾其肉。枕丁皆可茹。家數雖頗小。亦是一名魚。

蛤

不用下鹽豉。天然風味宜。一種澹泊趣。如讀晩唐詩。隔墻聽賣聲。已思解酲卮。

章魚

壯年吾早衰。漸覺齒力虛。硬肉難快嚼。對盤空長吁。舊交海和尚。欲贈絕交書。

河豚

吳宮一妖物。埋骨五湖濱。艷魂凝不散。化成水族倫。猶將一寸口。欲呑幾箇人。

樓前有二老松冬夜風聲怒號往々不能寐

半夜松風怒。濤聲壓小樓。夢魂搖不定。陸處尚疑舟。

雪朝次坡公韻

尺餘積素壓檐牙。凍雀何邊覓覆車。疑聽蠶聲食桑葉。恰看狗跡印梅花。玲瓏銀國三千界。層疊瓊樓十万家。對此雪天豪氣發。醉談又到鄂羅叉。

尾張人金井敬次郎來訪時地震連日人皆荷擔而立因賦似

海立山崩已二旬。乾坤何處着人。勸君早向故鄉去。臥待綠楊城裏春。

名古屋一名楊柳城

呑象樓遺稿匏集（五）　乙卯（安政二）至丁巳（安政四）

讃岐　日柳章士煥著
男　恕　終吉輯

乙卯（安政二）元日

夷礮無ㇾ聲民意安。廟謨得失且休ㇾ論。春風万戸太平象。一盞屠蘇亦國恩。

福壽草

欣然含ㇾ笑賀二新正一。鶯樸衣裳染得ㇾ成。蘭在二譜中一非二異族一。梅於二盆內一結二芳盟一。朱門遷去身初貴。幽谷生來骨也清。自ㇾ是雍熙好花艸。呼爲二福壽一不ㇾ虛ㇾ名。

追悼阿菊忌辰

音容在ㇾ眼恨無ㇾ涯。墓下空憐一朶花。昨夜分明來入ㇾ夢。嬌魂知尙戀二爺々一。

謝三虛心道人惠二梅花茶一。

林僧好事製茶新。透紙清芬更勝ㇾ花。桑苧孤山兩風致。一時併得入二詩家一。

苗田路上

風箏聲裏日輝々。行覺春寒漸霽威。鞋底新芽皆可ㇾ摘。薺蒿柔嫩碧芹肥。

礮臺鼎峙壓鯨濤。品水東頭覇氣高。塡海成山眞可駭。射潮鞭石未爲豪。
人言一夜地生瘡。誰識万家民出膏。今日武城嚴守備。割雞何害用牛刀。

英人戎裝圖

猩色光生十字旗。火槍大砲甲西陲。譎謀嘗挾芙蓉毒。武力將凌韃靼兒。
輕捷操舟鬼漆黑。嬋妍跨馬虎胭脂。東方男子多英傑。擒此人妖今有誰。

鄂羅人圖

一母五兒遙貽謀。直將腴乳漑諸州。投鞭欲斷黑龍水。築塞斜臨蟠虎洲。
截浪快船鵬万里。閃風彩幟鷲雙頭。北門鎖鑰今嚴否。枉使閑人擔杞憂。

皇城造築圖

劫火全消瑞靄開。帝居氣象亦雄哉。築臺周室非逃債。遷駕漢宮緣避災。
両殿規摸仍舊貫。四門經始擇良材。堪知皇澤人人浹。万國庶民皆子來。

象山萬福院觀花二首

嬌櫻圍繞梵王臺。金碧焜煌相映開。鶯語宛傳仙境樂。春風不帶世間埃。
客從下界如雲湧。花向諸天作雨來。解飲山僧多韻致。任他一杵暮鐘催。
春光綉出梵王城。綺麗莊嚴天造成。容有風流買島佛。盤供澹泊東坡羹。

訪二秋山仲禮一分得二消東一　仲禮善二國學一故句中用二和語一

子日纔過暖意融。吟遊來訪讀書櫳。詩才君得菅家髓。酒癖吾追伴氏風。
七種菜心抽二嫩綠一。八重梅蕾綻二輕紅一。不レ妨歸路將レ漸夜。春在二朦朧澹月中一。

同二劉君鳳一遊二銅華表一

伴二得吟翁一擬レ詠歸。銅華表外靄斜暉。雲開天鵠皆高擧。風弱鳶猶怒飛　。
數片櫻花遊妓袖。一株柳色酒人扉。好携二餘興一買二微醉一。薄暮輕寒襲二袂衣一。

小瀧水亭呈二劉翁一

巖泉遶レ屋響琤々。樹氣侵レ簾酒影青。恰有二能書王逸少一。不レ妨呼作二小蘭亭一。

讀二米利堅志一

鑿二得山程一砥樣平。一條鐵路轍痕橫。不レ須二人力一不レ須レ獸。轣轆烟車自在行。
闔國不レ知二飢與一レ寒。高橋華屋競二奇觀一。更施二巽術一防二雷火一。戶々門前長鐵竿。
醫典聖文致有レ餘。咿吾聲起滿村閭。盲人摸索猶堪レ學。一程親鐫凸字書。
近來產出木綿花。品比二外洲一佳更佳。閑却纖々紅女手。倩二他水力一轉二繅車一。
戒飮簿中題二姓名一。幾人從レ此廢二杯觴一。春風寂々華盛頓。無二復酒旗花外颺一。

品川砲臺圖

花垂瓔珞搖繁影。鶯奏笙簧曳艶聲。忙了老僧閑了我。繩床半日緩傳觥。

讀南北史小樂府十二首　錄五

殺僧如坑儒。佛貍亦英雄。恨宅生稍早。不嚇蕭老公。」
長城二千里。雄略亞嬴秦。不比南朝主。自壞万里城。」
江南好臣多。百年一易主。不怪天上象。當時曾應虜。」
汝父雖似龍。稱臣獨低首。何物鮮卑兒。罵帝如罵狗。」
誰遮百升月。容易奪陣老。可憐暗主暗。也似盲公盲。」

遊桃山二首

出遊輿動艶陽天。綠酒紅魚紫色氈。半日餘閑寶無價。一雙好友璧相聯。
野桃新綻含嬌靨。山蕨漸肥張老拳。更有溪娘能識而導。吾吟眺絕佳邊。」
市門一出輿相牽。春美歌鶯眠犢邊。幽境宛同盤谷路。孤村別闢武陵天。
山迎舊識皆含笑。花遇新晴益覺妍。對此風光却多憾。曾遊閑侶已成仙。

十年前與雪航翁同遊

法然堂在宮田村

偶逐遊春侶。來敲幽寺扃。晴邊山不俗。僻處佛無靈。松杉高過塔。櫻花低

拂レ庭。野還解レ事。煮レ茗洗二餘醒一。

暮春遊二西讃一途中口占

櫻雲梨雪已成レ塵。雨後風光都一新。唯有溪鶯聲未レ老。綠陰深處喚二留春一。

觀音寺

彈琴山下古名區。一簇人家沿水居。林寺晨二炊松露蕈一柳灣晩網鰯條魚。

有明浦

讃西多二勝景一。此地最宜レ詩。沙白絶二纖芥一。松皆無二俗枝一。月來人不レ覺。潮進鳥先知。咄々彼都士。唯誇妓浦奇。

不動瀑 在二岡本村一瀑下植二鳥桕一

桕葉滿山新綠濃。一條飛瀑掛二其中一。土人艷說秋霜候。紅錦堆邊見二白虹一。

藤川伯孝要レ我舟遊

輕刀破出午灣烟。鷗背波連万里天。醉臥二蓬窓一不レ堪レ快。恍然疑レ駕二火輪船一。

墨船賓服蝦船退。邊海風收波浪平。正是英雄無事日。好將下鯨飲一鬪中吟觥上。

贈二森田節齋一

睨二破乾坤一比二芬壘一。風情爛熳出二天眞一。五噫高曲恰攜レ婦。一代狂名殆動レ人。

氣岸世推鸚鵡稱。筆鋒敵避虎狼秦。兩都文柄歸誰手。豈可沈酣學伯倫。

送植田文藏還備中

鶯春雁夜屢相逢。何料一朝還備中。從此皆宜樓上酒。與誰相對說英雄。

綾南路上

菱絲荇葉媚清漣。四月薰風綾水邊。老鶴馴人閑不動。雪然蘸影夕陽田。

曉發高松

驢鞍載夢出城門。遠樹如烟曉色昏。五劍山頭光乍動。紅暾輾上大於盆。

初夏夜歸

穿籬燈影幽。農戶澹烟浮。何處梔花發。香風撲馬頭。

朱竹　以下十二首題畫

七賢與六逸。紛々皆酒徒。此君被渠醉。翠臉化成朱。

月竹

渭川綠玉君。一夜聘嫦娥。應是迎輿物。千纛影婆娑。

放翁竹詩云風梢千纛亂

松

獲レ壽霜後葉。虬影月中枝。千歲不レ如レ老。依然十八姿。

蘭

春風幾紅紫。見則思ニ酒肉一。唯此君子花。相對使ニ人肅一。

黄庭堅詩蘭似ニ君子一蕙似ニ美人一

菊

世間愛菊客。多是贋彭澤。花也儻有レ情。笑倒秋風夕。』

傲然不レ畏レ霜。可レ稱秋花王。滿身光爛燦。穿得錦袍黃。

蓮

雖レ在ニ淤泥裏一。不レ妨妍麗容。花中眞君子。也有ニ柳惠風一。

蝸牛

八字橫ニ雙角一。不レ妨牛作レ名。果然多有レ力。到處負レ廬行。

野菊螳螂

秋芳如ニ許艷一。螳也何所レ嗔。知汝奮ニ巨斧一。欲レ禦折花人。

蟬

樹杪吸ニ清露一。夙傳高潔名。如何猶誇レ藝。聒々發ニ繁聲一。

蝶

愛花如性命。羨汝太風流。狂舞翩々態。一生不帶愁。

蛙

夙興鶯爲伍。汝身亦有榮。如何脹其腹。漫作不平鳴。

夏日即事二首

涼氣透衣幽夢驚。離々松影枕頭橫。樓窓三面皆風路。畫幅吹飜壁有聲。

雨餘殘霧白濛々。界破前山半作空。獨有雙杉埋不得。碧尖對矗夕陽中。

象山有二大杉

松莊老人病後久無消息忽然來訪喜賦

一別三旬如隔年。忽聞竹杖響鏗然。殆疑賈島已成佛。始喜東坡未作仙。身似梅花癯更健。詩同楓葉老逾妍。蕉窓舊友唯君在。休怪相逢醉語顚。

雨後稍涼蟲聲可愛

一番涼信入幽叢。露下新聲種々蟲。應是秋皇仙蹕近。玉鑾遞響滴丁東。

借秋山仲禮所寫水史賦以謝

六國史後正史無。馬臺文章久榛蕪。彤管僅歸才女手。青史空屬浮屠徒。

東鑑俗陋猶錄レ實。平家紛厖漫記レ虛。降至二南北分爭後一。謏書穢史亂紛如。誰洗二此陋一正二紀律一。煌々西山義公筆。文如二馬史一豐而縟。法似二麟經一嚴且密。誅心不レ容姦賊罪。發幽能肉二忠義骨一。秋山仲禮若爲人。白首耽レ史極二精懃一。一部大書二百卷。紙々膽寫費二精神一。我生僻境乏二書籍一。井蛙管豹寡二見聞一。憑レ君一覽千古事。瞭然神武以來春。君不レ見昭代偃武奎運起。史壇輩出英俊士。請君扱レ載別成レ隊。六國史外添二一史一。

阿菊手栽菊着レ花

一去嬌魂呼不レ歸。餘香僅在二折餘枝一。寒花含レ露嫣然影。現出病中淸瘦姿。

雜詩

柳子從來性僻人。平生百事背レ時人。讀書不レ學讀書人。飮酒還嫌飮酒人。

冬夜

陰霾天難レ定。奔雲多變レ容。霰聲猶在レ竹。蟾影已離レ松。

除夜（安政二）

三十九年彈指中。雪聲梅影又春風。今宵小刻猶堪レ惜。纔到二晨鐘一卽是翁。

丙辰（安政三）元日

貧巷無二人賀一元朝閉レ戸眠。起從二鳴雀後一吟在二早鶯先一詩始用二翁字一心猶同二少年一。前途渾不レ問。把レ盞且欣然。

四十自祝

花前狂舞尚如レ童。月下豪遊未レ稱レ翁。誰レ笑吉叟唯願レ死。人生四十好春風。

悼二鶴翁一

豪氣如レ霓戛鑠翁。訃音乍到感何窮。十圍大腹韓公態。三尺長髯蘇子風。文底文章非二刀露一。胸中籌策自英雄。時平利器無レ由レ試。老病懸レ羞牖下終。

早春訪二松莊老人一

舊社飄零半似レ雲。又看草色滿二新墳一。早春殊有二關心事一。不レ問二梅花一先問レ君。

遊二上高野桃園一。

春風吹蕩酒人魂。遠向二桃花溪水源一。細路多岐何用レ問。紅雲曳レ影夕陽村。」
桃花缺處菜花鋪。中有二人家似二畫圖一。試登二高處一縱二吟眼一。一幅全然祕景無。」
牛欄鷄塒兩三家。紅霧堆中接二竹笆一。羨此山農好生計。一村無二處不レ栽レ花。」
張郎醉舞李郎歌。花下開レ筵各處譁。豈料歎紅塵外地。春風有二此小繁華一。

論詩十首（錄三）

幾人爭鑄黃金像。早向詞壇開法門。豈料生前已成佛。偶辭任口萬瀾翻。」

字磨句琢悉珠璣。丕變鎮西浮泛詩。琅誦誇人亦何害。一家風調十分來。

末句戲用東坡答郭功甫語

謔柳嘲花字々香。知將堯水洗吟腸。風姿嬌艷心情黠。也似京華好女郎。

雙松

呑象樓前兩樹松。蟠株聳幹鬱嵬々。雙龍爭攫一輪月。萬馬奔過半夜風。休言閑裏無佳伴。此三十六箇公。

象頭山

巨象何年化。雄蹲尚宛然。春容柔可撫。曉態穩於眠。新月磨牙出。一燈如眼懸。欲看眞面目。宜及雪晴天。

春夜與劉君鳳飲芳橋樓

歌管聲初定。樓々漸寂然。春人微醉後。夜景艷陽天。柳色黃於月。櫻花白欲烟。良宵可憐愛。酒罷未思眠。

春郊暮歸

杏花梢外彩霞流。薄暮春郊人未休。一縷東風吹有力。紙鳶高跨遠山頭。

遊春漫興

春雨晴時春服成。春風吹動出遊情。松間野寺涅般佛。竹外村莊彼岸櫻。
馬載醉人行欵段。蝶追粉妓舞輕盈。書生亦自非寒乞。猩色氈毹坐喚觴。
千金難買一朝晴。百事抛來隨意行。金碧光搖霞外寺。臙脂紅濕雨餘櫻。
春如短夢半無跡。人到中年猶有情。正是江南二三月。緋魚紫蕨入清羹。
清明時節恰晴暄。枯坐寧能獨掩門。遊騎鞭聲芳艸塢。女郎釵影夕陽村。
輕風媚柳全無力。細雨沾花微有痕。妝點春光絲與竹。不妨一曲侑金樽。

貍奴

拳大小貍奴。狂嬉不跳定。微風深院春。走捕飛花影。

富士圖

大華峯頭十丈蓮。漢兒虛語古來然。知否扶桑大國裏。芙蓉一朶聳晴天。

新晴登麻山吟望絕佳

蓊蒼幾穿望豁然。遠眸無物不嬋妍。藤黃藍碧春如畫。油菜園連牟麥田。

八幡公追貞任圖

苦戰經年紛亂時。從容留馬碧江湄。助他一縷纖々命。且續腸中五色絲。

新羅三郎吹笙圖

玉笙一曲想二英風一。彩鳳聲揚明月中。不レ讓二阿兄一當二此際一。邊城目送暮天鴻。

樓上雜題

好山當二我樓一。雨後綠如レ浴。清曉起凭レ欄。新詩手可レ捉。

黑龍長幾丈。蜿蜒過二前嶺一。捲レ簾暫熟視。始識是雲影。

酒罷客皆散。寂々南樓夕。欲レ讀々殘書。松間大月白。

林風吹葉盡。秋巒瘦二嶒峻一。嶺祠全露出。熠々數星燈。

遠街犖動息。夜意不レ堪レ閑。佛燈光尚在。點綴雪中山。

紛々稚穉子。莫レ叩二我柴關一。我方有二公事一。高枕見二青山一。

蠶豆

夏初蠶豆味尤眞。好賞頭番比二美人一。只恐鉄漿將レ染レ齒。知他碧玉是前身。
芳膚脱レ莢猶柔嫩。綠顆登レ盤太斬新。堪レ笑貪饞汪家叟。漫將二秋蟹一作中同倫上。
豆秋末蟹二物登レ盤不レ思多味

松蕈

松陽氣蒸黃玉抽。天將二珍味一賜二南州一。蟄地靈龜首猶縮。含風寶麝氣將レ浮。

已教群蕊避三舍。不許仙芝出一頭。品評好配櫻鯛美。壓倒吳江千里秋。

苦熱

矮屋小於甑。難容五尺躬。午炎人欲黑。夜熱月猶紅。汗外絕無雨。扇頭僅有風。天公何下策。着我火攻中。

驟雨

怒雨搖天地。不知飜幾盆。萬山皆縮首。一鳥殆飛魂。電閃金龍戰。雲驚黑馬奔。坐來詩膽壯。倚杖立南軒。

即事

暴雨乍開霽。稚筠搖細颸。驚蛛心始定。閑補斷餘絲。

夏夜步月

月色白于霜。林庭夏猶冷。稚兒誤爲眞。欲拾梧桐影。

咏隋史人物十二首　録五

枉斬青溪桃李膚。禍根他日竟亡軀。惜君黃鉞平陳日。不學五湖范大夫。

高熲

黃斑青馬勢騰驤。五百輕兵發壽陽。不恠威容難仰見。後身即是閻羅王。

韓擒虎

十策平陳皆絶奇。藤麟閣上好風姿。漫將矜伐招飛禍。記否爺々刺舌時。

賀若弼

呼爲鐵杖果超倫。曾是湖山嘯衆身。壯氣稜々眞可愛。英雄何必讀書人。

麥鐵杖

輕捷如猿空裏懸。一時呼作肉飛仙。他年峻節驚人目。也似幡竿高聳天。

沈光

牽牛花

纖麗天衣誰織成。塵間降謫可憐生。嬌心不惜一朝命。細蔓長纏千縷情。
孕露紫嚢張欲裂。受風碧傘弱將傾。畏他俗眼來看殺。纔過清晨已歛英。

晩晴樓寓中雜咏

書課終時例喚觴。半窓樹影又斜陽。盤中不用城中物。綠芋紫茄秋味長。
秋霞報霽曳胭脂。正是晩禾黃熟時。明日隣人應有事。磨鎌聲出槿花籬。

同野田笛浦翁登聚遠樓

繡簾畫棟聳清秋。此日有緣來一遊。呼吸生風通帝座。覽觀無物礙人眸。
瑠璃水色連三備。錦綺霞光分七洲。有客才華似王粲。好勞綵筆賦登樓。

佛嶺殘月　天草十二勝之一應永野某求。佛嶺是州藤肥州與木山某合境地

佛木峯頭古戰場。英雄壯氣未蒼茫。一枝缺戟稜々影。留在松間殘月光。

酒　六首

古人皆愛酒。今人豈負酒。可憐無福人。一生不飲酒。

無酒月非月。無酒花豈花。是此酒世界。不飲可如何。

欲知極樂路。宜把杯中物。吾家高祖師。南無米汁佛。

世濁酒猶清。一醉可忘身。況此清平日。莫學猶醒人。

無肉使人瘦。無酒使人俗。坡公應低戶。開口輙說竹。

飲則使人病。不飲如愁何。善哉邵康節。飲酒喜微酡。

小楠

半壁山河繫此身。君王何意賜佳人。獅兒唯識人爪牙用。不戀鴛鴦被底春。

新田義貞

武野原頭落日斜。當時遺恨逸長蛇。一軍團扇傳餘馥。打破紅梅滿兜花。

脇屋義治

臨宴悽然感幾人。寧馨兒繼阿爺勳。弱齡才己非偏裨。好擬當年南霽雲。

畑時能

鐵驪鮮甲畑將軍。猛氣橫飛鷹壘雲。麾下殘兵唯一犬。笑當百万虎狼群。

篠塚伊賀

追騎聞名辟易回。万人敵手氣雄哉。滿船大舸轟々響。也似當陽橋上雷。

冬日雜題

四十無聞事已休。擁爐兀坐似詩囚。醉歌老驥猶張膽。眠伴痴猫唯縮頭。乾葉有聲時觸瓦。寒風得力乍搖樓。近來也沒消閑策。戲倣時髦議海籌。

卅歲光陰一逝波。稜々傲骨漸消磨。輕狂曾稱驚蝴蝶。老拙今同疥駱駝。世事著人唯好々。酒場辨敵尙多々。漫然未定終焉計。如此鬢邊新雪何。

一擲千金彼一時。蠹書叢畔了生涯。梅花帳裡朝捫蝨。芋火爐頭夜倒卮。老矣何歎生髀肉。久哉不夢見蛾眉。近來唯有好奇癖。迎客先談亞墨夷。

悼髯虎

矮脚踈髯老兀顚。十年來作柳家奴。絲毫他日畫吾像。添汝梅邊擔酒圖。

除夜

攻人債主似戈矛。半夜紛々猶未休。我是華山避亂客。眠從年尾到年頭。

詠鶯

雪底辭幽谷。春風到處隨。戴雨梅花笠。織烟楊柳絲。嬌喉珠宛轉。新翠錦離披。憐佗好情性。一世不知悲。

早春出門

一川淺翠水成漣。正是杏前梅後天。知道春光有分界。象山猶雪飯山烟。

賀藤川伯孝四十初度

世俗壽言套語耳。龜鶴松竹漫比擬。我今祝君異其撰。不說長壽先說死。方今吾邦雖昇平。東有亞墨西有英。虜情窺覦未可測。此時志士豈忘兵。君今四十方強壯。有膽輪囷才縱横。万一猶風吹邊海。好試利器建功名。君不見人生上壽不盈百。々年義娥一瞬息。不如留名青史中。千秋万歲無終極。

登白峰値雪遂宿僧房

自笑詩人太好奇。衝寒早起出柴扉。一簑風雪畫中景。擔得梅花上翠微。』
行々漸覺足心酸。一磴穿雲螺樣旋。出樹老巖形似犬。避人暫立恠巖巓。』
一簑衝雪入僧房。寒透吟身凍欲僵。怪來氣候須臾變。吟肺春温般若湯。』

林僧愛レ客有二風情一。寶器誇來供二品評一。源將餘威雙股鐵。崇皇遺愛一枝笙。

孤僧出定夜將レ分。魑魅語レ幽廊下雲。清氣逼レ人眠叵レ着。佛燈影裏坐論レ文。

觀二細川清氏戰跡一碑

搏レ人如レ投レ礫。威猛誰敢當。々初早歸順。一死骨猶香。彪々英雄漢。不二是北方強一。

林田村

十里平疇牛蔗田。尖頭屋外老牛眠。此鄉眞個砂糖海。各戸春風靄々煙。

坂出

砂糖海出二洋書一

家々煮二海鹽一爲レ業。鹽味雖レ辛業不レ辛。請看蕉技洲畔景。化爲二花柳陷頭春一。

覇王樹

昂然覇王樹。奇狀非二凡種一。鱗甲尙遍身。大風吹不レ動。

題畫五首

崖樹皆櫻花。嬌雲埋二溪口一。樵路在二其間一。左擔不レ得レ右。

釣罷回二漁棹一。春汀潮已退。支流淺尺餘。舟帳落二花背一。

薄暮繫㆓漁舟㆒。風漪緣始定。網中不㆑見㆑魚。搖動青山影。」

楓灣收㆓晚霽㆒。紅雨滿㆓蓑笠㆒。點禽意在㆑魚。沙外睨㆓人立㆒。」

崖松低欲㆑墜。明月在㆓其枝㆒。漁舟時撒㆑網。閃動金漣漪。」

二月七日踏㆑雪趁㆓長尾子德約㆒途中口占

曉向㆓東村㆒快雪晴。三杯卯酒壯㆓詩情㆒。鞋痕恐涴㆓瓊瑤路㆒。故逐㆓前人踏處㆒行。

送㆔井上樛谷之㆓東都㆒

蠻帆無㆑影瑞氛新。海上東風不㆑動㆑塵。好云皺臺々畔路。鶯花依㆑舊錦城春。

宿㆓觀音院㆒

嬌鶯啼近碧窓紗。欲㆑枕閑思半椀茶。未㆑待㆓晨光㆒天欲㆑白。玉蘭一樹滿身花。

小早川黃門

幾局兵機觀不㆑迷。猴公多智亦輸㆑才。暮年一著最高手。續㆓得宗家血統㆒來。

豐公嘗圍㆑棋欲㆑敗謂㆑人曰雖㆑有㆓隆景之智㆒如㆓之何㆒

島津薩侯

猛氣橫飛薩國軍。一時撼動鎮西雲。此中猶有㆓敬箴意㆒。壁上畫來亡國君。

島津龍伯臥室之壁畫㆓和漢人兇暴亡㆑國者㆒以自警云

伊達黄門

驚レ人礫柱金光爛。入洛軍裝錦樣紅。胸襟磊落好男子。不レ負豪華一世風。

細川幽齋

四海虎狼吞攫時。獨耽二風雅一捨二君誰一。滿城飛箭流丸底。天使殊傳二鳳詔一來。

本多佐州

魚水相遭帷幄中。張之輩豈同レ功。輕輿團扇高風度。不レ害呼爲二諸葛公一。

大阪之役佐州乘二竹輿一持二大團扇一

板倉伊賀

公事謀レ妻楚優孟。虛心稱レ子晉祁奚。斬レ將搴レ旗多少士。孰如餘澤及二黔黎一。

本多中務

嶽々高抽鹿角鍪。品評恰好比二唐頭一。一枝長戟有二佳號一。截取蜻蜓六十州。

伊井兵部

鎧光如レ火爛生輝。赤色夜叉振猛威。却是他年入封日。春風吹レ暖木綿衣。

伊井中將

國初誰不レ策二奇功一。事々驚レ人最此翁。袖裏山河百万石。一時收盡火爐中。

村松芳休

半夜城頭尺八聲。可憐壯士解二風情一。餘音嫋々有二餘力一。吹落松間一片櫻。

武田信玄死前賦二松間花一其句爲レ讖云

加藤左馬

鉄袖凌レ波如二電光一。直將下二隻手一奪中艨艟上。這般驍捷好身手。可レ謂近時源九郎。

眞田大助

憐殺離レ爺獨入レ城。三軍鎧袖涙痕横。芳名彷彿小楠子。櫻井櫻門同一情。

塙團衛

百戰場中手運レ矛。豈圖此漢亦風流。請看天外闘鷗鳥。曾作二人間老鉄牛一。

初夏郊行

菱葉一灣新水。剣花十里平川。南晴驕雉聲健。泥滑耕牛跡圓。

首夏觀二紅魚網一八首

四月江南花悉殘。滿山櫻葉緑成レ團。春風猶在烟波裏。錦樣紅鱗纈碧瀾。』
櫻鯛時節恰牢晴。海國奇觀誰不レ驚。新波十面如二鋪錦一。魚背鱗々蹈可レ行。』
晴波如レ熨夏初辰。鯛網遊觀豪興新。説向都人應レ不レ信。一時唾レ手拾二金鱗一。』

一張一欹兩輕舟。快櫓排波蜈足稠。中有髯叟是漁長。白麾披拂立舷頭。
截波長網合成圍。正是逃鱗路極時。水面漣紋看漸蹙。碧琉璃變淡胭脂。
万鱗入網勢猶豪。潑剌有聲飛欲逃。時有馬鮫相錯雜。黃金尺裏閃銀刀。
隨例先投酒一壺。船頭正是下罾初。漁人自有豪心性。酬我瓊瑤三尺魚。
烹治何用易牙手。潮水和來尤可口。風味天然在濟中。不須塩酪不須酒。

塩飽島

維昔豐公西伐年。島民一半伍中編。遺風今日猶傳得。巧使荷蘭蒸氣船。

富家松浦往歲所插門松生根翠色鬱然使予咏之卒賦以賀

松浦主人性愛松。吟嘯不離松陰中。春初隨例插雙松。一夜生根鬱葱々。
秦皇之五鄭家七。豈與此松得儔匹。一年三百六十日。々々瑞氣如元日。
主人迎我求松詩。我且妄語君聽之。君身如松長強健。君家如松久蕃滋。
嗚呼惡魔窮鬼何得窺。兩個蒼官衛門扉。

高松

漢家宗室武威隆。形勢依然舊要衝。士氣秋高鷹在臂。民風春穩鶴巢松。

蒼波北擁雙稚戸。雄嶽東臨五劔峯。礪帶有レ盟長不レ變。名藩十二万提封。

九龜

慶澤三十六世間。江源一派舊濤浸。畫甍骨射琵湖水。紛堞今臨筆海灣。
山近二象頭一多二勝景。城依二龍背一小仙寰。行人休レ說大津事。當日孤軍難更艱。

羽間川打二香魚一

一隊漁人裝。柳陰提レ網立。旱川淺寸餘。香魚手可レ拾。
淺瀨水粼々。風微不レ皺レ碧。黠魚巧避レ罾。側身偎二幽石一。

汐木路上

梅霖初歇處。風景尚柔嘉。䆉秬綠尖嫩。藻蓀紫必斜。牛歸人讓レ路。水漲蟹登レ沙。吟步多二幽趣一。長堤十里霞。

託間浦觀二漁舟一

漁艇輕二於葉一。往來斜日灣。並時如二一字一。接處似二連環一。櫓影蜈浮レ水。帆光鷺掠レ山。江叟汝何福。釣二此畫圖間一。

夏夜飲二紅艷亭一示二廣瀨林外一

綠陰深處酒人莊。卜レ夜淸遊也不レ妨。竹徑蚊軍風外潰。秧田蛙市月中忙。

杯因久坐殊呼小。話對新朋自覺長。快極胸襟渾似洗。歸來何用解酲湯。

燒賊行

殺我使人奪我貨。何物蠻奴作我讐。事徹台聽赫斯怒。奉命者誰有馬侯。劍氣衝天待賊來。長崎港外高鋒頭。初遣志士試狙擊。賊也有備防其謀。更聚漁舟試火攻。賊也察機拒其籌。遂乘暗夜襲賊船。攻具唯用鉄鎖鉤。攀艫登艣何容易。刀下亂飛血髑髏。賊舶擾亂失戰機。鯨尾欲棹不自由。舶中有砲不能發。船中有劍不能抽。我兵於火助軍勢。礮室破裂迸紅毬。蠻奴三百不餘一。片時滅作海上漚。大府賞之賜寶刀。偉功近代絕匹儔。是此快事在何歲。慶長十四己酉秋。

白秋海棠

粉面含羞葉底垂。大眞不復舊容姿。臙脂一洗馬嵬雨。瘦盡當年豐艷肌。

戲咏東海夫人

內紅而外紫。夫人何嬌美。倩誰作良媒。爲配海男子。

戲作黑面詩

我面黎而黑。墨水誰染成。十年磨不磷。其色如鉄鐺。不是荊公䵟。却似英

存鯨。人言黃昏後。不レ語不レ知行。六郎蓮花麗。夏侯玉樹淸。試以二我面一比。氷炭迴異レ形。面也汝何物。於我太無レ情。面子赧然曰。君論恐未レ精。君面雖然黑。君心却不冥。白雪白何益。玄牝玄自靈。請看堅白論。不レ及大玄經。驍名千古轟。吳門墨牡丹見畫舫錄風流一時馨。美人玄妻號。福神大黑名。此外史籍上。黑面幾豪英。君且聽二我言一。莫レ爲二不平鳴一。君也才雖レ粗。終非二白面生一。

櫻町中納言

獨惜東風禱二鬼神一。櫻花知己是斯人。當時華族誇二濃艶一。不レ及君門一種春。

牡丹花老人

不レ作二浮屠一不レ作レ儒。牡丹花外自安舒。一雙牛角黃金燦。敢掛尋常西漢書。

鳥井强衛像

强衛死二于長篠一事太激烈後人慕レ之畫レ像以祭予鄉人有レ藏レ之者一題以二四十字一

壯氣辭二孤壘一。一身當二萬槍一。君家多激烈。此子最剛强。大節唐劉感。純忠晉解揚。遺容誰不レ敬。凜々挾二秋霜一。

贈㆓中村恭平㆒

泰西抄理大精明。嘖々人傳才子名。滿腹文章皆蟹字。醫家壇上好橫行。

秋水老人來訪賦贈

秋水越後人一稱㆓玉暮秋㆒嘗遊㆓松前㆒有㆑詩曰海上寒柝月生㆑潮涉際連檣影動搖從㆑此二千三百里北辰直下建㆓銅標㆒

長劍秋寒老氣橫。北辰直下遠傳㆑名。一篇警句人爭誦。綽號宜㆑呼㆓玉海城㆒

秋水老人談㆓蝦夷事㆒因記㆑之

荒僻風光入㆑話新。瞭然氷谷雪嚴春。大熊攫㆑馬獰如㆑鬼。老犬牽㆑船巧似㆑人。

即事

秋霜初放㆑晴。蕈價賤如㆑芥。村市黃昏後。聲々猶叫賣。

重陽與長尾子德遊㆓大麻山㆒歸路飲㆓紅艷亭㆒

登高歸路興猶長。笑叩㆓林亭㆒呼㆓酒觴㆒。醉倒白衣黃菊典。紅裙堆裏作㆓重陽㆒。

子德爲㆓其鄉孝子德藏製㆓一帖㆒乞㆑詩

德藏眞孝子。子德亦快人。一鄉出㆓二德㆒。果然德有㆑隣。

賀㆓高口子元新築㆒

聞君新築㆓讀書臺㆒。畫棟豐楹絕㆓點埃㆒。舊燕早知移㆑壘到。好山如㆑笑入㆑門來。
種㆑梅閑圃鋤㆓明月㆒。置石幽階養㆓綠苔㆒。何日身爲㆓不速客㆒。南訂坐喚煖房杯。

謝三高木藤馬惠二韓墨匾一　鯖子俗呼曰二韓墨一蓋以二其形似一也。

魚子製成韓墨樣。登盤恰好助二斟吟一。廚中且倣畫家法。寸々斫來如レ惜レ金。

畫家有二惜レ墨如レ金語一

森田節齋年過四十甫擧二男子一賦レ此以賀

老蚌生珠殊可レ憐。書香一種好相傳。膝前撫養未レ爲レ晩。君少二黃公一五十年。

元黃公九十始生レ子

眼鏡

無瑕雙寶璧。論レ價實連城。拭去纖塵盡。懸來兩日明。青光眼中動。白氣鼻端生。這樣品々物。誰呼靉靆名。

可兒才藏墓

半生驍名艸木知。幾人下レ馬問二殘碑一。我來且學桓温語。將レ謂可兒眞可兒。

即事

蔽レ天暴雨來。觸レ屋聲々急。飛點不レ沾レ窓。始知是木葉。

題畫

黃昏買レ酒向二城東一。一路歸來烟已籠。待我細君應レ斫レ膾。鳴刀聲出二荻花中一。

半篷飛雪漲二銀沙一。携レ鶴歸來溪上家。忍レ凍柴門猶未レ入。簑衣脱却蔽二梅花一。

呑象樓遺稿絶集　了

戊午（安政五）元日

不著麻衣脊雨肩。雖逢元日尙淸閑。醉上高樓先一笑。吾家賀客是靑山。

梅

春寒出奇兵。桃李皆失魄。抵敵唯梅花。一枝横鐵戟。
花中巢許輩。眞有氷霜操。王位讓牡丹。不肯稱尊號。

美人雜咏

辨内侍

想到聖賢尤是奇。何國才俊出娥眉。官家如解設新障。好把臙脂畫此姬。

佛妓

曇花一咲入蓬壺。多少嬌嬈色欲無。早把袈裟代羅綺。果然佛也不凡夫。

巴姬

蕪陣娥眉力拔山。紅粧綠鬢跨金鞍。美人也是万人敵。莫作虞姬一樣看。

尼將軍

覇業三朝春夢中。菱花買取術何工。果知悍婦威如虎。驅使英雄鬼武公。

常　盤

擁護孤雛暫忍羞。鴛衾幾夜進温柔。佳人自有娥眉斧。暗爲夫家謀復讐。

梶　原　婦

嬌櫻折盡幾枝雲。紅頰映花々更新。想見洞房春色美。風流相對箙梅人。

西臺翁主　鹽谷高貞妻

命薄似雲顏似玉。千秋涕涙襲衣吟。貞魂不學夫家樣。暮北朝南反覆心。

勾當内侍

消盡英雄胸裡鋏。纖々眉斧何嬌絶。鴛鴦被底一團春。醸出越山幾尺雪。

財田路上

阪路低來井底行。樵扉獵戸樹梢横。山茶花在斷崖上。紅雪撲人時有聲。

春晚

花氣滿山濃似霧。嬌鶯幾囀不知處。吾樓一刻價千金。不在春宵在春曙。

漫成

欲求千年壽。唯須讀古書。羲皇以來事。瞭然目擊如。欲畧萬國地。唯須閲

地圖歴々五大洲。掌中可卷舒。二事在案几。不勞又不劬。惜哉秦漢主。不知有此娛。

蛻巖翁百年忌其裔某開筵于柿本祠乞詩於四方賦此以寄

蛻翁亡後乏佳篇。赤浦風煙久寂然。好把黄金鑄遺像。歌仙祠畔祭詩僊。

大石太夫舊宅櫻花

夜斫仇門雪幾石。刀槍相映滿庭白。餘光留在一株花。百載依然照舊宅。
國士名葩兩絶倫。餘芳薫徹赤城春。櫻花今日添佳典。不説樹陰投宿人。

楠公墓前櫻花

瓊姿玉立湊川隈。好照英雄戰骨來。彷彿岳公祠畔樹。花枝今尚向南開。
西湖志岳墓樹枝皆南向

咏史

子房何多智。造出五色人。揮椎蒼海士。授書黄石精。赤松又四皓。一々使人驚。如問眞名姓。烏有一先生。
烹翁欲分羹。封嫂亦頡羹。此段刻薄處。出于牝雞鳴。由來妬悍婦。平生好殺生。人口朝屠戮。獵狗夕割烹。

漢高罵腐儒。未必罵眞儒。當時溲其冠。悉是鯫生徒。如逢君子儒。恭敬能屈軀。請看高山叟。一出助皇儲。」

韓信爲假王。紀信爲僞王。一是功名心。一是忠義腸。他日論功日。此事何渺茫。紀信無贈爵。韓信獨眞王。」

首夏二首

欣々鳥語近階除。快矣淸和四月初。世路何能屈此膝。幽栖聊且愛吾廬。一簾細雨客携酒。滿巷綠陰人賣魚。垂老稍知閑澹趣。日繙陶集案頭舒。」

軒窓換紙白晶々。芳事全收心地淸。風定飛花硯中落。露乾墜蘀枕邊鳴。偶烹菟茗品鷹爪。時閱蘭書同蟹行。閑極却嫌閑更甚。試從隣舍借籠鶯。

詠史二首

一掃箕封八点塵。韓王膽落殆稱臣。輝光遠耀日輪夢。眞箇扶桑木下人。

木下人出明史

布衣攘臂拉群雄。藐視鎌山巨首公。儔侶何圖在殊域。手持杯酒酹劉翁。

明大祖祭列代帝王。惟漢高祖前加酒一杯。曰惟公與我起布衣而有天下。此與我邦豐公嘲源右將像事極相類

雪花菜

菜譜收名未失眞。依然澹泊舊精神。豆花已斷三生夢。柳絮將爭一樣身。
蠻地蘇卿雪當食。鴻門亞父玉爲塵。憂羹恰有糟糠婦。助得儒餐日濟貧。

鷄卵酒

誰把黃鷄卵。來投綠蟻樽。醉鄕新拓境。混沌一乾坤。

留侯椎秦皇圖

大索徒勞十日中。飄然脫網似飛鴻。留侯此術是仙術。不待後來黃石公。

劉先主踰檀溪圖

一躍飛過檀水雲。亦劉遙冑果超群。贊辭自有老瞞語。天下英雄惟使君。

懷舊詩人

春貌似牛栖碧山。半生曠達被人知。最憐塵垢滿宮裡。蒸出清新錦樣詩。

牧詩牛○詩牛自扁其室曰詩牛宮。有詩云。室似牛宮塵垢滿。門如僧舍俗氛遙。

鯨海翡蘭皆自由。詞名早歷老詩牛。漆翁鑑賞非虛語。象首山中第一流。

雪航翁○藤漆谷嘗目翁曰象山第一流詩人。

漆叟風流天下聞。誰知學識亦超羣。臨終一語人傳說。禁唱蓮華經裏文。

漆谷○漆谷家世崇日蓮教。翁臨死遺言曰。祭我勿唱題目。唯誦仁義禮智孝悌忠信八字則足矣

塩田沙外荻花離。縱說曾遊涙自垂。猶記慇懃留我宿。雨蛙剪韭夜呼卮。
祭士彦

詠史

日出雍和氣。散入士人脾。虓々虎樣人。風流發騷思。安曾梅花詠。平將櫻樹詞。其佗幾英雄。豈悉沒字碑。西方日沒國。文華豈過之。曹瞞彼何人。枉誇横槊才。』

古來佞佛者。內心多不良。平生積陰惡。故求懺悔方。試觀前代史。此說非荒唐。彼有蕭叔達。我有豐聰王。々爲逆賊黨。蕭乃薄心腸。

東征八幡公。纓士術何工。勇怯分二座。日々校戰功。麾下皆感勵。血戰奮其鋒。果然良將意。務在攬英雄。不似廟堂上。鞶鑑代彤弓。

平家多忠良。可憎相國耳。櫻花詞藻麗。牡丹態度美。源門與此異。骨肉互仇視。猪武突如猪。鬼武獰如鬼。誰以成敗論。罵作怯懦子。卓哉木先生。左祖爲平氏。木下順菴有源平優劣說

兇悍平相國。自是大英雄。一怒焚諸寺。伽藍渾作空。事雖近狂暴。千載豈無功。請看末葉孫。能繼其遺風。赫々一炬火。燒盡比叡峯。

九郎非良將。唯能勝弱平。々氏百敗餘。疑懼風鶴聲。此時堂々陣。可以屈其兵。如何徒猪突。性命土芥輕。躡雲踰鐵嶺。冒颶渡蒼溟。時無英雄在。豎子功早成。世俗畏其勇。嘖々説威名。我今聊一罵。誰知是公評。』

中古亂離際。文章落浮屠。野史蛇添足。妄傳犬吠虛。南朝結城公。忠烈偉丈夫。一墮阿鼻獄。空辱堂々軀。忠臣果如此。何鼎烹賊徒。咄々閻羅王。法網亦何疎。』

楠木忠義種。枝葉皆芳芬。如何一遺蘖。獨稱降將軍。我竊察時勢。其志實可憐。南風日不競。賊勢合如雲。獨力以敵彼。杯水救車薪。公也暫待時。佯降全其身。惜哉志不遂。汚名至今聞。史家何不恕。列之賊家臣。

大日本史正儀入將軍家臣傳

總公馬上起。威稜拉鬼神。豈圖猛烈性。風流頗好文。嘗欲殺一客。招爲茶筵賓。客讀壁上字。琅々聲可聞。公憐赦其客。此事寛且仁。絕勝曹孟德。枉殺讀碑人。』

豐公起布衣。丁字如不知。當其聽漢書。早知酈生非。又聞讀明冊。不受沉郎歎。其佗翰墨壇。往々馳才思。筆帶晉人氣。 見香祖筆記 文摘國字辭

淸見字記果知英雄漢。固非沒字碑。」

毛公入雲州。侵夜絕山谷。沿州螢火光。中斷復續。不公曰敵渡水。前途必有伏。驗之果不違。麾下士皆服。觀螢料敵兵。佳話可以錄。源公金澤雁。流芳同一轍。

咏史

魯肅暗佐漢。王猛未忘晉。天下英雄士。本心果貴順。

平景政

啖睛夏侯惇。傷額杜伏威。一身兩典合。好箇偉男兒。

蒸氣船

新製驚人蒸氣船。呼物蠢房豈其然。砲聲朝發蘭墩港。檣影夕排環浦煙。輾浪奇機輪帶火。截風迅勢箭離弦。江陵一日青蓮句。今日吟來恐不鮮。

虞姬

甲張秋寒鐵騎空。紅粧慘淡淚成雙。妾身如有烏騅力。載得君王飛渡江。

小喬

顧曲風流綉襦襠。共嘆銅雀太淒涼。春窓讀盡英雄傳。無復丰神似我郞。

綠珠

金谷園中錦樣姝。春風吹碎墮樓船。季倫亦是有情漢。不レ惜二珊瑚一惜二綠珠一。

張麗華

玉樹花開一朶紅。誰下將二黃鉞一斬中春風上。白頭高老無情甚。不レ學二陶朱一學二太公一。

曾我兄弟復讐圖

血濺如レ雨滿天飛。牙旗帳下紅霧圍。十年磨出三尺刃。斫破將軍堂々陣。
將軍兄弟夙復レ讐。義旗半是濟二私謀一。孰與二雛捐二一命一。直入二虎穴一獲二虎頭一。

梶原源太箙梅圖

瓊葩滿レ箙影橫斜。源太風流亦可レ嘉。不レ讓二平家貴公子一。一聲笛裡落二梅花一。

八幡公勿來關圖

源門人物半梟雄。前後流レ芳唯此公。橫レ槊勿來關下路。鉄衣香颺二落花風一。

備後三郎題二詩櫻樹一圖

鉄衣雨濕肅無レ聲。花外虎狼眼不レ驚。義氣通レ天々亦感。一聯五字是長城。

北條早雲講二三略一圖

一部兵韜大略通。天才彷彿臥龍公。英雄自有二讀書眼一。不レ注區々章句中。

蜀志孔明讀書但觀二大略一

加藤公讀論語圖

舊主雄圖暗裡衰。讀書眼注託孤詞。英雄末路心中事。只有青燈一點知。

魯西亞竹枝

僻鄕一種産奇蔬。春日抽莖三尺長。味似魚蝦形似獸。不妨呼作地生羊。

銀扣施釘束玉肌。待佗新嫁定情時。可憐纖艶幾童女。一幅紅裙是獸皮。

南新瀛某地童女以皮束下体釘以銀釦俟嫁時夫親釋之

島野兼子　相傳兼子乘荷蘭船往海東三千里得一大國以爲是國宜屬神州因立碑題曰日本國中

破浪長風万里舟。欲將絶域屬神州。阪公當日中央碣。豪氣殆將輸一籌。

林子平

兵談先著我推君。五十年前策已新。詎料後身生外國。海籌又屬姓林人。

清林則徐譯海國圖志

越人長谷川公與西遊歸路來訪見示足利義滿乞和於菊地武政書及義臣對話中寺坂吉衛事一條其事皆關係名敎因喜賦示

一紙高城乞和檄。數行義士對談詞。囊中併貯雙珠玉。即是西遊好土宜。

能因禪師

面皮幾月窓中曝。橋柿十年囊底收。今日九原應一笑。世間無限假風流。

源　顯基

心在白雲身紫闕。源公天性有仙骨。原山他日草廬秋。無罪而看配所月。

牡丹花老人像

彭澤陶叟菊。濂溪周子蓮。清高與隱逸。餘芳流千年。卓哉肖柏翁。所愛異前賢。事々不求高。風流出天然。濃艶富貴花。直同蓮菊傳。

芭蕉翁

數片詞花吻角開。字纔十七有靈哉。帳中祕訣誰窺破。一部杜詩鎔化來。

玉蘭女史

好似梁家老孟光。胭脂不肯作凡妝。風流想見嫁時具。身外唯携琴一張。

疊松灣翁韵

攝東七子世曾諳。詎料奇人（用後藤松陰翁語）出海南。學識才皆不虧一。酒財色久已除三。愛閑梅閣鶴爲侶。論理芸窓雞肋談。捧讀新篇誰不敬。藹然氣象句中含。

穀似家風天下諳。夙將詞賦動江南。攝生有術學禽五。遊履乘閑與馬三。

名教中長領眞樂。琴書外不欲多談。一篇謾擬獻芹意。瓦礫羞吾口裡含。

名和伯州 應因人宮原某索

建武中興將。誰人最有功。此公眞壯武。乃弟悉英雄。驅使伯雲冀。頡頏楠菊忠。餘糧米猶在。一喫仰遺風。城墟往々出焦米

小楠

翠楠遺蘖在。一葉庇乾坤。芳蹟櫻花驛。威風菊水旗。英雄不耽色。敵卒亦知恩。好倣嗚呼語。豐碑照九原。

江村秋事

落帆舟邊夕陽初。冷澹秋光畵不知。人在阮亭詩句裏。半江紅樹賣鱸魚。

秋日郊行

郊外風煙到處宜。微暄況近小春時。村家曬柿串紅玉。茅店賣蕎麪素絲。秋嶂奇如渴筆畵。夕陽澹似老人詩。今年四野豐穰遍。我輩無田亦自怡。

賀三井隆邦剃髮

天圓地圓日月圓。草花木實亦皆圓。人是兩間一靈物。豈可圭角不團圓。聞君削髮圓其顱。我欲賀之句未圓。唯願君心學君顱。塵垢除去如玉圓。

一家上下皆親睦。長使和氣常團圓。嗚呼君心果能學君顯。福壽何事不滿圓。

買劒

君不見皇國祖宗崇威烈。三種神寶劒居一。又不見後鳥羽上皇伐北條。御手製造幾名刀。由來東方精氣美。散入人々肺腑裡。劒工輩出皆名手。干將爲奴莫邪婢。備國一派號長船。絕技天下人艷傳。安政丁巳二月吉。鍛出三尺蒼龍泉。我一見之傾囊橐。十金購得喜欲顚。白光出鞘龍飛躍。紫氣衝天星錯落。不折不撓剛而直。眞是日本丈夫魄。愛之當美姬。摩挲手難離。（古人劒詩云一日三摩挲劇於十五女）敬之當君子。鄙吝心可醫。看之可以起懦夫。執之可以攘狡夷。嗚呼万國非無兵器。孰及我劒之利。万國非無男子。誰及我士之義。此劒此士雙美合。紺瞳赤髮何足畏。竊聞天子英武宣皇猷。鳳詔東下警優柔。官兵果有征夷日。此劒亦逢立功秋。近日士風雖稍衰。天下不乏英雄儔。何足佩之渡大海。夜衝風雨馘鯨頭。

獲西洋砲有感

孔曰作俑其無後。孟曰作矢猶不仁。聖賢憂世意何厚。不製奇器貽後人。

何物洋夷狡黠智。唯知小利不知義。漏出乾坤未發祕。製造戰陣第一器。
大丸纔發万人摧。寸臂片頷飛作灰。黑煙凝結五里霧。紅火轟落半天雷。
處々武人膽何怯。俄棄我技學彼業。咄哉戎狄新幻術。變了孫呉舊陣法。
安得天降大英雄。一統五洲改其風。悉毀天下砲與熕。鑄作農器勸農功。

栗園病自浪花歸憔悴之狀不可言悽然賦似

五百里程輿病歸。淒然相對涙如絲。瘦顋羸臉蘗黄色。不似平生夢裡姿。

孫策

快劍生風艸木驚。小年美貌己英名。千秋來只有斯士。兩陣間誰及我卿。
猛士生擒何鋭氣。佳人分娶亦多情。白龍魚服無窮恨。不向中原試抗衡。

高歡

血戰掃除京洛塵。山河在握尙稱臣。英雄馭士亦如馬。變化臨機果此神。
一曲悲歌暮年涙。千金結客少時身。漳河々上好墳墓。恰與曹瞞卜比鄰。

坂上公

蝦海風雲隨指揮。桓々馬上舊英姿。剛柔幷備仲山甫。福壽兼全郭子儀。
雙眼似鷹光閃鑠。老髯如蝟勢鬖鬡。此公生在千年下。日本中央是墨夷。

大塔王

武緯文經大塔王。鉄衣跨レ馬勢龍驤。蘭陵美貌戰塲耀。上黨寃魂土窖藏。紅綿旗飜懸二日月一。彩牋書就挾二風霜一。延元天師無情甚。杜縛二麒麟一飼二虎狼一。

北齋上黨王被レ害二于地牢下一

悼二荒川栗園一五首 錄三

江湖落魄十餘年。一棹飄然載レ病還。猶免他鄉作二飢鬼一。尊鱸時節葬二家山一。

骯髒平生與レ俗疎。客中病苦定何如。歸來囊底餘二何物一。一部稗官未刻書。

栗園在二浪花一作二稗史一以糊レ口

病床忍レ苦尚咿唔。知汝前身是蠹魚。昨宵臨レ死三更後。痩腕猶擎一卷書。

咏史

仙華殿外鏤二金銀一。箇々蓮花隨步新。怪底美人跟底物。不レ分二寸許一賜二軍民一。」

不レ省北來舟幾隻。高歌玉樹醉二金缸一。景陽樓外臙脂井。即是君家天塹江。」

枉作二貧窮村裡遊一。無愁天子果無レ愁。他日宮嬪賣燭業。依稀猶續舊風流。」

金蓮貼レ地人安在。玉樹後庭花亦空。更有三豪華不二相讓一。牙檣錦纜照二春風一。

蛙鼻岡懷古 在備中

古壘登臨懷二昔年一。輸攻墨守共堪レ憐。梁入淮堰踪總在。襄子晉陽名尚傳。
沈竈苔蒸蛙吠レ雨。頽垣樹老鳥棲レ煙。空敎二清水一爲中泡沫上。遺恨大江兼二兩川一。

方廣寺懷古

巍々寶殿映レ雲開。遺跡凄涼半草萊。絕代英雄非二佞佛一。一時遊戲漫糜レ財。
黃金曾耀給二孤苑一。紅火空燒梁武臺。功德他年成二底事一。頑軀十丈大如來。

咏史

千歲無二弑逆一。太勝魯國臣。累代措二刑戮一。不レ愧周室君。東方大美事。堪レ誇万國人。弘仁已後三百四十年刑不レ上二大夫一

赤關波底句。白河秋風詞。慧心諳二國詩一。共是八歲時。憐殺二龍種。不レ見他年才。後醍醐皇子恒良甫八歲有二白河之詠一

清主謂二鄭氏一。非二我亂賊臣一。義公稱二石治一。豐家忠義人。見解同一轍。東西兩賢君。

冬日雜咏

榾柮爐頭坐送レ冬。偶然顧影嘆二衰容一。暗愁白髮三千丈。舊夢青樓十二重。
事似二拙棋一多二謬算一。才如二敗筆一漸消レ鋒。栗兄已沒松翁老。此際向レ誰披二我胸一。

野猪肉歌

十日南山雪累々。獵手到猪々味美。賣入城中肉猶溫。禦冬旨蓄無過此。老矣娥眉念已空。貪饞只有口腹中。寒夜一喫煖吟骨。即是我家肉屏風。

己未(安政六年)元日試筆

四十加三氣尚豪。欲乘鯨背破雲濤。春窓一醉屠蘇酒。先拭去年新買刀。

宿長尾子德家

紅膾綠蔬招我斟。早春時節興殊深。解酲酒烈如呑劍。晤語友多皆斷金。窈窕北方嬌女色。坐有歌姬 慇懃東道主人心。留連恰作通家想。醉後安眠同一衾。

曉入高松

松姿稍齊整。行覺近城都。日出虛嵐消。遠汀一鶴白。郭門春旭昇。萬瓦齊生色。城中曉煉兵。松杪礮烟黑。

壽松灣翁七十初度二首

賀筵好唱九如歌。梅格松標壽兆多。文錦纏腸五彩色。春風溢面一團和。量容後進牛僧孺。老有雄心馬伏波。今日騷壇名將乏。憑君長奮魯陽戈。

七旬矍鑠古來多。福壽如レ君殊可レ誇。淸瘦風姿堪レ入レ畫。正醇學派自成レ家。
詩鋒白也千人敵。醉臉紅二於二月花一。爲勸前程加二壯氣一。文旗去照鳳城霞。

早春小恙

料峭東風暖未レ催。養痾兀坐二旬來。詩レ醫難レ遇巖三點。禁レ酒唯追趙半杯。
凍硯敲レ氷謄二舊句一。寒爐燒レ藁貯二新灰一。人言散步可レ當レ藥。時向二前村一探二野梅一。

題二文郁新居一

金陵南畔小茅廬。修築雖レ疎潔有レ餘。隣衲隔レ籬時嘯レ月。溪明敲レ戶屢携レ魚。
流鶯聲裡朝丸レ藥。綠樹陰中夏讀レ書。不レ寂不レ喧眞美土。棲遲從レ此莫レ移レ居。

過二石崎叔舊居一

柴扉竹屋小籬笆。化二作尋常百姓家一。半死老梅人不レ賞。隣烟熏殺半梢花。

杜子美像

今古幾詩人。如何獨出レ羣。應緣敦厚意。一飯不レ忘レ君。

過二文山墓一

白峯山下岸紗巾。正是梅花微雪晨。當日同遊多少客。憐君獨作二墓中人一。

訪二松灣翁一松韵亦至分韻得レ先

偶訪詩中聖。剛逢飮裏仙。香苔菊池美。冷艪藻江鯨。蘇酒過三盞。焦談驚四筵。醉餘々興在。寶繪品雲烟。

春夜

西方無櫻國。猶稱千金夜。況我艷春天。一刻誰論價。

春郁辭歸

隔水芳林香霧横。妓筵絲竹漸收聲。玉驄恐蹈櫻花影。故避月光多處行。

咏史十二首 錄九

保得唐初第一功。英雄豈是韓彭比。知佗辭金受金心。也似避矟奪矟枝。

尉遲敬德

百勝先鋒威凜乎。天山青海一塵無。如何不決誅姦策。枉出潼關拜羯胡。

哥舒翰

中興宰相最稱賢。人品堪摩房杜肩。唯爲梅花傳一賦。鐵腸肯咏六郎蓮。

宗璟

正氣通天感鬼婆。梁公德器玉無瑕。胸中駘蕩春風象。吹發一門桃李花。

狄梁公

不下向二洛陽一揮中鐵戈上。金陵王氣竟如何。雄心獨勝乃家祖。半生低レ頭拜二鬼婆一。

李敬業

一檄何輸博浪椎。妖狐失レ色魄先褫。天香桂子閑吟處。也似圯橋潛匿時。

駱賓王

欲下執二長戈一挽中夕曛上。孤城四面賊如レ雲。壯氣不レ灑帳中涙。笑斯二娥眉一饗二六軍一。

張睢陽

酒間嚙レ指血淋漓。峻節千秋天地悲。如レ此英雄不二相救一。賀蘭至竟木腸兒。

南霽雲

歇五相公還自賢。風姿恰好畫中傳。可レ憐雪裏騎驢態。附與襄陽孟浩然

鄭綮

有レ客來談二小豆洲神驅之勝一因記以二詩六首一

挾レ路萬巖無レ不レ奇。迎レ人簇々勢欲レ飛。醜獰是鬼松爲レ髮。枯瘦如レ僧羅作レ衣。』

滿岸羅葉染二秋霜一。紫幛丹巒別作レ粧。此景人間無レ可レ擬。仙妃纏得錦衣裳。』

綠陰風景亦太奇。不二獨秋霜紅楓時一。虎石虬巖倶出沒。翠雲堆裏鬪二仙姿一。』

平生憎殺俗僧徒。滌盡人間幾勝區。幸是斯鄉免二斯厄一。巖根不レ著二一浮屠一。』

行到二絕巔一望豁然。有レ巖平坦可レ鋪レ筵。天邊縹渺五畿地。脚下分明三備烟。』

千巖万壑競幽妍。直與馬溪堪並肩。安得彩毫如賴子。此奇寫出四方傳。

春郊暮歸

暮村炊飯淡煙籠。花外餘霞尚艶紅。箇々春耕人罷去。鋤光閃去夕陽中。

武后 美人雜咏之一

高捲珠簾坐紫宸。君身恨不作男身。絶倫才氣無雙色。合鑄英雄與美人。

韓蘄王夫人梁氏

臥虎鼾聲認者誰。英雄帳裏有娥眉。風流笑殺夫家祖。只受尋常漂母知。

上總忠光

冠帶消成波上漚。單身誓報戴天讐。英雄不入江魚腹。且拾殘鱗挿兩眸。

戲勸君田蓄髮

宣聖之敎不傷髮。釋尊之頭亦著螺。何物俗儒與俗僧。毛髮剃除不留些。
君田夫子我黨士。夙將逢掖代袈裟。如何革心不革頭。禿顱兀然若頭陀。
我吐讕語勸蓄髮。不知君能聽受麼。君如頑乎從俗物。從今呼作肉西瓜。

讀蔚山記

虜箭密於雨。森々飛作響。曉看城上旗。穿破皆如網。』

明兵八十万。一夜如レ雲聚。喊聲時動レ天。城樓飛欲レ舞。」
一城皆餓鬼。猶解二奮空拳一。有レ人來賣レ水。一杓價千錢。」
兩旬不レ脫レ甲。嘗盡幾艱苦。寒城風雪晨。熱汗滴如レ雨。」
虜騎解レ圍去。城中漸寂々。疲眠時枕レ戈。夢裏猶擊レ敵。」

予素惡札故斷然不レ作レ書近日或有二嗜レ痂者一因始欲レ學二書法一賦レ此自嘲

五指平生重似レ槌。老來把レ筆始求レ師。厚顏欲レ引前人例。高適五十初學レ詩。

咏史

人後挐レ鞋一小猴。何圖肝膽與レ天作。黃金幾兩纔攘去。買取扶桑六々州。」
答レ韓一牘氣何雄。四百餘州眼底空。能把二文辭一耀二吾武一。豐聰王後有二豐公一。」
金瓢曜レ日照二東隅一。關八州皆一掃除。兩禿此時身尚在。與前執レ傘定非レ虛。

關雲長像

雄烈如レ君今古稀。報レ曹扶レ漢德巍々。一刀纔閃青龍影。万卒皆披白馬圍。
志在三春秋明二大義一。名留二天地一有二餘輝一。千秋憎殺東吳狗。枉助二妖狐一折二虎威一。

讀二唐太日記一

羊蹄嶺北是荒蝦。處々夷人空作レ家。陰壑四寺長貯レ雪。寒嚴六月始開レ花。」
利峯特立大洋間。秀色參レ天碧二髻鬟一。人道藤公西伐日。呼爲二蓮岳一是斯山。」
黄茅白葦遶二江村一。霾氣濛々午尙昏。行客相驚皆失レ色。沙間熊跡大如レ盆。」
愛見夷風變作レ華。迎レ人羅拜語牙々。長鬚三尺鞠躬立。此貌何妨呼作レ蝦。」
塵滿二眉毛一垢滿レ肌。生來未三肯著二臙脂一。島中豈欠一西子。不潔渾成二嫫母姿一。」
夷人使レ狗術何奇。雌狗前行雄狗隨。一葉輕舟屈曲水。引來引去自二由之一。
夷土風光格外奇。採來堪レ入二竹枝詞一。款冬葉展大如レ傘。百合花開黑似レ緇。

首夏郊行

故衣浣濯太輕盈。愛此午風吹レ袂淸。渚鶴掠レ波飛鶴々。溪鶯隔レ葉語鶯々。
老來猶有二冠童伴一。春盡絕無二絲竹聲一。好處一年知幾日。唯須三吟醉試二閑行一。

綾北路上

古跡依稀綾水灣。行々指點夕陽間。水淸帝子誅レ魚地。雲白相公祈レ雨山。

綠陰午睡

蕉陰移去納涼牀。日午淸風睡味長。好箇綠天新世界。更開一枕黑甜鄉。」
憎殺炎官漫弄レ權。虐威如レ火滿二坤乾一。閑人卜得安身地。獨向二蕉陰一載二綠天一。

予嘗獲二伏氣城古瓦一伯孝見レ之有二欲色一因割愛以贈

金殿無レ蹤缺瓦留。摩挲今日向レ誰投。請君珍重半枚碧。猶是「豐家土一坏。」

劉子攫レ金空二俠骨一。米顚望石亦寒乞。憐君一癖異二前人一。唯愛英雄遺愛物。

淵明高臥圖

道慕二伯夷一心孔明。寄懷何獨在二羲皇一。知君高臥北窗夢。半向二南陽一半首陽。

賀三文郁擧二第二男一

掌上雙珠前後新。玲瓏相映並爲レ珍。他年我待連城價。文似二珣珉一武玠璘。

晉王珣王珉兄弟並有二才藝一

武內公

伊呂合來爲二一人一。其齡其德尙非レ倫。五朝輔弼壽三百。半是英雄半是神。

伊尹壽百有五歲見二竹書紀年一太公壽百有十歲見二金石錄篇一

咏二三國人物一　予嘗作二三國雜咏二十餘首一遺漏尙多因再作二數首一以補レ之

用レ人如二齊桓一。後主亦賢主。蒼天何無情。奪二君一仲父一。

後主○李密以二後主一喩二齊桓一

馬兒兼二文武一。雄偉美丈夫。如何畏二癡虎一。不レ擒二一老狐一。

馬超

我愛趙順平。英風智勇兼。膨脝滿身膽。殆壓絕倫髯。

趙雲

唯手馘夏侯。剛侯何强摯。不妨五虎中。著此一老驥。

黃忠

才稍類文若。名曾惡葛公。憐君空一蹶。徒作半英雄。

龐統〇傳曰。目龐統爲半英雄

諸葛思遠

老儒唯勸降。上將未捐躬。誰及葛家子。精忠續父風。

孫策

江東驅健卒。帳裏貯佳人。風流虞家壻。安知是後身。

馬謖曹姦世。視友路人同。青州一名士。獨有古俠風。

太史慈

奇才亞諸葛。今古被人推。英氣最堪想。單刀責羽時。

魯肅

懿也婦人耳。欺孤唯恐嚇。善哉諸葛公。遺之以巾幗。

司馬懿

友人有下好二廢擧一者上賦レ此以似

君才如二賜也一。廢擧能逐レ時。我恐屢中億。却作屢空基。

富士圖

片雨峯腰懸。千山皆失レ顏。岳也如二相笑一。粲然碧落間。（二）

東方櫻花精。凝作二一名嶽一。直立五千仞。玲瓏照レ天白。

富士山上祭二木花開耶姬一木花即櫻花也故和歌者流詠二富士一者往々用二櫻花事一

伍子胥

視レ君如二寇讐一。鞭聲轟二千古一。一種快男子。果是俠客祖。

張儀

電光三寸舌。如何不レ出レ奇。唯假二虎狼力一。嚇殺六嬰兒。

蘇秦

扶レ弱拒二强國一。尚有二丈夫情一。不レ妨縱橫舌。百誕出二一誠一。

樂毅

漢祖猶尊敬。葛侯自擬レ倫。有二此兩知己一。知君非二常人一。

范蠡

干戈滿眼世。此老獨風流。美人蓬底在。春風五湖舟。

屈原

不レ食二濁世粟一。餐レ菊淸二其神一。乾坤求二儔侶一。只有二採レ薇人一。

賀二文郁移居一

曾言從レ此莫二移居一。移去新居勝二舊居一。如レ此移居還不レ惡。勸レ君從レ此屢移居。』

市塵疎處卜二新居一。半畝幽庭趣有レ餘。好是秋來聽二夜雨一。一叢當レ砌小巴且。

邦俗所レ謂馬蹄香蓋未レ詳二漢名一近人咏レ之有下宜レ雨宜レ風可レ題句上從レ今呼作二小巴且句一巴且芭蕉也

幾世餠歌 戲作

芳原名妓名幾世。蓮步梅粧傾國姿。技藝不二獨吹與レ彈一。點茶插花又圍棋。

矜持自恃二全盛色一。不許容易觸二氷肌一。半星寶靨万金價。惱殺都下豪華兒。

何物傭夫窺二此妓一。一指欲レ染容二朶頤一。其奈三秋風吹二囊橐一。空拳難レ衝花柳園。

辛苦三年肯爲レ粉。傭錢積得銖與レ錙。持レ之欲レ買二一塲歡一。臙脂坡下夜叩レ扉。

幾世有レ情諒二其意一。急辭二他席一來侑レ卮。此夕何夕眞奇遇。一朶優曇花始披。

豈圖滿樓春色裏。此時愁然忽蹙レ眉。曰我來路買二新褌一。楊柳原頭薄暮時。

腰間一條舊犢鼻。解來棄二去河之湄一。爾時心魂在二天外一。褌中藏金忘不レ知。

今也片黄亦烏有。何以償此樓上賚。幾世聞罷心悽惻。櫻唇欲綻淚先垂。
曰妾匣底有私蓄。今夕諸費能辨之。更呼熱酒掃餘愁。座上新添歌舞姫。
夜半宴畢洞房寂。綵畫屏中燭影微。不結尋常巫山夢。心事相訴細如絲。
妾心深感君篤實。願爲女蘿托松枝。請君從今三年間。努力厲精再積貲。
妾亦能脱苦海浪。荊釵戴去與君隨。郎也歡喜恍疑夢。山耶海耶盟就歸。
爾後果然踐其言。夫婦偕老約不違。一廛借得製賚糕。共爲人間賣餅師。
一片貞心天亦憐。餅舖追日蕃且滋。兒孫綿々續舊業。幾世餅名幾世遺。

咏郊外所見艸木九首

種梅三百樹。亦是小經濟。採子製烏楳。可以供歳計。今時林和靖。收名亦收利。

水邊著楊柳。非直爲觀美。其根攫砂石。可以防暴水。須看築堤者。古來皆種此。

聞説干戈世。以竹爲兵器。往々有嚴禁。民不知筝味。今時玩懶俗。誰能信此事。

大葉如幔帷。可以障炎日。良材製筥箱。可以貯湘帙。人家宜種物。桐桐是

第一

紅珠二寸强。嚼則滴ニ瓊漿一。嘿レ之和ニ蕎粉一。一丸可レ充レ糧。安得ニ閑隙地一。多栽救ニ窮荒一。

黄櫨可レ製レ蠟。豈與ニ常木一比。最是秋風候。霜葉爛班美。我觀ニ鎮西國一。隙地皆種レ此。

澹巴無用物。傳來知是誰。蔓延二百年。官家難レ禁レ之。咄々西蠻毒。久入ニ士人脾一。

昇平奢侈俗。唯愛一味甜。離々千畝綠。秋後致ニ幾金一。我恐南方國。化作ニ甘蔗林一。

神異經南方有ニ甘蔗林一

蕃國舶來物。花桃最爲レ珍。牡丹雖ニ體麗一。比レ汝賤如レ塵。請看身後功。長使ニ天下春一。

綿花一名花桃

所愛瓢爲レ人所レ破

我有ニ古瓢一稱ニ達磨一。醉餘愛玩日摩挲。一朝誤觸ニ俗人手一。碎作ニ微塵一恨無レ涯。
破瓢相顧亦何益。世間無ニ復補天媧一。明日雪郊尋レ梅路。奚奴肩上奈ニ空何一。

獲憩兒信

一封蠅頭細寫情。客中近況太分明。窮囊傾盡更無物。古袴裂來時有聲。
奇厄幾逃虎狼病。久居不易鳳凰城。最憐旅館乏書籍。半夜蕭然對短檠。

観雪處雜咏四首 録二

柳家新別業。松尾巷南開。閑事和忙時。晨杯連暮杯。暫時可無竹。隙地且栽梅。最是南隣友。隔籬呼取來。

靜處借荒園。呼僮先一掃。碧杉編作籬。紅葉燒温酒。巷水救窮魚。補屏防惡狗。自嗤懶主人。事々任新婦。

冬日雜感二首

霰聲破夢夜沉々。往事回思感自深。鄙計猶爭雞鶩食。寒聲徒學蚓蛩吟。
豪來時磨賈島劍。老去劉叉懶攫金。四十三年何所就。今吾未改故吾心。

愁緒攢胸眠不能。夜窓兀坐眼如鷹。菲才猶辱故朋愛。傲骨頻招俗士憎。
生計蕭條無祿士。況情澹泊有毛僧。閑來欲寫解嘲語。起向爐邊炙硯氷。

答人嘲短身

佝僂畏天三尺身。誰知膽氣尚輪囷。壯心自比桑維翰。一任人呼作半人。

冬日晏起

幽人有二枕癖一。掩レ戸午前天。檐暖雀聲悅。窓晴猫影圓。閑敲二一聯句一。穩補二五更眠一。悠々塵世事。不レ到二布衾邊一。

雪日次二坡公韻一

衝レ寒早起先二林鴉一。積素滿レ庭光照レ車。舞罷玉鸞棲二竹杪一。飛來粉蝶近二梅花一。乾坤何處黑人國。風物未レ歸青帝家。隣叟敲レ門謀二卯飮一。劚來蘿蔔大成レ叉。

大江廣元

滿腹經綸有用儒。簪纓叢裏匹儔無。一朝去棄周天子。半生甘爲二莽大夫一。北闕緣レ君擁二虛器一。東關從レ此定二雄圖一。智囊探出暮年策。不レ護二君家一唯護レ軀。

梁說巖曰廣元智囊也

尼將軍

馬上金戈百戰功。無端移入二鏡奩中一。八州草木雌風震。三世朝廷覇氣空。悍婦由來勝二虎狼一。美人亦自有二英雄一。唯謀二閫外一不レ謀レ內。遺恨當年鬼武公。

院狗行 啄史小樂府倣二賴翁一

答我者誰院耶狗。々則射之吾有弓。乱箭離弦如飛雨。殺氣直逼鳳輦中。當時妖霧塞天地。不怯賊眼太曚朧。君不見獮猴一掠四海裏。無人知有眞天子。

始見白髮

四十加三身尙強。鬢邊其奈着新霜。沙場如有荷戈事。欲學齋藤老別當。

雙鬢新添白幾絲。詩人從此好風姿。小妻何意太多事。枉向晴窓呼鑷來。

白髮由來此壽兆。一絲橫鬢亦何愁。商山之四洛陽九。此裏何曾有黑頭。

龍蝦

其姓稱伊勢。身着赤色服。知他平家蟹。與汝本同族。

老猫

癡心瞶々老貍奴。黠鼠羣中甘作愚。善飯將軍今耄矣。長眠隱士殆仙乎。附炎唯向竈邊溷。求儷猶於月下呼。別有耳根聽徹底。纔聞刀響即趨厨。

歲杪寄兒

一家雞犬並安寧。莫向故園勞汝情。好是鳳凰城闕下。各憑高枕待新正。

早春出門

輕氷半破疊新波。澹々東風暖意加。淺碧一川春似縠。綠鳧背上負梅花。

加藤公像

於菟神勇冠扶桑。銀兜光搖百戰塲。長戟生風人似草。寒城衝雪土爲糧。
萬夫不敵美髯羽。稚子猶知大眼楊。末路苦心誰得識。魯論讀熟托孤章。

風蘭

百尺崖頭掛在空。微香薰滿半天風。芳根不帶人間土。宜入鄭家圖畫中。

宿松莊老人幽居

來訪松莊居士廬。安閑恰好撚吟鬚。隱居殆似韓麻呂。妙句肯輸猿太夫。
蕉葉爲杯興不淺。梅花在牖夢何孤。清談一夕胸如洗。恍爾疑他非故吾。

三月十四日愬兒歸省賦似

遊子始歸省。爺々喜可知。對話三四日。膝下好傳卮。只愁象山地。土風本
不宜。濡滯如多日。野花香染衣。聞說嵐山櫻。近日開滿枝。東去須早々。
勿待落花時。

愬兒患疫頗劇。諸醫投以和解之方。一友人欲用攻擊之劑。其說
亦似有理。於是議論紛然。殆不可適從。遂招富山凌雲而質之。定
用和解之劑。病從而得愈。賦此以謝凌雲。兼似諸子。

用レ藥如レ用レ兵。機變爭二毫釐一。世間億兆命。生死在二一匙一。可レ戰而不レ戰。恰如二宋
朝衰一。可レ和而不レ和。又到二明季危一。我社諸國手。此意早已知。頃者療二我兒一。
治方正愜レ宜。何人出二奇說一。其說與レ衆違。一犬初吠レ虛。三虎終致レ疑。呂劉南
北分。洛蜀東西岐。誰能解二此紛一。凌雲良醫師。片言獄已折。一劑術得レ施。
疫鬼忽降伏。魔軍悉平夷。諸子力非レ少。凌叟勳最奇。醫壇有二麟閣一。一々畫二
其姿一。

足藝歌 示二愬兒一 并引

今春象山啓龕之會。百戲成レ群。而江川萬吉者最稱二絕技一。愬兒臥
蓐。不レ能二往觀一焉。因記二其槪一以示。

象山春寺啓龕日。百種戲臺比如レ櫛。就中絕技驚二人目一。江川萬吉居二第一一。
憐汝病床耳代レ目。唯聽二新評一臥二一室一。我略記レ之汝試聽。只恐摸寫難レ入レ筆。
一人仰臥竪二雙足一。々舞一盤何迅疾。轉如二車輪一旋如レ丸。千轉萬旋無二一失一。
須臾又承二大竹竿一。百尺亭々雲可レ拂。小兒年纔七八歲。輕捷攀レ之至二其末一。
身在二空中一如レ在レ地。腹旋踉掛技百出。或鯉魚登龍門。或如三猿猴捉二水月一。一
奇纔了又一奇。橫形大字最妙絕。觀者此時足二心酸一。不レ覺一叫齊擊レ節。嗚

呼我曹平日文字業。煉磨未ㇾ及渠儂密。愬也愬也汝勉ㇾ旃。勿ㇾ輸ニ賤人脚底術一。

坂谷子絢來訪賦呈

我舍今春客似ㇾ雲。紛々多是聚飛蚊。一樽快酌論ニ心事一。元日以來唯有ㇾ君。

大塔宮入ニ土窖一圖

鼎可ㇾ扛兮山可ㇾ拔。日本武後絕ニ其匹一。神龍一折登ㇾ天覓。杜與ニ蚯蚓一同ニ一室一。四海從ㇾ是如ニ長夜一。妖霧茫々翳ニ日月一。鎌倉山下小土牢。亦是一箇天石窟。

戲題ニ名妓圖一二首

娼妓豈ㇾ無ㇾ信。王侯殆失ㇾ威。黃金輕重價。白刃死生機。艶態柳何折。嬌魂花共飛。眉鬚幾男子。此操也應ㇾ稀。

高尾

佳人有ニ氣節一。可ㇾ謂ニ妓中仙一。女性勝ニ男子一。千金比ニ一錢一。梨園名字馥。柳陌墨痕傳。果爾臭泥裡。能開白玉蓮。

夕霧

坂將軍東征圖

整旅征ニ東奥一。桓々坂上公。石碑羊太傅。銅柱馬將軍。戈耀蝦山雪。旌搖氷

海雲。九原如可起。今日掃胡氛。

楠公　二首

楠子軍中士似雲。孟嘗君輩亦非倫。請看狗盜雞鳴外。養得羅門善哭人。
老楠奇策悉堪驚。不獨當年赤阪城。一夜原頭死諸葛。再生擧掄走驕兵。

首夏林莊　二首

林亭淺夏節。起臥太安便。花盡客稀到。蛙鳴人愛眠。松針串疎雨。宿戟突青天。此際無些事。初知日似年。
柴扉稀剝啄。靜寂似僧家。鶯隱山無語。藤懸松有花。幽居詩世界。永晝睡生涯。隣叟閑同我。綠陰呼煮茶。

佐々木四郎騎渡菟河圖

鞭底嬌龍蹴碧瀾。跳珠觸轡半天飜。英風振起兒孫氣。渡水功名歸一門。
承久中信綱渡菟河。建武中道譽渡相摸川。

讀乍浦集詠

鴉片毒煙傳幾春。千函燒盡孰成塵。何圖餘燼化兵火。焦爛江南十萬人。」
兒女捐身名是風。英雄全節姓爲陳。茫々四百餘州地。海外傳名唯二人。

國　字

我國伊呂波。用法簡而便。四十七個字。々々珠一聯。善哉豐太閤。欲下向二異邦一傳上。

漢　字

漢字有用字。不レ過二三千字一。何人妄製造。殆過二五万字一。可レ憐博學者。目有二未レ識字一。

蘭　字

西洋蟹様字。醜陋不レ成レ形。誰將二一炬火一。焚レ之學二秦嬴一。咄々葦原上。郭索稍横行。

屋島懷古

海隅誰築鳳凰樓。半壁山河澹帶レ愁。齊國宮嬪終賣レ燭。宋朝天子屢乘レ舟。珠簾露冷蘆花渚。錦幟風悲楓葉洲。最是歌筵觀月夜。此秋亦作二帝都秋一。末句用二平行盛和歌意一

時過二太平一收二戰氛一。綠疇墾破入二新耘一。弓容流去波間月。鏑影斷飛沙外雲。半沼蒺藜黄犢渡。黄牛崎一川䆉稏黑駒墳。村叟時拾二古刀鏃一。猶說二能州平使君一。

屏風浦

蘆花蓼穗白和レ紅。秋美沙汀六曲中。海似二硯池一山似レ筆。天然妙畫水屏風。

筆山硯海皆讃西名勝

米貴

米貴今年倍二去年一。啼レ飢萬口日喁然。寒厨糧盡鶴同瘦。冷竈烟消人欲レ仙。
邊孝先難レ誇二大腹一。杜工部只聳二双肩一。枯腸何術消二長日一。試草救荒論一篇。

酒貴

酒貴今春倍二去春一。幾人强學獨醒人。青樽殆倒孔融座。白醭時生彭澤巾。
子母百錢唯轉瞬。滴淋一計僅沾レ唇。誰家釀熟花方發。欲レ學風流不速賓。

豐公舊里銀杏

七道當年荊棘荒。一株銀杏獨昂々。錦衣枝耀錢鏐里。車蓋葉繁劉備鄉。
梢入二五雲一凌二大樹一。影横二萬里一蔽二扶桑一。殊憐老幹存二貞節一。化作二梧桐一護二鳳凰一。

伊達貞山公

獨眼熒々開二電光一。龍驤氣勢亞二猴王一。半生佳句詩人骨。絶代英風男子膓。
光耀映レ天金傑柱。豪華入レ洛錦衣裳。老來有レ膽更雄壯。鵬翼將レ振万里洋。

北條早雲

流寓東關落魄郎。腰間長劍作生光。蟄龍鱗動八州震。猛虎翼成双木僵。
漢法三章新號令。蜀山萬俵舊金湯。區々不借讀書力。收攬英雄一片腸。

粟津懷古 舊作

北陸遺孤如鬼神。滿腔鬱氣片時伸。武威旭耀蘇山曉。霸業氷消粟水春。
麾下風雲無弱卒。帳中粉黛有佳人。戰場一夜猶爲快。也勝鴿原泣死身。

賤嶽懷古 同

炬火連天十里光。北軍劍氣滅成霜。果然奇騎貴神速。自古驕兵必敗亡。
爛燦金標千顆瓠。縱橫血路七條槍。可憐叔姪夜叉勇。一蹶輸他猴面郎。

讚岐雜詩 此作曾有數首今收其遺漏者

藻城眞箇文華國。面々峯巒皆不凡。筆架嵌天青突兀。硯屏擁海碧巉巖。
五劍山一名筆架山屋島一名硯屏山

帝子登天留舊魂。縞衣丹頂集仙壇。春風華表翩翩日。不許獵人彈一丸。
白鳥祠祭日本武俗傳日本武薨後其靈爲鶴來集此地

南海由來靈淑區。闔州不產一妖狐。虛妄嗤他兒女輩。千年咒力說浮屠。

四州不レ産レ狐相傳僧空海所レ咒

菅家大守稱二神明一。誠氣通レ天甘雨零。靈澤洋々千載下。邑人猶比東先生。

仁和中大旱菅公祈三雨于二城山一卽日澍雨民感レ之聚會舞蹈東先生用二東哲傳中字一

高山彦九郎

自通皇家草莽臣。半生慷慨出二天眞一。一鞭打破姦雄墓。不二是子胥同樣人一。

即事

山下雨濛々。山上雪已積。雨晴雲始開。皎然一峯白。

擬レ送三人使二亞墨一課題

神州仁澤及二東偏一。使節新通二米利堅一。鐵路穿レ山平如レ砥。火船截レ浪急二於弦一。
壯遊何數張騫跡。久滯休レ經蘇武年。聞說蠻奴諳二漢字一。好揮二健筆一鬪二新篇一。

竹田路上以下二首京遊追作

雨後轍痕泥未レ乾。双條分曳綠楊間。行人讓レ路頻留レ杖。月下歸牛大似レ山。

東福寺

不レ許春櫻引二綺羅一。芳塵一掃老禪家。何圖秋後丹楓葉。幻出高僧意外花。

呑象樓遺稿上集了

呑象樓遺稿革集（七）　自辛酉（文久元年）至甲子（元治元年）

辛酉（文久元年）元日

万里朝宗五國船。古來無二此太平天一。試開二新暦一閲二支幹一。神武天皇登極年。

擬三答蠻人問二本邦一

綿々垂統帝王家。万世金甌不レ受レ瑕。嶽跨二三州一白菡萏。湖開二八景一綠琵琶。
鯛魚海內無双味。櫻樹人間第一花。護二此神邦一是何物。寶刀七尺凜霜華。

早春疊二松濤翁韻一以代レ簡

君性吾情迭熟諳。郵筒幾度寄二城南一。遊蹤憶昨日成レ五。（去年正月五日翁來訪）情況恰如レ年隔レ三。臘後定應レ添二妙句一。春來猶未レ接二清談一。待乘二微暖一試二遊屐一。小瀑梅花紅已含。

用二前韻一贈二双石老人一

湖海豪遊老益諳。風流塲裏馬征南。健強啖レ肉斤猶十。敏捷成レ文歩乃三。
麹秀才交未二曾絶一。孔方兄事亦何談。誰言此老頗奇僻。和氣温柔向レ我含。

題二鹿兒松南書屋帖一幷引

播之鹿川有古松其名夙顯中島子旭家其側自名其齋曰鹿兒松南書屋頃者製一帖將以求諸家題詠令予題其首蓋亦自靦之意乎

別府高砂曾稱松。士人艷說古名松。々邊着此讀書屋。孰及鹿兒川上松。

青魚鮞

纔出母胎身卽榮。萬頭無翼入春城。遠離蝦海千層浪。來作雞晨三種羹。
金粟堆々盤上色。玉肪嚼々齒間聲。可憐一箇寧馨物。也有人間騂角名。

蕉鶴 課題

輕舉將離飽肆塵。果然腐臭化爲神。請看衛國軒中物。曾是秦皇車上身。
飛躍天淵性何異。割烹山海味皆珍。風流好入髯蘇賦。大翅翩翩伴細鱗。

筆頭菜 舊作

草間亦自有尖頭。採擷登盤軟生柔。雨後一枝花正結。燒痕三寸穎猶抽。
催成靈運夢中句。寫出王孫別後愁。笑我腹中無點墨。饞涎一尺向渠流。

送子旭遊崎陽

諸蠻貿易市初開。武備森嚴舊鎭臺。花外信旗春映浪。柳邊祝砲曉成雷。
街童慣唱英人曲。樓妓爭傳亞國杯。是此瓊江新景色。羨君一々入詩來。

賀高木禎互四十初度

讃東高木氏。曩祖是鷲王。兒孫皆多力。傳統幾星霜。中葉宥遍公。英資最軒昂。慈心如菩薩。猛力擘虎狼。曾抜十圍木。一揮群盜僵。其他多奇事。口碑傳四方。華胄禎互子。器度亦非常。以智代其力。仁術業頗昌。秘蘊窺長沙。新奇搜西洋。餘力更學文。麗篇吐繡腸。今逢不惑年。會友擧壽觴。我進規箴語。聊代慶賀章。嗚呼禎互子。名已冠一鄕。未及祖先力。天下共稱揚。前途我望汝。勵精更自強。建旄刀圭壇。殪敵翰墨場。遠追鷲王德。近繼遍公光。千々万々歲。長傳一家芳。

送小西淸琴西遊

乃祖西征耀武威。小西名號震蠻夷。好將畫筆代戈戟。壓倒東呉辮髮兒。

辮髮唐人皆小兒。丹靑何肯作君師。々々耶馬溪中在。一幅天然黃大癡。

賀伯孝移居

藻城眞箇可移家。友自瑰奇酒自嘉。別有風流使人艶。新栽花勝舊栽花。

伯孝頃者改娶

謝某兄惠竹根印

猗々綠竹根。琢磨美於玉。君子向我贈。其情亦何篤。佩之代韋弦。醫盡胸中俗。

堀家看櫻乞一大枝而歸

香風引我滿園春。大樹如山壓四隣。乞取一枝君莫惜。折花人是愛花人。

戯贈一蝠 并引

一蝠者金陵幇間也滑稽善謔能使人笑性又風流喜交文士蓋俗而非俗。雅而非雅猶蝙蝠之似鳥非鳥似鼠非鼠乎

蜣螂戯了又蟷螂。比我彫蟲技更長。蝠也風流似胡蝶。一生狂舞爲花忙。

俗呼纒頭曰花

櫻 一字至七字

櫻。々。綽約。輕盈。繡難及。畫不成。如雲如雪。宜雨宜晴。香橘眞奴僕。寒梅難弟兄。非瘦非肥艶態。半醒半醉風情。瓊葩万國無双品。玉樹三春第一名

曉櫻 改舊作

香霧濛々似隔帷。仙妃偏畏世人窺。只言朶々猶難辨。誰識梢々已絕奇。漢殿煙消魂返早。楚臺雲鎖夢醒遲。名花第一精神處。在此春天欲曙時。

風櫻　同

雨態煙容無レ不レ宜。被二風吹一處最多姿。塞邊殘艶將軍槊。池上餘香天子巵。

闘罷玉龍鱗活動。舞來銀蝶翅離披。憶曾嵐峽醉歸路。滿面紅蒸薄暮時。

謝三伯孝惠二椰子一

椰子團々大似レ球。故人有レ意故相投。剖來好是作二吾盞一。此亦蠻王舊髑髏。

椰子一名越王頭

聞下森田節齋遊二姬路一不レ得レ意而去上賦レ此以寄

一字三綵筆文工。猖狂自有二正郎風一。憐他今世奇才子。不レ遇寬仁裴晉公。

寄二遠山雲如一

梟樓一別歲三移。詩酒知君同二舊時一。幾度分明來入レ夢。長身七尺笠翁姿。

雲如長身自比二李笠翁一

賀二家里松濤擧一レ女二首

梅梢嫩日照二紅綢一。瑞氣恰同春色生。好是新雛鶯様舌。呱々相和讀書聲。

吉夢非レ熊也不レ妨。淑媛又可レ續二書香一。他年涼雨秋燈夕。好授關雎第一章。

恭聞二文久改元一(二月十九日)有レ作

歳遇二金門一聖慮變。改元頒レ暦六十州。士風知共春風革。文久武長千万秋。

辛酉革命之節蓋自二延喜一始

失題

荊襄自レ古咽喉勢。虞號于レ今唇齒時。寄記太平賢宰相。莫下將二馬島一代中牛皮上。

和某生秋夜讀史作

讀史寒窓涙欲レ流。興亡歴代在二双眸一。内藩豈作二漢家害一。外寇暗萌明室憂。
自レ古怯謀爲二肉食一。于レ今奇厄及二清流一。倦來抛レ卷推二窓戶一。大樹蕭々獨耐レ秋。

追二悼大吉一

一諾千金不レ惜レ身。俠名半世動二鄉鄰一。世間無レ限讀書客。如レ汝好男知幾人。

音吉詩　并引

音吉者東讃垂水郡入谷氏老奴也天性大痴頗有二雅骨一去年庚申（萬延元）病死入谷氏憐レ之爲建二一碑一乞レ予記二其事一因賦二一律一以代二墓銘一

畸哉音吉叟。狂戲六十年。絶慾心如レ佛。無レ營身卽仙。有レ時雖レ乞レ食。半生不レ言レ錢。地下汝應レ笑。一碑名永傳。

讀二關原戰記一

東來羽翼成。屈レ虎人如レ虎。不レ怪群兒曹。一時伏作レ鼠」。
逆レ天奮二螳斧」。豈非二報國情一。螢也雖二微物一。丹心一片明」。
謀主是何人。名藩柱石臣。漢家恩不レ薄。雍齒得レ全レ身。
輸贏一局棋。事機己先賂。誰知盲將軍。眞眼爛如レ炬」。

讀二六合叢談一　二首

六合新聞寫出奇。編々無レ翼四方飛。百千里外遙傳レ信。筆也人間電氣機。」
佛郎女子木蘭流。希臘詩人杜甫儔。誰料鳥言侏服地。有人彷彿似二中州一。
法蘭國有二女子男裝從軍者一希臘國詩人和馬者作レ詩記二時事一論者比二之杜少陵一

梅花水仙同瓶圖

水仙小家數。枉作二梅花侶一。梅花量何大。不レ愧二與レ噲伍一。

寄題富山長平浪花新居

風光洵美浪華都。市隱羨君懸二一壺一。畫舫朝遊花外廟。寶轎夜走柳邊衢。
割レ愁自有レ酒如レ劍。鬻レ術何妨米似レ珠。此裏雖レ佳休二久住一。藻江秋味到二銀鱸一。

送二田岡夢弼東遊一

廟堂和戎不レ用レ兵。謳歌春滿在都城。奎運勃興是此時。文章須レ建丈夫名。

田子海南一奇士。少年志業在千里。眼中不獨空都人。蔑視狡虜比蟲蟻。君不見禹域文字洋外通。蟹行漸化作鳥踪。好揮健筆驚渠膽。英聲震動六合中。

寄小橋季績

內地雜居洋外夷。一聞一見事應奇。請君爲我揮椽筆。寄示任城新竹枝。

聞拙堂翁遊浪花將南下不果而歸賦此以寄

一棹飄然興盡歸。圖南鵬翼奮何時。我州山水眞無福。不入先生遊紀詩。櫻白鯛紅玉藻洲。地雖幽僻也堪遊。春風何日迎君得。同飮象頭山畔樓。

廣瀨旭莊翁來訪賦贈（文久元年七月）

豐中多傑士。夫子最超然。梅癖今和靖（翁近日將種梅花十万本）詩才後樂天。（翁詩什極富人比之樂天放翁）雷名童子識。椽筆異邦傳。（翁雲州海上詩爲清人所傳唱）邂逅一樽酒。恨吾遲三十年。

上州館林人山本士逑擴谷有卿來訪酒間談都下近事太詳因賦似二首　錄一

蝸鬪十年淸國亂。鵬程万里墨洲遊。（士逑兄某去年遊阿墨有紀行一卷）快談一夜佑吾

盞一。也勝漢書添二酒籌一。

夏夕即事

昇平風俗學二都城一。不レ守當年舊典型。楊柳橋邊小村市。蕘童一叫賣二新螢一。

安宅關圖

俠氣當年憐二九郎一。富樫眞箇有二心腸一。前身定作二函關吏一。殘月光中脫二孟嘗一。

顧亭林古俠士歌云曾作二函關吏一雞鳴出二孟嘗一

日本武尊女裝圖

凜々威容一丈身。女裝纔就即佳人。英雄眞箇不レ可レ測。變化隨時如二鬼神一。

加藤肥州西征見二富士山一圖

万里崑崙在二目中一。氣吞二禹域一與二箕封一。英風此際誰儔侶。好對乾坤不二峯。

牛稚學レ劍圖

飛騰凌轢白猿公。巖樹秋寒刀背風。遺恨阿兄腹中劍。奪二君辛苦十年功一。

延喜帝寒夜脫二御衣一圖

盛代君王常抱レ憂。仁風吹滿二六十州一。寒宵一領御衣服。不レ數區々万里裘。

機山聞レ笛圖

城角秋寒笛一聲。老姦顧面可憐生。風流彷彿乃家祖。足柄山頭月下笙。

伊賀局振樹圖

折取松櫻皆十圍。奇材恰配翠楠兒。如將此力借夫壻。擘破花亭大樹枝。

滑川撈錢圖

惜他白水委泥塗。一束松明策未迂。咄々近人此意。大洋飛渡萬青蚨。

王博士咏梅圖

日東博士浪華篇。先向梅花着一鞭。驛使隴頭陸凱句。後君一百十餘年。

太田道灌借簑圖

關外春風白櫻句。池頭梅雨紫菖詞。家風千載有餘馥。傳到棣棠花一枝。

雨餘遊小瀑

快雨初晴時。瀑勢溢巖曲。昨日一條絲。今朝萬斛玉。
飛泉屋外懸。雨點散晴晝。倚欄試一哦。水語與我鬪。

端午小酌示愬兒々時自京師歸海上有風波之厄

不作汨羅鬼。歸來眞可喜。一樽端午辰。莫學獨醒士。

某生問作詩之法因賦示二首

欲レ爲二善詩人一。須レ積二讀書功一。讀書千万卷。筆力始通レ神。是此一秘訣。傳自二浣花翁一。
謝家地塘篇。一時出二自然一。唯此平々語。千年猶喧傳。須レ知二詩妙處一。不レ在二彫與レ鐫一。

讀二鳥跡談一 鳥跡談松浦近著

洋學流行漢學卑。蟹文鴃語漫爭レ奇。喜君獨立背二時好一。一卷新鐫鳥跡詞。

聞三竹外致仕卜二居京師一賦レ此寄レ賀 二首

官途險處忽抽レ身。想見幽棲花竹新。我亦他年遂二吾志一。一囊私蓄買二芳鄰一。
新居卜得對二東嶠一。近柳遙松入二幽眺一。想君晚酌迸二涼蟾一。倚レ檻一聲高喚レ妙。
竹外醉後喜呼妙

謝三高橋世民惠二鉄如意一

剛鉄鑄成君子器。指揮直可レ驅二魑魅一。從レ此不レ須二腰下刀一。人間万事一如意。

聞三節齋移二居倉子城一賦レ此以寄

薇江波接二藻洲烟一。從レ此鄆筒好屢傳。第一好便君識否。春帆秋棹賣書船。
倉子城有二書商一時々來二予鄉一

題二伊池生指頭書一

知汝指頭殊有レ靈。千山万壑一揮成。半生不レ用人間筆。驅使天然肉管城。

夏夕戲題二團扇一

蚊軍千百万。掃去一揮中。吾家大團扇。夜々起二神風一。

雪兒

赤脚青裙小雪兒。有レ緣通レ我亦何奇。半生絕藝唯温酒。一味嬌心未レ解レ詩。樊素徒供老人樂。木蘭不レ學女郎姿。藕絲欲レ斷未レ能レ斷。我愧王敦開閤時。

燕子花

輕態如二飛燕一。翩々綠水中。前身漢宮在。纖艷畏二微風一。

紅蓮

水風吹不レ醒。紅影一枝橫。風流白蓮社。果着二醉淵明一。

坡公遊二赤壁一圖

小人成就高人福。謫處江山淸樂足。玲瓏明月滿船光。也勝一枝金蓮燭。

范蠡泛レ湖圖

四海干戈滿眼秋。此翁胸裏獨風流。白頭不レ學渭濱老。留得名花在二釣舟一。

伯顔齋梅圖

北人何必讓南人。馬上英姿不帶塵。擔取暗香疎影外。胸中別有一枝春。

明妃 和漢美人雜咏之一

不把黃金賂畫師。美人有氣似男子。漢家天子豈無愧。只倩娥眉和狄夷。

梅妃 同

幻出羅浮林下粧。肯同肥婢競容光。三郎至意風流乏。捨此梅花取海棠。

王翠翹 見虞初新志

佳人豈悉薄心腸。一死酬恩艷骨香。絕勝西施沼吳去。五湖春水泛鴛鴦。

柳夫人 同

誰料章臺出義姬。貞魂一縷附青絲。虬松百尺老儒士。孰與纖々楊柳枝。

虬松百尺柳夫人傳中字也蓋言虞山筆力之健也

雜詩

秦花一掃後。僞書又紛如。光明聖人道。五里霧糢糊。一讀使人迂。再讀使人愚。咄々造書者。其罪勝燒書。

古代人皆樸。文武途不殊。帝王即儒者。兵士是農夫。何時陵谷變。世道日

以汚。儒爲醫卜伍。士學商賈徒。楊墨全收跡。佛老稍失術。何圖千秋下。一害自西出。其說非虚無。其理太精密。今日之異端。非復曩者匹。立言誰濟世。恨無韓子筆。

書生論古人。忠邪辨分明。却對面前人。茫々目無睛。軼才蔡中郎。就賊汚其行。雄心陸放翁。南園累其名。古賢如二公。不免後人評。咄々讀書士。出處勿苟輕。

孔雀金雞類。雄者毛羽美。牛馬麞鹿軍。牡者骨角偉。人是万物靈。男豈讓女子。毛羽即文章。骨角是武技。男子無文武。至竟婦人耳。

題松莊老人畫像

老姿如鶴太清癯。此貌何妨入畫圖。逸樂四時花鳥月。通才三教佛神儒。幽棲頗似蟬麻呂。妙咏何輸猿太夫。更有雄心未灰死。寶刀三尺不離軀。

咏鬚

髯鬚是長物。至竟不如無。唯此數莖白。吟邊可以娛。何必蝟毛磔。醜貌類羯胡。我聞孔夫子。生來無眉鬚。夫子無鬚見孔叢子

論近人詩　原十

生字入詩能樣佳。鉢盂亦有渭南才。不知袖底施何咒。幻出虵神牛鬼來。」
我愛惠連才氣優。妙齡名已壓名流。老天如假數年壽。靈運終應遜一籌。」
半世精神在一囊。性靈直出自空腸。五更殘醮骨邊肉。味比君詩孰短長。」
江湖一失五山堂。誰作替人驚藝場。幸有二山相對立。江門風月未淒涼。」
詞塲巖鑠女將軍。東有細香西細蘋。誰有中間相角立。梁家閨裏布裙人。

讀論語

聖人如春風。常養靄然氣。所以浴沂辰。獨與點也志。

鎮西八郎

鎧袖一揮誰敢當。纔伸左手動扶桑。名高囘雁峯頭月。威凛流虬島外霜。
片羽當年沈巨艦。大鏃今日化長槍。數奇猿臂好男子。不學家風如虎狼。

謁石崎叔墓

情是至親恩是師。墓前蕭謁淚如絲。此人無子知何報。我叔有才眞不癡。
陪宴竹林朝佐酒。娛閑山墅夜圍棋。最思函丈承嚴敎。一月一箱勸讀時。
杜牧之示姪詩云一日讀十紙一月讀一箱

象山竹枝補遺

是亦金陵響屧廊。畫橋有ㇾ屋聳二斜陽一。迎來送去女郎履。蹈碎遊人木石腸。
姉妹相呼野外遊。榴裙綷綵午風柔。細葩摘取紅黃紫。纎手弄來爲二繡毬一。

賴山陽翁墓 京遊追作

此翁仙去幾經ㇾ年。洛下文林久寂然。病裏編ㇾ書習二鑿齒一。醉邊論ㇾ策杜樊川。
夙繙二遺集一心全醉。今問二殘碑一涙自漣。想見爛斑吐二鮮血一。空山花亦杜鵑天。

春寺櫻雲 香象樓十勝之一

滿山皆艶櫻。埋却古禪扉。夕陽西沈後。花光猶在ㇾ枝。山僧不ㇾ知ㇾ夕。撞ㇾ鐘常遲々。

秋嶺楓錦 同

霜葉錦爛斑。黃紅紫叉丹。青松點二綴之一。染成五色山。我樓秋最好。客至必憑ㇾ欄。

獅々駒歌 幷引

讃之俗、擧二男子一則粉團造ㇾ馬、以賀二八月之朔一、猶二女子雛祭一、例相傳保元上皇南狩之日、始造二此物一、以代二貢馬之典一、其狀太拙、上皇笑曰獅耶駒耶、殆不ㇾ可ㇾ辨、因名曰二獅々駒一云。

海南八月粳稻肥。落磑粉餅造駒兒。盤中躍出勢如活。騂駱驪騮種々姿。濫觴云是保元秋。崇德蒙塵綾水隈。行宮寂々迎駒節。聊獻此物侑玉杯。遺事綿々六百載。民間羊存傳至斯。我嘗讀史知國事。對之感觸獨攢眉。當時雙龍天上戰。中原始駭兵馬機。滿朝駑駘無駿骨。武人指鹿假虎威。大權一失塞翁馬。國勢駸々去不回。承久鑾駕遠播越。建武天馬亦槽隤。爾來群驚互跳陸。碧蹄蹈裂野馬羣。龍德東興煙塵歛。驅除一戰霸業開。驊虞二百人鼓腹。鬪雞舞猴競娛嬉。此駒亦作驕兒玩。汗馬苦勞無人知。錦繡作韉玉作鞍。脊靈驚目騁功思。君不聞古昔王室亦講武。北地貢駒是此時。駒兮駒兮能記否。天子騎汝征四夷。

義犬塚歌

阿讚之界山嶙峋。地呼犬墓果何因。云是往時有獵夫。夜驅猪鹿涉荊榛。倦踞樹根暫假寐。不省妖物吹毒氛。獵狗忽然磨其牙。一聲吠主含怒嗔。獵夫怪他反噬狀。砲丸一發傷狗身。狗也被創氣益猛。猛然躍向樹梢雲。中有蟒蛇長幾丈。見人垂涎欲下吞。被狗一噬膽驚破。巨頭忽縮意逡巡。獵夫仰見心初悟。人狗戮力燼修鱗。可憐蛇斃犬亦死。腥血滿巖紅雨繽。

木腸獵夫亦哀痛。弊衣裹屍築小墳。我聞此事心有感。拂苔細讀碑上文。
嗚呼澆季人情不如狗。爭名攫利日猖々。我願千紙搨此碑。分與不忠不
義人。

華陀療關羽圖

二豎入膏吳魏兒。漢家痒病竟難醫。英雄八十二斤鉄。輸與仙翁一寸匙。

讀北條某米行詩記

万里觀光使節舟。夷風蠻俗落双眸。火車追電一條路。星旆飜雲六疊樓。
鯨氣全收太平海。皇威遠及協和州。新編讀罷神飛越。今古無双大壯遊。

中秋後一日衝雨赴高木篤民約

一傘衝風雨。孤村十里途。欲見故人面。何論月有無。

膳臣刺虎圖

吻血灑紅滿巖雪。々裏尋跡入虎穴。直搜虎口扼虎舌。日域壯士何快烈。
獰獸從此心膽摧。千年畏縮不東來。

佛妓

僧相國家妖麗姝。嬌名底事喚浮屠。千秋才藝傳前史。絕代容華動上都。

氣節何曾輸祇女。心腸果是勝凡夫。紫裟一領代紅袖。佛妓前身定佛奴。

名妓汪佛奴作尼事見輟耕錄

鮎川一雄自銅山歸談其風景甚奇詩以記之

銅氣蒸山寸艸無。風光渾是別寰區。十丈巖容黑鬼立。一條水色赤虵趨。

屋頭峭壁路通天。欄下深溪雲在地。連屐何時遊此中。我詩君畫寫幽致。

崖頭廨舍太風流。卽是天然銷夏樓。一味涼氣徹人骨。暑窓猶着木綿裘。

纔入礦中知夜國。茫々不復辨西東。螺燈影裏穴人黑。恍訝崑崙烏鬼僮。

金燈花

五朶瑞雲紅欲浮。重陽時節滿林邱。一叢界破荒涼景。万蕾開張錦繡秋。

血色連郊殆漂杵。火光滿野欲燒牛。可憐吾土之知己。空伴塚邊枯髑髏。

郊行

十雨五風秋色闌。祠頭鼓笛有餘歡。村翁傳說城中語。米價降如下坂丸。

秋晴散步示子功文郁

村路煙消銜夕陽。秋光閒覺似春光。籬邊石佛袈裟紫。稻上草人簑笠黃。

求伴先敲詩友戶。借錢又貰酒朋莊。出遊此際好時節。須把一閑排百忙。

松蕈

靈域生靈物、自然有仙氣。我今命美名、呼作赤松子。

松蕈多生赤松之下

齒脱

蒲姿柳質奈衰殘。一齒離身心慘然。狗竇初開任人笑。驢車連痛有誰憐。
當時方朔誇編貝。今日女媧思補天。百事不成身已老。菜根咬得更何年。

雜詠

讀書有要訣。何必用博雅。忠孝唯二字。識之即學者。

書

繪事畫有用。屢從戰陣中。愧殺詩人筆。對虜無寸功。

畫

衣裘防寒耳。何用奢麗風。須思上古世。天下皆裸蟲。

衣

茶味濃於酒。醉他俗士心。殘缺一磁椀。購來價万金。

茶

山口懷古

西周佳麗擬二京師一。十載豪奢武備衰。文雅徒追鎌府主。優柔堪レ比乖工兒。吉見頼信以二義隆一比二平宗盛一堂中詞客燕嬉日。幕下權臣虎視時。弑殺錦街綉巷跡。棟花落盡夕風悲大内氏之末年或詠二和歌一曰二陶山風烈棟花落之句一蓋大内棟訓音相通

讀二東坡集一

一生不レ作憂愁語一。筆底奇文湧似レ波。能把二滑稽一驚二百代一。東方朔後有二東坡一。

讀二關城書一

一紙關城檄。千秋感二鬼神一。忠臣諸葛匹。賊子賀蘭倫。壯氣風霜凛。丹心日月新。讀レ之不レ灑レ淚。應是木腸人。

達磨瓢 評題二

即是天然不倒翁。不倒翁木消具見二談叢書一恐他一物作二空々一。金光自有二瞿曇相一。米汁恰同二嘯勒風一。繡褥安将好趺坐。銀環穿レ耳不レ離レ躬。達磨一名穿耳客慈心欲レ濟人間苦。貯得醍醐在二腹中一。

細川清氏碑

白峯々下冷ニ斜陽一。紅葉青苔古戰場。五百餘年蹤未レ滅。三十六騎骨皆香。
無謀縱欠ニ智仁器一。歸順猶存忠義腸。愛ニ此雄豪万人敵一。半生不レ作ニ北方强一。

祖谷葛橋圖

葛藤經且緯。欲レ渡魄先消。雲裏龍神掛。風中蛛網搖。千尋臨ニ絕壑一。百尺跨ニ晴霄。飛嶺溜筩險。何能勝ニ此橋一。

菊

世間寵レ菊人。半是驕奢客。可レ憐隱逸花。空屬ニ陶彭澤一。

石潭觀楓

艷々紅楓橫ニ翠微一。爬巖頑石亦妍姿。最宜隔水見ニ全景一。憶起京朋嵐峽詩。竹外嵐山詩有下一帶紅且橫ニ翠壁一只宜三[illegible]見ニ全山一句上
霜餘楓葉易ニ飄零一。万片隨レ風滿ニ晚汀一。亂舞蔽レ天紅蛺蝶。綾飛掠レ水赤蜻蜓。

冬

曉

樹々葉全脫。曉庭霜氣稠。寒雀團如レ菓。箇々坐ニ枝頭一。

柚味噌

一寸黃金釜。天然風味宜。螺殼烹ニ螺肉一。比レ之未レ作レ奇。

讃岐雜詞之一

新穀登塲玉有光。精綿入市雪爭色。品々更有海中墟。當喚南方三白國。

雄北口肅手書予象山竹枝以上梓其書其刻皆妙賦此以謝（文久二年作）

巴調竹枝歌幾章。村風恰似象山娼。一朝何幸逢名手。看得嬋姸都様粧。

悼小西清琴

萍踪欲遍大扶桑。一劍飄然向紫陽。豈料旅程無際限。遠遊十万億西方。

畫到髑髏尤逼眞。贈吾一幅更傳神。可憐此事終成讖。身作北邙山上塵。

雪後

雲花何似春花好。消作新泥不可行。憶起松家賢太守。沸湯一杓瀉瑤瓊。

松平備侯正信雪朝令人掃其門前瀉以沸湯蓋恐雪後泥濘人難往來也

撿阿菊遺物

傾盡殘箱暗斷魂。寶釵繡襪剩香存。最憐一紙三絃譜。淡把臙脂印指痕。

蠣

廣陵蠣肉品尤佳。曾入江南幾万家。我國海中非不產。牡丹終似讓梅花。

丸龜海中產牡丹蠣肉頗豐俗呼曰牡丹蚫蠣有植花蠣藝州所産卽是也

悼邊士信

遺命慇懃托令兒。也無片事礙心思。知君枕上呻吟際。腹藁一篇辭世詩。

臘尾戲作

舊債積來如唔塵。丈夫口殆欲言貧。今年囊底閑錢乏。買得鰤魚纔半身。

壬戌（文久二年）元日二首

金鼓無聲大八洲。万家迎歲意優遊。海西西域今爭戰。有此春風春水不。

四十六齡吾稍衰。欲將家事附阿兒。喜渠粗解青囊術。手製屠蘇進一卮。

宇久比壽

一囀告春聲太奇。與蛙成伍我曾疑。古今集序金黄避雨梅花笠。用古歌語錦翠織煙楊柳絲。七才芳譽嬌女句。紀貫之女七歲詠鶯千年佳話聖朝詩。和鳴眞是東方鳥。莫比唐山黄色鸝。

讀松濤翁疊韵百首詩次韵以題其卷後

君才天下悉相諳。不獨雷名轟海南。詩築長城一百二。壽加新算七十三。翁今年七十三篇々自有有餘味。語々絕無無用談。經國憂民多少意。請看此卷

悉包含。

福壽草

身離幽谷裏。含笑入春城。恰與鶯同色。好將梅作兄。黃苞金爛燦。紫蕾玉膨脖。自有雍熙象。堪呼福壽名。

賀一蝠四十二

東方朔是汝前身。日々滑稽娛幾人。三顆仙桃曾竊得。嬉遊從此九千春。

悼松莊老人

岸上樓中老隱居。唯將事業附三餘。枕頭遺帙五千卷。半是平生手寫書。

平生守約有囊儲。不似尋常風月徒。身後傳家物不乏。寶刀古畫大珊瑚。

賀三井伯成四十二

象山醫似艸。我友獨超倫。客簇杏林曉。名香橘井春。奇方洋漢合。和氣婦嬰親。此術好研究。壽人兼壽身。

寄題双松岡　松本松林同三子同居號双松岡

浪速文林久已荒。梅花不復舊時香。幸然有個双松樹。謖々清風起一岡。

始用眼鏡

双懸日月太分明。何物蠻兒精製成。人道一橋横跨鼻。我疑片玉忽嵌睛。
老來初識玲瓏色。當日枉呼靉靆名。二目從今爲四目。讀書萬卷事應輕。

海和尚 並引

予小時喜食章魚。嘗作一律嘲之。近來齒力稍衰頗
厭其剛。因又作一律嘲

海僧風貌一何殊。肉身時々自喫驚。衣上加緋即成佛。腹中有墨亦非儒。
誰言八脚似天蓋。我怪百瘤如念珠。老禿中人能作害。看來終是毒浮屠。

伊勢蝦

海中老物類龍蟲。（一名龍蝦）骨像稜々也自豪。幾尺紫鬚尖似戟。一團赤甲爛
如花。同倫唯有平家蟹。綽號好呼伊勢蝦。不畏此身烹五鼎。躍來三百向
人誇。

平家蟹

横行擁劍太豪雄。空匿江南蘆葦中。翻怨曾能伐猿島。訴冤今尚向龍宮。
身同擐甲武夫態。爪似彈琴貴客風。魚腹埋餘平姓鬼。當時一箇可憐蟲。

謝文郁惠薄葉紙

我是蠹魚叢裏客。愛他白紙比黄金。番々幾葉豈言薄。見汝平生皎潔心。

麻村路上

溪水渡還渡。溪廻路自廻。人道一溪水。渡來十六回。

一家五六本。艶雪照柴門。豈圖幽僻地。有此梅花村。

題畫

海上夷氛處々浮。青山綠樹失風流。畫中幸有別天地。不着西歐黑色船。

賀長忠卿賣倉 并引

賣倉非賀事也而賀之者何曰蝮蛇螫手壯士斷臂是禦其毒之深入也忠卿此擧頗類之故賀焉

一箇空倉賣亦佳。墻頭半角豁然開。君家從此多清福。靄々春山入戶來。

雜詩

愚夫願成佛。其心亦何惑。唯能除煩惱。何處不淨域。洵美大日東。即是極樂國。悅口鯛魚味。娛目櫻花色。何必近捨之。遠望十萬億。

人恨有地獄。我恨無地獄。々々如果在。天下快事足。先設犁舌獄。殺盡譏人族。更設剉碓獄。割取酷吏肉。

鷲山雖棄妻。龍樹已通妃。至竟佛菩薩。未全絶蛾眉。猗哉鷲上人。此意早已窺。周妻與何肉。一切不禁之。

南朝四百寺。北魏一万層。今日佛區數。亦恐不減之。一朝悉破却。得利實無涯。邪毒入人深。此策誰能施。燒之爲灰燼。纖公計豈非。留之充畫景。淸主意亦奇。

將棋

九道紋枰小戰場。分爭南北迭誇強。先排壘陣防企將。（築壘陣以防敵人）更築新都護王皇。三柱有功名始顯。一槍之勇孰相當。（一槍上勇四字用[illegible]公王彦章書傳記中字）出奇唯有用輕卒。車戰何曾拘古方。

元韃敗北圖

快事千秋寧有此。胡兵十万一時死。大艑峨舸碎爲塵。殘甲敗鱗流蔽水。豐閤玄菟未爲豪。周郎赤壁好爭美。區々不賴一神風。壯矣相州偉男子。

麴秀才

相遇先心醉。十年不負吾。精神如烈士。和氣似醇儒。交悉風流士。名稱賢聖徒。花晨兼月夕。豈可此君無。

豐王按摩圖

按ㇾ足摩ㇾ肩老沐猴。暫時亦忍胯間羞。到頭此手非二凡手一。一握蜻蜓六十州。

癸亥（文久三年）元日

攘夷議定國威揚。瑞日光生大搏桑。早起今朝何所ㇾ禱。聖明天子壽無疆。

讀二六士傳一

一擊何殊博浪椎。志雖ㇾ不ㇾ遂亦雄哉。請看今日中興勢。自ㇾ此書生一擧來。

追二悼吉田義卿一

此子如何罪。六年縲絏中。身如ㇾ虎投ㇾ穽。（義卿通稱虎次）氣尚鶴横ㇾ空。（象山送二義卿一詩有下孤鶴横二秋旻一句上）戀ㇾ母詞何切（義卿絕命和歌有二戀ㇾ母之語一）攘夷志太雄。櫻門十七士。首唱讓二他功一。

獲二京友信一

丹鳳城頭瑞日昇。知他國運屬二中興一。峻刑誰戮姦雄像。盛典新修古帝陵。峨米佛皆應二懾伏一。薩長土各有二威稜一。新來一紙信中信。讀倚二春牕一屢剪ㇾ燈。

上洛圖

畫戟東來朝二錦京一。君臣從ㇾ此義分明。縱觀自有二秦王勢一。畏戰曾無二宋主情一。百足聯行蟲不ㇾ仆。三年雖伏鳥初鳴。蜉蝣今日爭能動。大樹經ㇾ霜綠彌榮。

題自畫蘭竹

作畫如作文。其妙在簡潔。一花二三葉。是我畫蘭訣。

瘧間偶作

水戰纔休又火攻。困人瘧母術何工。纔離半死半生境。猶在八寒八熱中。
南里淵明全止酒。北隣滿奮亦嫌風。模糊血觸京城信。一紙傳來未奏功。

瘧間襍詩

夢遊五大洲。親睹各國事。始識新聞紙。一半是虚僞。
人道夷洋智。洋夷却是愚。種々造巧器。爲我帝國奴。
天下糖粃物。屠兒又浮屠。用之攘洋虜。一網打三魚。

謝高木篤民惠紙製陣笠

截則兜鍪提則牌。故人製法入精微。一板紙笠勝銅笠。抵敵砲丸如雨飛。

宿梧陽堂有感

百感攅胸眠不成。幽亭投宿若爲情。窓前更有棕櫚竹。終夜蕭々風雨聲。
如此寒風飛雪天。獄中辛苦有誰憐。愧吾無策救危急。黄紬衾中擁火眠。
時友人某下獄

亂本初萌山外州。一時搖動十諸侯。屯兵神武陵邊地。樹旆護王守處邱。
誰信長毛非逆賊。果然獨眼是名流。覇庭幸有仁柔德。結局勝他承久秋。

詠豐太閤四十八韻

扶桑木下耀紅輪。精氣化爲豐國神。傳絕縱橫一萬里。名轟前後二千春。
英雄正出亂離世。冠冕初歸草澤身。劉義攫金原卓犖。張良取履太勤辛。
重瞳不學匹夫劍。隆準殆溲儒者巾。曾結綠林豪客隊。夙離黃面瞿曇因。
漢旗遠嶺趙城幟。梁堰濤波魏竈淪。一勝一瓢加纍纍。五年五處定煙塵。
軀遭不幸却爲幸。歛讓和親終結親。乘運勢龍初變化。避鋒妖鼠忽逡巡。
素裳繇雪復讐日。香靄連雲祭墓晨。義擧堂々酬乃主。覇圖駸々救斯民。
鉄戈指處簞壺迎。麾扇揮邊牧伯遵。官途三軍讓黃紹。建康一戰破盧循。
江淮草木望風偃。荊楚包茅隨帝陳。西伐俘纔入蓮幕。東征表復上櫻宸。
服人蕭路天威在。破虜衛青奴面新。斧鉞光揚元帥服。旗旌影暖艷陽辰。
芙川鷀鴨寂休翼。湘海蛟鼉窟戲鱗。函谷崤關渾破裂。屠齊懦楚盡平均。
繁興故向河湯狩。楛矢遙從肅愼臻。樂侑瓊觴吹鳳管。宴供瑤饌煮猩脣。

規模已小平安土。邸第重營浪速濱。都古登臺天子跡。港開築嶋相公隣。
瑠璃夢聳魔箕斗。瑪瑙梯高通珪彝。姫貯娉婷欺祇佛。闔窮綺麗壓金銀。
狀鳩錦帆紅爍々。澱城脂水紫黝々。逸遊老醉肉纔瘦。薄伐殊邦志又伸。
陸曬戈矛威凜烈。水連畫舳勢赫赫。牛刀直割雞林郡。馬箠危投鴨綠津。
虎將奮髯姿颯々。狗脅低尾語猜々。拓開夷境到窮髮。摧折蠻兵如腐薪。
手覆孤巢獲單于。膽呑四海揮貽豹。七秋韓鎬釁朱血。八道邱墟走碧燐。
命也半途星早隕。天乎末局事空湮。寺傳功德猶香火。塚瘞髑髏唯棘榛。
鴻業何論鬼武匹。壯心肯數鹿苑倫。世傳戰法奇而正。我慕度量寛且仁。
愛犬鷹徒皆免醢。重糟糠婦不忘貧。作文氣帶廐王壯。裂冊風同莵稚嗔。
造佛本非走佛客。嗜茶還異濁茶人。識凌評史石胡將。策合投錢狄漢臣。
毅魄儿原如可起。武威万國亦應振。休言極侈似亡隋。莫說佳兵過暴秦。
好倩官家畫工筆。斕猴靈貌上麒麟。

甲　子(元治元年)元　日

自愧殘軀尫様全。也無一策到洋船。新正屈指啞然笑。齢倍周郎破賊年。

佐野竹之助臂罩歌應祇園太郎囑

春雪壓城深幾尺。櫻花門外天一白。壯哉濕家義八黨。恰乘此時狙讐敵。井家威權震幕中。寶轎畫戟光赫々。一朝逢變氷山頹。驕奴惰卒失魂魄。衆怨積來深於雪。刀槍電擊一當百。直斬夜叉如殺鼠。鋒尖貫頭血滴々。維時三月修禊辰。滿地染作桃花色。快事千秋寧有此。浪八代天誅老職。十有七士皆勇烈。赤心奪取赤城赤。中有一人尤少年。以竹爲名勁而直。自期戰場死曝屍。身被大創鬪逾力。衣中朱書絶命詞。三十一字響金石。一双臂單餘香存。祇子獲之比寶璧。我見其物想其人。留嗽捧持心感激。嗚呼祇子汝亦海西有志客。名藩受恩食其食。佩之好代韋與弦。緩急之節誓報國。

悼長尾杏齋

國手名轟藻府中。醫壇稱覇亦英雄。桑年溘逝無窮恨。匹似君家謙信公。

賀梅塢師華甲

佛家壽命稱無量。仙鶴靈龜非其倫。佛家身體稱不壞。綠竹蒼松非其群。我儕塵界一凡夫。豈有隻字可賀君。姑呈妄語侑壽醆。梅公々々君試聞。

如今夷風黷神國。邪教妖說亂紛々。王法將衰佛法微。此時君曹可不振。君身今日猶矍鑠。好提利劍破魔軍。君宗今日猶盛熾。好建法幢伏妖民。擁護王室與佛門。早使扶桑如舊春。君身長享無量壽。衆生亦保不壞身。

兒輩學劍賦此以示

英雄三尺劍。可以定風塵。莫學匹夫勇。唯能敵一人。

悼蝙蝠

會將遊戲了生涯。一旦仙遊殊可嗟。曼倩詼諧稱絕技。龜年歌曲自成家。醉顛常戀猩々酒。狂舞唯求蝶々花。從此柳東軒裏宴。樽前誰復唱雲耶。

宇都宮龍山見惠其集賦此以謝

絲崎松樹翠一區。柞原梅花白万株。龍山先輩出其際。人文恰與風景符。此翁夙有孝子名。孝子能詩匹儔無。放蜞一篇世爭誦。孟筍王鯉同一聲。近抄其詩始上木。格高調古使人服。我知此集他日傳天下。松讓其名梅讓馥。龍山母嘗患疔。醫將施蜞針之法。時方嚴冬水蟲皆潜。山百方求之。遂獲之。人以爲孝感所致。集中放蜞行一篇詳叙其事。

送雨艇遊但州

仙子床頭衣拂浪。夜叉城畔屐凌雲。此行別有奇觀在。芳艸芳花南八墳。

獲孫

鬓毛上鑷白於絲。爲汝大翁還自宜。一飽從今拋万事。南簷暖處日含飴。
獲孫如獲掌中珠。屈指待他孩笑初。無病唯能作嬉戲。何妨縻墨涴吾書。

女名大喬詩以演其意 大喬訓於多嘉

女子榮辱由其夫。々壻須擇賢與愚。一旦誤嫁賣菜傭。糞壤空埋韞櫝珠。
我獲孫女名大喬。其意偏在祝前途。々々所望阿誰匹。美貌快男孫伯符。

先妣忌辰

家門一敗鬻田園。辜負萱堂鞠育恩。聊慰靈魂唯片事。今年兒也獲初孫。

謝安川子風惠雜蔬

胡瓜蠶豆假神童。頭味雖佳鮮有終。好箇膨亨紫茄子。晩成自有老儒風。

買妾

聘得朝雲新結緣。蘇家從此不蕭然。老來肯起巫山雨。唯倩紅裙擘白箋。

味噌

五斗代糧功不輕。清廉價不抵連城。曉盆掃去珠無屑。寒杵擣來丹有聲。北氏當年傳雅事。東坡何日讓佳多。（俗呼味噌曰東坡取三蘇之義也見南畝莠言）食中宰相吾評汝。一味調和百種羹。

横濱

横濱互市簇蠻舟。聞說繁華冠地毬。天主堂高十字架。星紋旗閃七層樓。人疑此境是夷境。我道何州不帝州。泉下北郎瞑目否。胡奴調馬藁街秋。

呑象樓遺稿革集了

始入二獄舍一藤伯孝在二其西隣一隔レ壁呼曰獄味如何予即答以二二十字一。

人道二獄中苦一。獄中亦樂國。況有二讀書朋一。快語罵二夷賊一。

婆婆歌　三解

縱呑二鐵鑊湯一。不レ變男子腸。聽二我婆婆歌第一一。尊王尊王又尊王。
縱攀二劍樹枝一。不レ作二婦人姿一。聽二我婆婆歌第二一。攘夷攘夷又攘夷。
縱作二俠家敵一。不レ爲二皇國賊一。聽二我婆婆歌第三一。報國報國又報國。

贈レ盜

六經以外豈無レ人。胠レ篋擔レ囊術入レ神。豫讓漆痕猪滿レ體。荊軻劍氣髮衝レ巾。
好離二白谷綠林隊一。去作二玉麟鐵杖倫一。對話蕭々風雨夕。我疑李涉是前身。

答二伯孝見一レ贈

獄舍何圖忽遇レ君。隔レ窓細話淚沾レ巾。廿年磁鐵氣相感。今日蘭金德有レ鄰。
不レ害我腰同二蠖屈一。只祈君志共レ龍伸。泰來否往期應レ近。莫レ道天公頻殺レ人。

伯孝陰送酒賦此以謝

轍鮒連朝困渴喉。援兵忽出自青州。半杯卽抵千金寶。一盞全消萬斛憂。
新釀縱教曹操禁。醇醪自有越王投。醺然今夜初安睡。忘却此身爲楚囚。

獄中雜咏四十四首

檻車載夢入城門。鎖響鏘然徹耳根。老矣猶羞屈此膝。命乎何惜喪其元。
畢生只識皇恩渥。今日何知獄吏尊。憑仗人間韓吏部。一碑爲辯柳家寃」
閑雲孤鶴小生涯。何事一朝乘檻車。咄々向空書幾字。呵々索密發長嗟。
縲痕印臂篆籀字。蚊跡留膚絞纈花。此苦吾儕好甘受。慘刑今到貴人家。
身是神州一布衣。雖然眇小亦男兒。十年早已辨邪正。」(一本不論縲絏非其罪。)
今日何曾門盛衰。(一本只道聖賢皆吾師。)心念放翁臨沒句。口唫孝孺就刑詩。
死生兩路任天命。囑與家人勿復悲。
東黨西朋時事繁。餘波及我豈爲寃。袖中包去女兒涙。胸裏鍊來男子魂。
黑縲縮身鷹失勢。白沙埋膝鶴留痕。此回一死無遺憾。久矣故朋歸九原」
頑性狂心死不休。獄中猶抱杞人憂。西隣白首同歸伴。北舍綠林豪客儔。

談似隔靴何到癢。壁猶有耳屢招讐。曲肱時結荒唐夢。一劍凌濤斬老鮹。』
蟨蝸宮中薄命身。為牛為馬亦前因。室無燈燭常如夜。地絶鶯花豈有春。
冷雨窓間盜共語。醒風枕上鬼成隣。我來幸遇南薫節。不見雪天僵凍人。
東友祈神西侶耆。其間大坐笑怡々。气憐背傲檻中虎。排悶且吟垓下騅。
曝骨戰塲猶作快。（一本不學區々紈袴兒。）任身大命又奚疑。丈夫到死當雄壯。
馬伏波言是我師。
自作俘囚百不平。也無一策乞援兵。朝防雨箭衾為盾。夜禦蚊軍紙是城。
惜水如金蔚山壘。求壚到敵甲州營。狂心猶恐髀生肉。煉歩朝々繞壁行。』
地獄門高七尺牆。此中纔入黒茫々。臂頭正着觀音鎖。鉢底難求般若湯。
牛卒今朝奮鞭策。鬼婆昨日奪衣裳。幸然黃面如來德。爛々照人猶放光。』
安樂國中獨立王。世間百事暫相忘。室如幽洞乾坤狹。地似深山日月長。
時學東坡養生法。或求西竺煉心方。板床蓑褥聊清楚。好我今年避暑塲。』
海内狂猬骨半枯。背嗟桎梏到吾徒。赤心未報明天子。白首翻為贋丈夫。
獄裏如今尚清淨。世間何處不荒蕪。近來消絶歸乎念。出向江湖伴已無。』
農隙三冬誤讀書。危言終作繋囚徒。投身獄裏我為我。回首世間觚不觚。

忍餓未醫周國粟。諸因有作予不受辭（一本壯心猶罵紫髯奴。）消閑且畫鄭蘭圖。今時
只解免刑戮。豈是神州好丈夫。
早合青山埋醉骸。死全受侮伍輿儓。虛名本自虛文得。奇禍終從奇癖來。
妻孥曾嫌買臣窶。世人不愛禰衡才。是非四十九年夢。一夜回思百感催。』
北舍南隣各結盟。獄居何異世間情。人皆非鬼淚痕滴。錢果有神光焰生。
月下倶謀一瓢飲。雨中分與半杯羹。最憐斜日鳴鴉底。隨例祝呼三四聲。』
白旗入洛熟梅辰。想見紅橋漲紫塵。大擧殆同承久歲。再生宛擬慶長春。
蹄輪當此盈京洛。繹綫何緣到我身。爭戰知他期已近。砲車出郭響轔々。』
節入梅霖日似年。躹々只學宰予眠。兩隣宛作天涯國。孤枕何殊夜泊船。
老鼠侮人跳則畔。古狸學鬼嘯窓前。此中晴日猶難送。況是濛々漠々天。』
兎來西徙又東奔。白晝蕭然坐壁根。長睡過年小華嶽。靜居隔世別桃源。
他時老馬應回塞。今日羝羊多觸藩。把此清閑方賜我。藻城太守豈無恩。』
身外蕭然無一囊。獄居好似古禪堂。厠邊雪竇時持撅。壁下達磨常面墻。
意馬心猿總不動。周妻何肉兩相忘。炎天六月火坑底。如是觀來即冷涼。
熱汗淋漓濕葛衣。獄中苦境是維時。腐尸誰作帝羓狀。瘦骨我爲人措妾。

枕上喊聲蚊結陣。床頭穢氣蟻屯師。隣庭晩灑龍筒水。借得半涼纔學屈。

溽暑入秋威未收。炎塵万斛滿床頭。楮幬六尺獄中獄。鉄鎖二重囚裏囚。自覺吾軀縮年壽。何堪人汗搾膏油。無端憶起詩朋約。白藕花時涼處遊。

快雨滿城驅暑初。獄窓亦可撚吟鬚。月中涸水飜銀浪。露下蛛絲串寶珠。毳喝人如有神護。失威蚊似受天誅。更憐隣盜乘涼夜。一段傳奇說義徒。

送夏迎秋過幾旬。枕頭昨聽雁聲新。浮雲自古能遮日。沈木何日又遇春。無罪猶看配所月。有毛却現俊寬身。歸歟嘆罷自相愧。三歲幽囚人在隣。

海上逢秋殊可驚。金風漸々枕邊生。故園墳墓時關意。中國干戈常觸情。未見烏頭化為白。其如魴尾病將頽。明朝應有新聞在。月下官船歸棹聲。

柳質蒲姿不耐秋。十旬況作[illegible]城囚。一牙初動如[illegible]葉。兩鬢齊抽似栗毬。

人[illegible][illegible]牙[illegible][illegible][illegible]。[illegible]投馬勃病難瘳。故山[illegible][illegible]聞知否。[illegible]炎風流[illegible]象[illegible]。

節屆蘭盆感又生。故園瑣事惹關[illegible]。[illegible][illegible][illegible]舍未[illegible][illegible]。地向[illegible]隣借[illegible]。

江上雙魚信[illegible]滯。帳中孤鶴病應生。最思孫女添嬌態。此際蹣跚學步行。

白絲[illegible][illegible]吾身。荏苒光陰又幾旬。[illegible][illegible]昔[illegible][illegible]長夜。冷茶當酒作佳辰。

星觀織女心思婦。節到蘭盆[illegible]月親。開[illegible]世間[illegible]未穩。重[illegible]昨[illegible][illegible]歌人。

劍首矛頭踏險危。庭瀛現出罪人妾。假如諸葛唯三合。酒學道家纔半卮。
蟋蟀吟堂秋冷節。偶鶴語樹夜深時。此身今死猶堪惜。腹貯千篇未了詩。」
一盤苜蓿且防飢。雞鳳同樓眞可悲。夜把垢衣摩痒背。朝拈蛤殼鑷霜髭。
包羞友似胯門信。忍侮吾同簀裏雎。喁々藻城賢太守。此中埋沒幾男子。」
楚囚一泣淚縱橫。枯坐何堪髀肉生。友着新書憂帝國。客爲隱語罵胡兵。
簷前夜雨於翁感。枕上秋風李密情。隣盜有時餐芋薯。聽成厩馬嚼芻聲。」
四十九年謀已非。一朝失脚被人嗤。秋風囊底蚨生翼。斜日窓邊鼾抱兒。
到耳新聞多市虎。誤身奇禍本桑龜。恐他豪氣消除盡。日誦前賢正氣詩。」
獨坐獨眠安樂窩。等閑過了半年餘。閑邊常恨膝無語。窮裏猶欣囊有儲。
終日捫來王猛蝨。早秋憶到季鷹魚。欲搜韵字哦新句。默讀腹中多少書。」
百怪千妖現眼前。漫々永夜永於年。人同飢鼠厠邊住。身似嬴牛囊裡眠。
漁唱聲高遙浦月。法螺韻冷邏城烟。神秋時節愁如此。其奈嚴冬氷雪天。」
西風吹透木綿衾。鶴唳雁聲催暗愁。殉國狂心變而已。耽詩奇癖死何休。
山隣平氏敗軍地。節近杉公横槊秋。水鏡照顏生一慨。黒手漸少白手稠。」
蕭瑟秋風吹客囊。獄居何策慰愁腸。梅初標節辭山驛。菊有華時留海鄉。

齋學太常過百夜。貧如彭澤送重陽。昨宵吉夢分明記。我馬角生三寸强。
九月十三玉藻城。數行過雁喚愁生。人情四海猶騷擾。月色千金獨朗明。
邈矣寬平天上賞。宛乎壽永陣中情。舊舞何日從鞍馬。横槊轅門賦遠征。
白露爲霜夜正涼。枕頭暗淚又沾裳。故朋爲鬼半無首。今友於吾誰有腸。
夢遶鳳凰城上月。鬢寒狸貉窟中霜。一篇且綴招魂句。欲弔近年新戰場。
白髮蒼顏如老何。今年半在睛中過。卦爻未遇口頭士。時事空傳人畔戈。
急雨打窓秋有聲。猛風撼樹陸生波。無聊欲問江湖景。又喚新來小嘍囉。
改元夙祝太平春。却似慶長貞應仁。万卒徭繁鐘有聲。千門糧乏甑生塵。
火雷上下十年象。雨陣東西矛盾人。鼎峙瓜分機已見。舌鋒誰解學蘇秦。
四郊新穀上場時。菜色人猶望國墮。不說藁街梟虜首。只看官府剝民皮。
價如蜀錦魚三寸。直似海珠酒一卮。偶得新聞眉稍展。將軍昨退伏江湄。
覇綱將弛事紛々。都下留軍已幾旬。野鹿古來能作馬。海鯨異日恐呑人。
風搖楠子墳前港。浪拍豐公城下津。咄々書生休過慮。中流砥柱勢嶙峋。
擾々兵氛何日平。內憂外患又將生。後門從此幾狼進。前路祗今双虎爭。
石氏鄙詩憑聞傳。宋家謬算失長城。只愁大樹蕭々日。白雁渡江鳴一聲。

夏衣可凌冬匪防。飲無熱酒浴無湯。紙幃弊盡猶毛軟。棉衲裂來鸞尾長。
雨自半天斜射枕。風從大海直吹牀。隔窓時聽隣囚語。此際去年人屢傷。
獄苦清嚴十月初。々知此裡是危途。老囚命作虱頭肉。寒僕身爲佛頂珠。
月鏡穿窓時照簀。風刀入帳夜鑽膚。偶然覺得御冬策。𥡴貯殘茶當手爐。
傀儡香々揚且開。到頭時事可知哉。果然欲後詩千首。不若生前酒一杯。
四海英雄歸大夢。三年光景似寒灰。羨他隱逸陶彭澤。早賦田園歸去來。

中秋無酒戲作

無魚無酒等閑過。奈此滿天明月何。不醉詩人亦俗物。直將戟手罵嫦娥。

追悼吉猛

我愛松陰風骨高。幾回追悼涙淋漓。虎投幽檻無飢色。鶴望秋旻有逸姿。
正氣一篇文相筆。秘籌百錬子房椎。後生欲說尊攘事。先買春絲繡此兒。

追悼士權

獨眼雄豪誰得儔。轅門投筆運奇籌。快男自是高山匹。盲將儼然大谷流。
氣壓名儒作奴隸。性惟覇主作仇讐。南山一死應瞑目。曝骨延元陵畔秋。

和砲歌贈七子箕

大椎戸對小椎戸。男木洲連女木洲。玉藻城外好戰地。一礮可摧万國舟。
狹家火技世無敵。大丸轟天如霹靂。君傳其術極其蘊。膽氣剝呑赤毛賊。
聞説妖鯨又捲波。膺懲令必出皇室。期君一戰耀我武。凱歌山畔唱凱歌。

記　事

天上月卿離玉床。一床嘗作七星光。荒檐曉冷須磨雨。孤枕秋寒鬼界霜。
[illegible]昔[illegible][illegible]流竄地。即今[illegible][illegible]左還郷。想當此際揮紅涙。捧出天皇舊賜裳。

半獄居雜題

囹圄一出稍伸眉。獨子同居亦一奇。拮据身時爲婢僕。那吾日或授童兒。
酒當趙氏連城璧。客對秦家沒字碑。此裡猶堪免寒凍。藻江獄吏自慈悲。
溫湯一浴笑顏開。洗盡馬牛宮裡埃。睡後登堤遙眺望。飯餘下砌小徘徊。
半年不對水邊酉。今夕初看山下灰。知是人間途稍近。跫聲早入耳根來。
半獄居中又幾旬。蕭條身伴馬牛倫。雪餘棟子鈴離朶。風處松毬礫打人。
鬼話幾宵消永夜。猪肝一片送寒晨。此間稍適吾心者。只有三杯歡樂春。
[illegible]

地獄門前氣凜森。年光況又入窮陰。酒逢劊子如呑劍。炭到窮人似惜金。

老樹雪崩枝自仰。破窓風閃紙成吟。又知隣牢有僵屍。驪鼠板聲喧夜深。
賣鴉聲収客未眠。一双魚眼共熒然。白毛殆抵三千丈。里夜疑經億万年。
魄動厠邊人過鬼。耳鳴枕上我聞蟬。又謀醸飲防寒氣。揮去窮嚢焚尾錢。

俐子有酒癖醉則亂予屢逢彼之怒乃戯賦

每對青樽痛了頭。俐家惡酒似戈矛。枉教良藥變成毒。不起歡心却引憂。
一滴有時流鬼涙。三杯既是搾人油。可堪獄吏刑餘客。又作徘徊獄裏囚。

兒至賦此以示

黑龍鱗疊滿身垢。白鶴毛飜双鬢霜。衰容如此汝休愕。一片依然鉄石腸。

高松雜詩

海南雄鎮是高城。系異水藩難弟兄。筆架嶺遙青突兀。硯屏山近綠崢嶸。
鷹揚松妙羽林勢。龍躍雲中襲祖名。咄々末流今忽濁。源泉正派本稱清。

追悼橋以義

鳳凰城外骨爲塵。唯殺喬家小玉麟。顯父母名眞孝子。殉邦家難是忠臣。
靈魂今享蘋蘩祭。壯志夙辭桑梓春。愧我白頭猶未死。厚顏又弔少年人。

丙寅元日（慶應二年）

古狸窟裡也王正。起向東雲拜鳳城。吉貝一裘聊拾煖。屠蘇三盞且聽鶯。
何愁我輩在囚繫。仄聽將軍猶陣營。幸是戰花猶未綻。新年無客結春纓。

早春雜題

平頭五十鬢生華。隨見隨聞悉可嗟。世事轉遷瓢底鯰。年光直進峯邊蚰。
寸心報國計雖在。一劍立功時已差。好是青山放歸日。只携琴鶴隱梅花。
十弓閑地僅容身。光景雖新心未新。鬅髮宛然貧道士。弊衣即是懶仙人。
睡過彭澤逝川日。坐送東坡出戶晨。想像故山瀧水曲。梅花開到幾枝春。

聞松浦沒時伯孝有病

杏叟墓上木盈拱。松子墳前草又新。藻城二十年來友。唯剩獄中垂死人。

二月念八澤姬至賦此以示

來時喜笑去時悲。淚灑樽前酒幾巵。經歲甘爲太常婦。妙年況作樂天姬。
羞吾鬢已梨花雪。憐汝腰猶楊柳絲。命薄紅顏情不薄。一窓春雨泣男兒。

懷象山諸友

象山之花美而艷。象山之酒旨且多。春風不引戰塵氣。山點縹黛人綺羅。
嗟我一爲縲絏客。此景此身相懸隔。囑與故朋遠禍機。櫻雲深處恣行樂。

讀中山公子傳

系出中山毛穎公。直心一寸有家風。可憐鋭氣鋭殊甚。頭尙玄時壽正終。

贈高杉暢夫

剛是神州男子儔。英雄氣象帶風流。夜鞭名馬雪中陣。朝擁美人花外樓。學自虎兒傳一脉。節欽鹿介也千秋。孱兵八万今何畏。一劍曾横五大洲。

丁卯元日（慶應三年）

鶯語難通地獄門。節逢元日尙寒酸。暗窓試倩傍人筆。畫出梅花紙上看。

記事

哀詔傳來遏八音。滿天春雨氣陰々。不同人患唯黄鳥。城樹梢頭時一吟。

遏密令唯七日間。万家春杵己喧然。武人至竟蚊虻輩。不識天皇恩似天。

早春漫筆

病夫誰與說管攘。獨對春風涙數行。新樹纔抽枝軟弱。舊雲未散影蒼茫。去年蓮幕星收彩。今日櫻宸旭失光。咄怪書空非一事。遠槎將泛大西洋。

春初雜感

春尙疑冬玉藻城。觀無梅柳聽無鶯。蕭閑身似沙頭艇。搖動心如風裡旌。

寃罪三年猶在獄。長齋半月不呼觥。可歎演武城中鼓。耳畔日轟蠻調聲。
身似籠禽不得還。朝々回首望林巒。孤雛偏有反哺意。藥餌時々來問安。

兒至

首夏思鄉

鵑語穿雲新綠繁。夏初可愛是吾村。最思斜日柴門夕。蠶豆飯成炊靄溫。

雜詩

三年縲絏涙沾裳。何事朝來喜欲狂。有客分明傳吉語。今皇英武類先皇。

和甫造紙幬賦示

欲禦蚊蠅百万兵。工夫一日費經營。閑人亦有豐公術。紙造新城頃刻成。

中元

誤墮獄中身倒懸。黑繩痕古一年々。秋風又屆蘭盆節。救苦何人是目連。

新秋偶作

梧葉驚飛節又遷。石腸依舊尙依然。丈夫益壯不歎老。君子固窮何怨天。
雨後蚊軍圍漸弛。雲間雁路信初傳。只教時事知吾意。獄裏任佗過百年。
秋氣凄涼藻水湄。隨聞隨見悉攢眉。時情年變々之變。世運日衰々更衰。

滿巷蓬蒿貍語細。一城風雨鶴聲悲。此身自分此中死。腹稿預成臨沒詩。

初秋早起

蟲聲繞レ枕曉涼浮。獄舍風光又入レ秋。起倚二幽窓一獨惆悵。三年不レ見碧牽牛。

憶二松坡一

半歸二泉路一半天涯。湖海交遊附二逝波一。今日眼中尋二舊侶一。松濤翁外只松坡。

十三夜同二和市伯孝一次二上杉謙公韻一

白雁一聲秋月清。詩天風露滿二深更一。明年好是此時節。共向二砂場一賦二遠征一。

寄レ內

藁城暗室氷霜氣。檻里寒窓風雨聲。此際孤衾共如レ鋏。卿應レ思レ我々思レ卿。

綿衣至レ自レ家喜賦

吉貝裘輕恰可レ肌。奇溫可三以禦二寒威一。風刀雨箭森々底。一領穿來即鋏衣。

冬夜漫成

仄聽蓮幕休二干戈一。我看身猶二雉在一レ羅。苦境到レ冬殊覺レ慘。憂心入レ夜更添レ多。
蝨皆有レ齒大如レ象。人盡無レ情惡似レ魔。屈指寒窓又驚レ老。百年日月五分過。

寒夜即事

寒威栗裂夜三更。缺月如刀樹杪橫。知是隣囚將凍死。隔櫺號泣漸無聲。

戊辰(明治元年)早春寒甚一夜不寐枕上賦此

男兒奈此鬢邊華。身在獄窓齡又加。筐底新詩多哭友。枕頭春夢半歸家。
幾年無牝人如鰥。一夜屈腰身似蝦。聞說廟議除舊弊。枯楊何肯不生花。

朝命至高松余等初得出獄喜賦

自期獄底葬斯身。恩命東來有脚春。四歲誰知瀕死客。一朝恰似再生人。

江南路上

亂餘光景入淸平。細雨殘鶯江上程。昨日東軍流血處。艷葩齊發紫雲英。

淀江舟中千令若談其姪殉難事乃賦此

蓬窓留盞話當年。語到傷心淚自漣。櫻樹祠畔天又暮。滿江鬼雨澹如煙。

謁瀾塘世子恩遇太厚恭賦以呈

大江一泒本無涯。流到千秋餘澤多。今日海南魚蟹侶。幸然又得浴恩波。

乘火輪船遊兵庫是日風濤頗壯

怒浪如山何足驚。海程百里片時行。鵬頭願破長風去。直到西瀛龍動城。

伊藤俊輔供以洋製酒肉乃賦鳴謝

龍府香醪壓二醞醁一。佛都美肉勝二麒麟一。往逢二京友一堪二誇說一。我腹收來天下珍。

同二長懷山一訪二秋爽師一不レ在乃借レ床一睡

借二得禪房一眠二晏時一。藤牀竹簟與レ人宜。一生清福吾先享。遮莫詩僧歸院遲。

一生清福其杜聯之語

送二北翁歸一レ國

西偏東鄙事紛然。洛下諸公未レ息レ肩。一幅輕帆眞好計。小松江上碧鱸天。

自二神戸一抵二花浦一舶中雜咏

火輪破レ浪向二榛洋一。爽快身疑空裡翔。一管丹婆吹未レ了。摩耶山色已蒼茫。

過二招魂塲一　防府

忠肝義膽幾男兒。一死二鳳城一留二豹皮一。行客弔來皆墮レ淚。此墳是我峴山碑。

山口

西周風俗美而淳。彷彿桃花源裡春。陌列二九條一踪已舊。景分二十箇一趣皆新。
高峰古稱要衝地。名族今多信義人。願借二一廛一棲二此土一。雨簑煙笠避二秦塵一。

過二大内氏遺墟一有レ作

七州大守覇二西陲一。驕主空開亡國基。優美宛同二鎌府子一。孱柔何異二傘工兒一。

樽前詞客燕嬉日。幕下權臣虎視時。畫閣珠樓跡安在。棟花零落夕風悲。

棟大内邦音相通

宿二老梅書屋一 木戸氏幽居

溪畔巖根皆着レ花。風流眞是韵人家。來遊最好清和節。晴聽二林鶯一雨聽レ蛙。

送三福田俠平赴二北陸一

身在二戰塲一耽二酒詩一。鴻城第一好男子。風流想見越山路。醉賞敵中花幾枝。

俠平嘗有二敵地探梅詩一

楫取素彥示二一短刀一曰是星巖梁翁遺物也

洛下詩人慷慨深。匣中遺物價千金。帶來好作二韋弦戒一。八寸寒氷百錬心。

雨中同二野村迂忠前原彥太一飲談及二東事一乃賦

梅雨連レ天夜似レ煤。襟懷此際鬱難レ開。何當一掃妖氛氣。痛飲共傾三百杯。

題二清風松一 村田清風翁所二手栽一木戸氏頃建二碑其下一曰名二淸風松一

孤松磊砢傲二風霜一。百歲清風餘韻長。寄語後人休二剪伐一。此翁所レ種卽甘棠。

咏レ梅爲二兒玉少輔一

玉兒本不レ凡。脫却風塵氣。况添二此梅花一。詩骨香二天地一。

萩府諸彥饗供太豐但厚情之極使二人泥
醉一樂地往々化爲二苦境一乃戲賦レ此

觥籌獄裡誤投レ身。爛醉昏々夜又晨。始悟西洋規則好。各杯各飮不レ勞レ人。

漣驛示二木戶氏一

山驛空濛梅雨天。與レ君同宿不二蕭然一。今宵一酌亦佳話。閑煮二淮南一聽二杜鵑一。

木戶曰及予頃齒痛太故喜二淮南一

贈二梅處尼一 高杉晉作妻

憐汝恩情骨不レ忘。雲鬟剃去守二空房一。鴛鴦衾外春風冷。燕子樓中秋夜長。
誰道妓娼無二信義一。始知婦女有二心腸一。高郎地下應レ瞑レ目。纖手長供一片香。

吉田驛弔二高杉墓一

故人爲レ鬼美人尼。浮世變遷眞可レ悲。慘日凄風吉田驛。流痕如レ雨灑二苔碑一。

東行庵

讀詩四壁墨痕馨。想見平生風雅情。更有二佳人護二遺物一。東行一着勝二西行一。

前田路上

驛程漸近赤間關。崖角砲臺蹤尙存。知是夷船侵入日。松身時帶二鐵丸痕一。

船中望小倉憶高杉暢夫

小倉城外憶當年。四十八樓一炬煙。立倚舷頭子細望。故人戰處是何邊。

送山田秋水北征

「怒氣衝風氣凜然。壯夫向處陣無前。賊城拔取應在近。何待朔風飛雪天。」

長崎

瓊瑤浦是綺羅叢。今日況逢新政隆。萬國通商除舊弊。三藩戍卒有威風。
柳邊祝砲春風碧。花外信旗朝旭紅。此裡關心唯一事。妖民或唱白蓮宗。

題圭山山水畫冊錄四（井上聞多囑）

碧山一避世。不讀秦後書。昨夢伏羲氏。來談太古初。」
名山多屬佛。好水半附胡。唯此畫中景。不受一點汚。」
結屋層崖上。下瞰塵間地。千乘萬乘君。渾是一蟲蟻。」
快飈撼巖樹。吹送雨千點。欲取架上書。窓扉無遑掩。」

題干令戲墨花卉（爲雲仙）

此畫未爲巧。此圖未爲美。唯因其人奇。可賞又可喜。」

次督府澤公韻

鎮撫望レ君運二遠謀一。神州興廢在二斯秋一。人情未レ定同レ雲變。世態漸卑如二水流一。
嚴法宜レ師二諸葛匹一。寛量且學子儀儔。只待二四海清平日一。陪飲百杯盛二髑髏一。

井上聞多索レ詩乃賦贈

好持二蘇武節一。遠作二張騫遊一。君曹任今重。勿レ辱二我神州一。

櫻山拜二諸人塚一

七生滅レ賊東行志。一意尊王南八魂。櫻山留レ骸人多少。二子碑前涙最繁。

積翠樓賦謝二吉富宗像二子一

晝燭金屏光爛燦。碧鱗紅蟹味新鮮。今宵痛飲君休レ怪。十日瓊江無二此筵一。

曉發二赤關一

彌陀寺外拒二夷艦一。文字關邊討二賊兵一。一日戰功歸二覇國一。行人不三復說二源平一。
島嶼看過幾點青。無レ端呼起故鄉情。讃岐州在二斜陽裡一。象嶺依微龜嶺明。
朝發二防山一午播山。火輪一發急二於弦一。數年極レ口罵二蠻舶一。今日將レ言是寶船。

入二浪華一示二諸友一

竹海萩山飽二攬奇一。歸舟又向二浪花涯一。客囊仍舊貧如レ洗。只把二新詞一代二土宜一。

伏水客舍

浴後呼杯酒半酣。燈痕柳影小江南。今宵一飲胸如洗。醉倚快樓聽快談。

是夜櫻井新平談東北王師之捷事

同木戸北條二氏飲于菊亭

葦簾竹榻納涼棚。隨意傳杯坐二更。雪兒亦自解風趣。不把絃聲奪水聲。

聞小原鐵心辭官歸鄉賦此以寄

東山雲影猶縹渺。西巖花枝亦艷柔。怪君棄此風光去。空戀故山猿鶴儔。

送木戸準一使于東京

東海東山草偃風。此行難復試才鋒。東京到日渾無事。穩見芙蓉八朶峰。

仁和王北征于越余亦從賦此誌喜

鳳詔高擎掃賊氛。桓々帝子是將軍。繡袍爛燦九重日。錦旗翩飜三越雲。
皇運再開神帝業。王威遙繼武尊勳。布衣措大何僥倖。奉命轅門草檄文。

天子賜酒于軍士感而作

日東天子恩波渥。勾踐分醪事豈同。闕下三軍皆感泣。淚絲滴入玉杯中。

呑象樓遺稿木集終

跋

先子初號艑石。石在鄉之東。負山帶流。急湍激瀉。驚浪奔騰。自愛其景壯快。取以爲號。後改燕石。蓋謙辭也。後移居。屋之西種柳。因別號柳東。暇則風詠自遣。磅礴之氣。洩爲詩文。而傳播四方。雖身居僻陬。其名既著天下。故嘉永。安政。慶應。年間所編名家之集。必加先子。爲其一人。故世目先子。爲文人也。先子資生卓犖。不屑世事。見義無不爲。見窮無不援。千金忽散。二頃即空。是以人或呼爲俠客也。而其忽散。即空。非敢自私焉。當時王室式微。海內騷擾。先子托事於詩文。竊與天下豪傑交。將有所爲。於此。高杉東行。及某々等竊來相倚。先子厚遇之。以爲門下之客。其千金二頃。給之豈不贍哉。終爲德川幕府所怪。繫高松之獄。幽囚四年。維新之初諸公相知者。請朝廷解之。出爲史官。從仁和王北征。途病歿。其臨終。恍惚之間。猶扼腕奮起。爲從軍之態。而無一語及家。然則世目之爲文人。爲俠客。皆有未然。實重義。憂國。致身。勤王之人乎惜矣哉。天不假之年。而使遇今日聖明之朝。今茲當二十年忌辰。祭之於家。輯錄遺篇。上梓以傳之舊知。題曰呑象樓遺稿。樓在鄉之西。正與象山相對。先子自名之即先子所

風詠自遣一。而諸公某々等所二來寓一也

明治二十一年十二月

不肖　日柳政愬拜識

西遊詩草

甲辰（弘化元年）春末同凌雲遊西州

世網投身二十年。一朝決策跡飄然。薰風四月好時節。去踏蘇山萬疊烟。

徵藝防長舟中雜題

大帆卅幅箭離弦。豫嶺讃山望裏遷。回首朝來繫船處。接天寸碧淡於烟。

瀲灔晴波碧似油。三原城外夕陽收。篙人指點山陽勝。狗嶼猫洋雙鷺洲。

虎若風威浪作山。縺帆飛過片時間。陶洋三百里程路。在自上關到下關。

赤馬關東夜色冥。漁燈將死小如星。知他寃鬼覓人至。滿岸枯芦雨氣腥。

舟泊赤馬關下

赤馬關邊小雨晴。蒼茫水郭夜烟生。漁人篝火遙々影。商婦琵琶細々聲。

百尺危檣浦頭立。一痕殘月柳梢横。無端想起前朝事。添得蓬窓半夜情。

檀浦

芦岸颼々枯葉鳴。沙村晚色喚愁生。厓山宋主埋魚腹。淝水秦兵驚鶴聲。

寶劒氣消寒月冷。翠華跡沒澹烟横。水濱遺事無人問。秋渚潮痕大盤行。

阿彌陀寺

竹柏陰深鬼語哀。黎興過處半蒼苔。黄昏塚下無人影。一點流螢照暗來。

赤關雜詞

水郭無蚊夏氣涼。夜潮滿岸月蒼々。猪牙一葉迎商舶。中載紅裙好女郎。

萬檣矗々賈人舟。艫舳相銜大港頭。中有一船檣半折。自言漂泊到琉球。

簪纓一去恨無涯。遺種何年落狹邪。剩得當時殘黛色。娼條冶葉別成家。

狐王廟下入梅霖。港口連檣矗似林。客自禱晴儂禱雨。鴛衾一夜兩般心。

鴛鴦夢醒水樓頭。惜別朝來双淚流。妬殺江心裙帶菜。纏綿送客不離舟。

咏古三首

山勢東西合。海門舟僅通。平軍據此處。如鼠入囊中。不怪源廷尉。當日早成功。

右檀浦

猨精驅群傑。縱横蜻蜓洲。憐汝猶豪膽。單身欲復讐。膠舟謀雖拙。危礁自千秋。

右與治兵礁

雌龍誤廟謨。楓宸受穢黷。凜々和氣淸。直語挫姦兇。偉蹟千載下。尙使人心肅。

右妙見山

小倉路上

豐筑連山青色迎。小倉城外雨初晴。田塍十里無他樹。烏桕滿村新綠淸。

吉田山中

檞樹陰昏山日晡。巖根一路細將無。偶逢獵戶欲投宿。老媼如聾不受呼。

數里腹行双脚老。荒邨一夜宿蓬蒿。老孃憐我有飢色。粱飯盛來凸字高。

宗像路上

筑路雨晴山色濃。新知風物入双眸。碧杉經歲陰全黑。烏桕先秋葉半紅。

孝子豐碑槿籬外。故侯殘壘猪畦中。遊人元抱探奇癖。各處遺蹤行欲窮。

許斐嶺

山驛寒雲釀雨成。老杉深處有梟鳴。獵人破卯來呼伴。巖角吹螺一兩聲。

青柳驛

短亭破驛傍山陲。大路高低双脚疲。知是平生行客少。也無一馬借人騎。

香椎村

攢峯環立綠陂陁。想見薩兵蹂躪過。叢祠燼後無人理。死樹僵邊斷礎多。

筥崎

祠前松掩日。海岸水連天。霞映丹樓聳。雲晴金榜懸。神威高萬國。武德赫千年。香花瑤堦下。人心自肅然。

博多雜咏

覇家臺上柳條布。戶々繅車紡績奇。請看吳綾二姬德。千年遺教續如絲。

古碑字滅尙依稀。寂々殘花野寺扉。來採蘋蘩弔冤魄。淚痕一點亦濡衣。

濡衣墓

曾將纖手捕胡人。一點芳兵猶未泯。娼女不知當日事。香花祀做白眉神。

小女郎碑

脂粉叢中學佛家。早將舞袖當袈裟。白蓮一朵生墳上。不是尋常並蔕花。

妓明月墓

宿筒井村

半櫳雨氣野雲低。竹樹陰森頽屋西。剪盡殘燈深夜坐。老槐來學小兒啼。

宰府容舍

宰府驛頭人未歸。旅窓十日雨霏々。夢魂也學古梅樹。一夜枕頭千里飛。

謁菅公廟

夙着儒冠登上台。炳然學業自宏恢。德輝高照西都月。寃魄妄傳北闕雷。殘菊宴存餘馥久。飛梅樹古有花開。威靈九百餘年後。鎭見春秋奉祀祺。

宰府雜咏

細雨濛々暗梵城。落花堆裏暮鐘鳴。無端觸起行人恨。曾惱相公是此聲。

黍葉離々夕露清。府樓殘礎入新耕。遊人不管歸囊重。缺瓦纍然收得行。

故都踪半沒。遺事向誰聞。缺瓦菅公句。清泉紫女文。闕荒芳草綠。寺古落花薫。何處繁華地。平蕪冷夕曛。

鴻臚館廢跡全無。十里塞烟滿綠蕪。人道往時佳麗日。漢兒誤喚帝王都。

此鄉文物昔時隆。兵燹燒來總一空。斷簡遺篇無覔所。使人漫想大江公。

紹運墓畔獲一竹杖喜賦

六尺枯筇勁節存。獲之紹運墓前村。斕斑不是湘妃涙。曾灑英雄熱血痕。

發宰府路上望諸山。

竈門古處幾孱顏。青眼迎人暮靄間。多年一一入吾夢。休道平生未見山

筑北路上六言

山路高低疊石。人家慘憺寒烟。塍邊稚子驅馬。渡口村姑棹船。
曬紙村籬夕日。焙茶僧屋輕烟。婦自隨夫荷簣。馬能代犢犂田。
矮竹疊松村僻。長亭短堠家疎。山佃燒石如炭。蠻婢烹雞代蔬。
紅藕花邊小泖。黃瓜圃外疎籬。溪村或祭河伯。民舍時迎獸醫。
三戶山中驛舍。幾叢野外林祠。古木年深化石。老狐夜半憑人
蘆蕩半村雨収。藺田十里風柔。烹蔬林外頹舍。洗馬橋頭少流。

雨過筑後河

滿岸青芦急雨飛。森々如箭打人衣。筑河灣上黃昏路。也似十郎苦戰歸。

高良山

嶺頭高閣與雲齊。林路冥々人欲迷。夏月山中不知暑。十圍杉外老鶯啼。

路上即事

高良山下雨餘天。野水溶々漲午川。行覺清香來拉鼻。新荷十里綠盈田。

久留米

鴟尾高橫城樹頭。粉墻一帶夕陽收。行人欲說燕都事。十字街頭望火樓。

柳川

河水滔々遶女墻。柳川城聳立斜陽。曉雄壘祖典型在。巨礮聲轟演武場。

筑南路上

四月蔓菁莢正肥。滿村農事逐晴暉。瓜年少婦無羞態。赤脚蓬頭短後衣。

僻村蠻婢語音訛。缺舌酬人唯嘍囉。忽然問路互相怪。他笑我儂々笑他。

入肥界

午犬聲幽遠樹梢。尖頭茅屋出林高。權籬薯圃山村路。時遇士人荷竹刀。

東肥路上十首

山田膏雨後。植物悉蕃生。瓜蒔懷煙種。芋栽琉玖名。

山谿多礫礀。煙火自蕭條。民家石築堵。澗水竹編橋。

遙巔烟一縷。直上碧空間。行人不須問。早認阿蘇山。

七月中元節。迷燐波上燃。此遊期尚早。空過火海邊。

諸平冠蓋族。來住五家村。誰圖疊峯裏。別關小桃源。

小馬瘦如驢。載人唯一筒。半月兩肥中。不逢品字馱。

我國惡風俗。唯煎馬糞茶。此間堪喜所。苦茗製殊佳。

兩崖立似屛。老樹補其隙。可憐路上人。白晝猶疑人。

崖缺天初大。行人眼欲穿。熊城晴似畫。突兀樹梢邊。

九國第一城。藤公曾自營。門存高麗物。街古蔚山名。

肥後雜詩　五首之二

上古神尊耀武名。手除巨猾闢榛荊。藤公偉績高城聳。菊氏遺踪殘壘傾。
嶺上村如天上住。崖中路似甕中行。民風千載未頹廢。不怪此間出俊英。

四面崔嵬列疊峯。荒村到所有靈蹤。雁回源將懸弓壘。碑古朝臣題句松。
民似朱陳皆質朴。國如巴蜀自要衝。只愁一事異吾土。酒味酸甜灰氣濃。

謁加藤公廟　十韻

英風絶今古。正氣貫扶桑。雪壓蔚山壘。血腥賤嶽槍。夜叉名遠震。於菟勢
高驤。敵避岳爺陣。民新關帝堂。遺孤眞可託。諸將孰相當。瓜瓞統雖絶。
蘋蘩祀益昌。兵稱三畧旨。城倚九州吭。木像威靈赫。蓮經妙法彰。欲知節
操烈。請看姓名芳。

高橋僦舟

爛々殘星影欲流。綠陽洲外櫓聲柔。蓬窓結得曾遊夢。月下輕舟澳水秋。

舟到島原

碕原海城曲。島嶼遠斷續。聞昔大岳崩。飛來此攢簇。方者曲屏連。圓者小釜覆。並者是攣子。臥者是孤犢。如臼平而凹。似劍光而矗。奇鬼各跳梁。怪獸迭追逐。或散小於拳。或列大於屋。巖出骨全癯。樹枯皮自剝。奇形九十九。一々驚人目。若非愚公移。定是雖尤觸。舟行遶其間。似展橫畫幅。桅工說當年。向人猶顰蹙。可憐百千民。壓死葬魚腹。我來四月天。風恬漣紋綠。緬想天變災。何異蕉中鹿。喜逢平穩時。奇景恣遊矚。作詩代記文。聊揮吟毫禿。

島原途中

温仙山下小漁村。頽石崩沙猶有痕。知是當年多死者。大碑幾處弔冤魂。

烹茗輕烟細似絲。椶櫚樹外小茅茨。行々漸覺民風異。店媼五十猶畫眉。

自神代到諫早舟中遇大風浪賦此志懲

乘舟莫乘漁家舟。衝雨莫衝海上雨。漁家舟小太蕩搖。海上雨多無避處。我赴瓊津路貪程。來搭舴艋神代浦。僅離港頭天色濛。油雲靄々嚙島嶼。

須臾急雨東南來。噴風佐之勢若虎。疊浪激立響轟々。雪山崩來一丈許。大鼇出沒老鯨跳。各自嚇人恣噴怒。我舟漂々輕於萍。一低一昂且掀舞。雨勢漸加風亦狂。短篷三尺力難禦。衣袖淋漓粟生膚。交膝人似凍蠅聚。舵工賈勇膽如天。突鬢盱日勢踞扈。赤裸幹事汗成珠。雙手軋々搖急艣。俄頃舟到小漁村。急投茅廬何擇主。主嫗亦能憐遠人。慰我旅情慇懃語。竈下手燃一束薪。纔手且炙茶且煮。濾乞麥飯價千金。咄嗟療饑充腹肚。餘生幸免魚腹難。纖々繫來命一縷。驚膽漸定賀再生。傍人面色猶如土。嗟我家居徒溫飽。生涯未識此艱苦。始悟俚諺亦有理。嬌兒可必教行旅。

日觀嶺

羊腸石路遠躋攀。援蔓捫蘿十里間。結伴同行荏土客。自言峻坂似函關。

抵長崎

八千華屋倚山斜。翠陌紅橋接狹邪。知是前街蘭館近。彩旗高映半天霞。
十字街頭鋪石平。層門酒肆足逢迎。行人食指先將動。膩味登盤豚肉羹。

長崎竹枝　十首之二長崎一名曰鶴港

連峯三面綠成圍。萬瓦鱗々枕海磯。武備堪褫漢兒魄。岸頭檣比佛郎機。

港口蘭船高似城。砲聲漸絕沸八聲。蠻奴裸體黑於漆。百尺檣頭自在行。
鶴港晴烟搖綠波。船頭彩幟影婆娑。紫髯綠眼氍毹客。一闋翻來日本歌。
十里紅欄簇暖烟。圓嶠春色鬭嬋妍。可憐幾縷纖々柳。繋得東吳萬里船。
玻璃障暖護青娥。花月樓邊春最多。清酒百壺儲擷釀。小鬟十歳唱蠻歌。
罽帳春深香霧生。蠻人相狎亦多情。生憎床上大圓鏡。不照儂心一點清。

謾成

姦僧犯贓罪。館中嚴令敷。欲觀辮髮客。宜作挈鞋奴。

長崎雜詠 原五

前街楊柳後街花。瓊浦繁華無以加。酒味不甜魚價賤。遊人十日不思家。

遊長崎諸寺

長天渾是水。盛夏亦如秋。古物青蓮相。老僧黃蘗流。樓疑吐蜃氣。山似戴龍頭。最愛遊觀大。欄邊立拭眸。

右福濟寺

松蘿擁禪窟。嵐氣滴濃青。海靜天妃德。日懸關帝靈。石欄苔色古。金榜墨痕鮮。更喜雛僧慧。華音讀佛經。

右崇福寺

幽徑松間遶。寥々一鳥吟。花落螺堂靜。苔蒸龍窟深。僧說開山德。人生出生心。遺恨笙歌響。夜來及祇林。

右大德寺次清沈燮菴韵。

觀朝鮮人

自說朝鮮漂泊民。髷頭黧面古風淳。馬蹄鼠尾休相比。倘是箕封域內人。

發長崎赴大村途中

森々夏木擁山阿。十里鷄聲民屋多。言是溪村驅疫鬼。翁童三四立鳴鑼。

大村眞珠歌呈凌雲　大村城一名玖島城

大村之海平似湖。這裏奇貝胎眞珠。小如罌粟大如豆。品價迥與他州殊。
漁人能泅千尋底。驪龍領邊自由採。竊匿不許髻中藏。悉把蕳粟輸官邸。
合浦太守固稱賢。聞說此物遠來遷。無奈姦儈頻貪利。近來一顆價萬錢。
天下可憐是寒士。往々患眼亦坐視。我友仁術欲濟之。買來不遠路千里。
腰纏一空亦何妨。的皪奇品滿歸囊。君詩固自稱金玉。好與寶珠爭輝光。
我亦昏眸生華暈。平生羞他巖下電。一匙願仰奇藥功。看盡人間書萬卷。

裏見瀑

巖角双尖如ニ斲成一。飛流激怒響喧轟。崖根有レ路尤奇絶。人自ニ水晶簾內一行。

發ニ大村一路上

打麥分秧五月天。村々農事急ニ於弦一。閑人亦有ニ關心事一。故國猶餘二頃田。

其杵驛曉發

曙嵐蒼翠滴ニ涼氣一。十里溪聲如レ夢聞。蕭散店家人未レ起。陰森巖樹路難レ分。
村雞啼落古關月。驛馬踏過層嶺雲。病骨何堪寒氣密。強賒ニ薄酒一取ニ微醺一。

嬉野

牛宮雞塒小茅家。梔子花開滿竹笆。愛見農叟好生計。一村無ニ處不レ栽レ茶。

大川野驛

蛙聲閣々水盈レ田。入レ夜農功未レ息レ肩。小驛蕭然無ニ旅宿一。家々正是插秧天。

端午

疎燈短檠影蕭然。節過ニ端陽一幽恨牽。客裏光陰何欲レ去。夢中雲海路過レ千。
孤樽寂寞樗花酒。古驛空濛梅雨天。家有ニ一兒一初學レ語。今宵應レ望ニ阿爺邊一。

駒斷嶺

老檜林梢雨懸。危巖履底雲出。嶺高驛馬玄黃。路險行人劬瘁。

唐津路上　唐津城一名鶴城

五月暑猶嫩。行裝輕且便。驛荒人自朴。關古吏無權。荷沼蛙聲大。蘭田鷺影妍。倦來思二小憩一。茅店綠二茶烟一。

松浦川

松浦河邊沙路平。柳陰待客渡舟橫。店嫗饒舌誇二鄉味一。滿椀浮膏進二蜆羹一。

唐津客舍

梅雨濛々小驛昏。旅窓一夜欲レ消レ魂。妻兒如有二相思夢一。來遶振髻山下村。

自二唐津一抵二呼子一途中

栗樹陰森嫩綠昏。漁家農戶接二頹垣一。畦町十里魚成レ糞。路上風腥海畔村。

唐房浦

樵路花開不レ識レ名。崖頭人躡二樹梢一行。深山到處皆園圃。半嶺雲籠叱犢聲。

八所嶺

呼子浦

萬檣林立海門烟。各自卸錨梅雨天。遠客欲レ傳書一紙。向レ人先問讃州船。

片島

望夫山下過黃梅雨氣冥々海岸隈。五月奇寒徹人骨風從玄海大洋來。

夜宿漁家

晚宿漁村小草廬一灣苦竹雨聲疎。繙囊點撿松凌集。借得寒燈結網餘

漁村人定夜三更。半壁潮痕燈影淸。何物耳邊來攪夢。枯芦窓外蟹行聲。

名古屋觀豐公陣迹

渺漫遠水夕陽天。决眥巓頭快欲仙。想見千里飛且渡。遙山一髮是朝鮮。

豪擧直追神后功。銳鋒輝武及殊邦。當時遺恨星空隕。不渡大明鴨綠江。

振衣千仭嶺頭風。西望空洋氣作虹。想像人豪那邊起。飛蘭島在夕陽中。

姑射山頭舊陣營。豐公遺跡半榛荊。荒蹊古瓦桐花缺。破壘巨巖松樹生。

滿蹊密篠與人齊。寂々妖狐白日啼。六十六州公伯邸。平蕪滿目綠烟迷。

古壘年深蔓艸稠。彩旌畵戟事悠々。牧童纔知英雄跡。不向林間牧犢牛。

發唐津過二里松原

靑松一帶映圓沙。午照烘開皷子花。廿里長汀人易倦。恨無小店賣杯茶。

玉島川

高柳陰中野水長。垂綸靈石有輝光。倘怪金鉤腹中在。香魚腹上帶微黃。

自吉井驛到福岡城途中

朝辭吉井驛微熱下新晴。松岸烟如濕。麻畦露自清。羸牛馱薪去。老叟縛雞行。山外路差坦。海邊沙自明。疎籬曬罾影。小市搾油聲。村屬對州界。嶺呼富士名。古廟林間仄。大橋岸角橫。枇杷黃玉爛。穲稏綠雲平。村塾書堂散。茅檐茶媼迎。拭眸先一笑。認得福岡城。

仝　過宰府

故國出時春未盡。馬跡沿路踏花來。初驚客裏光陰早。菅相祠邊標有梅。

同是松良齋遊春日川

觀漁人使烏鬼五首

吟遊一日伴漁翁。路入汀花潭竹中。作々携來是何物。茶籃酒榼小魚籠。

溪村烏鬼馴漁叟。長喙銜魚似魚狗。憐汝一生不厭勞。慇懃送入他人口。

送入他人口遠倉山咏箸詩

頸上繫縧長丈餘。浮沈浴水自安舒。一聲時向漁人叫。飢喙似求籃底魚。

濤浚湲水遶苔磯。烟柳風蒲綠作圍。烏鬼倦來振濕翼。餘飛如雨濺人衣。

柳陰當午自清涼。冷脸斫來欺水晶。笑就沙汀喚瓢酒。藻蒸花外細颸香。

題自畫墨竹

半檐新竹雨蕭々。遙想家園翠色饒。消悶抽來橐中筆。溪藤一幅寫烟梢。

良齋供香魚竹筍

香魚和酢銀鱗美。嫩筍成羹黃玉腴。千里江東倦遊客。滯留十日忘蓴鱸。

志賀島

戶々門前繫釣船。荻籬竹籬少人烟。此鄉魚蟹當糧食。四面空洋是水田。

海中道

左右蒼波擁松樹。圓沙卄里通漁路。老嫗一語卽成詩。海中似曳一條布。

奈多濱

曬網腥風滿午村。苔花半濕落潮痕。軟沙汀外多人跡。大蟹時携小蟹奔。

名島

壘根裂破入新耕。僅有農叟說廢城。幾丈古溝新水滿。孤蒲深處鵓鴣鳴。

利休碑

小碑年古綠苔生。店媼猶傳陸羽名。一路老松如有意。淸風吹起煮茶聲。

宿二木戸山中一

幽夢醒來燈飈挑。半檐老月掛二松梢一。四更人定山窓寂。枕上溪聲聽漸高。

奈良津

秧葉如レ錐出二新年一。村姑除レ莠各耘耔。初知農事異二吾鄉一。鋏爪爬泥不レ須レ指。

黒崎

自レ發二瓊津一半月强。蓬萵幾處飽二風霜一。今宵初覺赤關近。驛舍整齊炊靄香。

小倉舟中

細漣如レ縠午風閑。柔櫓聲々近二馬關一。誰識行人抱二幽恨一。蓬窓背指鎭西山。

赤關客舍

冷膾登レ盤酒半醺。佐レ杯小婢亦紅裙。水樓第一快心事。五月中旬正沒レ蚊。

阿彌陀寺夜泊以二月落烏啼霜滿一レ天爲レ韵

柳梢疎星爛如レ月。半簑殘滴雨初歇。『岸根三尺潮痕落。彌陀寺外烟漠々。』
避レ風舟船卸レ檣烏。各自繫纜小浦隈。『啾々寃鬼夜深啼。一點靑燐出レ水迷。』
蒹葭洲冷露似レ霜。遊子衣薄不レ堪レ涼。『蓬窓狹小客正滿。臥榻愁聽他人鼾。』
耿然不レ睡到二曉天一。坐待三鐘聲到二客船一。』

舟達讃岐

風軟蹉洋十里間。布帆無恙近郷關。蓬窓一瞥明吾眼。一桁濃青飯顆山。

一別以後音耗杳緲。晝夜渴望頭者讀高什。始識文几無恙。僕今歳同凌雲遊九州。拙詩近日欲上梓。恨不使老兄評之。蕪句一章聊陳鄙意。幸笑而覽焉。

秋老長天雁影疎。涙痕併寄一封書。不知何日君邊達。路隔蒼溟千里餘。

甲辰（弘化元年）秋日　燕石柳彰拜

海棠園小嚢　全
南里先生批
十春詞
燕石山人著
(芭蕉書屋藏梓)

自序

近日社友以十春詞為課題余乃發技痒構思數日僅能成章醜如傚顰固不足録然雞肋之愛又不忍割為小舟子以博諸君之一粲呼嘲花謔柳固愧小品倡予和女敢望大方

已亥(天保十)花朝

燕石外史識
湖谷主人書

行間批点南里先生所加
上頭評語係雪航先生

春曉

半簾殘月曉朦朧。柔火星熒爐底紅。一囀嬌鶯覷不見。海棠花外淡烟中。

春晝

濃睡回時日脚斜。倩來鸚鵡欲呼茶。鈎簾先醒夢鬆眼。一架連蕘爛熳花。

春月

畫燭燒殘夜未央。獨乘微醉步長廊。避心欲讀相思字。故就梨花淡月光。

春寒

二月嫩寒猶透肌。爐邊一睡伴猫兒。梅花也似詩人懶。噤口盆句未肯披。

春陰

出遊怯雨約空違。漠々春陰風力微。此際在家還不惡。花開窓畔紫薔薇。

春雨

牡丹漸綻過清明。細如塵未放晴。隣院知人破岑寂。隔墻棋子響丁丁。

春晴

花氣侵簾雨霽晨。流鶯幾處喚遊人。今朝願化身千億。散探東西南北春。

雪航曰斡旋不腐

春郊

黄菜花邊蝶翅飄。晴郊十里午煙消。群童喧噪鬧何事。敗紙鳶懸堠樹梢。

雪航曰新尖可喜

春山

雉子啼邊淡靄籠。春山采薇尾村童。歸來何管斜陽落。路入櫻花爛熳中。

春水

晴柳搖風駭綠斜。雪餘新漲上圓沙。漉魚童子無情思。踏過波心乱點花。

荒河英政 校

讃岐　燕石山人著

天保己亥（十年）夏新鐫

象山雜詞　全

芭蕉書屋藏版

象山竹枝序

我邦稱烟花三勝者。一爲嶋原。一爲吉原。一爲新坊。猶彼土有西湖虎邱秦淮。然而京師之樣如絲柳裊娜。江戸之樣如櫻花豐艶。浪華之樣如躑躅燦爛。各自凝其粧爭其妍。然而風土所使然。習俗自別也。是以文人韻士摸寫其地方光景。而有某竹枝某竹枝之作。蓋亦各異其趣焉。方今昇平之久。至于窮郷僻地。亦有狹邪之設。寔可謂盛世之快事也。若我象山。雖在於南州邊陬。神靈之赫著。三百有餘年于茲。香火日夕相望。士女輻輳。蹄輪絡繹。其與京攝一瀛海水耳。而舟楫甚便。故衣裝時樣。教坊新曲。朝改于其地。而夕已傳于吾郷。人呼爲南方歌吹海。不亦宜乎。余嘗風清月朗之夜。乘醉徘徊于佐屋橋邊。四聞絃歌之聲。身如在乎西湖。心似遊乎秦淮。夫勝槩

如レ此然而未レ有二竹枝詞曲之可一レ傳。僅有二染指者一。未四以足三厭下吾心上而愉二吾情一也。闕然以爲レ憾焉。吾友燕石山人。靑年能沽二花柳之酒一。豪華不レ厭二于心一。生平過レ情所レ感筆レ之作二竹枝一百餘首一。凡自二妓樓遊宴一迄二四時娛樂一。無下不二道破一者上。故其語過二佻達淫靡一固皆出二于遊戲文墨之餘一者也。欲レ授レ梓徵二序于余一。余之於二燕石一納交金蘭。誼不レ可レ辭。聊題二贅言于卷頭一。以賛二竹枝先登之勳一焉。象山詞曲至レ此始與二勝槩一相副。足三以厭下吾心上而愉二五情一焉。燕石之業眞可レ謂曠前絕後一矣。假饒有二英俊之士一繼レ此而起者一。殆所謂清明過後插二柳枝端午翌日採二菖蒲一者也歟。

天保戊戌(九年)竹醉日

象首山外春嶺散人撰

象山竹枝序

予自二童年一游二學四方一家鄕歲時之樂事未レ及レ諳レ之。況妓樓遊宴之侈。殊所レ不二夢想一也。往年癸巳之秋。歸レ鄕展レ墓。因留累旬。故人春篁雪航等相尋觴二予於酒樓一。歌妓撰レ妙。肴饌盡レ美。服飾華麗。器物濟楚。雖二京攝之盛一莫三以加二焉。予始驚二象山之、非一レ村也。乃欲下製二竹枝一以鳴中其事上。腹二稿其一二一。既而自咎曰。乞

兒需殘未レ可三以論二鼎中之味一。矮子雜レ衆何足三以盡二場上之觀一。嘲花謔柳非二措大之分一不レ若留レ此以待二風流才子於他日一也。終焉絕レ念。頃鄉人柳燕石新著二象山雜詞一卷一。介二雪航一以問二序於予一。凡一鄉之勝槩。四時之娛樂。與二夫脂粉絃歌之情狀一莫三不レ在者一。可レ謂爲二我象山一大吐レ氣矣則予之所二預度一果爲レ不レ誤也。然而風情才華。有レ若二燕石一而。當時諸友無二一言及レ之。使三予不レ得二一見一者獨爲レ可レ憾耳。故今弁二數語於卷端一以代二納交之贄一不レ知予再歸之日。燕石亦能延レ予遊二遍諸樓一。使レ見三詩中所レ述皆非二虛搆一乎否。

天保丁酉(八年)百花朝　默菴陳人古愚

象山雜詞

神嶺奥宅區雖二幽邃一。車馬輻湊。歲添二熱鬧一。且有二煙華之勝一。豈無二詞曲之傳一。余也濫吹二齊竿一。妄誇二遼豕一。實是汜渝之鄙俚。何望二淇濮之艷冶一。裝二飾土風一竊傚二禹錫之竹枝一。游戲文墨敢比二廣平之梅花一。丙申春日狹貫燕石山人識

櫻林夾レ路錦雲橫。鱗次彫甍旭影清。破卯已知香客夥。隔レ花風遞曉鐘聲。

連峰如畫點臙脂。三日薔晴花悉披。若比西湖西子例。品評堪喚醉粧時。
華表南邊村路平。翩翩蝶影午風輕。三月上旬春似海。客衣薰徹紫雲英。
翠巒擁郭勢陂陀。潑黛嵐光帶晚霞。遠望眞成象頭狀。人言新月似磨牙。
蕪村短歌新月磨牙象頭山之句膾炙人口
巋然傑閣擁崔嵬。壯麗夙稱南海魁。請看草昧威靈顯。不過楚人一炬災。
相傳秦元親欲焚其門以其威靈赫灼不果
清姬舊跡少人知。櫻樹林邊一片碑。萬點飛花飄雪處。猶思鳳閣捲簾時。
一帶長廊跨碧波。衣香裙影晚來多。欲知象嶺春光麗。須向鞘橋西畔過。
臙脂坡上軟塵輕。箇箇紅樓絲肉聲。弱柳嬌花春四季。金樽銀燭晝三更。
絲簧聲湧岸西東。一道清漣燭影紅。月上簾櫳淡烟散。宛然人在畫圖中。
水明樓聳俯晴波。點點燈毬入夜多。知是阿娘長袖舞。映玻璃障影婆娑。
當檻春山昨雨晴。舞筵咫尺翠嵐橫。鶯兒不養金籠著。聽取林間自在鳴。
趁宴紅粧鬆屐輕。陌頭鶯列可憐生。鬢端攢插金花鈿。蓮步移時珊有聲。
午檐花影媚晴暉。笑語檐前坐作圍。醉臉愛風褰繡箔。落紅斜掃寶釵飛。
嬌鶯一囀隔窻紗。睡起忙櫳鬟脚斜。共趁晨鐘呼姉妹。山祠隨例奉香花。

賣花聲裡夢魂殘。掩閣簾垂春曉閑。宿酒才醒無氣力。銀盆求水喚丫鬟。

梨花影轉繡牀香。金獸煙消夢一場。殘夜何妨蘭燭暗。紗窻月閃玉釵光。

小玉新粧粉膩濃。回波掌上舞容工。嬌羞佐飲生人酒。一點櫻脣濡嫩紅。

絃撥收來酒緩巡。多情寶髻帶微嚬。蘭氣時吹相思艸。輕拈金管與傍人。

海棠睡足轉嬌柔。偸視一陣秋水流。躱避嫌他狂客嬲。湘簾誤觸玉搔頭。

紅杏綠楊春繡成。新來京妓面猶生。雪纖未慣山途險。喚取小鬟攜手行。

雨過南塘芳艸柔。醉裙輕掃露華浮。細葩摘取紅和紫。玉箸拈來作繡毬。

鶯語滿山春色闌。紫氍毹暖列杯盤。歌兒醉戲開輕扇。煽起飛花做雪看。

薄暮蘭湯浴罷時。越羅綷縩裊涼颸。怱忙趁宴膚猶濕。將謂芙蓉出水來。

羅衫疊雪透冰肌。際晚涼棚上席時。笑語先開金摺扇。紅船縱得引輕颸。

船衣領也

水樓夜色月華新。綠鬢紅裳綺席春。生怕風簾搖不定。模糊難認意中人。

小樹晚涼羅縠飄。紫藤棚上露珠饒。醉顏時鑒清池水。金鯽驚沈花影搖。

覩螢郭外趁昏黃。莎徑露飛羅袖涼。解事丫鬟不攜燭。妙囊各手萬星光。

隔樹燈光點點明。晚郊暑斂碧衫輕。乘涼共賽林神去。露徑風傳綵屐聲。

三尺紅魚錦鱗閃。幾層碧鮓雪花堆。餘酣不想金莖露。水拍銀盤盛果來。」

店頭籠餅美名傳。纖手搓成顆顆圓。亭午登盤猶未冷。藍田日暖玉生煙。」

乞巧樓頭秋露皓。黃昏有約開筵早。願絲不管苦穿針。繫作紅繩祈月老。」

節値蘭盆月色饒。踏歌無處不喧囂。紈巾先判了鬟隊。軟舞輕輕迴細腰。」

祭靈燈籠競紛華。無數今宵放水涯。取次煙中浮影去。爛然亂發玉蓮花。」

遺事千年供戲嬉。糕粢造出小駒兒。奢靡最是誰家子。玉勒錦纏爭矜奇。」

銀燈亂月滿街稠。節近中秋剩暑收。一夜賽神人熱鬧。綺紈絡繹汗珠流。」

銀鱗金鳳繡衣裳。扮戲各呈濃淡粧。一樣鷄行何物比。移春檻裏簇花王。」

松蕈秋肥黃玉胎。雨餘結伴步蒼苔。林間楓葉紅如錦。不用開張畫幕來。」

小樓酒散雨聲稠。一點殘燈夜色幽。縷屐衝泥扶醉客。共同油傘過橋頭。」

胡枝花散曉窻香。夢覺紗幮風意涼。整頓寢衣相送立。蛩聲泣露石階傍。」

起步西廂夜色深。簷鈴風細送微音。嗔郎火急將歸去。指道銀蟾猶未沈。」

神會前頭多送迎。橋聲　々筰輿輕。邀棚已定開場日。揭榜先標馬李名。」

祀事例修十月天。肅然儀衛兩行連。殿驅道士峨冠聳。前導老媼緋袴鮮。」

走索吞刀列戲臺。南衙各處漲飛埃。異觀最是人爭趁。怪獸新從蠻地來。」

賽會新裝競相誇。纏頭情客極驕奢。蠻錦龍綃光爛燦。看成象嶺小春花。」

妙娃陽月日怱忙。翠袖飄風蘭麝香。十二巫峯雲雨夢。一宵分與幾襄王。」

相約黃昏趁劇場。匣觀園裡伴兒郎。痴情怕觸稠人眼。爲卸銀鈿瓔珞長。」

戲場人散鼓聲長。殘夢依依夜已央。故訴離情相送去。紅裙冷徹板橋霜。」

起撥爐灰火已無。繡牀燈影曉來孤。嬌嗔欲覺檀郎睡。金管吹煙擊唾壺。」

客散芳筵月影團。獨眠難著恨偏攢。霜風閃動孤燈底。錦字私裁坐夜寒。」

通宵轟飲興情新。墮珥遺簪鬪酒頻。狎客陪歡狂戲甚。起身睥睨扮優人。」

鳳釵蟬鬢影縱橫。打坐無端巡巨觥。醉臉潮紅不堪酒。故呼拇戰競輸贏。」

錄事巷南烟月新。艷粧一種別成春。野花畢竟品雖賤。時見嬌姿能動人。」

橋南諸樓別貯娼妓品價最卑

粉白黛青粧得濃。無壚也解學嬌容。晝間恐是不堪看。好向瑤臺月下逢。」

市聲漸定水聲饒。橋畔樓窗燈影搖。不識幾人佳夢熟。絃歌無響夜寥寥。」

長錐串策唱聲傳。蟻會匣觀人百千。一擲賭來十萬貫。誰能騎鶴作腰纏。」

雪泥黏屐滑街頭。各戶雙松翠靄浮。春近紅裙迎送少。笑呼小妹弄飛毬。」

象山雜詞畢

題柳燕石象山竹枝　巖村南里

八珍飣餖易二饜飫一。芳桂枝繁尋二斧柯一。爲報前脩有二詩訣一。動レ人春色不レ須レ多。』
二牧亡來無二復詩一。詎圖接武更精奇。壇角立吾何敢。徒欲三逢レ人說二項斯一。

同　松陵陳人

柳子風流才又多。戲毫新著竹枝歌。陰來字字香二脂粉一。閱處篇篇耀二綺羅一。』
瓊浦嚴洲文字關。繁華竝稱女仙寰。地生二才子一歌二風土一。此事應レ輸二我象山一。

同　後解傚二其體一　雪航老生

南地妙年才調名。新聲今政出二劉生一。飜來鼓吹傖儜曲。裝點繁華獨喜鳴。』
貪看金魚竝戲行。小鬟十四已多情。鬢邊斜挿二花鈿一重。彈二墜石一池鏗有レ聲。

象山竹枝叙

燕石山人製二竹枝數十首一來。眎曰。是小子三餘遊戲之文字。事雖レ涉二艷冶一。聊足レ述二風俗一。亦豈庶三幾賢二乎已一乎。余讀レ之。體該二四時一。才見二八叉一。宜三以傳二于夫嗜痂之士一也。抑東方竹枝之曲。以二祇南海一爲二嚆矢一。而五山棕隱二家各爲二后羿逢蒙之技一。踵レ之而起者蓋無レ有レ多也。夫以象山南州香火之藪。而士女之雜沓。絲竹之嘔啞。日夕相望。然而遠人忖度。止以爲二月篠二山一并在土州

之流。是所以山人之有此譏也。余目山人為劉賓客之裔孫。恐當非過論也。因題二絕句而鳴此擧云。丙申（天保七年）夏日識于池雨新晴蛙鼓喧處

雪航老生。

後落葉序

庚子（天保十一年）之冬。森田節齋。豫州歸路過予家。會優人中村歌六。演戲于象山。聲價雷鳴觀者蟻集。余拉節齋往偕觀焉。爾時予方青年。以烟花為性命。衣服瀟灑風流自喜。是日名妓數輩來佐酒。釵光鬢影玲瓏滿座。亦一時豪興也。既而節齋還鄉。不復作汗漫之遊。予亦落魄江湖。韜晦飲博。一別杳然。不通音耗者十六年矣。今茲乙卯（安政二年）夏。節齋突然來訪。把臂歡甚。酒間談舊。恍如隔世。乃出案中一冊子。

曰此予嘗戲與優人市川蝦藏問答者。而某生記之也。作此序者。非風流如子則不可。子其序之。余傲然擧大杯睨之曰。古人不云乎。士別三日刮目待之。公尙待我以舊燕石乎。我近日面目大變。朝論蠻夷夕說英雄。不屑

作嘲花諸柳之語。況於俳優者流事乎。節齋莞爾笑曰。子未免爲田舍兒也。知其一而未知其二。請爲子演之。夫俳優其業雖賤。而其所扮則忠臣義士貞女俠客之事也。當其裝雄壯也使觀者眉昂口呿不覺起慷慨之氣。當其寫悽慘也。使聽者鼻酸泣下不覺起惻隱之心。嗚呼技之妙至于此。我輩雖口有百舌筆有千枝不能摸寫其一端也。且如市川團十郎之養其親。中山文五郎之事其師。孝順恭敬皆出其天性。求諸今世儒中其有幾人乎。吾嘗觀都下之儒。或奴其顏而拜伏于賈豎之門。或鬻其學而惑溺乎西洋之道。或欺衆盲以售拙技。或學黠妓以設狡計。其他刻苦煉詩而面色蒼然者。倨傲論文而鼻梁隆然者。意氣揚々乎喜登城者。容貌蠢々乎類擔糞者。皆是僞豪傑贋君子。其行距俳優者流幾何。万一癉風犯彊。砲聲一響乎。鼠膽畏縮狼狽失措必矣。子今捨彼取此不亦誤乎。余曰快哉公言。使我復作觀一大戲場之想。遂連吸數杯醉書其語於卷端。乙卯（安政二年）淺夏燕石陳人識于呑象樓上杯盤狼藉中。

柳東軒畧稿

解題

此は嘉永六年に著はされた詩集にして弘化、嘉永年間迄に詠じた詩の中で會心の作と認めたものを輯め謄寫して知人に頒かたれたものである松陰が節齋に宛てた尺牘の文中に（東軒略稿も來り朗誦擊節仕候）とあるは此書の事である

本書所載の詩は遺稿中に採集しあるを以て重複の恐れがあるから茲には單に序文だけを掲げ詩は省く事にした

柳東軒畧稿

自叙

予少好任俠。頗耽飲博。朝沉樗蒲。夕迷花柳。今也風流雲散。煩惱灰滅。七年從事。感四簷雨聲。十載春夢空附一榻茶烟。儼然江湖秋風客。宛乎鄉曲冬烘生。頃刪舊稿。編爲小冊。篇々不出月露之形。字々或帶脂粉之氣。嗚呼予固天下贅人。詩亦口頭囈語。作時未必嘔心。觀者只宜捧腹。

癸丑槐夏　　柳東主人識

山陽詩註

記者の知己なる某老大人の談に曰く高松市に於ける維新前の漢學者と云つたら先づ片山沖堂、山田梅村の二氏に指を屈するのであるが其中の一人なる山田氏にても山陽詩鈔の全部は了解し盡くせぬと聞きしが今本書を繙くに難解の處は細大洩さす註釋が加へられてあるので此を以て見ると翁の學殖が如何に深かつたかが推察せらるゝのである本書は明治二年に京都の錢屋總四郎と云ふ書肆より刊行されて居るが此書草稿の成りしは遠く十五年前の嘉永六年であつて即ち翁が三十七歳の時に成り久しく篋底に秘め置かれしものを翁歿后の翌年即明治二年に男政恕と倉橋貢の二氏が校正し最後に片山勤が重校されたものである這回の全集に採錄したかつたが余り頁數が浩澣になるから遺憾ながら掲載を省略したのである

賭博問答

章頓首再拜謹復

松灣先生案下。僕少放蕩破ㇾ産。終至下以二賭博一爲上ㇾ業。先生以三僕之粗解二詩賦一也

不以其爲博徒而斥之。辱交誼者殆廿年矣。僕恒感其恩不能忘焉。僕今茲戊午（安政五年）先生以僕犬馬之齡四十加二也。辱賜序賀之以極褒揚。某生聞之寄書於先生責以不宜與僕交之故。先生即復書辯論。且爲僕解其嘲。既而辱賜手教於僕。諭以改其業。以爲詩人。嗚呼先生何愛僕之至此也。僕感激自奮。欲速改業而酬知己之言。而僕今日之勢。實如騎虎不可中止。何則方今之世。上下窮乏以文字糊口太難。而爲農爲商亦僕之所不能也。僕嘗使豚兒學醫術。是預爲改業之地也。然兒齡尙弱。技未熟將待來春而就師于京師。故以家政附兒。亦非今日所能辨也。雖然僕豈不奉敎。俯願先生江海之量。暫容僕罪。以待一兩年則僕將幡然改業以一洗前陋。昔韋蘇州杜樊川皆嘗放逸。後變爲詩人。名動一世。僕雖駑才。心竊慕之。非敢飾言遂非以遷延歲月也。某生所言確則確。然頗似苛刻。抑其人有猜忌之心歟。先生明眼洞視人肺腑。又何待僕喋々乎。臨書愧悚交至。不知所言。俯乞憐察。

十二月五日（安政五年ナラン）

章嘗答鶴翁書。未曾汚電覽。今併錄以呈左右。但少年之作語近狂悖。賜

一覽後附之丙丁。章又白

答鶴翁（吉田鶴仙）

曩辱惠書。責僕爲博徒。感謝々々。僕亦識二十四兄非好友也。然僕病漸入膏肓。非針砭藥餌之能活也。蓋僕有不得廢博者四焉。僕不幸早失父母。孤身落魄。奔走東西。負郭二頃之田。典賣殆盡。然而狂奴故態。依然未改。以坐上客常滿。尊中酒不空。以小北海自居者。非此業則不能給其費也。此不得廢博一也。僕性迂拙身無一技能。既不能握牙籌爲守錢虜。又不能荷鉏耰爲叱犢翁。今而廢博。一家數口齊上枯魚之肆。此不得廢博二也。性又倨傲不喜立人之下風。僕之於博夙把牛耳於象山。諸惡年少皆厥角稽首推僕以爲其社長。是雖瑣事亦足以取一快。不得廢博三也。又喜談兵。常恨身生草間不得學弓馬之藝。唯博也一箇小戰塲。而其接戰進退粗同用兵之法。且其徒雖無賴。亦自有一種信義。万一邊疆有警。夷礮一響則此輩以編卒伍。螻蟻微力聊欲以報國家也。不得廢博四也。先生曰博者鄙事。士君子所愧而不爲也。然古之人爲之者不爲不多矣。文士則韓文公。詩人則韋蘇州。其他豪傑劉毅。劉裕之徒不遑枚擧也僕嘗觀今世士君子

者。或有士其面而盜其心者。或有儒其名而商其行者。是皆欺世誣俗之徒。其罪比之博徒如何也。且夫古來英雄。往々隱醫卜。僕亦隱博者也。願先生待僕以柳下之寬量。僕雖謭劣。亦豈徒以博徒終者乎哉。冒觸尊意。惶懼尤深。惟先生諒察不宣。

戊申（嘉永元年）九月　　柳政章拜乞

叱正

二篇語々出中情。以酧知己之好意。爾時余雖年猶少。能知其實。先子業博非好而爲之。蓋其勢不得已而爲之也。當時鄉閭少年。賴而生活者百有餘人。四方賓客來而滿坐。而家無一頃之田。縱使雖有亦何能支之。是所以欲止而不能止也。而以其餘貲。養豪傑。窃圖皇室恢復。故其跡雖陋。亦其所係寔大也矣。所謂君子居之何陋之有是也。果際會風雲。將有所爲。而天不假之年。亦命也矣。此卷高橋詞兄所藏。而係松濤先生批評。先生先易簀而不能親視先子前途。以爲遺憾。然使先生知於九泉之下。則應信前言不虛而曰柳東不欺吾也矣。明治廿三年康寅四月初九日。不肖日柳燕生書以爲跋。併係詩一章。

門下春風出二諸賢一。半生俠氣有レ誰憐。戴レ星曉逐淮陰子。擊筑秋留易水船。鞍上羽書城七十。獄中風月句千篇。越山恰是月明處。好與二杉公一隣二墓田一。

金毘羅奇談

一名

金郷春夕榮

自序

玉藻よし讃岐の猿の人まねは見ざるひとさへイケ子ヱといはざるはなしさ夜ざるひく庚申まちの友だちがいさむることもきかざるは藝なし猿のまけぬ氣で彼大江戸の諸名家にましらと思ふあさ智恵は手におよばざる水の月とらんとするに似るのみか毛さへたらはぬみすぢの糸てうしはづれのこけ猿と哂ひ給へと

嘉永庚戌の春　　讃岐のさる人云

このこがねのさとはるのゆふばにはわか友猿赤が名に於へるさるのしりのあか本めかして書けるものからへたのたくみのかんなもあらためずお關所こさネヱ江戸ことばはナンダバカラシトおとがめなくアヽ是ものざかなる御代の春にうかれ幽谷を出て喬木にはいまだうつらぬ藪鶯かたことまじりの一曲も同しこゝろの友をもとむる心ざしはひなも都もかはらしと四方の君子かれがさがしらをにくみたまはず其もとめさんにあはしてやろといひつぎかたりつぎつゝひろめてたまひねかし

嘉永三とせといふとしの正月

友人狂迂しるす

題辭

漫屈驥才營蟻垤乾
坤到處孰知音陽春
不入時人耳一卷狂
文値萬金

笑叟

紅塵影漲版

橋夜銀燭光

搖水榭秋

猿赤

象山の麓に猿なありぬ士其名龍宮にさへ響て膽をつふしぬ智は孫呉空にまさる猿冠者といはんか太郎冠者にあらねと大名もうかるゝうつほさる成るへしさる程にこゝにいはざる色の黄金の里こゝろもうこく春の夕榮これなむ又とあろかゐなア賛なまたとあろかひなよゐ女房の色情春情みるにあかざるいふにいはれさるきくにいまたきかさるあり三馬がくゝり猿もたかをくゝり此赤本にしかさるはあらしとしかいふ

庚戌の夏小簑ほしけなる卯の花雨のそほふる日

安原の枝澄誌

金鄉春の夕榮

狹貫　猿赤居士戲編

第一回

島原芳原もない象山に人を動す花もさゝトハ予が友狂迂痴叟がよしこのにて花も解語四季の春むれ來る客を松尾街五百の長市と名付しはずんどむかしの〳〵の事にて今は屋數もアヽ三千て魚鱗につゞく甍こそげに小浪花と云ふべけれ朝まだきより燒立る混屋へ入り來た小年芋淨瑠璃は古いとて薩茱のやうな常磐津もあたまの天邊にこびきけり中にまぜりし賤娼の風俗くさしあかしの月のまる貌首すじさへもあかつきの眠りたらざる海棠はからの美人にあらねどもアノ家猪くふた口中に臭氣はかりは似たりけんその次はぼたもちすきそふな人相にて足のごかつくあるきぶり立ば立臼すれば引臼これを蘭人に見せたならスワルトバアトルといふならんその次は丹波の國より生捕ました鬼娘のやうな麻面草鞋でふんだ板橋の霜の如なる白粉の凹凸の中に殘りしをぬか袋にてみがきつゝ甲「梅吉さんアノ小松さんトあい寢間はモウおよしョ乙「ソリヤどうして甲「イヤゆうべアノ兒の浪聲のおかげでわしが客まで氣がうつり三丁も四丁も五六丁もヲヤとぼしたわいな蠟燭を乙「オヤおかし

ネぶんやとやらいふものは杜宇じやないが一聲はイヽガやたらになくとイケネヱゼ　甲「イヤモ八千八聲なきあかしてはむねがわるくてへどヽきすさこそいふべけれトしやれて居る門口よりこま履の音クワラ〳〵さ多くの人の魂をふみくだき來ふたりの歌妓一個はキイタうへだ島藍辨慶に黒襦子の襟にかヽりしあらひ髪つやも奇麗に玲瓏茶金石の簪チョイと横へ少し年まのやうなれど眉毛も梨の花一枝雨を帶たる淡粧いろけは蟻の穴よりも千雨づヽみも崩すべし一個はその妹分と見へまだ初春の咲かねし櫻の艶に梅の粹をば一味加へ氣に入ぬ風にはなびかぬ柳こしいかな阿難尊者でもムツと煩惱おやし立て還俗する氣になるぞかし況て凡夫のトラ達はうは氣心の二つもじ牛の角もじ胯間に生風呂を出るにも出られはせずストンとこまる風情なり

第二回

爰に玉藻屋象之助といふ通客あり玉の巵底〳〵からみがきあげたる顔は光る源氏の君にもをさ〳〵おとらぬ色男にて天下第一といふ美人を掌中に入んといふ大願おぞ起しけるその美人といふは三十二相悉く具足したる中にも膚のよきをもつて極上といふ說を出し光明皇后の故事にならひ日々に風呂屋にいたりて千人の女をためしけるが今此小妓が姿を見るに身の美しき事芙蓉の露に咲る

ざがこさく一點無瑕の玉子のむき立秀色可餐肌なれば流す涎は三千丈ともに白髪の生へるまでと心の内に思ひつゝ箱火鉢によりかゝり吸付煙草のうすけふりを連環の輪に二ツ三ツ吹出して居る所へかの姫も心はすこしあり原の中將きんよりイヽ男トほれてはさすがの吉粹もやぼなおぼこの處女の如くはづかしそうにそばへより小妓「アヽ湯があつかつて上氣しましたヨもしはばかりながらその御扇子チョツトかしておくんなさいましトいへば象之助も其道には如在なき男なれば象イヤあなたのやうな全盛のお手に觸ますとはあふぎにうれしうございやすトわたせば小妓はオホヽト「手にとり見れば

親骨はたとへのいても行末ひろく

ぬしに扇が樂しみよ　狂汪

トかいてあれば大妓は見て「ヲヤ〳〵これは松里さんがこの間作つたよしこのだヨ　小妓「そんならあなたは松里さんのお友達かへト嬉しさうなる心の内看官よく〳〵推したまへ

第三回

銀の目貫の太刀の鞘橋を西へ渡れば名にしおふ金の鄉の春げしき慾の世界の極樂國輕薄郎の魂

もこの里に宿がへし有天頂人を欺く姫花の如くに粧ふたりわけて花橋屋といふ青樓はびいどろさかしにつり燈籠一向宗の佛壇よりもまだうるはしき座舗にて金ほど光るあが佛トうやまはれ來る通人は松里といへる粋の骨長玉藻屋象之助を伴ひて幇間と兼てより待ちまうけたる亭主の狐右衛門ヲツナあたまの凹入金くれんとぞはひかゞみ奥の茶屋へ通しけるこゝは象山の天狗達翅をやすめる杉柱かけ花瓶に朝貌の一輪咲し投入も利休が流れをくんで來る喜撰一椀のむうちに咄嗟に間にあふ鉢肴はやあひたいのさし身より外にうまみの赤貝はヲヽ蜃氣樓を金絲にぬひしはでな衣裳の藝妓の小富士姉の翰江どもろともに二階のはしごトコトンあがれば 松「松コレハ〳〵珍肴亭の御馳走に楊貴妃さんの御入來トハどふもいへぬサア玄宗皇帝がお待かねジヤト象之助がそばへおしやれば小富士は嫣然ト一笑しからくれなゐの襟くつろげ半分あけしきん扇でふたりかけもちに煽ざつゝ象之助をしり目に見て小富士「あなたはいつぞや風呂屋で御目にかゝりましたナア 松里「ハテおそろしい眼力じやナアト彌陀六のこなしになれば小富士「あなたはいつでも程がよしつねさんじや 松「イヤわつちはけふは辨慶でございやすト（いろ〳〵しやれて酒となり踊つたり謡たりすれどこゝに略す）

抑もこの小富士といふひめは色藝ともにならびなき全盛にて多くの客をふり袖の容易に帯をとか

ればひそあだあ人仇名して高根のさくらといふその心は手折がたしといふ事なりされど象之助にはほれきつてはや色に出る薄紅梅ほろよひきげんの顔いろを松里はそれと見てとりて（下女をよんで何かひそ〳〵耳をねぶればはや用意をやしたりけん）松「サア酒は量りなしサモウ初學とこに入と出かけふ象「イヤ〳〵賢をけんとして色に易ると（イ、リヤント拳をうつて）松「ソレデモ妓を見て爲ざるは勇なしダトむりに一間へおしこめはば極彩色の金屏風鴛鴦のつがひの翼をならべいつしか息も雲雨の夢迭に心とけ〳〵ど雪の膚にうすけふり空燒物の下襲ねおもひ染こむ摸樣さへぬしといつしよにやり梅やツイ一聲の鶯の初寢の床の樂しみはア丶きみが代のしるしなり折から聞ゆる隣の間に枕に觸る金釵のおとカチ〳〵〳〵

第四回

つりばりのやうなかしくで釣りたらす網まで張りし伏猪亭いつか阿漕の浦ならでたび重なりし象之助曬もつもる雪の朝象「ドリヤ歸らうト帶引しめ立あがらんとするをりしものきばの竹のくづれ雪ドッサリ枕にひゞきければ小富士は驚き抱き付「アノ古い文句でありますがたとへ年季がますかとてけさの寒さにかへさりよかトうま味を含ひしその笑顏チョンボリあきし靨のなかへとんと命も窄く深く込りし象之助宵の口舌に立腹もさつぽりわすれて居る所へ下女のお萩こたつの火をもて

來て 小萩「面白妙の雪けしきでございます ト椽側の障子さつとあくれば 象「アヽ寒い／＼香爐峯のゆきはむかしの事だヤツパリ障子をしめておくんナアそしていそいで燗をおたのみ申やすお萩はハイトいふうちわトン／＼あふぐ泥爐は香芥のかをりに鴨の脛みじかき冬の日もたけて午の貝ふくころになりければ象之助も腰をするいつそ手形もやけまくで二寸さらるゝ覺悟の居續けさいつおさへつ水いらず酒しほ鍋へさしかげんも女房きどりの小富士が塩梅あまい辛いの世態の味もまだしら歯はそめねども紙を引さき眉毛をかくしモシヱこちの人などゝ勤めを早ふひく三絃のてんトたまらぬ醉かげん炬燵は戀の玉手箱あけを奪ひしむらさき浦しまちりめんの下紐へそろ／＼あしをさし込み藝妓折から二階の下より「姉さんたのんでおくんな 小富士「ハイ旦那は今やすんで居るから後にいふてあげるヱ

第五回

かゝる所へ松里は雪をふみ分けてあわたゞしくかけ來り袖うち拂ふて一息つき 松「サア大變ナ事が出來たヨ 象「ナニどうした譯だ 松「イヤおまへの姉夫悪内どんはかほは如來さんののやうなれど〇がほしいの御念願石の地藏のむなぐらでもつかむやうな有財餓鬼おまへの性とは火水の處此間からの

ゐつゞけがあまりながいにかこつけて一家親類相談のうへしばらく勘當にきはまりしとき丶て象之助はびつくりし寢耳に水の入りたる如くとんト途方にくれ竹の朱らうの煙管頰杖につくねんとして居たりしが松里ははたから氣やすめに 松「ナニサ大丈夫屈する事もネイゼ色男金と力はない物ダ勘當うけた身の上もイキナじやネイカマアかういふ時には一杯のむとしよふ小富士さんその燗直して象さんにあげネイカ小富士は「ハイトいひつゝも襟の中へさしいれし貌をやう／＼半分出し涙でしめりし火鉢の火を紙を折てハタ／＼あふぎとつくりの尻をあぶつてさし出せば象之助はグイとのむ愁を掃ふ玉箒雪にあつ湯のかんざけにしばらくうさをなぐさめけり

作者曰く雪中の居續けこたつの對酌ちん／＼鴨のなべやきはこれ人間の喜歓城まされどたのしみ極まればかなしみおほしのことわり象之助が身だいいつの間にやらあし引の山とつみてしたくはへも今はあらしの吹からに金のなる木のしをるれは女郎かひ變じてちはやふるかみくづかひにもおとるべしかくいふ作者も木から落たる猿なればまじめにいふも嗚呼がましけれど看官前車のくつがへるを戒めとしたまへかし

第　六　回

去ほどに象之助は浮浪人の身となりはてどこからいでの山ぶき色せがめど〳〵くれなゐの花代つもりて雪の如くはらへばきよき袂さへ今はよごれし結城のどてらはなの内町へは向はれずやう〳〵姑蘇の金山寺夜半の鐘をあいづにてかよふ所はきたなくも螺の曲りの如き巷にて間口三尺の一小樓はこりまぶれの木枕にみじかき蒲團よきなくも六疊じきを三間にしきりその次の間のあひ客は唐のまねするからけつ醫者和漢蘭語をなひませて「コリヤ〳〵老婆風流痞のない女をきまつてくれ酒と肴もついでにたのむと懐中より木守の南一とり出せば老婆は受とりしばらく有て調へ來る鉢の肴はみかんに肉餅五ツきれ六きれ箏上の雁のやうに組排へたり醫「コンナ物は美くナイ鰻か鼈はネイカ老婆「ハイ別のお肴はモウございませぬ醫「ナニサべつといふはすつぽんの事だ俗人といふものはドウモならぬハイ鼈はありませぬが龜はどうでございやす醫「イヤその五四六は大の禁物じやゆふべも大壯はりこんで殆ど裸躰に及んだそれよりとかく易い物がよい淮南ダト湯豆腐で小半合酒をのみつくし「アヽ頗ドロンケンと聲はりあげて

子夏と顏さへ見る事ならぬ
誰をたのんで閔子騫　猿赤

その又次の其客は色も青田の苔摶打うでのくりから自慢にや廣袖鶉衣片はたぬぎ盃の酒を手にもつて甲「アノ聲はナンノお經ダ乙「ばかアいへアリヤよしこのだヨ甲「ヱヽアノやうな鹽辛聲が酒の肴になる物かと江戸ッ子風のぢきばしで河豚の湯をくらひつヽ甲「アヽ鶯の味はひは又格別だ雪のふぐ豈一命を惜まんやトハヨクいつた句だノウ乙「イヤ河豚汁にあたら命をすてんよりわしやいき鯛をくふはうがよい甲「ソレデモ縹緲の中に西子といふ美人の乳のおまさにたとへて有トいふがヱ乙「ナニサアレハ毛唐人の寐言ダヨ日本の魚の親玉とは鯛の事だそれをすてヽ是をくふトハ内の嬶をそでにして外で女郎かひをする樣なものだ甲「フンもしあつたらかさかいたやうな物かへそりやそうと兄貴例の彦妻呼にやるか乙「ヲケ／＼手めへのやうなトンチキ野郎にござる姫があれば立た杜に花が咲くワイ甲「イヤそうもいはれぬ劒菱ャ薦きて人がすくゼトしやれて居る所へ亭主宵仕切をさりにくれば甲「こよひの仕切はこの通りダト鍋ををしへる亭主「ふぐにくれるといふ事か甲「イヤ鉄炮ダ亭「モウその毒氣にはたび／＼こりて居るカライヤダヨと河豚のやうにつらふくらせはひとりの生酔むつとして「金の代りに地がねを出そうト火鉢をとつて打かへせば火花は四方へ飛ちりで何がやけるかしらぬ火の只一面の沖となりあひの屛風バツタリたふれば以前の醫生新造に帆柱おし

立てふとんに波をうたす最中さすがの悪漢吹出して腹をかゝへて虎溪の三升笑ふ門のふぐ肴和睦の酒となりければみな〳〵ともに酔たふれしの字く字に折ふしけるこれはさておき小富士はかの銅山の客人を欺みな象之助に身あがりの雲雀の床にかよひぢもいつしか首尾のあしくなるをやう〳〵翰江かはからひにて今宵は夜ふけて來りしが小櫻のいぶせさは有明の灯已にきへ破れ窓の紙ビラ〳〵風に閃あなよりさしこむ月のあかりに見れば象之助が待かねて寐入りし貌のいつもよりは瘠たるやうに見へければみなわしゆゑの苦勞かと思へばいとゞ可愛さの心のたけの長じばんそつと寐床へはひる折しも屋棟の上に烏の聲カアイ〳〵〳〵〳〵

第七回

光次は業平よんもイヽ男ト古人の金言うべなる哉されば三味線しらず芝居見ず藝なし猿のやぼ客もたゞ○印さへあればいかなる美人もツイ手いけのはなになる物なり爰に銅山の大盡小富士をしば〳〵口説といへども心づよくも肌ふれざれば終には千金を抛ちて根引にせんとひしめきけるが元來小富士が親方は威猛屋の長爪虎と綽號の付しほどの人物にて銅臭をしたふ事蟻の西瓜の皮に付が如ければ早速相談きはまりけり小富士はそれときくよりもほんに身も世もあられふる涙を袂につゝみ

かねけふは持病がおこりしとて奥の一間へ立籠りよぎ引かづきて打臥しける翰江は薬に事よせて枕のそばへそつと來て翰江「今象さんが格子へ來たがなんぞ用事はないカヱトいはれてうれしく首をあげ小富士「モシ姉さんこれを渡しておくんなアト小菊の紙に紅筆ではしりがきなるその文も半は涙にしめりけり斯て其夜も更わたり轟々の太皷もやみお茶をひいたる藝子の釵も屏風に觸る折からに小富士は起て脊戸をあけ飛石傳ひのさし足も心のそこの深み草胸へさしこむ芍薬の花壇を廻りせんすいの菖蒲もわかぬこひのやみさぐり／＼て橋をこへ誰がよい中へ垣つばたの汀に生ふるうき草のあすはむかふの岸に咲トおもへばいとゞ打しをれ露もかわかぬ朝貌架ほんにうき世も秋萩のしをり戸あけて忍ひ出る外にはそれとすいせんのはなの垣ねにたゝずみて待かねて居る象之助よひの文にて約束しつれてとも／＼飛梅の心づくしのはてまでもとにげゆくむかふの木かげよりあらはれ出たる五六人黒装束に面をつゝみ「ヤア欠落人をのがすなと引執へて轎へのせいづくともなく飛行けり

第八回

人間萬事塞翁が馬／＼ト首尾よふ計りおふせその行さきは夏木村の中ほどにて卯の花垣にて表をか

こみ庭のやり水きよらかにながれかきつばたのはなかげに金魚のおよぐも奇麗に見へほどよき所へかけ橋も風流めきた住居なり內の樣子をうかゞへば銅壺火鉢を拭立て塵一點も霰がたの鐵瓶に雨ふる聲のきこゆるはふだんたぎれる湯なるべし家內は年頃十三四の氣のきゝた女の童に狆兒一隻のその外は猫はゞ爺の類もなし座しき口の二間のふすま微塵砂子の仕立だち四季の草花のかきまぜも圓山風密畵なりふすまをあくれば鼻さきへポットかをるは靑磁の獅子の口から咄しけふりなり床には文具を位置よくかざりし側に琴一張を置たるはコロリンシャントころび寐の誰と調子か合すみ家ト小富士はあやしう思ひし所一間の內に聲ありて其譯くはしく語らんト立出たるはこはいかに銅山の客人なれば小富士はいよ〱驚きしが其人扇を笏にとり「抑こんどの狂言は小富士さんが心底をさぐらん爲の計りこそその作者は松里先生此榎井藻海はちやり敵トかぶりし頭巾をとりすつればあたまばかりはあかがね山兀とした禿坊主七賢人のなかまのぶうな竹の林の藪醫師なり小富士は事の始末をきゝて魘夢のさめたることゝちしていそ〱したる折こそあれ出入りの料理屋「ハイ御肴が出來ましたト三ツ四ツさげくる鉢ざかな酒のかんさへイヽ塩ばいトみな〱ともに悅びける

附錄社友狂詠

川たけのながれゆく身のアノしがらみにせかれてあはれぬ戀のふち　錦席

卷紙もさもにやせてもきみゆゑなればふでのいのち毛つゞくだけ　同

氣にいらぬ風が吹ふとぬしゆゑなればまゝの川邊のいとやなぎ　小巴

みだれつゞみのおとづれたへてなるかならぬかわかりやせぬ　同

玉手箱あけていふのにうたがひぶかいみなうらしまにきかしやんす　狂迁

三味線のいとし皮いゝみさほをたてゝどうでもつとめをひくしあん　同

脇差のとげぬ緣じやとあきらめみてもきるにきられぬ身のいんぐわ　同

たま〳〵のおとづれさへもやゝ打たねてあんじがしやくの種がしま　同

しら雲か雪かこゝろのわからぬひとを花を見ていたくやしさよ　同

逢た夜のにはとりをもまだにくらしいうき名をうたふひとの口　同

灰吹のうたれたゝかれソリヤ身のかくごすてゝのかるゝ中じやない　同

捫蝨餘話

獄中排悶。唯在二談話一。々之快者。乃載二諸筆一。得二數十條一。名曰二捫蝨餘話一。

丙寅首夏　狸窟幽人識

（注記）本書は翁が獄中に於て著はされたもので、未刊の書で吉田松陰の幽囚錄の如きものである、其捫蝨と名付けしは『世說に晉の王猛桓溫が關に入りしと聞き、褐を被て之に謁し、蝨を捫りて當世の務を談ず、旁に人無きが若し』とあるに採りしものである。

水府烈公其子振々。而七郎公之賢。九郎公之英。最顯二于世一矣。七郎公年甫十一。其老臣適有二聚歛之議一。公乃書二德者本也財者末也語一以眎焉。老臣愧而輟二其事一。幕府愼公聞レ之。召レ公將レ賞レ之。時南天燭子正熟。爛燦照レ庭。其樹十二株。皆奇種也。愼公指レ之曰我與二汝一樹一。汝宜レ擇レ焉。公答曰。臣願盡賜レ之。愼公意雖二頗惜一焉乃諾レ之。公下レ階悉摘二其子一。愼公怪曰如二其樹何一。公曰臣之所レ欲者。在レ子而不レ在レ樹也。來年又熟將二復拜一レ賜。愼公於レ是益稱二其賢一。公卽今一橋公也。

（注記）德川家慶

愼公は十二代の將軍、幼名敏次郎家齊の子天保八年職を襲く治世中米國ペルリ其他外船の來るあり頗る多事なりしが、嘉永六年薨す、年六十一。愼德院と謚す。

德　川　齊　照昭　（烈　公）

勤王家、水戶侯治紀の第三子、通稱敬三郎、字は子信、景山、又潜龍閣と號す、弘道館を興して藩の文武を獎勵す、大老井伊直弼と政見を異にし、水戶に禁錮せらる、萬延元年八月薨す、年六十一私に謚して烈公と稱す、明治卅六年六月正一位を贈らる。

德　川　慶　喜

水戶齊昭の第七子、幼名を七郎麿と云ふ、長じて一橋家を繼ぎ刑部卿となる、慶應二年將軍家茂薨するにより其職を繼ぎ十五代將軍となり、同三年政權を奉還し其職を辭す、爾後維新の大波瀾を經て靜岡に屛居し、悠遊自適風咏自ら遣るもの數年、明治三十一年居を東京に移し其時公爵を授けられ、大正二年十一月薨す。

九郎公在二鶯城一時。父烈公承レ譴幽二于駒籠之邸一。鶯城諸老恐二禍之及一將レ出レ公公有二一男一女一皆幼。公呼二其男一曰來々。男匍匐至二膝下一。公手及レ之。顧二諸老一曰我胤盡矣。汝宜二安心一。即拂レ袖而去矣。

今薇公遊獵之次。憩二一里正家一。戲作二滑稽一乃裹レ面擔レ籠作二村翁入レ市之狀一。使二人呼一曰老爺何之。答曰明日縣令來矣。趁二岡山一而沽二酒脯一。是雖二瑣事一亦矯弊之意也。薇公即水府九郎公也。

甲寅之大震。藤田東湖在其邸。虩々聲乃出避焉。見母猶在室。走入援之。將出而屋壞。東湖壓死。但母氏獨完矣。蓋以其骸蔽母也。埋葬之際母氏不肯哭焉。或怪問其故。答曰妾衰朽女子雖存何益。彪也我君股肱而君恩未報。今救妾而捐其身。不忠莫大焉。我何哭之。問者歎曰此母而有此子。

（注記）　藤田東湖

勤王家、水戶藩の幽谷の子、名は彪、通稱虎之助後誠之進と改む、善く藩主齊昭を補助す、史官及び側用人たり、安政二年十月二日の夜、震災の爲に壓死す、時に年五十、明治二十二年二月十一日正四位を贈らる。

十七士之向櫻門也。會于大森。以賀首途。酒間各作歌詩以揮毫。齋藤監物作其題辭。一則七律詩也一則見義而爲四字也。倥偬之際辨此誠。文武士哉。

（注記）十七士は關鐵之介、齋藤監物、稻田重藏、佐野竹之介、黑田忠三郎、大關和七郎、廣岡子之次郎、山口辰之助、森五六郎、岡部三十郎、鯉淵要人、杉山彌一郎、川崎孫四郎、蓮田市五郎、森山繁之助、山崎禮藏、有村次左衛門等をいふ外に金子教孝、高橋多一郎等があつたが此時上國に行つてゐて直接行動に加はつて居らなかた。

吉松陰少時書鷇而已三字於小紙。常懷之。後果酬其志。可謂大丈夫也。

松陰正氣歌。檻車趁二江門一時。歩二文天祥韵一也。車中無書誤二脱二句一。可レ惜。

（注記）　吉田松陰

勤王家、長門藩士、通稱寅次郎、名は矩方、字は義卿、又二十一回猛士と號す、杉常道の子、吉田賢良に養はる、佐久間象山に師事す、安政元年米艦の下田に來るや、之に搭乗せんと計り其罪により其藩に檻致せらる、既にして赦さる、後同志梅田定明等捕へられ、事松陰に係る、因りてまた囚獄され、安政六年十月廿七日斬らる、年二十九、明治廿四年正四位を贈らる。

松陰善論レ兵。其說曰兵法有レ攻而無レ守。又曰勢者人也非レ天也。皆奇氣絕レ人。松陰愛二予詩一。常藏二予稿一。亦一知已也。予頃作レ詩追二悼之一云。我愛松陰風骨奇。幾回追悼涙淋漓。虎投二幽檻一無二飢色一。鶴望二秋旻一有二逸思一。正氣一篇文相筆。秘籌百鍊子房椎。後生欲レ說二尊攘事一。先買二春絲一繡二此兒一子房椎。用二松陰文中語一。

松陰門下、有二松浦龜太者一。性喜二繪事一。松陰告レ之曰。書無用物也。然寫二忠臣孝子像一而傳レ世。亦可三以禆二名敎一也。汝宜レ用二意于此一。龜太從レ之乃寫二松陰眞一。其圖巧妙鬚毛皆動。□□之歲。龜太欲レ刺二永井雅樂一而不レ果焉。登二粟田山一屠腹而死。蓋松陰薰陶之功也。

（注記）　松浦龜太郎

名は温古、字は知新、號は松洞、長州の人、吉田松陰に學び又畫を沼西涯に學ぶ、文久二年國を脫し東上せしが、寸功なきを慨き、粟田山に自刄す、年二十六。

高暢夫嘗遊二支那上海一。夷人請レ看二其佩刀一。暢夫脫而示焉。夷人傳觀レ之。有二輕侮狀一。暢夫乃以レ手示二斬伐之勢一。夷人大懾遽返二其刀一。暢夫作詩有二一劍横行五大洲句一。暢夫亦受二業松陰一者。

（注記）　高杉の渡清

高杉は文久二年正月二日、形勢視察として外國行の命を受けたので、諸準備の爲め一應歸國し四月廿九日幕船千歲丸に搭し長崎を出帆し、五月六日上海に安着數十日滯在の上、七月十四日全船にて長崎に歸著した。

（注記）　高杉晉作

山口藩の志士、名は春風、字は暢夫、東行と號す吉田松陰の門人、文久三年六月奇兵隊を組織して、其隊長となり、藩の俗論黨を一掃す、慶應二年四月病歿す年二十九。

宍門討姦之擧。暢夫爲二其首唱一。時甲子十一月望夜素雪初霽。明月在レ天。其事爽快。不レ使三赤城義士擅二美於士林一。

（注記）　宍門　長門の事なり古は宍門と稱し、景行帝の時宍門國造の名見へ、仲衰帝熊

襲を征する時、行宮を豊浦に置かる。

討姦之舉。姦党連敗。民間謠曰先鋒之隊。何異二麥奴整々而出一寸功一也無。

暢夫慕二山中幸盛之風一。常拜レ之。其志亦可レ見。

賴子春之被レ刑也。江木某得二其骸一而葬レ之。蓋大橋訥庵周二旋之一也。

（注記）　賴　子　春（三樹三郎）

名は醇、字は子春、鴨厓又古狂生と號す、山陽の第三子、後藤松陰に學び、後昌平黌に入る、勤王說を唱へ、後幕吏に捕へられ、安政六年十月七日斬らる、年三十五、明治廿四年四月八日正四位を贈らる。

夢路日記、訥庵妻所レ著也。其中說二某宮事一。用二王昭君典一。比喩自妙。

（注記）　大　橋　訥　庵

名は正順、順藏と稱す、淸水赤城の子、淡雅の養子、宇都宮戸田氏に仕ふ、文久二年正月幕府に捕へられて獄に下さる、七月釋され十二日歿す年四十七、明治廿四年十二月從四位を贈らる

（注記）　大　橋　卷　子

卷子は大橋淡雅の女にして卽ち訥庵の妻なり、和歌を善くし、國典を修め、傍ら茶儀香道に通して、才媛の譽れ高し、訥庵が國事をもて捕へらるゝや、卷子早く其の秘密の文書を集めて悉く之を匿せしかは、幕吏搜索するも、其の證跡を得ること能はさりき、さて卷子が家に籠り居りし間に、書きつけたる日記を夢路日記と名つけ、梓に上せて世に傳ふ、明治十四年十二月廿

三日年五十九を以て沒しぬ。

河野顯三死二于坂下一。其祖父守弘聞レ之。喜曰此兒神也。非二我孫一矣。乃献レ酒祭。守弘善二國學一。其書數部傳レ世。

（注記）　河野顯三

坂下門の刺客、名は通植、字は士威、初め越智通弘と云ふ、下野河内郡吉田村の人、大橋訥庵に漢學を學び、河野守弘に從て國學を修む、攘夷の説を抱き、幕府通商互市を約するに及び、遂に同志と謀り三島三郎と變名し、文久二年正月十五日老中安藤信正を阪下門外に要撃し事成らずして殺さる、明治三十五年十一月從五位を贈らる。

松本士權在二若黌一時。其藩名儒應二幕命一來二于府下一。頗有二矜色一。士權乃簁二醜羅蔔一。以送レ之曰君勿レ忘二此味一矣。士權倜儻皆此類也。

（注記）　松本奎堂

勤王家、名は衡、字は士謙、通稱謙三郎、三河の人、刈谷藩士なり、安政元年昌平黌に學び詩文に長ず、幕府が攘夷の勅命を奉せざるを見て憤慨悲憤、終に文久三年同志と義兵を大和に擧げ奮闘し負傷せしかば、九月廿五日轎夫に扶けられ、鷲谷山中小字岩本に休憩の際、紀藩山高右近の部下に銃殺せられ、遺骸は湯の谷に埋葬せり。

辭世

君が爲め、みまかりにきと世の人に、語り繼てよ、みねのまつかせ

明治廿四年十月從四位を贈らる

士權嘗過二照公廟一。執レ手罵レ之、其事頗似下高山彦九鞭二曾氏墓一事上。予悼二士權一詩云

獨眼雄豪誰得レ儔。轅門投レ筆運二奇籌一。好男自今高山匹。盲將儼然大谷儔。
氣壓二名儒一作二奴隷一。性憎二覇主一比二仇讐一。天川快死應二瞑目一。曝レ骨延元陵畔秋。

士權傳。松林飯山所レ作。逸事尚多。士權集伊藤軍八所レ輯。亦其一斑耳。然士權名已轟レ世。不三復待二區々文字一也。

（注記）　松林飯山

名は漸字は伯鴻、大村藩士、安積艮齋に學び昌平黌に入り、詩文掛となる、後大村に歸り、政務に參す、慶應三年正月三日賊手に係りて死す、年廿九、明治三十五年十一月八日正五位を贈らる。

武田伊州號二耕雲一。或問二其義一。答曰我三仕三黜。身如二浮雲一。是以號二耕雲一。耕雲翁臨レ刑嗔レ目曰。可レ攘レ夷々々々。否則我復出矣。行刑者畏レ之。即日歐レ血死。

（注記）　武田耕雲齋（正生）

字は伯道、如雲と號す、後從五位下に叙し、伊賀守に任す、弘化元年齊昭の蟄居を命せらるゝや此が救護に奔走し、爲に罪を得て致仕を命せられ、因て耕雲齋と號す、後櫻田の變あり、藩内繹騷し、國事爲すへからざるを察し正生死を以て國に報んと欲し、同志數百名を率ひ國を脱し

朝廷に哀願せんとし、途次雪に阻まれ金澤藩の爲に捕へられ慶應元年二月四日、越前敦賀に於て斬に處せらる、年六十三。

筑山之役。權藤正人以二十三人一。當二敵三百一。可レ謂二一身渾膽一也。正人即清健次也。

保母建伊藤益荒一双壯士也。建死二于芳山一。益荒入二筑山一。其死生予未レ知焉。

（注記）　保母建（景光）　伊藤益荒

右両名は九州島原藩士にて、平田鐵胤に皇學を學び皇運の陵夷を挽回せんとし文久頃京都に出で、盛んに活躍せし勤王家である、保母は大和の義擧に加はり、十津川の郷士を說きて兵を募り、擢でられて隊長となりしも、戰利あらず同志と共に和歌山藩の手に捕はれ、元治元年七月廿日、京師六角の獄内にて斬られた人である、年廿二才、されば本記事に芳山で死したとあるは誤聞である、保母は明治三十六年十一月從五位を贈らる。

益荒は水戸に入り藤田武田等の軍に加はり、奮戰せしも、軍利あらず元治元年九月八日常州笠間に於て戰死した。（其時廿二才）

辭　世

春雨に、みの覆ふべき方もなく、今は笠間の露と消ゆらむ

京城之役。來島翁將レ戰。日下義助有二異議一。來翁怒曰讀書生何知レ兵。我今一戰直提二賊首一來。卿等宜下在二山上一而觀上レ之。乃先レ衆而發。馬上奮レ刀。勇氣蓋レ

軍。敵知其驍將。登屋狙擊之。來翁遂中丸而死。其兵大敗。義助將死。嘆曰

我不能固諫來翁而誤大事。死有餘罪矣。

（注記）　來島又兵衛

名を政久と云ふ長藩士なり、爲人膽力あり、元治元年六月諸隊を率ひて、都に上り哀訴せしも許されさりしを以て、此上は戰ふより他策なしと七月十九日新在家門近く押寄せ、會津勢と戰ひしか、彈丸飛來り胸板を貫かれて蛤御門にて絕命せり、明治廿四年四月八日正四位を贈らる

（注記）　日下義助（玄瑞）

長門藩の醫、勤王家、名は通武、字は實甫、吉田松陰の門人、元治元年攘夷の勅下るや、長藩奇兵隊に長として馬關碇泊の外艦を擊攘す旣にして朝議一變し、三條公等罪を得るに及ひ、天顏に咫尺して哀訴せんと欲し、來島又兵衛等と藩兵千餘を率ゐて上京し、蛤門を破り、松平容保等と激戰し利あらすして鷹司邸に自殺す、年二十六、明治廿四年四月正四位を贈らる。

安積武貞。臨刑三拜禁闕。從容而死。可謂壯矣。武貞長子武技。緒餘讀書

頗通孫子。

（注記）　安積武貞（五郎）

勤王家江戶の人、文久三年八月中山忠光が大和に兵を擧げし時、岡見留次郎同志の者十四人と共に其群に入り、十津川邊に於て戰ひしも、軍利あらすして津藩の兵に生擒され、京都の獄に投せられ、元治元年二月十六日獄中にて殺さる年三十七、明治三十五年十一月從四位を贈らる

長公輿天性慷慨。聞二節義一則泣矣。但醉則乱。是白璧微瑕也。嘗在二軍中一醉而被レ縛。乃作二狂歌一。有二獄中出者涙外唯屁句一。軍正笑而解レ之一時傳誦。以爲二話柄一。

公輿軀幹堂々。頗有二威貌一。京城之役。爲二使者一有レ功。

(注記)　公輿　(長谷川鐵之進)

勤王家越後の人、名は世傑、字は公輿、强庵と號す、朝川善庵の門、文久三年七卿に從ひて長門に奔り、戊辰の役、王師北征の先導となる、明治四年秋歿す年五十

同氏は文久頃、香川郡圓座村小橋氏方へ來り、長らく滯在して、榎井と丸龜間を往來し當國の勤王志想を皷吹せし人にて先年贈位の恩典に浴せり。

京城敗後。中村圖太耽二于花柳一。蓋泄二其不平一也。一日來醉。携レ妓遊二于筑一。々其故國也。舊僚來責レ之。勸二其自反一。圓太諾レ之。乃傾二數杯一談笑而死矣。有志者聞レ之。皆惜焉。京城之役。稱二野口唯人一者。乃圓太之仮名。

(注記)　中村圓太

名は無二、號は東州又は李不言齋と云ふ、福岡藩士中村兵助良英の次男なり、天性英邁にして氣節あり、安政六年國を脫して江戶に至り、姓名を變して菅兵輔と稱し、大橋訥庵の門に入り多くの志士と交り謀る所あり、歸國後野口唯人と變名し、慶薩長及京師の間に奔走す、幕府征

討軍の長防に迫り、長藩内の議論二派に分れ正義の徒危機に瀕するや、圓太密に高杉晋作を誘ひ福岡に歸る、此の後圓太は薩州に航せんとして解纜せしも海上風波に逢ひて、船を博多に寄せ夜深に乘して上陸し、石藏屋と云ふ旅舍に入る。其時多くの壯士の爲めに迫られ、慶應二年正月廿六日、奈良屋町の報光寺に往き屠腹す年三十一、明治二十四年十二月十七日從四位を贈らる。

支那楊某。割據南京。自號東王。嘗以海内皆東王地。爲試題。一生即賦曰。
率土皆清地。胡爲漫陸梁。國爲紅巾破。愁緣黑髮長。敗賊唯因況。虐民總是楊。避秦何處是。回首問斜陽。某見之怒。戮其生。

（注記）楊某は清の長髮の亂徒楊秀清の事ならん。

我芳原妓。有拒墨夷聘以作國詩者。可謂一双美談。

（注記）本文に芳原とあるは横濱の誤である、其妓は左の女子である。

喜游

喜游は元幼名を知惠と云ひ、江戸皆川町に住みし、醫師太田三庵の女なりしが、少年の頃家道衰へしを以て、横濱の岩龜樓に身を沈めて娼妓となつた、其際樓主に對し特に洋客には接せさる條件を付したが、或時米人イレースなる者同女を見染め、貳百金を以て同女の春を買はむ事を申込みしに、元來樓主は貪欲飽く事を知らさりし者なりしかば、先の契約に違ひ其旨を承諾し其意を彼女に告けしに、喜游は斷然其交渉を拒絶せしも、樓主は既に枕金までも入手せし事とて、又候其旨を諭せしかば今はいなむに途なく、いつそ自決して素志を貫かんと決心し、寄

に自室に入り、左の遺書を殘して、自害して、果てた。

妾義を守らむと欲すれは、主の難方に急なり、妾身を措く所を知らす、只死するより外に道も侍らす。かくは刄にうち伏し侍りぬ、ねがはくは、妾が尸を以て洋客にさらし、ただ我が堂々たる君子國の人の心は、最もいやしき娼妓なれど、義を守る志はなほかくの如きに侍るよし申し傳へ玉はらば、妾がよろこび生にもまさり侍りぬと、書きし末に歌さへそへたり。

露をだにいとふやまとの女郎花
　　ふるあめりかに袖はぬらさじ

主人此さまを見ておどろき、かつ悔みて、其米人に事のよしを告げしに、米人もまたおどろき自失して去りたりとぞ。

鍋島侯閑叟。聞二島津三郎入洛一作レ詩云諸君、擾々成二何事一不レ若閑叟唯樂レ閑。蓋睥二睨一世一矣。

（注記）　鍋島閑叟

佐賀藩主、齊直の子、幼字貞丸冠して直正と稱す、幕末意を海防に用ひ、功により左近衛權中將に叙せられ、文久元年致仕して閑叟と稱し、公武調和の爲に盡力す、明治四年正月薨す同卅三年從一位を贈らる。

（注記）　島津三郎（久光）

鹿兒島藩主、齊興の三男、公武の間に國威を發揚せんと期し、文久二年從卒武州生麥に於て英人を殺傷し、英艦鹿兒島に來攻す、終に砲擊して之を走らす、明治七年從二位左大臣に任せら

れ、三條岩倉の二公と議協はすして辞す、明治十七年公爵を受け、廿年從一位大勳位に叙せらる、同年十二月六日薨す。

或曰我大螭東西七百里。儼然一大軍艦也。此語自ニ林子平ニ一轉來。然雄壯可レ喜。

（注記）　林　子　平

慷慨家、名は友直、江戸の人其姉仙臺侯の側室たるに因り仙臺に貫籍す、四方に遊び全國の地理を究め、我邊防の急なるを論じ海國兵談を著し、又三國通覧を作りて朝鮮琉球蝦夷の地誌を明にす、幕府以て徒に民心を動すものとし仙臺に禁錮す、寛政四年獄中に歿す、明治十五年六月三日正五位を贈らる。

藻府尊攘之士。以ニ長峻阜一爲ニ蒿矢一。源烈公嘗嘉ニ其志一。手書ニ義榮二字一以賜焉。可レ謂レ榮也。

峻阜在レ獄凡三年。壬戌之冬。今上天皇下レ敕而赦レ之。是誠榮之榮者。我𡽶之士。懦弱不レ振。第喬以文子友助戰ニ死于京城一。所レ謂鉄中錚々者也或曰杉山彌一亦我州人。然則讃亦非レ無レ人。

（注記）　長谷川峻阜

小字安次郎、名初秀芳、後秀驥、字邦傑、號峻阜、通稱宗右衛門、世々高松藩臣、父は祐民幼

より文武の兩道に達し尊王攘夷の説を主張し遂に幕吏に捕へられ、傳馬町の獄に繋かれ、後高松の獄に移され、文久二年朝命に據り出獄するを得、姓名を九岡淪と改め、長州に遊ぶ、明治三年九月二日病に罹り起つ能はさるを知り宮闕を拜して絶せんとし、船に上り舞子濱船中にて歿す年六十八、書齋義榮館と稱す、水府烈公が「義榮」の二字を書いて贈れり、公の幽閉せられし時、岐阜幕府に上書し之を救解せし事ありしと、明治三十四年七月四日正四位を贈らる。

(注記)　杉山彌一郎

櫻田刺客の一人、名は當人、父を孫十郎と云ひ、鉄砲鍛冶を以て水戸に仕ふ、彌一郎其の業に工なる事父に勝れたり、班を留附にすゝむ同志の井伊をねらふ時その動靜を偵察し、襲撃の便を計り、事果てゝ後堀丹波守の邸に囚はれて斬らる、年三十八。明治三十五年十一月正五位を贈らる。

以文與二鎌和甫一。今在二予鄕獄一。頃作二聯句一云。亦心誰共語。悒鬱獨書空。咄々
咄甞子。偸安辱二祖宗一。前半以文句。後半和甫句也。和甫即櫻水也。

(注記)　橋以文　(小橋香水)

名は以文、字伯友、幼名友之輔、後安藏號香水、道寧の長子なり、初家庭に學ひ後伊藤南岳に從ひ詩文を學ぶ、嘉永以來尊攘の説を唱へ燕石等と行動を共にして、文久、慶應、明治の三度高松藩の獄に繋かる、後赦されて耕讀し、明治五年六月歿す、年六十五、大正四年贈正五位。

(注記)　鎌和甫　(君田)

名諧、字和甫、通稱援造號君田、阿波美馬郡重清人、父は鎌田治左衛門、安政頃君田金毘羅に

來住す、初僧、後還俗す、書畫詩歌俳諧能す維新前勤王を說き高杉、桂、日柳、長谷川等と交る、慶應元年入獄す、其頃櫻水と號す、明治七年七月歿す、年六十三、明治三十六年正五位を贈らる、一號士佛「金鄕春夕榮」に鷙物と欵せり、士佛の變名なり。

甲子冬。予有レ故。隱二于酒中一。柴原某。作レ詩嘲レ予曰。身浴二朝恩一稱二逸民一。絕無三行事答二蒼旻一。初知殉國勤王士。不レ屬二詩人一屬二武人一。此亦予項門一針。因記焉。

（注記）　柴　原　某　（和）

通稱を順二といひ、靖廬と號す、播州龍野の人、森田節齋の門人節翁が句に曰く

　ただでさへ人を驚かす柴原が、まさかの時はこれで龍野か

明治維新後、最初の縣令として職を千葉縣に奉し、大久保東京、楠本新瀉と共に三縣令の名を博し次いで元老院議官となり或は山形、香川縣の知事となり、後貴族院議員に列せられ明治卅八年十一月廿九日歿す、年七十四。

藤伯孝。松每友亦在二矛隣獄一。伯孝頃著二太平秘策一。及龍虎要略一。皆有用書也伯孝論レ兵。陸主二短兵一。水用二小舟一。其令簡而其法嚴。大抵與二予論一合。伯孝頗通二天學一。去年五月念七。三光並出。衆以爲レ異。伯孝曰。雨兆也。翌日果雨。

（注記）　藤　川　三　溪

名忠猷字伯孝通稱初求馬、後能登又將監號三溪、南凱の子、家學を修め詩文に達す、早くより勤王志想を有し、長州の久坂高杉等と交はり、燕石の親友たり、農兵組織の議を唱へ、藩の諱む所となり、高松藩の獄に繫かれ、維新の際出獄し、官軍に從ひ奧羽に出征す、明治三年朝（正院）に仕へ後致仕し、水產に力を用ひ水產學校を起し、自ら捕鯨事業を企圖し、明治廿四年大阪に於て歿す、年七十四、著書海國急務其他多し、大正四年十一月正五位を贈らる。

每文氏亦尊王士也。嘗聞二一姦臣被レ黜事一。喜而舞踏。時每文着二白襦一。飄然如レ鶴。因自稱曰二鶴翼舞一。予等從レ此。呼二吉事一曰二鶴翼一。亦獄中一佳話。

（注記）　松崎溢右衛門（每友）

名佐敏、號達齋、高松藩世臣、嘉永文久年間藩主賴胤賴聰を輔け、朝庭と藩とに斡旋す、在京の時水藩志士と尊攘を謀る、元治元年賴聰入朝七月高松藩兵禁門を護る、蓋佐敏の力に因る、藩論一變獄に下る、後赦されて執政たり、明治二年異論者に殺さる、年四十三、明治卅一年七月正四位を贈らる。

捫蝨餘話小序

王景略之談二時事一也。苻堅相二其心一。而桓溫相二其皮一矣。士煥集二獄中同士之話一。爲二一册一。亦時事極快者。然士煥豈有下以レ之望レ世之苻堅之意上哉。此其義氣之所レ感。不レ覺載二諸筆一者已。然亦皮相之士。目以爲二平々雜話一。則大非二士煥之志一也。捫蝨蓋取二諸獄中之常狀一。非三敢以二景畧一自比一。

同獄生拜日主人獻

（注記）王　猛　（晉）字は景畧、北海劇の人、魏郡に家す、少くして貧賤、畚を鬻ぐを以て業と爲す、好んで兵書を讀む、氣度宏遠、桓溫が關に入りし時褐を被て之に詣り、蝨を捫りて當世の務を談じ旁に人なきが若し、溫之を異とし徐に曰く江東に卿の比なしと、乃ち猛を軍に置き與に俱に還らんと欲す、猛就かず、呂婆樓、猛を苻堅に薦めて曰く猛の謀略は不世出なりと堅、婆樓に因て猛を招き一見して舊友の如く、自ら謂へらく劉玄德の孔明に遇ふが如しと、猛を以て尙書左丞と爲す、治績擧る、尋で相となり燕を破り淸河侯に封せらる、寧康三年歿す武と諡す。

苻　堅　（晉）前秦主第四世、字は永固一字は文玉、洪の孫、父東海敬武王雄、佐命の元勳を以て位將相を兼ね、堅爵を襲ぎ英豪を交結し、呂婆樓、彊汪、梁平老等と善し、秦主生、暴虐にして殺を嗜み人心離乱す、呂婆樓、等堅に勸め其兄淸河王法と兵を發して生を幽す、堅遂に位を嗣ぐ、王猛を擧げて任ずるに國事を以てす、建元六年王猛をして燕を伐たしめ之を滅す

又涼を擊て之を破る、涼主逃れて晉に降る、是に於て秦天下を九分して其八を有し、晉は其の一を有す、建元十九年大に師を起し、晉を伐ち、淝水に戰ひ大敗す、慕容垂、慕容沖、姚長等皆叛いて獨立す、苻堅屢之と戰て克たす、二十年終に姚萇の爲に擒にせられ、新平の佛寺に縊死す時に年四十八。

桓　溫（晉）字は元子、長するに及で雄圖あり、嘗て曰く男子芳を百世に流す能はずば當に臭を萬年に遺すべしと、庾翼に代り荊梁等の軍事を都督す、永和三年漢を伐て之を取る、十年又北伐して大に秦の師を敗る、孝武の時に卒す。

明治己巳仲秋鐫

柳東日柳先生遺著
天江江馬先生鑒閲初編

呑象樓詩鈔 初編

書肆擁萬堂製本

序

攝之西。名於詩者。僅々不過數家而已。日柳柳東其一也。余嘗聞其爲人。任俠自喜。骯髒蔑禮。詩名警拔。有驚人者。每以不交杯酒爲恨。戊辰之夏。飲於鴨干樓。文雅之士滿座。々有一客。默々不語。問之則柳東也。因共結交。然未見其任俠骯髒之狀。余竊怪之。豈有所蘊蓄未發乎。其所養必有異於人者也。既而杯盤狼藉。將期他日細論斯文。當此時北越之賊焰甚熾。吾仁和王奉勅討之。柳東以記室扈從焉。適使染瘴疫歿於陣中。頃其嗣終吉。

携其遺稿。訪余曰。此亡父之詩也。欲刻若干首。頒之故舊子。其弁一言語意懇々。余把讀之。涙下數行。追憶鴨干樓上握手談讌之事。宛在目睫。嗚呼當此時。余安知其有千里從軍之行耶。又安知其遂死於陣中耶。一別永訣。期之他日者。不可得而今校其遺稿序之。人生不可測如此乎。惟其平昔。任俠自喜。骯髒憂國之志。於是暴白矣。其所養異於人者。亦可以見也。

近前豐佛山村上翁。將刻一集。托人見寄其詩。高逸靜澹似其爲人。翁與柳東共爲攝西名家。若使柳東在世。其警抜驚人者。不止於此。將與翁同維持風雅。今也則亡矣。余焉得不悵然。

屠維大荒落。小重陽。撰並書於容靜處

天江樵客江馬聖欽

（本集揭載ノ詩ハ遺稿ニ採集シアルヲ以テ爰ニ畧ス）

柳東遺稿

易堂鼎題

解題

本書は白紙刷二十三枚の四六形の小本にして柳東遺稿と大阪の書家易堂鼎が題字を加へ次に三舟君が翁の自題壽像を寫し又次に竹香道人が序文を書き尾に三舟君の跋文あり之を江南遊記、浪華遊草、西遊詩草の三記に分ち明治元年三月上京以後の日記及詩文を載せしものにて翁の得意時代の作に係るものであるが誰か印刷せしものか今は不明なるも案するに翁の十七年忌を修するに當り日柳家に於て印刷され江湖に頒布されしものならん

呑象樓壹百尺高。快如秋隼脫絲條。酒與適之同樂聖。詩推禹錫可稱豪。
空拳乘去南山虎。不餌釣來東海鼇。知君草罷籌邊策。唉差腰間日本刀。

是余三十年前所贈柳東翁詩也。今錄以代序言時

明治甲申年桂月　竹香道人棟

江南遊記

今茲四月。予在洛城。與木戸干令小原鋏心諸公。結文雅之交。水樓之遊。山寺之會。槩無虛日。適木戸氏有江南之行。予亦與焉。其間奇事異

聞太多矣。乃記其一二。以供他日談柄云。時　神武帝開國後。二千四百六十八年。讃岐柳東貴人識于周芳山口客舘。

四月十一日。辰後出洛。午前抵伏。乃乘舟下澱。時細雨横江。柳色如畫。予欣然擧杯連酌。木戸氏誦諸公送別聯句。乃錄之。朝旭輝時下澱江　春嶽公　青山十里入蓬窓　雪爪禪師　舟廚自在一樽酒　閑叟公　掛到華城愁陣降　秋月公子

薄暮過櫻祠。木戸氏藹然曰甲子之變。我姪殉難于此。予聞之不覺泣下。西後入浙。宿于兩水樓。々乃鴻池某別莊。而灞藩邸監北條君韓旅館也。其室華潔。座無點塵。庭有杜鵑花。亦太美矣。

十二日晴。木戸氏夙朝于行在。又謁其藩世子。予在兩水樓。與君韓話詩消閑。

十三日晴。君韓拉予觀壯丹吉甫亭。花雖稍殘。亦可以賞焉。歸路飲于向陽樓。名妓數輩來侑酒。皆櫻唇桃臉。勝于吉甫牡丹數等。蓋所謂別品者。

十四日晴。卯飲至午。乃下樓乘舟。歸于中島。此遊往返皆舟。不踏寸土。因

想舟楫之便。海内無雙。且其地富饒。其景佳麗。鮪帝猴閣之卜二居于此一。良有レ以哉。

十五日晴。木戸北條皆有二公事一出レ館。々人尾崎某。設レ酒慰レ予。其禮太恭。

十六日晴。井上聞多來談二瓊浦近事一。及二商稅法一語頗有レ味。

十七日晴。是日

天子幸二于東本願寺一。木戸氏從レ駕。薄暮歸レ館曰。辱拜二天顏一。相違咫尺。

又曰

玉體雄壯。無二孱弱之風一。他日必爲二英雄天子一。乃分二菓子於予等一曰此

帝所レ賜。

十八日晴。木戸氏曰朝議將レ興二豐公廟一。予以爲二如何一。予答曰豐公討二不逞一。尊二

王室一。其功大矣。德川氏廢二毀其廟一。可レ謂レ酷矣。今再二興之一。

實聖代之一大美事。公宜レ贊二成之一。

十九日晴。或曰會賊頗悍。蓋窮鼠噛レ猫者。品川彌次。至レ自二京師一。示二一卷一曰

此久坂義助天王山陣中日記也。子宜レ作レ跋。予本慕二義助一。乃錄二其文一云。

此爲二久坂實甫軍中日記之片紙一。品川兄嘗獲レ之爲レ寶。使三予題二一言一。予本

慕ニ實甫之爲一レ人。今讀ニ遺文一、慕蘭之意益深。乃爲作ニ二絶句一云。

松陰門下義人多。此子風標尤可レ嘉。想見從容就レ死處。鏡中顏色似ニ櫻花一

吉田義卿常曰男兒就レ死顏色當レ如レ添レ花後
果如ニ其言一實甫臨レ死索レ鏡照レ顏亦蓋慕ニ其風一也

轅門軍務百忙中。瑣事入レ毫墨跡濃。始識人間偉男子。別留閑地在ニ心胸一。

廿日晴。是日訪ニ英商賀蘭僑居一。賀蘭喜供ニ洋酒一。味酸而美。以ニ梨子一所レ製云。
賀蘭善通ニ和語一。其談頗奇。姑錄レ之以供ニ笑柄一。賀蘭曰。會津人頗强悍。我
太愛レ之。盖渠今爲ニ國之逆賊一。然佗日歸順則爲ニ帝之好臣一。
又曰日本之戰與ニ西洋一異。洋人每戰必殺ニ數千人一。如ニ日本一則死者不レ過ニ二
三百一。而勝負判矣。
又曰日本之人。性太好。但商法不レ正可レ恨。
又曰日本產物之多。爲ニ世界第一一。而絹絲及茶最佳矣。
是夜同ニ木戶氏一訪ニ茶博士某一。予不レ解ニ喫茶之法一。只從ニ衆之所一レ爲。然雋永之
味。閑靜之趣。自然可レ喜。
廿一日陰。木戶氏有ニ公事一。赴ニ于神戶一。伊藤俊輔以ニ火輪船一迎レ之。同遊者藤

井七郎。後藤象二。伊達自得。廣岡久衛。井上金三。及余等也。是日風濤不レ順。舶太動搖然百里海程一時而達。是夜宿二于旭樓一。轟飲徹レ曉。

廿二日雨。午後霽。同二諸子一遊二于英國岡士舘一。々內珍奇羅列。光彩奪レ目。但位置不レ雅。頗有二骨董舖之風一。午後乘二馬車一。詣二楠公墓一。車載二三人一。一馬牽レ之。其行大捷。蓋洋製也。

是夜同二藤井氏一。遊二兵庫一。遂宿焉。

廿三日晴。伊藤俊輔招二予等於其舘一。供以二洋製酒肉一。且飲食之法皆傚二洋人一。俊輔又示二久阪高杉等詩數首一。乃各錄二其一一。

送俊輔兄　江月齋誠

未下掃二腥羶一雪中國羞上。天王軫念幾時休。想君下レ馬京城夕。白露金風不レ耐レ秋。

丁卯元日　些々

遁世無用人間事。不レ帽不レ袍只穩睡。市中君子頻奔馳。山裡病夫夢結時。入レ門剝啄投レ刺出。始知今朝是元日。

廿四日晴。卯後乘二華旗國舶一歸二于浪華一。遠藤謹助出二其槖中書一。娛レ予。讀レ之數行。舶已入レ港。

是日見二鐵船一。鉄厚數寸。砲丸不レ能レ入焉。按二淮南子一有二鐵不レ可レ爲レ舟之語一。今遂屬二荒唐一。

廿五日晴。謁二灏城世子一。々々賜二酒菓及金帛一。恩遇太厚矣。柏村。八木二氏又招二予於別室一。供二酒肉一。

廿六日晴。植田宗平二予妾澤姫一來。乃共飮二于松亭一。椋生亦至。劇談移レ時。

廿七日雨。象山友三井。松原二子至。

廿八日微雨

廿九日長岡謙吉來。贈二洋酒三瓶一。柴原順次亦至。

閏四月朔晴。同二長岡一訪二詩僧秋爽一。

是日英人朝二于行在一。蓋賀二王政一新一也。

二日晴。是日英舶連二發祝砲一。以二其國王誕辰一也。

三日晴。秋爽設二茶讌一。招二木戸北條及予一。酒間秋爽談二其友藍田事一。示二其遺墨美人圖一。々有二自賛一。曰浮動暗香三十里。滿江無三影不二横斜一。只應レ驚二殺林和靖一。日本浪花新地花。

藍田嘗關二係國事一。遂斃二于獄一者。

歸路小二飲于京樓一。乃乘レ舟歸レ館。

四日晴。

五日晴。福田良助自二江戸一歸。曰官軍入二鬱宮一頗振。

六日晴。

七日晴。

天子還二幸于京一。

八日晴。是夜飲二恕醉樓一。夜半大雨。

九日微雨。是日荒川樟庵及見塑書至。予將レ下二瓊浦一。事太忽劇。乃作二略書一答レ之。

江南遊記了

浪華遊草

柳東章未定稿

亂餘光景入二清平一。細雨殘鶯江上程。昨日東軍流血處。艶葩齊發紫雲英。

澱江舟中干令君談二其姪殉難事一乃賦レ此

蓬窓留レ盞話二當年一。語到二傷心一涙自漣。櫻樹祠畔天又暮。滿江鬼雨澹如レ煙。

吉甫亭觀二牡丹一花已摧殘

雨後牡丹花己衰。殘紅剩レ紫尚多姿。十分富貴非二吾願一。來後春雨亦復宜。

些庵庭有二杜鵑花一太美矣賦呈二北翁及主人一

鮮血何時灑二此枝一。紅葩艶々媚二晴暉一。客窓十日能留レ我。誰道杜鵑唯勸レ歸。

謁二灞城世子一恩遇太厚恭賦以呈

大江一泒本無レ涯。流到二千秋一餘澤多。今日海南魚蟹侶。幸然又得レ浴二恩波一。

乘二火輪船一遊二兵庫一是日風濤頗壯

怒浪如レ山何足レ驚。海程百里片時行。鵬頭願破二長風一去。直到二西瀛龍動城一。

謁二楠公墓一

賈人樓閣挿青霄。畫檻珠窓光動搖。却是忠臣楠子基。祠門仍舊尙蕭條。

伊藤俊輔供以洋製酒肉乃賦鳴謝

龍府香醪壓醍醐。佛都美肉勝麒麟。往逢京友堪誇說。我腹收來天下珍。

同長岡懷山訪秋爽師不在乃借床一睡

借得禪房眠妥時。藤牀竹簟與人宜。一生淸福吾先享。遮莫詩僧歸院遲。

一生淸福其柱聯之語

晚步次北翁韻

蜆橋北畔屐聲長。浴後輕衫追晚涼。樓下盆花樓上妓。濃芬一樣撲一香。

送北翁歸國

西偏東鄙事紛然。洛下諸公未息肩。一幅輕帆眞好計。小松江上碧鱸天。

灞城詩客雅情多。乞暇遙歸江上家。一艇蕭然何所載。幾箱名畫幾盆花。

浪華舟遊

兩岸樓臺好畫圖。滿江燈影串明珠。東人只說墨陀好。有此風流遊舫無。

浪華遊草了

西遊詩草

柳東章未定稿

自神戸抵花浦舶中雜咏 閏四月十二日

火輪破浪向榛洋。爽快身疑空裡翔。一管丹婆吹未了。摩耶山色已蒼茫。

白月一痕雲際沈。玻瓈燈綠夜深々。滿艙海氣不堪冷。血色氍毹且代衾。

過招魂場 防府

忠肝義膽幾男兒。一死鳳城留豹皮。行客弔來皆墮涙。此墳是我峴山碑。

鯖嶺小憩

店頭俯見夕陽灣。浦樹鮭煙畫裡天。有客酒間相指點。那邊昨日繫吾船。

山口

西周風俗美而淳。彷彿桃花源裡春。陌列九條蹤已舊。景分十箇趣皆新。

高峰古稱要衝地。名族今多信義人。願借一廛棲此土。雨簑煙笠避秦塵。

過大內氏遺墟有作

七州太守覇西陲。驕主空開亡國基。優美宛同鎌府子。孱柔何異傘工兒。

樽前詞客燕嬉日。幕下權臣虎視時。畫閣珠樓跡安在。棟花零洛夕風悲。

棟大内邦晉相通

有感

不下爲二皇家一立中寸功上。蹉跎徒作二白頭翁一。客窓對レ劍心空愧。身在二西州一賊在レ東。

宿二老梅書屋一　木戸氏幽居

溪畔巖根皆着レ花。風流眞是韵人家。來遊最好清和節。晴聽二林鶯一雨聽レ蛙。

送三福田俠平赴二北越一

身在二戰塲一耽二酒詩一。鴻城第一好男兒。風流想見越山路。醉賞畝中花幾枝。

俠平嘗有二畝地探梅詩一

懷二京友一

幾日淹留鍔水隈。新螢夜々照二吟杯一。京華詩友此時節。醉向二菟川一知幾回。

椙取素彥示二一短刀一曰是星巖梁翁遺物也

洛下詩人慷慨深。匣中遺物價千金。帶來好作二韋弦戒一。八寸寒氷百錬心。

象頭峰　在二鴻城一一名長蛇山

奇峰如レ象鼻彎々。翠色迎レ吾斜日間。客路一千餘里外。恍然疑對二故鄉山一。

雨中同野村迂忠。前原彥太飲談及東事乃賦

梅雨連天夜似煤。襟懷此際鬱難開。何當一掃妖氛去。痛飲共傾三百杯。

自鴻城趣萩府路上作　閏四月念六

巖砦虎踞水蛇盤。海內何兵踰此關。自笑書生顏太厚。竹輿坐入灞城山。

萩城雜詩

豪商能愛風流客。壯士皆吟慷慨詩。胡枝城裡人多少。一個曾無沒字碑。
萩城兒女面如花。十五盈々嬌態加。醉夢願爲胡蝶去。夜來飛上髩邊釵。

題清風松　村田清風翁所手栽。木戶氏頃建碑其下。名曰清風松。

孤松磥砢傲風霜。百歲清風餘韻長。寄語後人休剪伐。此翁所種即甘棠。

咏梅爲兒玉少輔

玉兒本不凡。脫却風塵氣。況添此梅花。詩骨香天地。

萩府諸彥饗供太豐但厚情之極使人
泥醉樂地往々化爲苦境乃戲賦此

觥籌獄裡誤投身。爛醉昏々夜又晨。始悟西洋規則好。各杯各飲不勞人。

謝鹿鳴仙洲惠硯

瀰城豪賈膽輪囷。一舶欲レ凌大海雲。贈レ我囊中紫端硯。輕便可レ携實是珍。
願帶二此物一跨二鯨背一。寫出五洲紀行文。

漣驛示二木戶氏一

山驛空濛梅雨天。與レ君同宿不二蕭然一。今宵一酌亦佳話。閑煮二淮南一聽二杜鵑一。
木戶曰及予頃齒痛故太喜二淮南一

贈二梅處尼一 高杉晉作妾

憐汝恩情曾不レ忘。雲鬟剃去守二空房一。鴛鴦衾外春風冷。燕子樓中秋夜長。
誰道妓娼無二信義一。始知婦女有二心腸一。高郎地下應二瞑目一。纖手長供一片香。

吉田驛弔二高杉墓一 五月九日

故人爲レ鬼美人尼。浮世變遷眞可レ悲。慘日凄風吉田驛。淚痕如レ雨灑二苔碑一。

東行庵

畫詩四壁墨痕馨。想見平生風雅情。更有三佳人護二遺物一。東行一着勝二西行一。

防長路上雜咏

梅雨廉纖水滿レ田。南塘北塢插秧天。村孃此際有二威在一。路上要レ人索二酒錢一。
挿秧婦見レ客則連進レ秧索レ錢亦土風也

防山行盡入長州。路稍平坦家稍稠。村圃不栽閑草木。桑麻楮柏綠連疇。

前田路上

驛程漸近赤間關。崖角砲臺踪尙存。知是夷船侵入日。松身時帶鐵丸痕。

船中望小倉憶高杉暢夫

小倉城外憶當年。四十八樓一炬煙。立倚舷頭子細望。故人戰處是何邊。

送山田秋水北征

怒髮衝風氣凜然。壯夫向處陣無前。賊城拔取應在近。何待朔風飛雪天。

船中雜咏

快舶昨來辭赤關。紫溟玄海片時間。艙中在個閑人在。却恨忽々閱好山。

海雨橫天鯨氣腥。船窓人定夜三更。針程應入飛鸞島。枕上怒濤聲漸平。

長崎

瓊瑤浦是綺羅叢。今日況逢新政隆。萬國通商除舊弊。三藩戍卒有威風。

柳邊祝砲春風碧。花外信旗朝旭紅。此裡關心唯一事。妖民或唱白蓮宗。

瓊浦雜咏

水煙橫處紅旗閃。崖樹懸邊碧檻紆。瓊瑤浦上新風景。宛入寫眞鏡裡圖。

小郡驛記木戸氏話

小郡如何地。美俗冠防長。人々兼義勇。戸々貯銃槍。里正秋元氏。侠名正稱揚。河水曾暴漲。禦之救一鄕。廩米數百苞。積來代陂塘。其族新藏翁尤具男子膓。林氏亦不凡。角立爭芬芳。甲子國難日。俗論滿四方。邑人獨確乎。助義議堂々。丙寅敵迫日。又憂國存亡。黄金六萬兩。獻得買艅艎。邑有一耆者。按摩送星霜。一朝應其募。慨然傾槖囊。嗚呼澆季俗。見利義是忘。知若此黨風。懦骨亦激昂。我今過驛舍。感涙殆沾裳。剪燈揮禿筆。聊寫詩一章。

題圭山人山水畫冊錄四　井上聞多囑

碧山一避世。不談秦後書。昨夢伏羲氏。來談太古初。
名山多屬仙。好水半附胡。唯此畫中景。不受一點汙。
結屋層崖上。下瞰塵間地。千乘萬乘君。渾是一蟲蟻。
快颷撼巖樹。吹送雨千點。欲收架上書。窓扉無遑掩。

題于令戲墨花卉爲雲仙

此書未爲巧。此圖未爲美。唯因其人奇。可賞又可喜。

次二督府澤公韻一

鎭撫望レ君運二遠謀一。神州興廢在二斯秋一。人情未レ定同レ雲變。世態漸卑如二水流一。嚴法宜レ師諸葛匹。寛量且學二子儀儔一。只待二四海清平日一。陪飮百杯盛二髑髏一。

瓊浦雜咏

苔痕濕レ雨造船廠。樹色迷レ煙製鐵場。獨有二一群振遠隊一。鎭臺風物未二凄涼一。」

不レ抵二崎山二十霜一。重來事々變二滄桑一。腥羶入レ境唐人寺。金碧聳レ空天主堂。」

孱弱堪レ憐辮髮胡。鴉煙敗後面將レ無。臨池才子丹青客。総向二洋人一作二僕奴一。

井上聞多索レ詩乃賦贈

好持二蘇武節一。遠作二張騫遊一。君曹任今重。勿レ辱二我神州一。

雨日飮二于玉川亭一

崎山到所足二娛歡一。此日一遊殊解レ顏。碧玉欄頭擁二紅袖一。停レ杯靜見雨中山。

自二瓊浦一還二于赤關一舶中雜詩

松州西畔雨濺レ珠。怒濤驚撲二舳艫一。隣榻有レ人先失レ膽。低聲早已唱二南無一。」

彌浦留レ舟亦一奇。詩人此夕豈無レ詩。灣西先擇二絶佳地一。醉倚二水欄一聽二竹枝一。」

彌灣風景尤宜レ夜。竹樹模糊水靄横。破屋頽樓渾不レ見。紅燈數點獨分明。」

舟到玄洋雨恰收。硝窓半啓豁雙眸。舵工指點海雲外。一帶遙青是壹州。

玄海洋東斜日中。始看粉壁出青松。舟人一叫先相賀。馬港吾邦喜望峰。

赤關雜詩

櫻山々畔是新坊。黛色粉香連戰場。商女亦諳當世事。竹枝歌帶凱歌章。

紅燈倒影翠漣明。向晚江干多送迎。少女十三捷於蟹。商舟舷上自由行。

櫻山拜諸士塚

七生滅賊東行志。一意尊王南八魂。櫻山留馥人多少。二子碑前淚最繁。

積翠樓賦謝吉富宗像二子

畫燭金屏光爛燦。碧鱗紅蟹味新鮮。今宵痛飲君休怪。十日瓊江無此筵。

曉發赤關

解纜赤間關下湄。水煙一帶曉迷離。海門浪惡舟行緩。兩岸青山凝不移。

彌陀寺外拒夷艦。文字關邊討賊兵。一自戰功歸覇國。行人不復說源平。

自花浦抵神戸船中

暗礁觸處船將傾。逆浪翻時人悉驚。此苦今朝忘似夢。靴紋波上見新晴。

日逢念八雨方收。藝島薇山翠色流。欲買鮮鱗開賀宴。隔煙一叫喚漁舟。

島嶼看過幾點青。無端呼起故鄉情。讃岐州在斜陽裡、象嶺依微亀嶺明。

朝發防山午播山。火輪一發急於弦、數年極口罵蠻舶、今日將言是實船。

囉叭一聲眠始醒。檣頭曉色爛疎星、起來掬水洗昏眼、播攝諸山漸々青。

入浪華示諸友 五月念九

竹海萩山飽攬奇、歸舟又向浪花涯。客囊仍舊貧如洗。只把新詞代土宜。

淀江舟中

両岸垂楊十里煙。溯江仍舊景依然。近來混沌竅頻鑿。此裏應通蒸氣船。

蓬窓酒罷午蕭然。水枕高低見碧山、欲煮新茶洗殘醉、向人幾度問青灣。

伏水客舍

浴後呼杯酒半酣。燈痕柳影小江南。今宵一飲胸如洗。醉倚快樓聽快談。

是夜櫻井新平談東北王師之捷事

同木戸北條二氏飲于菊亭 六月五日

葦簾竹榻納涼棚。隨意傳杯坐二更。雪兒亦自解風趣、不把絃聲奪水聲。

聞小原鉄心辭官歸鄉賦此以寄

東山雲影猶縹渺。西崦花枝亦艶柔。怪君棄此風光去。空戀故山猿鶴儔。

納涼示植田兄

一灘明月照胡床。何用紅燈萬點光。第五橋邊幽靜地。詩人別有納涼場。

六月十三日同春田耕齋。植田宗平遊清水寺觀月義定院主供以茶菓

偶避喧囂地。來遊清淨場。月帶微雲麗。風牽綠樹涼。
登臺縱遠目。掬瀑洗塵腸。尤憐紫衣侶。留我說尊王。

鴨堤曉望

東鳥収翅未離松。宿霧蒼茫曉色濃。三十六巒猶睡臥。天邊獨立日枝峯。

京寓雜咏

風柳露蓮涼氣滋。家々並住水之涯。岸頭開徑迭來往。南是詩翁北畫師。
長堤隔水望殊宜。人影紛々斜日時。最是女郎粧畫景。紅裙相映綠楊絲。

送木戸準一郎使于東京

東海東山草偃風。此行難復試才鋒。東京到日渾無事。穩見芙蓉八朶峯。

洛北路上

菅公廟西路。竹樹遶村翠。搭尖遙出雲。知是仁和寺。

陪
仁和王北二征于越一賦レ此誌レ喜

鳳詔高擎掃二賊氛一。桓々帝子是將軍。繡袍爛燦九重日。錦旗翩飜三越雲。
皇運再開神帝業。王威遙繼武尊勳。布衣措大何僥倖。奉レ命轅門草二檄文一。

西遊詩草了

柳東日柳先生著

皇國千字文

吉備　僊松樓藏梓

舌鈍筆健。幽囚發憤。洩二思於書一。此韓非之流亞也。然而所レ說皆大義偉論。非區區說難孤憤之比一矣。曰以爲小子。而大人淑焉。有二斯才一也。有二斯節一也。一旦雲開。天日煌煌。將二大有レ爲焉。而誰奪レ之。吾將以二此一千字肝血一。抹二北越萬仞雪山一。

明治三年皐月

吉備朗盧阪谷素識

門人　荻田嘯謹書

序

神龍唫則靈雨滿天。鮫客泣則明珠迸地。士煥在囹圄著皇國千字文。字颯爽語々燦爛。使人不覺呼奇矣。盖此文也。先哲所難未下手者。今以赤手揭大業。其盛奚翅墨池神龍文淵鮫客而已乎。

丙寅孟春　櫻水馬諸識

皇國千字文

日柳政章著

伊弉諾尊

恭惟諸尊　降自高天　立鶺鴒教　闢蘆葦原

靈等鏡璽　澤遍乾坤　肇基二柱　傳統一孫

古有爲妖說者以皇國爲吳太伯之後

國非姫姓　含碬𥗋眞　人悉男兒　具日本魂

厥俗喜勇　翌鬟跨鞍　其性憎讐　黃口揮鞭

蘇我馬子

神帝以下　世出聖君　逆蘇之外　廷無暴臣

峭巖爲壁　萬里嶙峋　蒼瀛作塹　四面回環

秦始皇名政或說富士即蓬萊

嬴政艷羨　遙望蓬山　徐福歸化　竊比桃源

秋津洲　富士山

蜻蜓伸翼　地芥區寰　菡萏開萼　嶽奴崑崙

嚴島

杵嶼清淨　夏宵沒蚊　琶湖瀲灩　雨時可船

武野弱浦並據古歌

武野暮色　蟾雖艸間　弱浦晴景　鶴渡葭邊

壤產瑞穗　黍稷稻綿　礦胎珍寶　銅銕金銀

郊絕獅豹　毛物共馴　麃多騏驥　駿骨成群

田道間守獲香菓于常世蓋橘也
明惠始植茶于栂尾

嘉菓留馥　扶桑托根　栂茶芽綠　攝酒味醇

櫻　鯛

瑳玖蕾綻　麝臍猩唇　汰緋魚躍　瑠晴瓊鱗

海鼠　羽二重

叅乃鼠族　五葉駢肩　緋帛鳥羽　六銖爭鈞

歐陽脩詩有云徐福行時書未焚
逸書百篇今猶存

書免秦火　篆籀儼然　服用唐制　黼黻炳焉

素盞烏命割大蛇尾獲劍源家寶
刀鬼斬丸

就中介冑　最軼類倫　飾窮佳麗　質擇精純

鎮西八郎一箭覆艦
高麗獻鐵盾盾人宿禰射洞之

劔斷蟒尾　刀驅魔氛　箭洞戰艦　鏃鑿虜干

武備志有梨花槍

綉鍪傾鏗　菊蓮嬋娟　直槍閃刃　梨花繽紛

往昔我不逞民擾彼濱海明人呼
爲蝴蝶軍

陣選奇騎　蝴蝶從軍　舸排捷艪　蜈蚣走瀾

洵是美士　須禦蠢蠻　歷代薄伐　諸將錄勳

日本武尊
周時肅愼獻其楛矢今借用

倭建踰塞　楛矢遡臻　功后拓境　氈笠咸賓

阪上田村麻呂征蝦夷
紀謂武内宿禰也
應神天皇九年宿禰按察筑紫蓋
當吳
孫氏勢盛時關羽罵孫權曰吳狗

阪進蕭揄　遼蝎遁奔　紀執斧鉞　吳狗逡巡

巴提使使百濟時殺虎報兒讎
伊企儺見虜叫新羅王啗臂竟見
殺

巴提奮拳　獰獸血玄　伊企啖臂　驕倉膽寒

高麗使者表文倨慢菟道太子責
裂其表
菅公上疏廢遣唐使

責彼慢辭　菟郎雷嗔　輟吾遠使　菅氏鯁言

義經入蝦夷
爲朝左手長數寸遁大島入琉球

牛稚輕舄　蹠蝦窟灘　猿臂鳴鏑　響虬戸雲

斫案用孫權語
菊池肥州從鎭西官嘗郤明使

北條斫案　驍兵喪元　西府郤聘　明客赧顏

箕跡謂朝鮮

豐閤胸宇　禹域併呑　藤肥矛戟　箕跡摧殘

明人呼豐公曰猳精
豐公東伐假鬚示威作者蓋合用
二典
虎頭用班超傳語

猳鬚偉畧　豈沐猴冠　虎頭驍貌　寔鬼上官

明人呼島津爲石曼子
龜井茲俊請取琉球豐公壯之題
其扇頭曰龜井琉球介

麑島石曼　著于青編　龜井琉球　耀於素紈

伊達正宗偏盲有征南蠻之志
武田若州闢松前

奥主獨目　蔑視南蕃　狹侯隻手　攫取東偏

山田長正見海外異傳

鄭森襲臺　蛟騰蝸蟠　長正定暹　鴻翥鵠騫

照祖靖難　號令維新　台公承緒　規模仍遵

臚館應接　只延流韓　橐街互市　特容漢蘭

細戈千足國我舊稱
往時痛戮邪徒蠻人畏曰日本人
有三眼

戈貫胡顱　千足勢振　榜示奸罪　三眼威懸

頭注	本文
見海外異傳 見會澤氏新論	濱田匕首　刧甲必丹　兼子片槎　偵米利堅
	憑咽喉險　泥封函關　備覬覦寇　鑰巖江門
	郭帶鋒霞　喬松陰繁　旗擎朱旭　巽葵葩薰
	覇圖極盛　宸居永全　往昔寧樂　秖今平安
	祭祀肅穆　儀陳瑚璉　簪笏端莊　班列鵷鸞
	堯階尙儉　歸存億年　周鼎貴德　鎭壓百藩
素性歌	櫻楊經緯　錦裹禁垣　楓櫨濃淡　畫繞御園
淸氏 菅三品	才女捲簾　賞雪霽晨　鉅儒染簡　咏鶯囀春
	洛滋己穩　浪速亦殷　綺羅輻湊　管絃喧闐
鵜仁德帝諱字 大坂川名	鵜閣曉眺　竈蒸祥煙　蜆川夜游　橋漲歡塵
	城聳樓櫓　睥睨朝鮮　港銜艦舳　吐納秋津
泉錢通	踊糴糶價　商賈專權　鬻漆絲品　牧伯通泉
蠻曆磨蝎宮蓋我丑歲 紅羊見元史	如斯靜謐　誰招災殃　歲當磨蝎　運屬紅羊
鴉音通亞 鷲鄂羅旗號	凶鴉噪峽　妄爾鴟張　妖鷲搏崎　飽則鷹颺
	蓮幕寬量　姑許跳梁　柳營深慮　務撫獗猖

蟠文狠藉　猾禮義郷　鴃舌侏儒　擾翰墨場
卒擧繰步　穿窄袖裳　民廢踏佛　迷十字方
卓哉水烈　興乎常陽　辨別名分　牽由典章

蠑螈類蠑州蓋秋津洲之意

弘蠑州道　夙護皇綱　奉鳳詔旨　先論海防

織田右府法諡総見院

符合總見　梵器毀傷　執同守屋　魍法掃攘

三善清行有意見封事

獻楠家策　語綴珪璋　奏善相議　詞挾氷霜
蠅糞空點　和璧失光　龍氣忽盡　鏌鋣折鋩
龕麟續胤　爪趺熾昌　熊羆纖志　史筆焜煌
楔辰豪擧　壯心軒昂　燈夕快事　情風消亡

武田

筑嶺碧竹　健竿雖僵　荻壘紫英　幽叢愈香
我輩小蟻　意慕餘芳　身在繰纏　憂及廟堂

吉田　穎
入一本作投

踪似吉猛　寃亞古狂　嗚呼命也　臨鑊入湯

櫻水曰首押聲韻尾用王字是作者微意

唯所禱者　拒夷勤王

章白忠卿足下。時事茫々。今春又暮枯楊生レ花蓋難矣。而周粟未レ絶。

慚愧々々。此文去年所レ作。今使ニ和甫(美馬君田)書レ之以贈ニ足下一。僕等如

不レ得レ還則請覩レ之爲ニ遺物一。

丁卯季春中浣　　柳　章

忠卿長兄侍史

遺文錄

（本欄は前記遺稿其他に漏れたるものを掲ぐ）

文久元年九月廿四日。與二松灣翁二三子一、遊二于象山小蘭亭一、遂宿焉。亭臨二瀑泉一頗有二幽致一、夜深人定水作二雨聲一、予徒然不レ能レ睡。翁亦有二微吟聲一、問レ之則詩成也。時燈滅室暗。乃起開レ戶以引二月光一、少分天曙山紫林翠。漸々可レ辨。亭外有レ巖其下貯レ水。掬レ之盥漱。淸氣徹レ骨矣。如レ此之境此之客不レ易レ得也故記

壬戌元日　柳東主人

平致經戰死圖

白旗蔽レ天迫二艨艟一、殺傷如レ麻海水紅。東軍乘レ勢西師殲。貂蟬悉葬二魚腹中一、
搏戰獨見能登守。戟手自當突騎攻。獰虎羸軍雖レ颯。羣雞一鶴氣尙雄。單
身奪レ舟求二敵將一、勁兵披靡鐵袖風。可レ憐墜日終難レ捧。結纓何惜七尺躬。勇
武驚二駭兩軍目一、至レ今繪畫感二兒童一、當時諸平多怯懦。咏レ櫻弄レ笛徒衒レ工。此
曹地下儻不レ死。不レ識何顏見二是公一、

日柳章謹題

（三井謙三氏藏）

受松軒雜咏

梅坪松徑淨無レ塵。小巷不レ妨容二此身一。爐上三絃微雪夜。窓邊一枕早鶯晨。
小妻恰擇二中庸婦一。老僕殊宜下等人。醬酢米鹽粗辨得。新居恰好待二新春一。
予妾非二娼妓一。非二鄙婦一。所レ謂黑白中間之婦也。故下二中庸字一下等人見二于輟耕錄一
家具一車生計貧。闕如件々借二諸鄰一。客娛二良夜一携二歌妓一。奴送二窮陰一祀二竈神一。
莪乳烹羹煖屋宴。藁灰貯レ火開レ爐辰。殊憐新婦力扛レ臼。高褰二青裙一拮据頻。

柳燕石章拜草

（三井謙三氏藏）

題祖谷覽奇卷後

跋涉層崖探討窮。祖山全景聚二双瞳一。賞心應償烟霞癖。僻境爭傳詩畫工。
百尺葛橋臨レ澗架。一繩棧道躡レ雲通。讀終却是多二遺恨一。不レ得三斯身入二卷中一。

燕石章拜　（三井氏藏）

題陶彭澤圖

痛飲忘憂酒幾杯。柴桑夫子意深哉。一篇不悖離騷語。秋菊開時歸去來。

○

芳樹滿汀鶯響幽。黃昏猶泛打魚舟。落花香裏東風急。欲卸春帆不自由。

籠鶯

花間柳外語嚶々。誤入金籠送半生。不知禍本由饒舌。尙向秋風囀幾聲。

（以下遺芳帖）

問盜

問盜何心漫害心。盜言我罪是纖塵。錦衣綉袴堂々士。白日公然剝取人。

謙公吟月圖

過雁三更月滿營。二十八字是長城。一生一首極精妙。此老練詩如練兵。

次杉暢夫韻

蹴殺東關百萬兵。戰功想汝冠鴻城。轅門拔劍舞明月。一曲凱歌天地聲。」

赤蜻兒子是孱兵。一敗奔歸ニ秋國城一。想見快刀追擊處。萬頭如レ葉落無レ聲。』
猛ニ於風雨一是奇兵。餘力掀翻小笠城。蜻國東西六十六。無ニ人不レ說ニ此英聲一。』
將軍一夜出ニ奇兵一。去入ニ西天乾闥城一。錦幟金標化ニ幢蓋一。罡風吹送半空聲。

楠公

霧合雲屯百萬兵。眼中看破等ニ孩嬰一。老楠自有レ如ニ天膽一。壓ニ倒全蜻一此一城。

不識庵擊ニ機山一圖

三尺刀光紫電驅。老姦如レ雪點ニ紅爐一。斷頭却是殺風景。留到ニ千秋一入ニ畫圖一。

秋夜不レ寐

地獄門邊兩度秋。此生恐向ニ此中一休。五更蟲語三更雨。男子何曾不レ說レ愁。

雜詩

優柔未レ免太平風。遺恨藩屛十八公。醉把ニ史編一明ニ我眼一。英雄果在ニ古人中一。
振ニ起頹風一在ニ斬屠一。區々弄筆計全疎。吾四十年來業。不レ學ニ劍槍一唯讀書。

懸崖蘭自畫贊

春風幾紅紫。見レ之思ニ酒肉一。唯此君子花。相對使ニ人肅一。

壬戌閏仲秋　柳東

（荒川氏藏）

欲レ爲二長壽人一。先須レ戒二怒嗔一。欲レ爲二富貴人一。更須レ戒二怒嗔一。怒氣一發猛二於火一。忽然滅レ家又焚レ身。請看仙人。與二福神一一生不レ怒面如レ春。

癸亥春日　柳東

（荒川氏藏）

南郊探梅

一灣溪水遶二人家一。路入二篁陰一鳥語譁。可レ肌風日餘寒退。慰レ眼畦町昨雨過。瓢貯二三四杯酒。梅開五六七株花。新句拾來先滿レ意。不レ妨遙巘有二歸鴉一

○

瑤華脉々殿春殘。姑射仙人畫裏看。月下敢矜容似レ玉。年來眞有二臭如レ蘭。

柳政章

（古川氏藏）

曾我部老人九十三壽言

遐齡九十有三年。矍鑠風標鉄骨堅。彭祖曼倩何足レ羨。君身卽是活神仙。

咏槍奉贈上野君

我國長槍冠二五洲一。至剛至直凜如レ秋。條々茅穗飄二銀線一。閃々梨花舞二玉毬一。新製曾傳自二楠子一。驍名今尚說二藤侯一。視君他日攜二斯物一。疊貫髯奴血髑髏。

柳東

（上野氏藏）

○

松聲入座卽是無弦之琴。鳥影當樓天然大幅之畫。

遊子樓主人介虛心道人求予詩予未知其樓之勝如何姑錄道人之所語以爲一聯贈之云。

壬戌秋日　柳東

(安藤準平氏藏)

唐突敲門情早親。藹然和氣一團春。梅叟門下能詩客。温厚如君知幾人。

奉訪　柳章再拜

愿庵君卒賦呈

咏櫻

超然玉樹出扶桑。夷草蠻花皆失芳。品格無双國士態。容華絕代美人粧。
濃香薫處天如醉。艶蕾開時客悉狂。花史如能論正統。我櫻至竟是春王。

(猪木氏藏)

夏日早起

春風曾寓對鷗梅。紅鬘登盤酒似油。今日聊爲木瓜報。象山松蕈一籮秋。

(香川氏藏)

貽二松蕾于凌雲一

節値二中秋一未レ放レ晴。滿街細雨濕二層甍一。此鄕此夜何論レ月。十里珠簾不夜城。

金鄕寓樓逢二中秋一此夜無月

○

風幔低臨レ水。軒波與レ岸齊。翠禽看不レ見。聲在二藕花西一。

書窓春事竭。蕭兀睡魔生。日中蕉無レ影。風飜篳有レ聲。病賴二門醫一退。詩謀二隣衲一成。晩間思二小飲一。茄子已堪レ羹。

新夏言事

滿巖楓葉鬪二秋妍一。中有二飛泉一落レ自レ天。此景人間無レ可レ比。紅雲深處白龍懸。

木馬一蹶鼠橫行。蜻蛉翼上陰上腥。假玃喫尽豚犬肉。大鬼小鬼力難レ爭。君不レ見。天意已疾食人鼈。丹烏白狐跡悉滅。妖氛一掃天如レ拭。老狸鼓腹賀二靜謐一。

木馬一閃錄爲二桌園老兄一　　石散人

飲博場中過二幾秋一。男兒徒欲レ老二荒陬一。昨宵痛飲紅樓酒。夢駕二火船一遊二黑洲一。

（丸龜氏家喜兵衛氏藏）

和友人長崎竹枝

貿易相通萬國舟。瓊江不㆓復舊時秋㆒。山腰古寺義人館。海面新街英客樓。』
瓊浦繁華此是辰。港頭輻湊五洲人。誰知紅髮紺瞳外。別有㆓唐山避乱民㆒。』
赤毛曾繫㆓赤繩緣㆒。却愛蠻郎口氣羶。一別商參三萬里。夢魂飛趕㆓火輪船㆒。

江村秋事

渡頭繫㆑艇待㆓潮生㆒。楓項殘霞照㆑岸明。淺渚無㆑浪清徹底。臥看螺蛤水中行。

（丸龜氏家喜兵衛氏藏）

幾年隱逸絕㆓塵營㆒。蘿月松風夢也清。彭澤樽中酒常熟。孔融坐上客方盈。
官途豈蹈羊腸阪。沙社長持牛耳盟。不用區々覓㆓仙藥㆒。君家卽是小蓬瀛。

燕石柳章拜

綠葉不㆑凋㆑雪。高梢殆入㆑雲。我祝松岡叟。堅剛如㆓此君㆒。

咏竹奉賀松岡君六十　燕石

（志度松岡氏藏）

和文

金鄉春夕榮の自序

玉藻よし、讃岐の猿の人まねは、見ざるひとさへイケネヱと、いはざるはなと、夜ざるひく庚申まちの友だちが、いさむることもきかざるは、藝なし猿のまけぬ氣で、彼大江戸の諸名家に、ましらと思ふ、あさ智惠、は手におよばざる、水の月とらんとするに似るのみか、毛さへたらはぬみすぢの糸、てうしはづれのこけ猿と咲ひ給へと。

嘉永庚戌の春　讃岐のさる人云

和歌

後醍醐天皇楠正成を召し給ふ

楠の蔭、たのますは、そでぬれし、松の下露、かはかさらまし

政章　(有房氏藏)

大塔

高ひかる、親王を岩戸に、かくさすは、とこやみの、世とならさらましを

政章　(有房氏藏)

上杉謙信月下に詩を吟する歌

久方の月より、高くきこゆなり、越の山邊の、かりのひと聲

(遺芳帖)

圓金亭の記

夫○の貴き事、能四百四病の親玉を療し、四面九面の苦しみをさく、故に孔子もすくない哉、ぎんとのたまひ、彌陀も○かほしと、うしろをなでつゝ(此間不明)半醉老人の、亭に名つくるはその意を知らされと、老人の汚泥、貨財に溺る人にあらざれは、たゝその○(まんまる)にして、圭角のなきの義をとるならんと、猿赤山人ましらになつて記す。

(小橋喬子藏)

俳句

蝨ひとつ探し出けり。秋の暮

小便のはつみぬかすや。牽牛花

せつちんを引はりこかす。瓜の蔓

下女の屁に夜は。ふけ行や後の月

燕石

あれでまあ、先生樣か雲の峯

右は河野鐵兜を調ふれたる句

さけよ花、世にをくれては、人も見ぬ

俗謠

島原芳原も、ない象山に
人を動す、花もさく

親骨に、たとへのいても、行末ひろく
ぬしに扇、が樂しみよ

子夏と、顏さへ見る事ならぬ
誰をたのんで、閔子顆

大學の道を敎ゆる、孔子でさえも
なせに、しなふと、のたまはく

或時琴平邊に麻疹の流行せし時よめる

家ごとに、枕ならべて、晝寢とは
はじかしいでは、ないかいな

雪はよか亭、月水明樓、いつそ
いつゝけ、松里庵

ねやのかけがね、はやかけたかと
あだにきてなく、ほとゝぎす

女木と男木とを、豐島へ入れて
早く夫婦(めうと)に、小豆島

お多福の贊

ほれた欲目か、どちから見ても
顏の眞中に、鼻がある

入獄の時の口吟

明の鳥は、東で泣くが
うちの妻子は、西で泣く

出獄祝宴の席上揮毫せし自畫贊

伊勢海老の、こしは、しはらく
かゝめて居れと、やかて錦のよろひきよ　猿赤

獄中より愛妾お澤に寄せた端唄「忍ぶ身」の變へ歌

初雁の、鳴きつゝ渡る、聲聞けば、心は空に飛びあがる、會ひたいわいな、會ひたかろヱ、何時か嬉しき一つ夜着。

尺牘

（注記）書翰や尺牘は其人の心事を赤裸々に言顯はしてあるもので、歴史的に必用のものであるが。翁は常から余り尺牘類は書かん方で、誰れかゝ或物を呉れたら、早速詩を作つて其れに酬いたものであるから、其遺筆が當世に存してるものが甚た尠ないのと、又一ッは幽囚の身となつたので、其所持者は係累とならん事を恐れて、破棄したものも多かつたので、今茲に蒐集したのは、左の數件に過ぎないのが、遺憾に思はれる。

片山沖堂宛書翰

（前文欠）發兌と申事に御座候、此は精選と彼よりも申來り候、此度到來之詩林なる者は一書肆之思付に候、玉石混交且尤粗製、高說の如くに御座候、生口なる者不知何人也、察するに松崎門生と存候、右文久集に敵し、今世名家絶句と申者を、急に集刻仕度と申一書肆あり、撰人は名古屋之由也、御社中諸君ゟ御入選之御思召に御座候へ者、急に御出し可被下候、右之書品により古今體相交候由承り候間、絶句三十首斗雜體二十首斗、御錄し可被下候、小生手元ゟ御越しに而も、家里ゟ御出しに而も、或は六角堂前、丁子屋源兵衛と申書林ゟなりとも、御出可被成候、家里子來年續刻と申事は承り不申候、金聲集と申詩集を拵へ候由、一寸承り候、もし此事にやと存候、其內一應京師ゟ往復可仕候、松崎も此節歸省、何れ盃後ならては歸京不申と存候、其れ故京便は少々延引に及候、此御承知可被下候、坂谷希八、忠芬義芳跋之事高說一々

破的御同意に御座候全体彼先生、文辞は甚疎率、至詩最甚矣、往々不成語之病御座候、併し人物は大快、能解事且讀書之見解も、大に妙也、詩文之手際とは大違ひに御座候、何分西備之一人物に御座候。

先達而、彭城恭藏なる者（長崎譯官ノ子）東國詩錄と申者を撰み候由に而、邦人之詩を集め、唐山ゟ送り候と申、貴鄕諸先生の詩も集居候、弊地ゟも參ゥ候へ共、小生は出し不申候、是は攫金之策之由也、右集め候黄白は、浪花に而散し候と承り候。如何御存しに候哉、家里より右恭藏に與る書、一篇參り候間、入御覧候、此文御評被下候へ者大に妙也。

廣瀬旭莊も浪花引拂ひ、歸鄕之岀に而、先達而來訪、半日斗談し候、當冬十月比か、來二月比か、又々來遊御地ゟも、參り候積りと申居候、老兄ゟ此由御賴申呉れと被囑候。

渡邊兄やはゥ臥蓐候由、御面會之節、宜御致聲賴上候、其外杏齋、省齋ゟも御傳聲願上候。

盆前取込早々不乙

七月八日（文久元年か）　　章　拜

六石大兄　侍史

此間詩林一部、藤川ゟ托し献上致候御落手被下候哉、

前文申上候名古屋人所撰、名家絶句集、御入撰之思召なれば急に御出吟賴上候、右書肆火急に集候由、承り候尤撰の精粗は存し不申候、定而粗選とは存候如何。

（注記） 此宛名の六石とあるは、高松の儒者、片山冲堂にして、翁没後榎井にある、翁の碑銘を撰せし人、家里とあるは元伊勢の人にて、京都に移住して居た、詩人の家里松疇である。坂谷希八は、希八郎にして、備中河上郡九名村の人、即ち朗廬なり、杏齋は高松の醫師長尾杏齋、省齋は同上葛西省齋、渡邊生とあるは、是又高松の醫師、渡邊松窩（故椋園の父）の事である又此手紙の年號は文久元年ならん、其譯は松窩は同年十二月に沒してるからである。

長谷川佐太郎宛尺牘

章白。忠卿足下。時事茫々。今春又暮。枯楊生レ花蓋難矣。而周粟未レ絕。慚愧々々。此文去年所レ作。今使二和甫上一書レ之。以贈二足下一。僕等如不レ得レ還。則請視レ之爲二遺物一。

丁卯季春中浣　柳章

忠卿長兄侍史

夜前は拜晤、大慶仕候。然者黃白一條、御厚配被下、感謝々々、畧夯一通差上候間、御落手可被下候、明朝は圓座村小橋氏迄發し候。彼地にて一兩日滯留、直樣上京仕候、右に付甚た多用御面會も不致候、諸公隨分御自愛爲國家。御周旋賴上候　不一。

二月廿一日　柳東

松原樣
三井樣
井上樣
侍史
（三井謙三氏藏）

以寸楮申上候、然者小生事重三之日入京、卽夷人參內之日に御座候、輦下之形勢、隨分御盛に候へ共、珍事多く不可解事に御座候、併し天朝は御威光赫々に御座候間、御安心可被成候、扨河野氏は澤公之御用筋に而、浪花ゟ下向留守に御座候故、未た面會不仕候、何れ近日歸洛之上萬々可申談積に御座候、萬々後鴻可申上候　不二

三月八日

明日は太政官府ゟ、今上帝行幸に御座候由承り候、駿府も官軍已に入城之由確信承り候。

三松井諸兄侍史

畧封御免可被下候
（三井謙三氏藏）

燕石全集跋

吾鄉勤王家。曰柳燕石先生。慷慨尙氣節。其著頗多。皇國千字文。捫蝨餘話。呑象樓集等。既公于世頃者梶原君竹軒。編其全集。求余一言。顧先生忠義天性。議論風發。覺破一世迷夢。稱爲偉人。不亦可乎

大正十二年暮春　　象雲三谷穆識

[illegible]

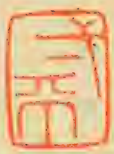
大正十二年八月一日印刷
大正十二年八月七日發行

【定價金五圓】

著作兼發行者　香川縣高松市二番丁四番地　梶原猪之松

印刷者　香川縣高松市西濱新町二十五番地　間島武男

發行所　香川縣高松市濱ノ丁十二番地　香川新報社
（振替貯金口座大阪一八九〇番）



愛知縣北[illegible]具村

夏目一平